

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第269集

宮崎市所在

じんのもと
陣ノ元遺跡

一般県道学園木花台本郷北方線（山下工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

宮崎県埋蔵文化財センター

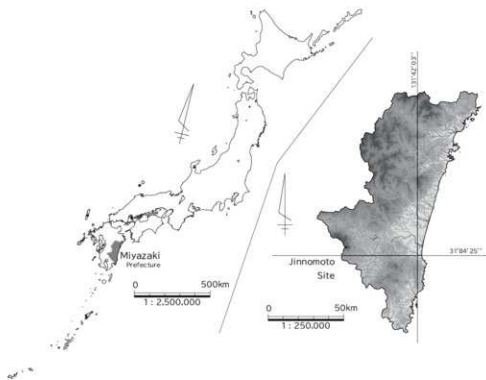
宮崎市所在

じんのもと

陣ノ元遺跡

Jinnomoto Site

一般県道学園木花台本郷北方線(山下工区)道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2024

宮崎県埋蔵文化財センター



上空から見た陣ノ元遺跡

陣ノ元遺跡は、日向灘に注ぐ清武川河口から約2kmの木花地区(宮ヶ田川の集落等を含む)の西端に位置する。

遺跡南側の高位台地上には、宮崎大学や学園木花台建設等に先行して発掘調査された宮崎学園都市遺跡群が広がっている。

陣ノ元遺跡や県史跡「木花村古墳」は、宮崎学園都市遺跡群から清武川方向へ下った低位台地の先端付近に位置している。

写真はC区の弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落跡調査時のもの(2021年11月26日撮影)



陣ノ元遺跡 主な出土遺物

序

宮崎県教育委員会では、一般県道学園木花台本郷北方線（山下工区）道路改良工事に伴い、宮崎市熊野地区に所在する陣ノ元遺跡の発掘調査を令和3年度から令和4年度にかけて実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

2か年にわたる今回の発掘調査により、当遺跡では旧石器時代から近代までの長きにわたって、断続的に人々の営みがあったことがわかりました。特に、縄文時代早期の被熱礫の広がりや集石遺構、弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落跡における外来系土器や鉄製釣針、石錘などの漁具、古代から近世における布痕土器、貿易陶磁器、炭化米等の出土から、当地で暮らした人々の生業や他地域との交流がうかがえます。

本書において報告する発掘調査成果や出土遺物等は、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用し、郷土の歴史や埋蔵文化財保護に対する理解の一助といたします。

最後になりましたが、調査にあたり、御協力いただいた関係諸機関および関係各位、地元の方々々に心より厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 吉本 正典

例 言

- 1 本書は、一般県道学園木花台本郷北方線(山下工区)道路改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県宮崎市大字熊野に所在する陣ノ元遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査は令和3年4月5日から令和4年3月4日までの193日間、令和4年5月16日から令和4年8月10日までの48日間の合計241日間にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、令和3年度を石塚啓祐、江藤建輔、小吹雅史、藤木聡が、令和4年度を江藤、小山輝晃、藤木が担当した。現地調査における図面作成は調査担当者が主体となり、平井祥蔵、伊東浩二、大竹進太郎、古川誠、本部裕美、呼子和友の協力を得た。
- 4 発掘調査及び報告書作成に伴う、測量業務(グリッド杭設置)、空中写真撮影、自然科学分析(テフラ分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定、樹種同定、放射性炭素年代測定、FT-IR分析)、石器実測(一部のみ)は下記のとおり業務委託した。
 - ・ 測量業務 有限会社 島田コンサルタント/有限会社 大淀測量設計事務所
 - ・ 空中写真撮影 九州電力株式会社テクニカルソリューショングループ統括本部
 - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
 - ・ 石器実測 有限会社 ジハング・サーバイ/株式会社 埋蔵文化財サポートシステム
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターにおいて整理作業員の補助を得て行った。デジタル図化作業は石塚・江藤・藤木・本部・呼子和友、平井・伊東・大竹の協力を得た。石器の実測及び拓本作業は谷口武範・和田理啓の、実測委託以外の石器の実測は藤木の、鉄器の実測は和田の協力を得た。遺物の写真撮影は調査担当者が主体となり、東憲章の協力を得た。
- 6 土器の型式分類等は谷口、宮崎市文化財課の河野裕次、関西大学博物館学芸員の山下大輔の助言を得て、石塚が行った。陶磁器等の分類は堀田孝博、石器の分類は藤木の助言を得て、石塚・江藤が行った。
- 7 本書にて使用した位置図等は、国土地理院発行の地形図50,000分の『宮崎』『日向青島』や宮崎市現況図(縮尺1/2,500・縮尺1/10,000)をもとに作成している。
- 8 本書に掲載している土層断面及び土器の色調等については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2008年版)に拠る。
- 9 本書における図中の方位は、国土座標第Ⅱ系(世界測地系)の座標北(G.N.)、国土地理院発行地図は真北を指す。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠しており、標高は海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した遺構略記号は、下記のとおりである。
SA：竪穴建物跡 SB：平地式建物跡 SC：掘立柱建物跡 SE：溝状遺構 SF：井戸
SG：道路状遺構 SH：単独の小穴・ピット SI：集石遺構 SJ：竪穴状遺構 SX：不明遺構
- 11 石器実測中のカタカナ表記の意味は次のとおりであり、矢印はその範囲を示す。
コ：敲打痕 ス：磨痕(磨面) ト：砥面 マ：摩滅
- 12 本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ章を江藤、第Ⅱ・Ⅲ章を藤木、第Ⅵ章を石塚、第Ⅶ章を石塚・江藤の合同で行った。なお、第Ⅶ章は、古環境研究センターによる委託成果品を石塚が編集した。
- 13 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに		第VII章 自然科学分析の結果	
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 自然科学分析の項目と概要・目的	276
第2節 調査の組織	2	第2節 テフラ分析	276
第3節 発掘調査の方法と経過	2	第3節 植物珪酸体分析	280
第4節 整理作業及び報告書作成	6	第4節 花粉分析	284
第5節 教育普及活動	6	第5節 種実同定	287
		第6節 樹種同定	293
第II章 遺跡の立地と環境		第7節 放射性炭素年代測定	297
第1節 地理的環境	7	第8節 漆分析・有機物分析(FT-IR分析)	301
第2節 歴史的環境	7		
第III章 遺跡の概要		第VIII章 総括	
第1節 旧地形と基本層序	13	第1節 旧石器時代の様相	305
第2節 遺構・遺物の概要	13	第2節 縄文時代早期の様相	305
		第3節 縄文時代前期～晩期の様相	308
第IV章 A区の調査成果		第4節 弥生時代後期後半～古墳時代前期の様相	308
第1節 近世～近代の遺構と遺物	14	第5節 古代の様相	309
第2節 中世の遺構と遺物	25	第6節 中世の様相	310
第3節 古代の遺構と遺物	28	第7節 近世以降の様相	310
第4節 縄文時代の遺構と遺物	37	第8節 結語	310
第V章 B区の調査成果			
第1節 近世～近代の遺構と遺物	40		
第2節 縄文時代の遺構と遺物	44		
第3節 時代不明の遺構・ その他の時代(古代・中世)の遺物	45		
第VI章 C区の調査成果			
第1節 古代・中世・近世の遺構と遺物	48		
第2節 弥生時代後期後半～ 古墳時代前期の遺構と遺物	57		
第3節 縄文時代前期～晩期の遺構と遺物	140		
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物	157		
第5節 旧石器時代の遺物	230		
第6節 時代不明の遺構	230		

挿 図 目 次

第 1 図 試験調査トレンチ位置図	1
第 2 図 調査区周辺地形図	3
第 3 図 障ノ元遺跡周辺の遺跡分布図	9
第 4 図 障ノ元遺跡の周辺地形と遺跡分布図	11
第 5 図 A 区遺構分布図及び A 区西南側道の土層断面図	15
第 6 図 A 区中世～近代遺構分布図	16
第 7 図 A 区近世～近代遺構実測図(1)	17
第 8 図 A 区近世～近代遺構実測図(2)	21
第 9 図 A 区近世～近代遺構実測図(3)	22
第 10 図 A 区近世～近代遺物実測図(1)	23
第 11 図 A 区近世～近代遺物実測図(2)	24
第 12 図 A 区近世～近代遺物実測図(3)	25
第 13 図 A 区中世遺構実測図	27
第 14 図 A 区中世遺物実測図	28
第 15 図 A 区古代遺構分布図	29
第 16 図 A 区古代遺構実測図(1)	31
第 17 図 A 区古代遺構実測図(2)	33
第 18 図 A 区古代遺構実測図(3)	34
第 19 図 A 区古代遺構実測図(4)	35
第 20 図 A 区縄文時代遺構実測図	37
第 21 図 A 区古代遺物実測図(1)	38
第 22 図 A 区古代遺物実測図(2)・縄文時代遺物実測図	39
第 23 図 B 区遺構分布図及びトレンチ位置図	41
第 24 図 B 区近世～近代遺構実測図	43
第 25 図 B 区縄文時代遺構・遺物実測図及び出土遺物分布図	45
第 26 図 B 区時代不明の遺構実測図	46
第 27 図 B 区遺物実測図	47
第 28 図 C 区中世～近世及び時代不明の遺構分布図	49
第 29 図 C 区中世～近世遺構実測図(1)	52
第 30 図 C 区中世～近世遺構実測図(2)	53
第 31 図 C 区中世～近世遺構実測図(3)	54
第 32 図 C 区中世～近世遺構実測図(4)	55
第 33 図 C 区古代～近世遺物実測図	55
第 34 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構分布図(1)	59
第 35 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構分布図(2)	60
第 36 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構分布図(3)	61
第 37 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(1)	62
第 38 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(2)	63
第 39 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(3)	65
第 40 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(4)	66
第 41 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(5)	67

第 42 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(6)	70
第 43 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(7)	71
第 44 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(8)	73
第 45 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(9)	74
第 46 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(10)	75
第 47 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(11)	77
第 48 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(12)	79
第 49 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(13)	80
第 50 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(14)	81
第 51 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(15)	82
第 52 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(16)	85
第 53 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(17)	87
第 54 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(18)	88
第 55 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(19)	89
第 56 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(20)	91
第 57 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(21)	93
第 58 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(1)	97
第 59 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(2)	98
第 60 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(3)	99
第 61 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(4)	100
第 62 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(5)	101
第 63 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(6)	102
第 64 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(7)	103
第 65 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(8)	105
第 66 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(9)	106
第 67 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(10)	107
第 68 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(11)	108
第 69 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(12)	109
第 70 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(13)	111
第 71 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(14)	112
第 72 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(15)	113
第 73 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(16)	115
第 74 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(17)	117
第 75 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(18)	118
第 76 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(19)	119
第 77 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(20)	121
第 78 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(21)	122
第 79 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(22)	123
第 80 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(1)	125
第 81 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(2)	126
第 82 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(3)	127
第 83 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(4)	128
第 84 図 C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(5)	129

第 85 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(6) ……	130
第 86 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(7) ……	131
第 87 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(8) ……	132
第 88 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(9) ……	133
第 89 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(10) ……	134
第 90 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(11) ……	135
第 91 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(12) ……	137
第 92 図	C 区弥生時代後期後半～古墳時代前期鉄器実測図 ……	139
第 93 図	C 区縄文時代前期～晩期遺構分布図 ……	141
第 94 図	C 区縄文時代前期～晩期遺構実測図(1) ……	142
第 95 図	C 区縄文時代前期～晩期遺構実測図(2) ……	143
第 96 図	C 区管竈式土器分布図 ……	143
第 97 図	C 区縄文時代前期～晩期土器実測図(1) ……	145
第 98 図	C 区縄文時代前期～晩期土器実測図(2) ……	147
第 99 図	C 区縄文時代前期～晩期土器実測図(3) ……	149
第 100 図	C 区縄文時代前期～晩期土器実測図(4) ……	150
第 101 図	C 区縄文時代前期～晩期土器実測図(5) ……	151
第 102 図	C 区縄文時代前期～晩期石器実測図(1) ……	152
第 103 図	C 区縄文時代前期～晩期石器実測図(2) ……	153
第 104 図	C 区縄文時代前期～晩期石器実測図(3) ……	154
第 105 図	C 区縄文時代前期～晩期石器実測図(4) ……	155
第 106 図	C 区縄文時代早期遺構分布図(1) ……	158
第 107 図	C 区縄文時代早期遺構分布図(2) ……	159
第 108 図	C 区縄文時代早期小穴溝分布図 ……	161
第 109 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(1) ……	161
第 110 図	C 区縄文時代早期散濺分布図 ……	163
第 111 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(2) ……	165
第 112 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(3) ……	167
第 113 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(4) ……	169
第 114 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(5) ……	171
第 115 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(6) ……	173
第 116 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(7) ……	175
第 117 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(8) ……	179
第 118 図	C 区縄文時代早期遺構実測図(9) ……	181
第 119 図	C 区縄文時代早期土器分布図(1) ……	185
第 120 図	C 区縄文時代早期土器分布図(2) ……	186
第 121 図	C 区縄文時代早期土器分布図(3) ……	187
第 122 図	C 区縄文時代早期土器分布図(4) ……	188
第 123 図	C 区縄文時代早期土器分布図(5) ……	189
第 124 図	C 区縄文時代早期土器分布図(6) ……	190
第 125 図	C 区縄文時代早期土器分布図(7) ……	191
第 126 図	C 区縄文時代早期土器実測図(1) ……	193
第 127 図	C 区縄文時代早期土器実測図(2) ……	195

第 128 図	C 区縄文時代早期土器実測図(3) ……	197
第 129 図	C 区縄文時代早期土器実測図(4) ……	199
第 130 図	C 区縄文時代早期土器実測図(5) ……	201
第 131 図	C 区縄文時代早期土器実測図(6) ……	202
第 132 図	C 区縄文時代早期土器実測図(7) ……	203
第 133 図	C 区縄文時代早期土器実測図(8) ……	204
第 134 図	C 区縄文時代早期土器実測図(9) ……	205
第 135 図	C 区縄文時代早期土器実測図(10) ……	206
第 136 図	C 区縄文時代早期土器実測図(11) ……	207
第 137 図	C 区縄文時代早期土器実測図(12) ……	208
第 138 図	C 区縄文時代早期土器実測図(13) ……	209
第 139 図	C 区縄文時代早期石器分布図(1) ……	211
第 140 図	C 区縄文時代早期石器分布図(2) ……	212
第 141 図	C 区縄文時代早期石器分布図(3) ……	213
第 142 図	C 区縄文時代早期石器分布図(4) ……	214
第 143 図	C 区縄文時代早期石器分布図(5) ……	215
第 144 図	C 区縄文時代早期石器分布図(6) ……	216
第 145 図	C 区縄文時代早期石器分布図(7) ……	217
第 146 図	C 区縄文時代早期石器分布図(8) ……	218
第 147 図	C 区縄文時代早期石器実測図(1) ……	219
第 148 図	C 区縄文時代早期石器実測図(2) ……	221
第 149 図	C 区縄文時代早期石器実測図(3) ……	222
第 150 図	C 区縄文時代早期石器実測図(4) ……	223
第 151 図	C 区縄文時代早期石器実測図(5) ……	224
第 152 図	C 区縄文時代早期石器実測図(6) ……	225
第 153 図	C 区縄文時代早期石器実測図(7) ……	226
第 154 図	C 区縄文時代早期石器実測図(8) ……	227
第 155 図	C 区縄文時代早期石器実測図(9) ……	228
第 156 図	C 区縄文時代早期石器実測図(10) ……	229
第 157 図	C 区旧石器時代遺物分布図 ……	231
第 158 図	C 区旧石器時代石器実測図 ……	232
第 159 図	C 区時代不明遺構実測図 ……	233
第 160 図	屈折率測定結果 ……	279
第 161 図	植物柱體体分析結果 ……	283
第 162 図	花粉ダイアグラム ……	285
第 163 図	暦年較正年代マルチプロット図 ……	299
第 164 図	暦年較正結果(1) ……	300
第 165 図	暦年較正結果(2) ……	301
第 166 図	土器内面付着物と非外縁分光分析結果 ……	302
第 167 図	障ノ元遺跡における時代別主要遺構変遷図(1) ……	306
第 168 図	障ノ元遺跡における時代別主要遺構変遷図(2) ……	307

表 目 次

第 1 表 布痕土器集計表	37
第 2 表 主要遺構一覧表	235
第 3 表 土器・陶磁器観察表	241
第 4 表 石器観察表	268
第 5 表 土製品・瓦・瓦製品観察表	275
第 6 表 ガラス製品観察表	275
第 7 表 鉄器・鏡観察表	275
第 8 表 テフラ分析結果	278
第 9 表 植物珪酸体分析結果	283
第 10 表 花粉分析結果	285
第 11 表 炭化種実同定結果	289
第 12 表 イネ炭化果実の計測値(粒長・粒幅)	291
第 13 表 イネの粒形と大きさ	291
第 14 表 樹種同定結果	295
第 15 表 放射性炭素年代測定結果	298
第 16 表 元素分析結果	302

写 真 目 次

写真 1 試料採取箇所	278
写真 2 テフラ試料とテフラ粒子の顕微鏡写真	279
写真 3 植物珪酸体(プラントオパール)	284
写真 4 花粉顕微鏡写真	285
写真 5 種実同定における試料	289
写真 6 樹種同定における顕微鏡写真	294

図 版 目 次

図版 1 清武川下流域の田園風景の中にある陣ノ元遺跡(北から)／ 清武川下流域の田園風景の中にある陣ノ元遺跡(南から)	
図版 2 陣ノ元遺跡 A～C 区的位置(俯瞰・合成)	

(A 区)

図版 3 陣ノ元遺跡 A 区(アカホヤ火山灰層上面)の遺構分布(俯瞰)	
図版 4 SG1～4 完備状況(北から)／SG1～4 完備状況(俯瞰)／ SF1,2 掘削状況(東から)／SF2 検出状況(西から)／ 湧水著しい SF2(北から)	
図版 5 SC1～4 完備状況(東から)／SC1 遺物出土状況(南から)／ SC2 検出状況(南から)／SC3 検出状況(東から)／ SC3,4 完備状況(南から)	
図版 6 防空壕跡 P14 木杭跡とその掘り方(北から)／ 畝状遺構検出状況(西から)／防空壕跡完備状況(西から)／	

SB2・SC5,6 完備状況(俯瞰)

図版 7 SB1,2・SE4～6 完備状況(西から)／SB4 検出状況(西から)／ SE3,4 完備状況(南から)／SE3 完備状況(西から)／ SB4 完備状況(西から)	
図版 8 SB5,7,8(東半のみ)完備状況(南から)／SE6,8 完備状況(北から)	
図版 9 SB9,10 完備状況(南から)／SB6-SC1 検出状況(北から)／ SB7 完備状況(西から)／SB9,10 完備状況(西から)／ 柱穴列完備状況(東から)	
図版 10 SE4 検出状況(西から)／SE4 完備状況(西から)／ SE5,6 検出状況(西から)／SE5,6 完備状況(西から)／ SE4 土層断面(西から)／SE6 土層断面(西から)	
図版 11 SE8～10 完備状況(西から)／SE8～10 検出状況(西から)／ 低地堆積物(西から)／SE8～10 掘削状況(西から)	
図版 12 SC10 完備状況(南から)／A 区の土層堆積(西から)／ A 区西側街道の調査状況(俯瞰)／ A 区西側街道 c 地点西壁の土層堆積(東から)／ A 区西側街道 b 地点西壁の土層堆積(東から)／ A 区東側街道の全景(西から)／ A 区東側街道のトレンチ掘削状況(北から)	

(B 区)

図版 13 陣ノ元遺跡 B 区(アカホヤ火山灰層上面)の遺構分布(俯瞰)	
図版 14 SB1・SG1～10・SC1 完備状況(西から)／ SG1～10 検出状況(西から)／SG1～3 完備状況(西から)／ SG8～10 土層断面(西から)	
図版 15 SE2 検出状況(西から)／SE2 完備状況(西から)／ SE2,3 土層断面(西から)／SE3 土層断面(北から)／ SE2 土層断面(東から)／ SE1～3 と農史跡「木花村古墳」2号(南東から)／ SC2～4 検出状況(北から)	

(C 区)

図版 16 陣ノ元遺跡 C 区(東から)／ 農史跡「木花村古墳」と陣ノ元遺跡(南西から)	
図版 17 陣ノ元遺跡 C 区 1 画面(アカホヤ火山灰層上面)の遺構分布(俯瞰)	
図版 18 SE1～6 完備状況(南東から)／SE1～3,5,6 完備状況(東から)	
図版 19 SE1 土層断面(北東から)／SE6 土層断面(西から)／ SE1 完備状況(北東から)／SE8 完備状況(西から)／ SE4 完備状況(西から)	
図版 20 SE6 検出状況(西から)／SE6 完備状況(西から)／ SE5 検出状況(南西から)／SE3 検出状況(西から)／ SE3 完備状況(西から)／SE7 完備状況(西から)／ SG2～4 土層断面(西から)／SB1 検出状況(西から)	
図版 21 陣ノ元遺跡 C 区北半(南東から)／陣ノ元遺跡 C 区北半(西から)	
図版 22 SA1・SB2 とその周辺(北から)／SA1 完備状況(東から)	

- 図版23 SA1遺物・炭化材出土状況(東から)／
SA1炭化材出土状況(北から)／
SA1炭化材出土状況(南から)／SA1炭化材出土状況(南東から)／
SA1間仕切り1西壁土層断面(東から)
- 図版24 SA2完掘状況(南から)／SA2完掘状況(俯瞰)
- 図版25 SA2-SC1掘削状況(南西から)／SA2-SC2土層断面(北から)
- 図版26 SA2-SC1完掘状況(西から)／SA2-SC2完掘状況(北西から)／
SA2-SC2遺物出土状況(北から)／
SA2-SC3完掘状況(東から)／
SA2-SC3土層断面(東から)／SA2-SC4完掘状況(東から)／
SA2-SC5完掘状況(東から)／SA2遺物出土状況(北から)
- 図版27 SA3完掘状況(東から)／SA3,12切合い等検出状況(西から)／
SA3検出状況(東から)／SA3-SC3遺物出土状況(東から)／
SA3-SC1遺物出土状況(南西から)
- 図版28 SA4完掘状況(西から)／SA4完掘状況(南東から)／
SA4検出状況(西から)／SA4掘削状況(西から)／
SA6完掘状況(南東から)／SA6検出状況(東から)／
SA6遺物出土状況(東から)／SA6遺物出土状況(東から)
- 図版29 SA7完掘状況(南西から)／SA7東半遺物出土状況(北西から)／
SA7西半遺物出土状況(北から)／
SA7西半遺物出土状況(東から)／
SA7東半検出状況(北西から)／
SA7埋土2層中の隠検出状況(南から)
SA7西半・SA8,10完掘状況(南西から)／
SA7西半・SA8,10検出状況(南東から)
- 図版30 SA3,8,9,11～13完掘状況(俯瞰)／
SA11完掘状況(南西から)／
SA11掘削状況(南東から)／SA12掘削状況(南東から)／
SA9赤色顔料出土状況(南西から)
- 図版31 SA5土層断面・完掘状況(東から)／SA13完掘状況(西から)／
SA14完掘状況(俯瞰)／SB2完掘状況(俯瞰)／
SB2完掘状況(南から)／SB2-SC1掘削状況(東から)／
SB3完掘状況(俯瞰)／SB4完掘状況(南東から)
- 図版32 SC1～5分布状況(南東から)／SC11～13分布状況(南東から)
- 図版33 SC1掘削状況(北東から)／SC1完掘状況(北東から)／
SC2掘削状況(南東から)／SC2完掘状況(東から)／
SC3掘削状況(東から)／SC3遺物出土状況(北東から)／
SC3掘削状況(東から)／SC3完掘状況(東から)
- 図版34 SC4掘削状況(東から)／SC4完掘状況(東から)／
SC5掘削状況(東から)／SC6完掘状況(東から)／
SC7掘削状況(西から)／SC7完掘状況(東から)／
SC8掘削状況(北西から)／SC9掘削状況(北から)
- 図版35 SC9遺物出土状況(東から)／SC9完掘状況(北西から)／
SC10掘削状況(北から)／SC10遺物出土状況(北東から)／
SC11掘削状況(東から)／SC11完掘状況(北東から)／
SC12掘削状況(西から)／SC12完掘状況(北東から)
- 図版36 SC13掘削状況(北から)／SC13完掘状況(南東から)／
SC14掘削状況(東から)／SC14完掘状況(北から)／
SC15掘削状況(北から)／SC15遺物出土・完掘状況(北から)／
SC16遺物出土状況(東から)／SC16完掘状況(南から)
- 図版37 SC17掘削状況(南東から)／SC17完掘状況(東から)／
SC18掘削状況(北東から)／土器集中1-1検出状況(北から)／
土器集中1-2検出状況(北から)／土器集中1-3検出状況(北から)／
土器集中1-4検出状況(北から)／土器集中2検出状況(北から)
- 図版38 SJ1・SC19完掘状況(東から)／
SJ2・SC20完掘状況(南東から)／
柱六列完掘状況(東から)／SX1・柱六列検出状況(東から)／
SX1掘削状況(南から)／SX1完掘状況(南から)／
SX2掘削状況(北から)／SX2完掘状況(北から)
- 図版39 散濺の掘削状況(2号散濺周辺,南から)／
小穴群分布状況・下層確認トレンチ配置状況(俯瞰)
- 図版40 SB5完掘状況(北から)／散濺・集石構造調査状況(北東から)／
SI1検出状況(南西から)／SI1配石検出状況(南西から)／
SI2検出状況(北東から)／SI2配石検出状況(北から)／
SI3検出状況(東から)／SI3配石検出状況(東から)
- 図版41 SI4検出状況(西から)／SI4-3配石検出状況(南東から)／
SI4-1充填隠及び配石検出状況(南西から)／
SI4-1配石検出状況(南西から)／SI5検出状況(南西から)／
SI5配石検出状況(南西から)／SI6検出状況(東から)／
SI7検出状況(東から)
- 図版42 SI8検出状況(南西から)／SI8完掘状況(南西から)／
SI9検出状況(東から)／SI10検出状況(北東から)／
SI11検出状況(東から)／SI12検出状況(東から)／
SI13検出状況(西から)／SI14検出状況(北から)
- 図版43 SI15検出状況(北から)／SI16検出状況(北から)／
SC22,23完掘状況(北から)／SC28,104完掘状況(南東から)／
SC24掘削状況(南西から)／SC24完掘状況(北東から)／
SC29掘削状況(北から)／SC29完掘状況(北から)
- 図版44 SC38,40完掘状況(北西から)／SC69掘削状況(南西から)／
SC69完掘状況(南東から)／SC87,88完掘状況(東から)／
SC91掘削状況(南から)／SC100完掘状況(南から)／
SC109掘削状況(西から)／SC111掘削状況(南東から)
- 図版45 A区 近世～近代遺構出土遺物(陶磁器等)／
A区 近世～近代遺構出土遺物(瓦・土製品等)／
A区 近世～近代包含層出土遺物(火消し壺等)／
A区 近世～近代包含層出土遺物(石礎等)／

A区 中世出土遺物(土師器・須恵器・青磁)

図版46 A区 古代掘立柱建物跡出土遺物(土師器等)／
A区 古代SB6-SC1出土遺物(陶羽口)／
A区 古代その他の遺物出土遺物(土師器等)／
A区 古代出土遺物(布痕土器)

図版47 A区 縄文時代出土遺物／B区 中世～近代出土遺物／
B区 縄文時代出土遺物

図版48 C区 古代出土遺物(土師器・須恵器)／
C区 中世～近世出土遺物(土製品・石器)／
C区 中世～近世出土遺物(陶磁器)／
C区 近世出土遺物(瓦玉)／
C区 近世出土遺物(銭貨)

図版49 C区 SA1出土土器／C区 SA1出土石器

図版50 C区 SA2出土土器／C区 SA2出土石器

図版51 C区 SA3出土土器／C区 SA3出土石器

図版52 C区 SA3-SC1出土土器／C区 SA4, 6, 7出土土器

図版53 C区 SA4～6出土土器／C区 SA7, 8出土土器

図版54 C区 SA11, 12出土土器／C区 SA11, 12出土石器

図版55 C区 弥生時代後期後半～古墳時代前期土坑出土土器／
C区 土器集中出土土器

図版56 C区 弥生時代後期後半～古墳時代前期包含層出土土器／
C区 櫛掻文のある土器／C区 口縁部に線刻のある土器

図版57 C区 古墳時代前期輸入土器／
C区 底部に貫通孔・棒状圧痕のあるミニチュア土器

図版58 C区 弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器集中ならびに包含層出土石錘／
C区 弥生時代後期後半～古墳時代前期包含層出土土器

図版59 C区 弥生時代後期後半～古墳時代前期出土鉄器／
C区 SA2出土袋状鉄斧／袋状鉄斧X線写真

図版60 C区 縄文時代前期～晩期土器(1～4類)／
C区 縄文時代前期～晩期土器(5～10類)

図版61 C区 縄文時代前期～晩期土器(11類)／
C区 縄文時代前期～晩期(打製石鏃・石錘・削器)／
C区 縄文時代前期～晩期(石核)

図版62 C区 縄文時代前期～晩期石器(石核・礫器・束刃石器・磨製石斧)／
C区 縄文時代前期～晩期石器(切目石錘・有溝石錘・打欠石錘)

図版63 C区 縄文時代早期土器(13・14類)／
C区 縄文時代早期土器(15a類)／
C区 縄文時代早期土器(15b・16類)／
C区 縄文時代早期土器(17類)

図版64 C区 縄文時代早期土器(18a類)／
C区 縄文時代早期土器(18b・18c類)／
C区 縄文時代早期土器(19・20類)／

C区 縄文時代早期土器(21類)

図版65 C区 縄文時代早期石器(打製石鏃)

図版66 C区 縄文時代早期石器(削器・尖頭状石器・異形石器・微細割
離削片・削片)／
C区 縄文時代早期石器(石核)

図版67 C区 縄文時代早期石器(打欠石錘)／
C区 縄文時代早期石器(敲石・磨石・凹石)

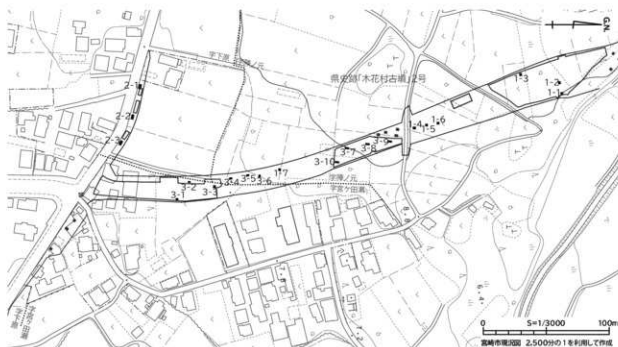
図版68 C区 縄文時代早期石器(台石)／
C区 旧石器時代石器(細石刀・細石刀核)

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県教育庁文化財課(以下、文化財課)では、毎年、関係機関に対して開発事業の照会を実施しており、宮崎土木事務所による一般県道学園木花台本郷北方線(山下工区)の道路改良事業について道路建設課から回答があった。事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったものの、清武川を挟んで南側の畑地や山林、宮ヶ田瀬集落の宅地等にかかる用地について、前方後円墳である県史跡「木花村古墳」2号の東側に隣接することや用地内で土器片等の散布が確認されたことから、遺跡の存在する可能性が高いと見られた。そこで、文化財課では、宮崎土木事務所と協議の上、用地買収の進捗に合わせて令和元～2年度に計3回の試掘調査を実施した。

1回目の試掘調査(令和元年12月16・17日)では、トレンチ7か所について、清武川よりの丘陵北端付近(トレンチ1-1～1-3)・県史跡「木花村古墳」2号の北東のやや低地になった畑地(トレンチ1-4～1-6)・現在の宮ヶ田瀬集落の西側山林(トレンチ1-7)に設定し、トレンチ1-1～1-3でアカホヤ火山灰層上位の黒色土中から土器・陶磁器・石器等、同火山灰層下位の黒褐色土から石器が出土し、アカホヤ火山灰層に埋り込まれた遺構と見られる黒色土の落ち込みも確認された。トレンチ1-4～1-7では、遺構・遺物とも確認されなかったものの、トレンチ1-4～1-6ではアカホヤ火山灰層下位の黒褐色土～褐色土から以下の土層、トレンチ1-7では同火山灰層やその上位の黒色土が残存すると確認された。2回目の試掘調査(令和2年8月18日)では、県道338号拡幅部分(本道より西側にトレンチ3か所(トレンチ2-1～2-3)を設定し、トレンチ2-1の黒色土から古代の土器等、トレンチ2-2の黒色土から古代の土器・近世の陶磁器等が出土した。また、トレンチ2-2・2-3では、黒色土の下位にアカホヤ火山灰層の堆積が認められた。3回目の試掘調査(令和2年12月14・15日)では、10か所のトレンチについて、現在の宮ヶ田瀬集落の西側(トレンチ3-1～3-6)・県史跡「木花村古墳」2号の東に隣接する畑地(トレンチ3-7～3-10)に設定し、トレンチ3-7・3-8で遺構と見られる黒色土の落ち込みや土器等が発見され、トレンチ3-1～3-3では土器等の他、アカホヤ火山灰前後の良好な土層堆積が確認された。トレンチ3-4～3-6・3-9・3-10では、遺構・遺物とも確認されなかったが、トレンチ3-4～3-6ではアカホヤ火山灰層下位の褐色土～礫層が、トレンチ3-9では同火山灰層下位の褐色土から以下の土層が、トレンチ3-10ではトレンチ3-7・3-8と同様の土層がそれぞれ見られた。



第1図 試掘調査トレンチ位置図

試掘調査で新規に遺跡が確認された結果を受けて、文化財課では、宮崎市教育委員会と協議の上、周知の埋蔵文化財包蔵地「陣ノ元遺跡」として取り扱うと決定した。その後、試掘調査で遺構・遺物の確認されたトレンチ1-1～1-3・2-1～2-3・3-1～3-3・3-7～3-10の周辺（トレンチ1-4～1-7・3-4～3-6周辺は遺構面・包含層等の削平により除外）について、宮崎土木事務所と文化財課、県埋蔵文化財センターの三者で保存協議を進めたものの、工事計画の変更はできず、やむを得ず工事の影響を受ける陣ノ元遺跡の一部7,820m²について発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

第2節 調査の組織

陣ノ元遺跡における発掘調査組織は下記の体制で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー	飯田 博之	(令和元～2年度)
	松林 豊樹	(令和3～5年度)
埋蔵文化財担当主査(4年度から副主幹)	高橋 浩子	(令和元～4年度)
埋蔵文化財担当主査	沖野 誠	(令和5年度)

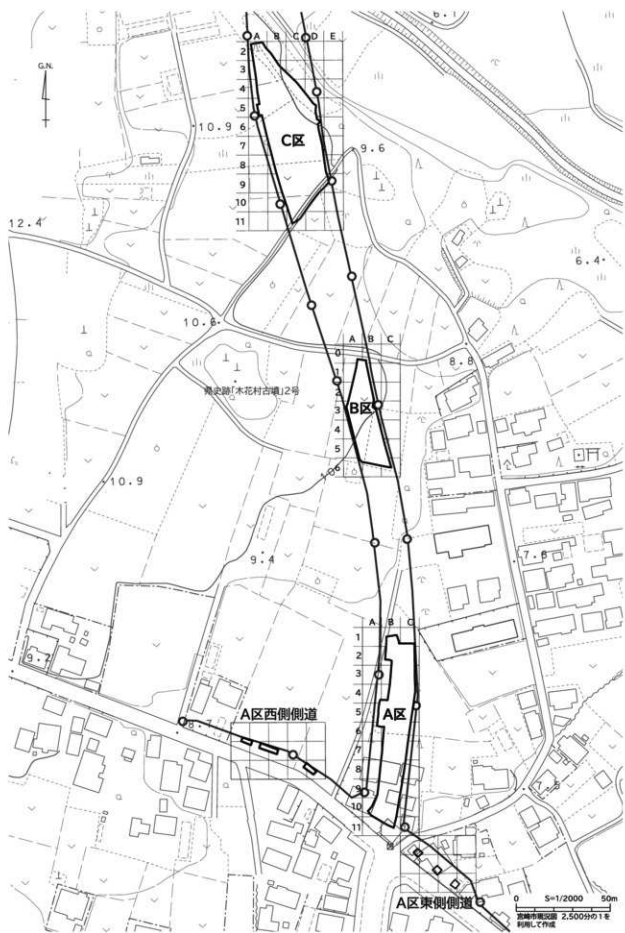
発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

所長	菊村 祐司	(令和3年度～令和4年12月)
	吉本 正典	(令和5年2月～令和5年度)
副所長	赤崎 広志	(令和3年度)
	片伯部 真一	(令和4年度：兼 総務課長)
	東 憲章	(令和5年度：兼 調査課長)
総務課長	鈴木 勝代	(令和3年度)
	寺原 尚徳	(令和5年度)
総務担当リーダー	阿波野ゆかり	(令和3・4年度)
	原田 佳奈子	(令和5年度)
調査課長	飯田 博之	(令和3年度)
	東 憲章	(令和4年度)
調査課調査第一担当リーダー	和田 理啓	(令和3～5年度)
調査課調査第一担当主査	藤木 聡	(令和3・4年度 調査担当) (令和4・5年度 整理担当)
同上	江藤 建輔	(令和3年度 A区調査主任・C区調査副主任) (令和4年度 B・C区調査主任) (令和4・5年度 整理・報告書作成担当)
同上	小吹 雅史	(令和3年度 C区調査担当)
同上	小山 輝晃	(令和4年度 B・C区調査副主任)
調査課調査第二担当主査	石塚 啓祐	(令和3年度 C区調査主任・A区調査副主任) (令和4・5年度 整理・報告書作成担当)

第3節 発掘調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

陣ノ元遺跡は調査対象面積が7,820m²あり、現場事務所や駐車場用地の確保の面から、便宜上南から北に向かって順に、A区(3,330m²)、B区(1,040m²)、C区(3,450m²)の3つの調査区を設定した。A区はさらに、公道が入ることや、調査区を介してのみ出入り可能な隣接畑地の作付け等の関係から、本道部分・西側側道部分・東側側道部分に細分して調査を実施した。A・B区はアカホヤ火山灰層上面の1面、C区はアカホヤ火山灰層上面・下面の2面を発掘対象とした。現場事務所等について、令和3年度はB区を、同4年度はA・B区間の残地をあてた。また、調査区周辺の道路は狭くかつ舗装されていない箇所もあって、大型トラック等の通行や毎朝夕の作業員



第2図 調査区と周辺地形図

等の車の出入りが難しく、県道と各調査区との導線確保が必須であったため、A区本道西側等に進入路を仮設し、調査進捗に応じて付け替えつつ、令和4年度の調査終了時まで使用した。

グリッド設定については、A～C区それぞれの調査区に対して、国土座標（世界測地系）に基づいた10m×10mを1グリッドとし、南北方向のグリッド線にアラビア数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。さらに、1つのグリッドを5m×5mの4分割にし、北西隅から時計周りにa・b・c・dの小グリッドに分け、包含層中の遺物取り上げ等に対応した。なお、A～C区それぞれに同じグリッド名が存在するため、ラベル記入は「A～C区名+グリッド名」とした。

遺構名はA～C区それぞれで検出順にS+Noで付与し、同Noは「実測番号」として遺物への注記に始まり、収蔵までそのまま踏襲した。調査順序の都合から、A区北半：S1～251及びS500～553、S2000～2031まで、A区南半：S1000～1221まで、B区：S1～65、C区アカホヤ火山灰層上位：S1～450まで、C区アカホヤ火山灰層下位：S500～727となった。また、本書において遺構平面図等を個別に報告するような主要遺構については、「報告遺構番号」として当センターの遺構略号ごとに、A～C区それぞれで1から番号を付した(第2表)。

遺構の掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半裁により埋土堆積状況の確認や床面の認定の上で、作業員等による人力掘削を進めることを基本とした。また、竪穴建物跡や土坑底面付近に堆積する遺構埋土等46試料442.4kgを対象に、現地にてフローテーション法による炭化物等の回収(篩の最少目盛り：0.45mm)を行った。

遺構等の記録のうち、遺構平面図や遺物の取り上げに伴う三次元情報の取得については、その後の報告書作成までを含めて円滑化・迅速化を図るために、トータルステーションと連動した(株)CUBIC製の「遺構くん」ソフト搭載のノート型パソコンを使用した。ただし、遺構図作成のうち、集石遺構の礫・配石の図化や各遺構の土層断面図及び遺物出土状況等については、縮尺1/10もしくは1/20で調査員が手実測した。

写真記録のうち、遺構検出から半裁時の土層断面、遺物出土状況、完掘等については、一眼レフデジタルカメラ(Nikon D850：4575万画素 フルサイズ)を使用した。デジタル画像の保存形式は、TIFFとRAWを基本としている。メモ記録写真には、コンパクトデジタルカメラ(FUJIFILM FinePix XP140：1635万画素 APS方式)を用いた。さらに、上空からの写真撮影は業者委託とし、A・B区では遺構検出・半裁・遺物等の出土状況及び完掘状況、C区では調査1面目完掘状況・2面目調査状況・周辺地形等を対象に、全体で合計5回に分けて実施した。

なお、新型コロナウイルス感染症への対策として、日々の掘削作業時の作業員間の距離確保やマスク着用、道具や事務所等の共用部分の消毒等、各指針等に沿いつつ従来の調査とは異なる形でもって調査を進めた。

2 発掘調査の経過

令和3年度 令和3年4月5日から令和4年3月4日までの193日間でA・C区の発掘調査を実施した。まず、A区の調査から着手し、東側側道部分について土層堆積を確認するトレンチを3か所掘削したところ、遺構はなく遺物もかなり摩滅した土器小片1点のみときわめて希薄な包含状況であったため、東側側道部分の発掘調査については、このトレンチ調査のみでもって終了とした。次いで、事務所用地(B区)等への仮設進入路を用地内の西側に確保しつつ本道部分の表土剥ぎを進めた。本道部分は、周辺地形の中で地表の雨水等が集まる低地となっていた関係や調査時期が4～7月であったこともあり、湧水や長雨による水没に悩まされていた調査であり、必要に応じて水中ポンプで排水しつつ発掘を進めた。また、西側側道部分は、畑地と交通量の多い県道に挟まれた狭い調査区であり、作付け等の関係や、絶え間ない湧水により壁が崩落しかかる等、8月中の1週間という短期間かつ

通常以上の安全対策の求められるものであり、文化財課の試掘トレンチ間の未掘地を主対象に、壁崩落の回避等を念頭にしつつ、トレンチ状に分割した小区画3か所での発掘調査とした。

C区の調査は、A区調査と一部並行しつつ6月から着手した。猛暑の中でのアカホヤ火山灰層上位の黒色土(包含層)の人力掘削に始まる多くの遺構掘削や記録、遺物取り上げを繰り返した。遺構検出は、アカホヤ火山灰層のより残存する範囲では容易であったが、直近まで耕作されていた範囲では竹根による攪乱が著しく、加えてアカホヤ火山灰層下位の黒褐色土層面等で黒色の埋土の遺構検出にあたることも多く、特に切り合い等の集中する範囲では検出が難航した。8月には、未着手であった調査区北端の段落ちた畑地にトレンチを入れたところ、砂礫層中まで削平されているとわかり、同範囲については調査終了とした。この範囲の調査面積減を加味してなお、当初予定以上の遺構・遺物の発見があったことから、調査期間について宮崎土木事務所と協議し、3月初頭まで延長することとなった。11月末には、新型コロナウイルス感染症対策等を十分に図った上で現地説明会を実施し、105名の参加を得ることができた。

12月からは、アカホヤ火山灰層より下位層の調査に着手し、多量の散礫の位置情報を記録しつつ、遺構の検出作業を進めた。強風、凍結、降雪等の気象条件により、作業面・安全面への障害が多く、調査の進捗に影響を与えた。最終的に53,000点を超える散礫を記録し、散礫下から多くの遺構、13,000点近い遺物を確認し、令和3年度の調査を終了した。

令和4年度 令和4年5月16日から令和4年8月10日までの48日間でB区及びC区の一部で発掘調査を実施した。B区の調査は5月に着手し、7月にトレンチによる下層確認を行い終了した。なお、当初B区に含まれていた北西端の区画(A1・2Gr.の一部)については、令和3年度中に確認トレンチを設定し、同区画内はすでにアカホヤ火山灰層下位まで耕作により削平されていること、同層下位に遺構・遺物とも存在しないことが確認されたため、令和4年度の調査着手前にB区の調査範囲から外すこととなった。C区では、前年度からの継続調査を6月から進めた。前年度と同じく、縄文時代早期の遺物が多く出土した。7月中には掘削完了し、8月初頭には記録等を終了した。

令和3・4年度の調査日数は合計241日間である。発掘調査経過(日誌抄)は、下記のとおりである。

A区

R3.4.5～4.8

4.14～4.20
4.21～5.8
5.17～5.28
6.1～6.4
6.7～6.11
6.14～6.18
6.21～6.25
6.28～7.2
7.5～7.9
7.12～7.16
7.19～8.6
8.10～8.13
8.16～8.20
8.23～8.27
11.15～11.19
11.22～11.26
11.29～12.3

伐採。

東側側道部分の調査終了。本道部分の確認調査、重機による表土除去。

排土置場整地。現場事務所等設置。

発掘作業員任用開始。環境整備等。遺構検出。

小穴を多数検出。溝状遺構の検出写真撮影。雨天及び湧水により調査区南側が水没。

遺構掘削・検出・写真撮影。テレビ取材対応。

遺構掘削・検出・完備写真撮影(独立柱建物跡、溝状遺構)。

完備写真撮影(独立柱建物跡等)。調査区南側の湧水著しく作業困難。

調査区南側に残る湧水をポンプで排水。

トレンチ掘削。調査区南側の溝状遺構について小型水中ポンプで排水しつつ掘削。防空壕実測。

溝状遺構の土層断面図作成。遺構の図化・記録作業が本格化。

遺構の図化・記録作業。空撮(7.30)。

耐風養生した箇所現状復旧。重機で井戸掘削。仮設道路部分以外の本道部分の埋め戻し。

重機で西側側道部分の表土除去。包含層掘削。遺物取上げ。環境整備は空撮準備。

西側側道部分の記録作業。空撮(空撮直後に安全対策のため埋め戻し)(8.24)。西側側道部分の調査終了。

本道部分の仮設道路部分の表土除去。遺構検出・掘削・実測・写真撮影。

遺構掘削。空撮(11.26)。

遺構実測。埋め戻し。本道部分の調査終了(A区全体の調査終了)。

B区

R4.5.16 ~ 5.30
6.1 ~ 6.29
7.14

現場事務所設置、排土置場整地、重機で表土除去、グリッド杭設置、発掘作業員任用開始。
環境整備・遺構検出・検出写真撮影・掘削・実測・完掘写真撮影・空撮(6.24)。
下層確認トレンチの掘削。B区の調査終了。

C区(令和3年度)

R3. 6.14 ~ 6.18
6.25 ~ 7.2
7.5 ~ 7.9
7.12 ~ 8.6
8.10 ~ 8.13
8.16 ~ 8.20
8.23 ~ 9.10
9.13 ~ 9.17
9.21 ~ 10.1
10.4 ~ 10.8
10.11 ~ 10.29
11.1 ~ 12.3
12.6 ~ 12.10
12.13 ~ 12.20
12.24

包含層の堆積状況を把握するトレンチ掘削。
表土除去。土層出土が目につく。
環境整備。南西側から包含層掘削開始。溝状遺構・間仕切り住居等を検出。
包含層・溝状遺構掘削。台風対策。
耐風養生箇所の現状復帰。包含層掘削。
調査区北端の段落ちした畑部分の確認調査。同部分の調査終了。包含層掘削。大雨対策。
サブトレンチを併用しつつ包含層掘削。遺構検出写真撮影・掘削・実測本格化。
雨天のため現場中止。
遺構・包含層掘削。写真撮影・遺物記録等。冠水を受けC区進入路の再整備。自然科学分析サンプル採取。
遺構掘削・写真撮影・実測・遺物取上げ等。重機で東半の一部の包含層上部を除去し、遺構確認を急ぐ。
フローテーション作業開始。遺構掘削・写真撮影・実測・遺物取上げ等。
遺構掘削・写真撮影・実測・遺物取上げ等。現地説明会(11.23)、空撮(11.26)、下層確認トレンチ掘削。
2面目の調査着手。重機で無遺物層除去。取上げ済みの遺物整理等。グリッド杭の再設。
遺構・包含層掘削・実測・写真撮影。遺物・礫の点上げが本格化。
長期休業前の耐風養生等。

R4.1.5 ~ 1.28
2.1 ~ 3.4

遺構・包含層掘削・実測・写真撮影。遺物・礫の点上げ。空撮(1.27)。
包含層掘削・実測・写真撮影。遺物・礫の点上げ。令和3年度の調査終了。現場事務所撤去。

C区(令和4年度)

R4. 6.9 ~ 7.28
8.1 ~ 8.10

包含層掘削・実測・写真撮影。遺物・礫の点上げ。
遺物・礫の点上げ。C区全体の調査終了。現場事務所撤去。

第4節 整理作業及び報告書作成

整理作業は、令和4・5年度に宮崎県埋蔵文化財センター本館にて実施した。令和4年度は、A・B区の整理作業及び報告書作成、C区の遺物水洗及び注記・接合、遺物実測や拓本の一部ならびにトレース作業や図版作成を行った。令和5年度は、C区の遺物実測ならびに拓本、図版作成、遺物や図面記録類に関する収蔵のほか、報告書を刊行した。遺物の水洗・注記・接合・実測・製図は担当者ならびに担当者監修の下で会計年度任用職員(整理作業員)が行い、製図のうち、遺構関係の図面及び石器・鉄器実測図についてはデジタルトレース、石器・陶磁器等の製図は手書きトレースで進めた。デジタルトレース及び図版編集等はAdobe社製の各種ソフト(illustrator2024・Photoshop2024・InDesign2024)を使用した。遺物写真撮影は、一眼レフデジタルカメラ(Nikon D850 : 4575万画素 フルサイズ)を使用した。また、令和4・5年度に、石器実測図作成の一部、ならびに炭化材やフローテーション法で回収した炭化種実の同定や放射性炭素年代測定、土器付着物の性格解明等の自然科学分析について業務委託した。

第5節 教育普及活動

障ノ元遺跡の出土遺物を持ち込んで進めた出前授業は、令和3年度に宮崎市立木花小学校(12月14日)、同4年度に宮崎市立鏡洲小学校(7月11日)で実施した。発掘現場と学校をライブ中継し、発掘現場の状況や発掘作業の様子、遺物の出土状況を同時進行で伝える形の出前授業は、令和4年度に門川町立草川小学校(6月16日)、小林市立東方小学校(7月1日)、都農町立都農東小学校(7月8日)、宮崎市立鏡洲小学校(7月11日)、日之影町立日之影中学校(7月13日)の合計5校で実施した。令和5年度には、報告書作成と並行し、埋文講座「清武川をのぞむ古代のくらし」(12月17日)、「清武川と共に生きた弥生ムラ」(2月18日)で発掘調査の成果を紹介した(いずれも会場:宮崎県埋蔵文化財センター分館)。その他、民間TV放送の情報番組で、A区発掘調査の様子等が紹介された。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

陣ノ元遺跡は、宮崎県宮崎市大字熊野字陣ノ元・字下原に所在し、旧清武町と旧宮崎市の境にあたる木花地区の西端に位置する。木花地区は、南から西にかけて標高500m級の双石山・轟鉢山・花切山等からなる山地を控え、その北裾にはおおよそ西高東低の台地と東流する清武川・加江田川があり、その東には白砂青松の日向灘を望んでいる。この台地は、加江田川・田上川の間で宮崎大学や学園木花台・熊野の集落等が広がる標高約20～40mの台地(以下、高位台地)と田上川・清武川の間で宮ヶ田瀬・下原・下木原の集落等が広がる標高約10～15mの台地(以下、低位台地)に分かれており、陣ノ元遺跡は後者の低位台地の先端付近に位置している。また、これら台地の東側には、本来は加江田川に南流の上で合流していた清武川の旧流路(現在の県総合運動公園付近)により形成された砂丘があって、木崎・島山の集落等が展開している(標高約10m)。加江田川及び田上川沿いの氾濫平野ならびに砂丘の後背湿地となっており、現在、水田等として利用されている。また、気候の特徴として、南方向に山塊があって東西方向の河川と北に開けた地形は、山沿いの多雨と、川上から海に向かう冬季の強い西風をもたらしており、発掘調査の進行にも大きな影響を与えることとなった。

陣ノ元遺跡は、河口から約2km西の清武川右岸の低位台地上に位置し、清武川とその分流である久保川による段丘崖の上面の畑地から、その南側の宮ヶ田瀬集落と下原集落の間の畑地が範囲となる。陣ノ元遺跡の地形は、戦後間もないアメリカ軍によるものや1960年代撮影の空中写真と比較すると、区画整理等による土地の改変がほとんどないまま現在に至っているとわかる。一方で、宮ヶ田瀬集落の東側ならびに県道久保木崎線より南側の低地部分は大規模な圃場整備により、蛇行した旧流路による開析地形とそれに起因する小区画水田が解消され、河川も付け替えられる等、地形改変が進んでいる。また、交通網の観点では、1884(明治17)年に製作着手の内務省地理局等編輯地図「輯製二十万分一図」によると、大淀川南岸の城ヶ崎を起点に、恒久、赤江、本郷北方、城下、本郷南方、郡司分、木崎、島山、曾山寺、折生迫(以下、略)を結んで日向灘沿いを南下する道路と、本郷南方から南西に分岐するより小さい道路があり、後者は、北から順に本郷南方、山下、清武川を渡って宮瀬(宮ヶ田瀬)、熊野、犬ノ馬場、加江田川を渡って加江田、曾山寺で再び前者に合流している。すなわち、清武川の主要な渡河点は、地図「輯製二十万分一図」や『日向地誌』等を参照すると、当時から上使橋渡(仮肥街道、現:上使橋付近)・木崎渡(現:木崎橋付近)にあるが、清武川の渡河点の1つが陣ノ元遺跡直近にある点は、遺跡の性格付けの上で見逃せない。その他、地元住民(70代)からの聞き取りでは、子供の頃の話としてC区の東の浅い谷(現況は瀬れ谷)には川水が上がってきて魚を捕ることもできたという。陣ノ元遺跡に近い位置まで清武川が入り込んでいた状況は、現在の堤防設営前の古地図でも看取され、水運や生業等にかかる点で注目される。

第2節 歴史的環境

陣ノ元遺跡が位置する清武川右岸の低位台地では、県史跡「木花村古墳」が知られる一方で、埋蔵文化財から見た歴史はほとんどわかっていない。これは、そもそも陣ノ元遺跡をはじめ東隣の宮ヶ田瀬遺跡・南隣の熊野下原遺跡もまた近年の新発見遺跡であるように、低位台地上の遺跡の把握が近年になって進んだこと、そもそも開発事業が少なく発掘調査もほとんどなかったこと等による。一方で、宮崎学園都市の展開する高位台地周辺や清武川対岸の丘陵地等では、1980年10月に始まる宮崎学園都市遺跡群の発掘調査をはじめ、工業団地や住宅地の造成、大規模な圃場整備等によって多くの遺跡内容が明らかとなっている。発掘調査された主な遺跡には、宮崎学園都市遺跡群の堂地西遺跡(現:堂地遺跡)・堂地東遺跡(現:堂地第2遺跡)・熊野原遺跡・前原西遺跡(現:熊野前原

遺跡・前原北遺跡(現:熊野前原第2遺跡)・前原南遺跡(現:熊野前原第3遺跡)・今江城跡・平畑遺跡・陣ノ内遺跡・車坂城跡・田上遺跡・浦田遺跡・入料遺跡・下田畑遺跡・赤坂遺跡・山内石塔群・小山尻西遺跡(現:小山尻第2遺跡)・小山尻東遺跡(現:小山尻遺跡)、同遺跡群周辺の山下第1・2・3遺跡(現:学園木花台山下遺跡)・車坂第1遺跡(現:車坂遺跡)・車坂第2遺跡・車坂第3遺跡・熊野第2遺跡(現:熊野西ノ原第2遺跡)や同遺跡群北の低地にある西ノ原遺跡(現:熊野西ノ原第2遺跡)・下原遺跡(現:木原下原遺跡)、清武川河口の砂堤上の木崎遺跡、清武川対岸の丘陵上等に清武城跡・北ノ迫遺跡(現:小丸遺跡)・小丸遺跡・上山ノ丸遺跡・須田木遺跡・若宮田遺跡・辻遺跡・枯木ヶ迫遺跡・市位遺跡・松ヶ迫遺跡群・平田遺跡A～C区(現:東宮一丁目平田遺跡・東宮一丁目平田第2遺跡)・東宮遺跡、岡川・水無川流域に竹ノ内遺跡・小原遺跡(今泉小原第2遺跡)・岡第4遺跡(現:岡遺跡)・上ノ原遺跡(現:今泉上ノ原第2遺跡)・田代堀第1・2遺跡(現:田代堀遺跡)・三角堀遺跡、やや上流の船引台地には清武上猪ノ原遺跡第1～5地区・五反畑遺跡A地区(現:五反畑遺跡)・五反畑遺跡B地区(現:五反畑第2遺跡)・坂元遺跡及び山田第1遺跡(現:坂元遺跡)・山田第2遺跡(現:船引山田遺跡)・滑川第1・3遺跡(現:滑川遺跡)・滑川第2遺跡・上ノ原第1・2遺跡(現:船引上ノ原遺跡)・上ノ原第3遺跡及び白ヶ野第1～3遺跡(白ヶ野遺跡)・白ヶ野第4遺跡(現:白ヶ野第3遺跡)・椎屋形第1遺跡(現:椎屋形遺跡)、八重川流域の低地・津和田第2遺跡(現:津和田遺跡)がある。以下では、調査当時の遺跡名をもって、陣ノ元遺跡周辺の歴史的環境を述べる。

旧石器時代 現状で、清武川下流域における最古クラスの遺跡は、始良Tn火山灰上位の堂地西遺跡・坂元遺跡等であり、礫群や剥片尖頭器・ナイフ形石器等が発見されている。また、堂地西遺跡・前原西遺跡・田上遺跡・清武上猪ノ原遺跡第4・同第5地区等で燧ノ木津留産黒曜石を主石材とする細石刃石器群が出土している。チャートを用いた細石刃石器群は少数派で、田代堀第1遺跡で細石刃材、前原西遺跡で細石刃がある。

縄文時代 清武上猪ノ原遺跡第5地区(一部は調査後に県史跡指定)では、草創期の14棟もの竪穴建物(うち1棟は草創期では全国初となる石組炬火を有するもの)や草創期としては県内最大級の集石遺構とともに、隆帯文土器や貝殻押圧文土器、槍先形尖頭器や丸ノミ形石斧、九州で初出土となる矢柄研磨器が出土した。また、堂地西遺跡・清武上猪ノ原遺跡第2地区・同第4地区で爪形文・隆帯文土器等、白ヶ野第2・第3遺跡でやや特異な神子柴型石斧が出土した。早期になると、遺跡数が急増する。代表的な遺構には、調理関連施設とされる集石遺構と炉穴・連結土坑があり、集石遺構に関係して検出される散礫は、礫数が多い場合「礫の絨毯」とも形容される。集石遺構の中には、須田木遺跡や滑川第1遺跡例のような直径2m以上・深さ1m・充填された礫の総重量1トン以上もある超大型のものも存在する。放射性炭素年代測定の結果等からは、船引台地上では集石遺構が8,400～8,200年前(早期中葉)を中心に早期の全時期にわたって形成され、連結土坑・炉穴も集石遺構と同じ早期中葉にはほぼ集中して構築されている。また、船引台地では、陥し穴状遺構や土器埋設遺構の発見例がいくつかあり、後者には清武上猪ノ原遺跡第4地区の下刺釜式土器、坂元遺跡・清武上猪ノ原遺跡第1地区・同第2地区の塞ノ神式土器等の埋設がある。清武上猪ノ原遺跡第3地区では石斧の埋納遺構がある。この他、早期後葉～末葉での特異な出土品には、滑川第2遺跡の南九州最大級となる重量1.2kg強の姫島産黒曜石製石核、下猪ノ原遺跡第1地区の塊状耳飾がある。前期になると、鬼界カルデラの巨大噴火の影響等により遺跡数が減少する。若宮田遺跡・白ヶ野第1遺跡・滑川第1遺跡等で轟B式土器が散発的に出土した。前期後半の曾畑式土器期では、三角堀遺跡で竪穴建物、下田畑遺跡で土坑が検出され、滑川第1遺跡・同第2遺跡で曾畑式土器がまとめて出土した。中期には、船元式土器等の瀬戸内系土器の流入があり、辻遺跡・白ヶ野第1遺跡で出土している。やや先行して、土器片錘や切目石錘等も同様に瀬戸内方面からの影響下で、漁網錘として採用される。中期後半以降は遺跡数が増加し、中期中葉～後葉の上ノ原第1遺跡(春日式～大平式)では約30軒の竪穴建物や土坑等があって、石棒等が出土した。



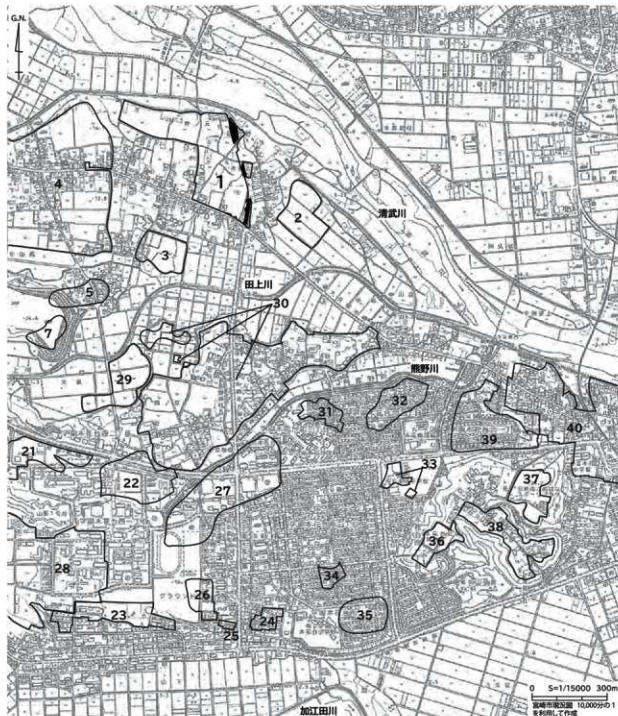
第3図 陣ノ元遺跡周辺の遺跡分布図

後期前葉(指宿式～市来式)を中心に中期末～後期後葉(宮之迫式～太郎迫式)の上の原第2遺跡では、50軒弱の竪穴建物や土坑群が検出された。後期前葉～中葉を中心に50軒以上の竪穴建物がある竹ノ内遺跡では、軽石製岩偶やヒスイ製玉類の出土が特徴的である。後期後葉～晩期前半を中心とした竪穴建物約70軒や埋壺等が発見された平畑遺跡では、土器や石器他の各種生活道具とともに石刀・岩偶も発見され、宮崎県を代表する当該期の集落遺跡となっている。埋壺は三角堀遺跡でも発見されている。平畑遺跡に隣接する山下第2遺跡は後期中葉の集落跡である。晩期後半では、前原北遺跡で孔列を有する刻目突帯文土器や穿孔を有する擦切り石庖丁が出土した。この他、時期の絞り込みは難しいながら、滑川第1遺跡の調査成果から、日東・五女木等の南九州産黒曜石が前期以降に増加する傾向が指摘されている。

弥生時代～古墳時代前期前半 弥生時代前期～中期前半は散発的なあり方ながら、滑川第2遺跡で下城式土器がまとまって出土した。前原北遺跡では中期後半の円形プランの竪穴建物や、貯蔵穴と推定される袋状竪穴が検出されたほか、竪穴建物の内部床面に土坑(貯蔵穴)を掘り込むものが登場する。椎屋形第1遺跡・田代堀第2遺跡では、中期後半から後期初頭の竪穴建物・掘立柱建物(独立棟持柱を有するものほか)等からなる集落があり、椎屋形第1遺跡には箱式破砕土器棺墓もある。この他、五反畑遺跡B地区で中期初頭、三角堀遺跡で中期、清武上猪ノ原遺跡第1地区で後期前葉、堂地東遺跡で後期初頭～中葉中心の集落がある。弥生時代終末期～古墳時代前期前半では、熊野原遺跡A・B地区で、宮崎平野部では唯一となる該期の円形間仕切り住居2軒が発見された(円形間仕切り住居は霧島山北麓や都城盆地で多い)、周溝状遺構1基もあり、当期の宮崎学園都市遺跡群の中心的集落である。また、同遺跡の竪穴建物出土炭化材の樹種構成から遺跡周辺の林相が照葉樹林であったと推定されている。この他、前原西遺跡・前原北遺跡・前原南遺跡・浦田遺跡・西ノ原遺跡・須田木遺跡・滑川第3遺跡・木崎遺跡・東宮遺跡でそれぞれ小規模ながら弥生時代終末期～古墳時代前期前半の集落がある。なお、弥生時代後期後葉から古墳時代前期後半には焼土や炭化材が床面等に堆積する竪穴建物(いわゆる焼失住居)がよく見られ、古墳時代初頭までには竪穴の壁際に貯蔵穴と見られる土坑を持つ建物が増加する。墳墓は事例が少なく、下猪ノ原遺跡第1地区で弥生時代終末期の土墳墓がある。

古墳時代前期後半～古墳時代終末期 前期後半の集落は、堂地東遺跡・熊野原遺跡C地区・前原北遺跡・前原南遺跡・陣ノ内遺跡にあり、熊野原遺跡・陣ノ内遺跡等は中期中葉には衰退する。熊野原遺跡C地区では14軒の竪穴建物と周溝状遺構1基があり、当期の宮崎学園都市遺跡群の中心的集落である。熊野原遺跡のように、間仕切り住居が長期間にわたって継続して設けられる点は、清武川下流域の集落の特徴となっている。この他、枯木ヶ辻遺跡(前期末から中期)・竹ノ内遺跡(中期後半)・田代堀第1遺跡(中期)・山田第1遺跡(後期前半)・上の原第3遺跡(中期後半から後期前半)・前原南遺跡(後期後半から終末期)・市位遺跡(終末期)の集落がある。古墳群には、後期と推測される(中期に遡るものを含む可能性もある)主軸長50～60m級の前方後円墳3基、円墳5基からなる木花古墳群(県史跡「木花村古墳」)ならびに五反畑遺跡B地区の中期後半の木棺墓・石棺墓・土墳墓・地下式横穴墓で構成された墳墓群がある。この他、熊野原遺跡B地区では、C地区の竪穴建物よりやや新しい年代の大形土坑墓がある。

奈良時代 律令国家体制確立の中、「日向国」が確立する。発掘成果では、松ヶ迫窟跡群は8世紀中頃から9世紀初頭に操業(9世紀以降にも操業継続)されたもので、現状で県内最古の須恵器窯跡である。須田木遺跡では焼け歪みや割れのある須恵器が多数出土し、松ヶ迫窟跡群からの供給が推定されている。また、宮崎市熊野は、「延喜式」に記載された日向16駅の一つで日向国府から大隅国に至る「大隅ルート」上の「救麻駅」の比定地候補の一つとされてきた。「救麻駅」の推定地は諸説あり、飫肥南郷隈谷村(郵岡良弼『日本地理志料』(1903))・木花村熊



第4図 陣ノ元遺跡の周辺地形と遺跡分布図

第3-4期 遺跡名

- 1 陣ノ元遺跡(奥指定全部「木花村古遺」を含む)
- 2 宮ヶ田南遺跡
- 3 熊野下原遺跡
- 4 木原下原遺跡
- 5 小山尻遺跡
- 6 小山尻第2遺跡
- 7 田上遺跡
- 8 栗田遺跡
- 9 入科遺跡
- 10 赤坂遺跡
- 11 下田畑遺跡
- 12 横小路遺跡
- 13 木原長割遺跡
- 14 山内石碓
- 15 熊田遺跡
- 16 今泉尻尾遺跡
- 17 今泉前原遺跡
- 18 三角遺跡
- 19 田代畑遺跡
- 20 元木遺跡
- 21 堂地遺跡
- 22 堂地第2遺跡
- 23 宇藤木花台山下遺跡
- 24 半坂遺跡
- 25 車坂第2遺跡
- 26 車坂第3遺跡
- 27 熊野原遺跡
- 28 平地遺跡
- 29 熊野西ノ原遺跡
- 30 熊野西ノ原第2遺跡
- 31 熊野前原遺跡
- 32 熊野前原第2遺跡
- 33 熊野前原第3遺跡
- 34 降ノ内遺跡
- 35 車坂城跡
- 36 木花遺跡
- 37 木花第2遺跡
- 38 木花第3遺跡
- 39 今江城跡
- 40 木崎遺跡
- 41 真山遺跡
- 42 真山遺跡
- 43 豊岡城跡
- 44 中興遺跡
- 45 今泉山口遺跡
- 46 岡遺跡
- 47 谷ノ口遺跡
- 48 井手ヶ城遺跡
- 49 今泉小原第2遺跡
- 50 湯山遺跡
- 51 湯山第2遺跡
- 52 竹ノ内遺跡
- 53 梅原原遺跡
- 54 梅原原第2遺跡
- 55 杉ノ木原遺跡
- 56 下里野遺跡
- 57 水ノ原遺跡
- 58 今泉下ノ原遺跡
- 59 今泉下ノ原第2遺跡
- 60 今泉小原遺跡
- 61 今泉上ノ原遺跡
- 62 今泉上ノ原第2遺跡
- 63 牧原遺跡
- 64 牧原第2遺跡
- 65 スノ山遺跡
- 66 根尾形遺跡
- 67 坂ヶ谷遺跡
- 68 黒北遺跡
- 69 黒北南遺跡
- 70 縮江上ノ原遺跡
- 71 船引上ノ原遺跡
- 72 白ヶ野遺跡
- 73 白ヶ野第2遺跡
- 74 白ヶ野第3遺跡
- 75 清川遺跡
- 76 清川第2遺跡
- 77 船引山田遺跡
- 78 坂元遺跡
- 79 清武上ノ原遺跡
- 80 五反原遺跡
- 81 五反原第2遺跡
- 82 栗田遺跡
- 83 丸石遺跡
- 84 船引ヶ谷遺跡
- 85 古津遺跡
- 86 平敷遺跡
- 87 清古城跡
- 88 中ノ原遺跡
- 89 古津遺跡
- 90 敷松遺跡
- 91 上ノ丸遺跡
- 92 丸石遺跡
- 93 辻遺跡
- 94 若宮田遺跡
- 95 須田木遺跡
- 96 長巻遺跡
- 97 上平野古墳
- 98 白砂坂古墳
- 99 白砂坂第2古墳
- 100 白砂坂第3古墳
- 101 ぎよもろ屋敷遺跡
- 102 町ノ前遺跡
- 103 家次遺跡
- 104 岡ノ原遺跡
- 105 南川内遺跡
- 106 源跡遺跡
- 107 津屋原遺跡
- 108 牧地遺跡
- 109 矢野遺跡
- 110 田吉山内遺跡
- 111 津和田遺跡
- 112 池田遺跡
- 113 飛行場遺跡
- 114 松崎遺跡
- 115 松崎第2遺跡
- 116 松崎第3遺跡
- 117 本郷南方原遺跡
- 118 立石遺跡
- 119 市立遺跡
- 120 坂ヶ谷遺跡
- 121 本郷南方石田遺跡
- 122 豊田遺跡
- 123 国富遺跡
- 124 坂ヶ谷跡群
- 125 本郷南方西原第2遺跡
- 126 東宮一丁目平田遺跡
- 127 東宮一丁目平田第2遺跡
- 128 東宮遺跡

野あるいは清武町沓掛(喜田貞吉『日向国史』上巻(1929))・木花村熊野(藤岡謙二郎『古代日本の交通路』(1979))が挙げられる。近年では、永山修一は、邨岡による隈谷村説は広田駅とあまりに離れすぎて適当でなく、熊野説についても熊野という地名が熊野信仰の流入により成立したと考えるのが妥当であることや宮崎学園都市遺跡群で駅家が存在したというには遺物等が十分でないことを踏まえ、「教麻駅」の候補として沓掛としている(永山1998)。木下良は、熊野がやや迂回路になり疑問かつ沓掛が道路の結節の地点でないため、駅間距離や道路の起点的位置にあたる点から、清武町正手の丘陵上を適地候補に挙げている(木下2009)。

平安時代 発掘成果から見ると、遺跡数が再び増え、平畑遺跡・前原南遺跡・陣ノ内遺跡・下田畑遺跡・赤坂遺跡・堂地東遺跡・須田木遺跡・白ヶ野第2遺跡・岡第4遺跡等で、カマド付竪穴建物や掘立柱建物からなる集落が確認された。西ノ原遺跡では土師器焼成遺構が検出された。特殊遺物には、越州窯系青磁が小山尻東遺跡で、緑釉陶器が平畑遺跡・小山尻東遺跡・赤坂遺跡・市位遺跡・枯木ヶ追遺跡・津和田第2遺跡で、灰釉陶器が市位遺跡で(津和田第2遺跡にもその可能性ある陶器あり)、墨書・刻書土器が陣ノ内遺跡・前原南遺跡・下田畑遺跡・枯木ヶ追遺跡等で出土している。また、船引台地では、9世紀後半～10世紀の掘立柱建物跡やそれらに伴う土師器環・布痕土器・内黒土器・墨書土器等があり、特に清武上猪ノ原遺跡第5地区の大規模掘立柱建物跡や溝状遺構等、五反畑遺跡A地区出土の緑釉陶器・長沙窯水柱等は一般集落とは考えにくい様相となっており、例えば古代官道のルート等を想定する上で示唆的である。この他、陣ノ元遺跡と同じ低位台地からその西縁付近にある下原遺跡で古代の畝状遺構がある。

中世 日向国は、律令体制の行き詰まりから生じた荘園制の成立・拡大期に入る。熊野は、日向の在庁官人である日下部氏が11世紀後半から開発した国富荘の一部にあたる。その後、天授5(1379)年には、日下部氏に代わって勢力拡大した隈野氏の支配下となる。発掘成果では、平畑遺跡・陣ノ内遺跡・熊野原遺跡・前原北遺跡等に集落があり、熊野原遺跡では、庇を有する掘立柱建物ならびに2棟の掘立柱建物ぞ「コ」の字形に配置するものがある、前者が母屋、後者が納屋あるいは倉庫と推定されている。墓地には、鶴の文様入り漆器皿・土師皿・銅銭を副葬した前原西遺跡の周溝墓がある。山内石塔群では五輪塔539基・板碑74基が一定の配列をもって検出され、堂地東遺跡では溝で区画された中に石塔群があり、小山尻西遺跡では河原石葺きの盛土を有する大乗妙典供養の「大永六年」(1526年)銘の入った板碑がある。また、伊東氏48城の一つである清武城の一部や、隈野氏の居城とされる車坂城跡や、広義の車坂城の西の曲輪の一群とされる今江城で発掘調査がなされた。

近世 陣ノ元遺跡は、現在の宮崎市清武町中野地区を中心とする畝肥藩清武郷に含まれる。畝肥藩の主要街道である畝肥街道は、陣ノ元遺跡の西側約2kmを南北に走っている。発掘事例では、堂地東遺跡で墓道を伴う土坑墓群、前原北遺跡で土坑墓があり、それぞれ六道銭等が出土している。上の原第2遺跡で石組み遺構及び石塔類を伴う集落、枯木ヶ追遺跡で石塔類、浦田遺跡で礎石建物跡及び井戸、東宮遺跡で溝状遺構・土坑等がある。この他、1662(寛文2)年の外所地震(日向瀧地震)により土地の海没や建物の倒壊等、一帯は大きな被害を受け、その記憶をつなぐ50年ごとの供養祭のたびに供養碑が建立されている(最新は2007年建立)。

近代以降 陣ノ元遺跡の位置する隈野村は、行政区分では1889(明治22)年に隈野村・鏡洲村・加江田村の区域をもって北那珂郡木花村に、1896(明治29)年には所属郡が宮崎郡に変更となり、1951(昭和38)年に宮崎市に編入、2006(平成18)年には旧木花村域について木花地域自治区となった。世界大戦関係では、1945年3月18日には赤江飛行場を含め宮崎が初めて空襲を受け、同4月26日には清武町加納地区・船引地区でも爆弾投下がなされた。

第三章 遺跡の概要

第1節 旧地形と基本層序

調査前の現況は、A区：宮ヶ田瀬集落西端の宅地(建物と裏庭等)及び畑地等(標高約8～9m)、B区：県史跡「木花村古墳」東側で宮ヶ田瀬集落西側の畑地(標高約9m)、そしてB区から浅い谷地形を挟んで北側がC区：久保川及び清武川本流により形成された低位台地上の畑地(標高約10～11m)である。大きな地勢として、全体的に小さな標高差でもって北高南低・西高東低となっており、A～C区とも調査区東側の方が西側に比べて地層の残りが良い。南北方向で見ると、同じく小さな標高差でもって、C区北の段丘崖付近が高所となっており南に向かって下がる傾向にあり、例えば豪雨等の際には表流水がみな南東方向に集まっていた(結果としてA区水没等)。

層序は、表土直下には、畑造成・耕作等による削平具合によって、残りが良ければクロボク(Ⅱ層)から以下が堆積し、Ⅶ層以下はA～C区間で不安定であり、特定区のみで堆積する場合があった。Ⅺ層は入戸火砕流等の二次堆積かと見られる白色粘土あるいは同質の粘土中に砂利や転磨礫を含むものである。

- I層：黄灰色土・黄褐色土・黒褐色土。現在の畑造成・耕作土や宅地の基礎等。
- Ⅱ層：黒色土、いわゆるクロボク。縄文時代前期～近世までの包含層。Ⅱ層上部は桜島文明テラ等の火山堆積物をごくわずかに含むこともあり、その場合は、Ⅱ層下部は黒味が上部より強く、しまりがある。A区西側側道・東側側道部分は層厚約30～100cm以上(全体は未掘)。C区は、その大半がⅡ層下部から以下の堆積となるが、部分的にⅡ層上部が残存する。
- Ⅲa層：明黄褐色土。森林褐色土(いわゆる二次アカホヤ)。層厚はA区約15cm・B区約5cm(削平あり)・C区約10cm。B区では縄文時代晩期遺物を含んでいた。
- Ⅲb層：黄褐色土。鬼界アカホヤ火山灰の一次堆積。層厚はA～C区とも約10cm。堆積は不安定で、ブロック化しているあるいは確認されない箇所もあった。
- Ⅳ層：黒褐色土。硬質。A区ではⅣ・Ⅴ層の分層困難(層厚約15cm)。層厚はB区約20cm・C区約10～20cm。
- Ⅴ層：暗褐色土。硬質。縄文時代早期の包含層。層厚はA区約15cm・B区約15cm・C区約20cm。
- Ⅵ層：にじい・黄褐色土。Ⅴ層に比べ軟質。層厚はA区約20cm・B区約30cm・C区約10～30cm。
- Ⅶ層：暗褐色土。B区のみ堆積。層厚15cm。
- Ⅷ層：黒褐色土。硬質。B区のみ堆積。層厚40cm。
- Ⅸ層：褐色土。A・C区は粘質強。B区は砂質あり。層厚はA区約20cm・B区約30cm・C区約20～30cm。
- X層：明褐色土。砂利少量含む。層厚はA・B区10cm以上(全体は未掘)・C区約20cm。
- Ⅺ層：灰白色土。粘質強。局所的に人頭大の転磨礫含む。湧水少量あり。下位まで未掘のため層厚不明。

第2節 遺構・遺物の概要

今回の陣ノ元遺跡の発掘調査では、主に、以下に挙げる旧石器時代から近代までの遺構・遺物が発見された。

A区	B区	C区
縄文時代：陥し穴状遺構・土器(刻目付実帯)・石器(敲石) 古代：掘立柱建物跡・溝状遺構・土師器(鏝・坏等)・布張土器・黒色土器・須恵器(甕等)・管状土師・輪郭口・炭化種実 中世：掘立柱建物跡・竈状遺構・土師器・東播系須恵器・龍泉窯青磁・炭化種実 近世～近代：掘立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構・井戸・土坑・小穴・陶磁器(肥前・関西・瀬戸・美濃・薩摩等)・統制陶器・瓦葺火消壺・焙烙・瓦・土製品(人形)・中世：磁石(硯・砥石・火打石)・石器(火打石・砥石)・ガラス製品・プラスチック製品	縄文時代：土坑・土器(晚期)・石器(磨製石斧・二次加工剥片・敲石・凹石等) 古代：須恵器 中世：龍泉窯青磁 近世～近代：掘立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構・土坑・陶磁器・管状土師・ガラス製品 時代不明：溝状遺構・土坑	旧石器時代：細石刀・細石刃核・掻器 縄文時代早期：平地式遺物跡、散濺・集石遺構・土坑・小穴・土器(加楽山式・別府原式・下約筆式・辻タイプ・桑ノ丸式・押型式・塞ノ神式・無文・その他)・石器(打製石鏃・石錐・削器・掻器・尖頭状石器・異形石器・二次加工剥片・微細鈹刺片・剥片・石核・原石・磨製石斧・打欠石錐・敲石・磨石・凹石・台石)・炭化種実 縄文時代前期～晩期：竈穴状遺構・土坑・土器(曾根式・春日式・宮之迫式・磨消縄文・黒色磨研等)・土器片・石器(打製石鏃・石錐・石匙・素刃石器・礫器・磨製石斧・打欠石錐・切目石錐等) 弥生時代後期後半～古墳時代前期：竈穴建物跡(間仕切り(住居あり))・掘立柱建物跡(独立棟持柱付きあり)・土坑(貯蔵穴等)・小穴・土器集中・弥生土器/土師器(鏝・壺(二重口縁等)・高坏・器台・鉢・ミニチュア土器・布留系土器等)・石器(打製石鏃・有溝石錐・打欠石錐・紡錘車・砥石・敲石・磨石・凹石・台石・棒状礫・軽石製品等)・鉄器(袋状鉄斧・釣針・鏃・鉤・鉄片等)・炭化種実 古代：須恵器・布直土器 中世：掘立柱建物跡・溝状遺構・龍泉窯青磁 近世：溝状遺構・道路状遺構・小穴・陶磁器・土師・瓦玉・滑石製品・火打石・銭貨 時代不明：土坑

第IV章 A区の調査成果

第1節 近世～近代の遺構と遺物

1 概要

近世～近代の遺構として、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、道路状遺構4条、井戸2基、土坑43基(うち3基は漆喰張りのもの)、防空壕跡1基、小穴94基が検出された。遺構検出面は、Ⅲ～Ⅳ層面である。検出された遺構には、その埋土が灰色系のもの・黒色系のものに大別され、おおよそ前者は近世以降に、後者は中世以前の遺物を伴い、また、砂利等を含むやや「汚い」埋土の場合は近世以降(一部は現代)の遺物を伴う傾向が見られた。これにより、遺物を伴わない場合であっても、埋土の特徴によってその遺構の年代をある程度は推定可能である。近世以降の遺物を伴う主な遺構は、1号溝状遺構(SE1)以南に集中して見られた。SE1より北側にも、埋土から当該期と推定した土坑・小穴があるが、遺物を伴わず、埋土のしまりもないものが多い。遺物は、陶磁器(肥前系染付碗・関西系灰釉端反碗・瀬戸美濃系端反碗・肥前系染付皿・瀬戸美濃系皿・型紙習皿・鉢・瓶・盃洗・紅皿・苗代川土瓶(蓋)・関西系播鉢・肥前系播鉢・徳利・花生け・壺・甕)・統制陶器・瓦質火消壺・焙烙・平瓦・瓦玉・土製品(土人形ほか)・石製品(硯・砥石・火打石)・ガラス製品(飲料水瓶・文具瓶・薬瓶・板ガラス)・プラスチック製品等が出土した。

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はB9Gr.で1棟検出された(現地復元)。周辺には小穴が分布し、南側には壁材に漆喰を用いた土坑が3基位置している。

1号掘立柱建物跡(SB1, 第7図)

主軸方向N-80°-Wをとる。掘立柱建物跡は最小規模で1間×2間に復元され、その場合、身舎面積は11m²となる。北辺・西辺の柱穴列が未検出であることから、本来はより大きな建物跡であってその南東側のみ柱穴が設けられたか、あるいは掘立柱建物跡でなく柵列様の遺構である可能性もある。柱穴はそれぞれ径45～66cmで、深さは30cm前後である。柱間寸法は、桁行のP2とP3の間が1.98m、P3とP5の間が2.1mで、ほぼ等間隔に配置されるが、梁行のP1とP2の間が2.7mで若干広くなる。また、柱穴埋土はすべて灰色土であり、根固めや柱痕跡は確認されなかった。柱穴埋土には18世紀から19世紀の遺物が含まれ、P2から瀬戸美濃系の皿、P3から瓦、P4から磁器・瓦(3)、P5から磁器(1)・瓦(2)が出土した。

(2) 井戸

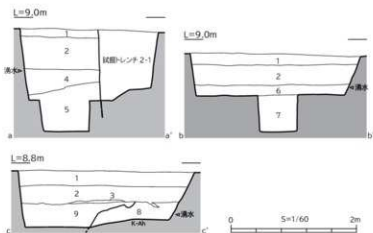
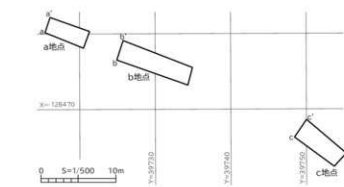
井戸跡はA10Gr.で2基検出された。SF1とSF2との距離は3.78mで、SF2は3号溝状遺構に掘り込まれる。

1号井戸(SF1, 第7図)

平面形は径0.80mの正円形で、壁面はコンクリートで整形されている。均質な灰色砂利で埋められており、検出面から深さ1.6m(標高6.0m)までの掘削にとどめた。

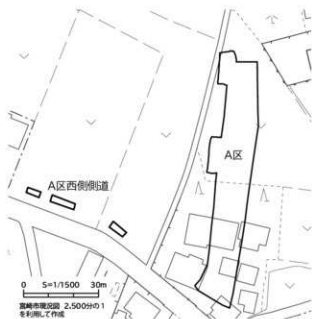
2号井戸(SF2, 第7図)

平面形は長軸1.68m、短軸1.60mの楕円形を呈する。井戸枠となる板や石材は認められず、素掘りの井戸である。埋土は灰褐色砂質土で、検出面では楕円形プランの南側このみ小礫が認められた。掘削にあたっては、Ⅳ層下面に至った時点で壁面からの湧水が著しくなり、壁面崩落の危険性を考慮する必要が生じた。そこで、平面上端を記録した後に、途中から重機を用いて半裁しつつ掘り下げ、検出面から深さ1.8m(標高5.5m)までの掘削で中止した。検出面から30cmほど掘り下げた埋土中から、土製品(4)が出土した。

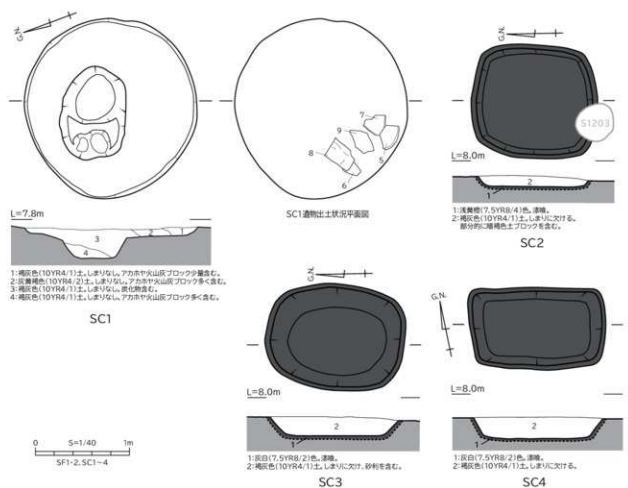
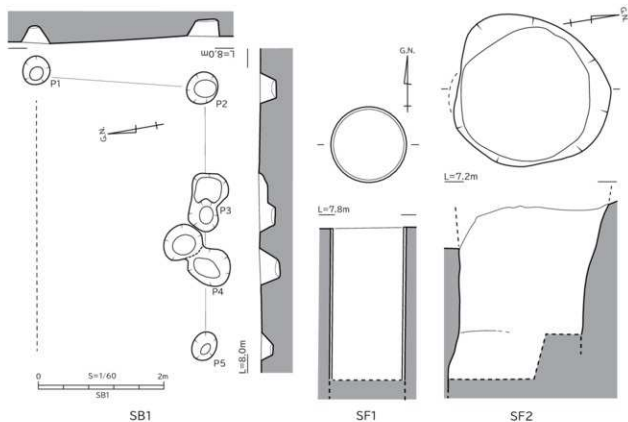


- 1: 層灰赤(2.5Y4/1)土、耕作土(現代)。
 - 2: 層灰色(2.5Y4/1)土、耕作土(程度不明)、1層より硬しめる。
 - 3: 褐色(7.5YR1.7/1)土、硬化層、砂質しり、耕作に硬くしめられたものか。
 - 4: 褐色(7.5YR1.7/1)土、やや明るく、しまりに欠ける。
 - 5: 褐色(7.5YR1.7/1)土、しまりあり、赤水跡着。
 - 6: 褐色(7.5YR1.7/1)土、しまりあり、赤水跡着。
 - 7: 褐色(7.5YR1.7/1)土、しまりあり、赤水跡着、若干砂質を含む。
 - 8: 褐色(7.5YR1.7/1)土、しまりあり、赤水跡着。
 - 9: 灰色(5Y4/1)土、しまりあり、遺状遺構SE2と連続するものと推定される。
- ※ 1-3 耕作土、4-8 遺物の埋積物、9 遺状遺構

A区西側側道



第5図 A区遺構分布図及びA区西側側道の土層断面図



第7図 A区近世～近代遺構実測図(1)

(3) 土坑

土坑43基のうち、遺物が重複して出土したSC1と壁材に漆喰を用いたSC2～SC4をここで報告する。いずれもB9・B10Gr.で検出され、SB1の南側に位置している。SC2から東へ約4mにSC3が、SC3から南東へ2.7mにSC4がそれぞれ位置する。また、SC2とSC4の間にあるSC3は、SB1から南西へ5.36mに位置する。SC2～SC4の3基は長軸がそれぞれ約1.4m前後、短軸は0.88m～1.2mとやや差があるが、ほぼ同じ規模の土坑となっている。

1号土坑(SC1, 第7図)

平面形は径1.84mの正円形で、全体に深さ約0.28m、中央に不整形な掘り込みを伴う。遺構埋土は、炭化物を含む褐色土でしまりかたない。土坑底面の西壁付近から、折り重なるように関西系播鉢(5)・瓦(6～9)が出土した。播鉢・瓦の上には、腐植が進み、うすく細片化した鉄板状のものも見られたが、取り上げはできなかった。

2号土坑(SC2, 第7図)

平面形は隅丸方形で、長軸1.36m、短軸1.20m、深さ0.12mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は水平である。漆喰は灰白色のもので、壁から床まで全面に張られ、その厚みは検出面で2cmである。埋土(2層)は暗褐色土ブロックを含む褐色土で、しまりに欠ける。2層中から、瀬戸美濃系端反碗・瓦が出土した。

3号土坑(SC3, 第7図)

平面形は楕円形で、長軸1.48m、短軸1.12m、深さ0.2mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は水平である。漆喰は浅黄褐色のもので、壁から床まで全面に張られ、その厚みは2cmである。埋土(2層)は褐色土で、砂利を含むためかしまりに欠ける。2層中から、須恵器・陶器・瓦が出土した。

4号土坑(SC4, 第7図)

平面形は隅丸方形で、長軸1.44m、短軸0.88m、深さ0.22mである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は水平である。漆喰は灰白色のもので、壁から床まで全面に張られ、その厚みは検出面で2cmである。埋土(2層)は褐色土で、しまりに欠ける。2層中から、瓦が出土した。

(4) 溝状遺構

溝状遺構は、3条検出された。SE1はB7・C7Gr.で検出された東西方向に走るもので、防空壕跡から北へ5.4mに位置する。SE2・SE3は調査区南壁沿いのB11Gr.で検出され、SE1同様、東西方向に走るもので、東西とも調査区外へ延びている。

1号溝状遺構(SE1, 第9図)

検出できたのは延長約13mである。断面形は逆台形を呈し、検出面で幅約0.6m、深さは最大で約0.12m、底面の幅は約0.28mである。埋土は灰色土で、遺物は型紙摺の陶磁器小片1点、布痕土器小片1点が出土した。

2号溝状遺構(SE2, 第19図)

検出できたのは、延長約4mである。断面形は逆台形を呈し、検出面で幅約0.5mである。また、壁面の高さ等の安全面から平面検出ならびにトレンチによる土層断面の記録までとし、完掘はしていない。埋土は灰色土で、黒色土ブロックを含む。遺物は、焙烙(17)が出土した。なお、SE2の平面・土層断面は古代のSE9と重複、切り合い関係にあるため、IV章第3節に示している。

3号溝状遺構(SE3, 第19図)

検出できたのは、延長約4mである。断面形は逆台形を呈し、検出面で幅約1.4m、深さは最大で0.2m、底面の幅は約0.8mである。底面は凹凸があって、他の溝状遺構よりも複雑な掘り込みとなっている。埋土は灰色土で砂を

含む。遺物は出土していない。なお、SE3の平面・土層断面は、SE2と同じ理由により第IV章第3節に示している。

(5) 道路状遺構

道路状遺構は、南北方向に走るものがB1・B2Gr.で検出された。この道路状遺構の位置・走向は、里道（現況では畑地や荒地等であった）ならびに現在の小字（西側が下原・東側が宮ヶ田瀬）の境界と重複している（第1図）。

道路状遺構の掘り下げは、断面観察用の畔（断面a・b）を残しつつ進め、遺構底面や硬化面の分層により、断面aでは表土（I層）直下において1、2、3、4～9、10～13、14～16、17、18・19、20、21、22、23・24層（4～9、10～13、14～16、18・19、23・24層はそれぞれで細分可能）の最少12の単位（12条の道路状遺構等）に、断面bでは1、2、3、4、5～9、10、11、12、13・14、15・16、17、18層（5～9、13・14、15・16層はそれぞれで細分可能）の最少12の単位（12条の道路状遺構等）にそれぞれ分かれる。断面aと断面b相互における分層単位の関係は、断面aの1～3層：断面bの1～4層、断面aの4～9層：断面bの5～9層（ただし連続はしない）、断面aの10～13層：断面bに対応する層無し、断面aの14～24層：断面bの10～18層がそれぞれ対応する。また、立ち上がりの切り合い状況から、道路状遺構の先後関係（新>旧で表す）がいくつか捉えられ、断面aでは、1>2>3>4>9>10～13 / 17～19層そして1>14～16、1 / 20>21>22 / 23・24層、断面bでは、1>2>3>4>5～9層そして10>11>12>13・14>15・16 / 17 / 18層となる。

しかし、平面的な遺構の広がりにおいては、硬化層が部分的で連続しなかったことや、遺構の立ち上がりも検出面からの深さがほとんどなく不明瞭であった等の事情により、その面的な掘り下げ過程において、断面aで認識した12条・断面bで認識した12条の遺構を明瞭に仕分けて掘削することは極めて困難であり、実質的に地山面で捉えることのできたSG1～4として完掘するに至っている。土層断面と対応させると、断面aの4～9層がSG1、断面bの5～9層がSG2、同17層がSG3、同18層がSG4となる。

なお、遺物はSG1～4において時期差はなく、4条すべてで一括として取り上げた。遺物は、陶器（鉢・播鉢・磁器（皿等）・瓦・石製品（砥石（10）・火打石（11））の他、土師器・須恵器・敲石（78・80）も混入し、表土直下での検出過程ではガラス片の出土もあった。陶器・磁器はいずれも小片で、18世紀以降のものである。

1号道路状遺構（SG1、第8図）

SG1は現存長約5.3m、幅約0.7m、検出面からの深さは最大で約1.2mである。断面形は逆台形を呈し、底面の幅は約0.42mであるが、西側はテラス状に底面から一段高く上がっている。遺構埋土は、細かい砂粒を含む黒褐色土が大半であるが、底付近にはアカホヤ火山灰ブロックを含む黒褐色土や砂粒を含む硬化層等が認められた。6層を挟んで上下に硬化層（5・7層）があり、徐々に埋没しながら、少なくとも2回、硬化する状況があったとわかる。

2号道路状遺構（SG2、第8図）

SG2は北端部分がSG1に切られる。現存長約6.8m、幅約0.4m、検出面からの深さは最大で約1.05mである。断面形は逆台形を呈しているが、西側の調査区外に延びており底面の幅や全長等は不明である。遺構埋土は黒褐色土が大半であるが、底付近にはアカホヤ火山灰ブロックを含む黒褐色土や砂粒を含む硬化層等が認められた。

3号道路状遺構（SG3、第8図）

SG3はSG1、SG2と同様に、南西に向かって延伸する。明瞭な硬化面を伴わないものの、道路状遺構と一連の遺構として捉えられるため、道路状遺構として報告した。現存長約7.0m、幅約0.4m、検出面からの深さは約0.24mである。断面形は立ち上がりの緩やかな皿状となり、底面は概して平らである。遺構埋土は、アカホヤ火山灰ブロックを含む黒褐色土でしまりに欠ける。また、北に向かって浅くなり途中から掘り込みが消失する。

4号道路状遺構(SG4, 第8図)

SG4は、SG3と並行気味に南西に向かって延伸する。現存長約6.9m、幅約0.3m、検出面からの深さは約0.24mである。断面形は半球状を呈する。遺構埋土は、アカホヤ火山灰ブロックを含む黒褐色土でしまりに欠ける。SG3同様、北に向かって浅くなり途中から掘り込みが消失する。

(6) 防空壕跡(第9図)

防空壕跡は、B8Gr.で1基検出された。当初は性格不明の土坑であり、検出面の埋土中に現代のガラス瓶やビニール製品等を大量に含んでいたため、ガラス瓶等を含む埋土上部について重機で除去し、残る範囲は人力掘削とした。その後、完掘状況を見学された地元住民から「裏庭に穴を掘った防空壕があった。屋根をかけていた。隙間から上空の飛行機を覗こうとして怒られた。」という話を伺ったことから、半地下式の防空壕跡と判明した。

平面形は、床面で長軸4.4m、短軸2.0mの長方形で深さ0.6mである。埋土は、検出面付近ではガラス瓶等を大量に含むもので(埋却されたような状況)、より下位になるとあまりしまりのない、地山土ブロック等を含む灰黒色土であった。各柱穴等も同質の埋土である。検出面付近ではやや開いた立ち上がりになっているものの、北壁の床面から10～20cmほどまでや南壁の中央付近、北東隅・南東隅は、使用時の垂直の地山壁が良く残されている。床面壁沿いには5間×2間の柱穴及びその補助であろう一回り小さい柱穴等(P1～P16)が毀けられ、東壁南半にのみ柱穴列より壁沿いにP17・P18が輻り込まれる。床面四隅付近には最大長20cmほどの河原石が各コーナー1点ずつあり(S1～3・5)、南壁中央付近にも同様の河原石が1点(S4)見られた。

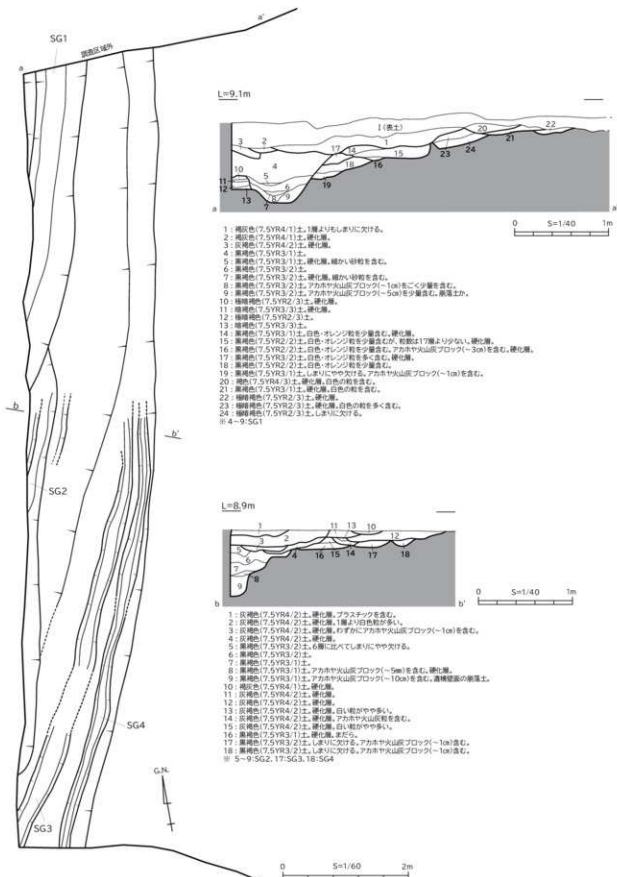
壁沿いの柱穴列は北壁・南壁で対になっている。その対応を西壁側から順に示すと、P1(補助でP2)・P15、P3・P14、P4・P13、P5・P12、P6・P11、P8(補助でP7)・P10となる。この長辺上の柱穴には、径30cm・床面から深さ10cm前後の穴とその中央に径10～15cm・床面から深さ30cmの細い穴が組み合うもの(P1・2・3・5・6・11・12・14・15)、径20cm・床面からの深さ10～15cmのもの(P4・7・8・10・13)の2とおりがあり、前者は断面円形で径10～15cmの杭柱穴とその根固めが組み合わさったものとみられる。P10には杭柱と推測される木片が残されていた。柱間寸法は0.9～1.1m前後を基本とし、いくつかは0.5～0.7m間隔と狭いものもあって一定でない。また、東壁のP9・西壁のP16は短辺の中央で対になるもので、径30～40cm・深さ20cmと他の柱穴より径が大きい。P17・P18は東壁南半に60cm間隔であく径20cmのもので、全周する柱穴列より壁沿いに位置し、柱穴径も異なっている。なお、南壁西端は、その上部に攪乱が入っていたためやや不明瞭ながら、壁のラインよりも南に40cmほど方形に突出した平面形となっている。聞き取りでは家屋側にあたることから、防空壕への出入口等であった可能性が考えられる。

防空壕跡の床面等に残された遺物はないものの、埋土中から、陶器(碗・播鉢等)・磁器・瓦・石硯(13)・飲料水瓶(12)・酒瓶・化粧瓶・板ガラスが出土し、少量ながら縄文土器・土師器も含まれていた。

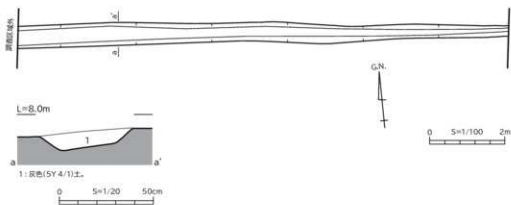
3 遺物

(1) 遺構出土(1～19, 第10・11図)

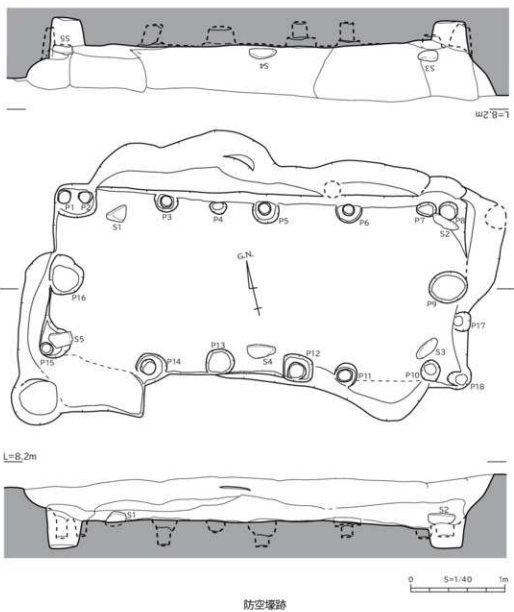
1～3はSB1出土で、1は型紙摺の丸碗である。2・3は瓦で、2は穿孔が、3は「塙」と思われる刻字がある。4はSP2出土で、マツ等の樹木を表現したようにも見える、赤塗りの土製品であるが、欠損著しく詳細不明である。5～9はSC1出土で、5は関西系播鉢、6～9はすべて平瓦である。10・11はSG1～SG4出土で、10は砥石で上面・右面に整形面が残る。11は火打石である。12・13は防空壕跡出土で、12は横断面が六輪花形のガラス製飲料水瓶、13は長方形の石硯で、裏に釘状のものによる文字線刻がある。14はSC5出土の肥前系染付皿で、輪花・



第8図 A区近世～近代遺構実測図(2)

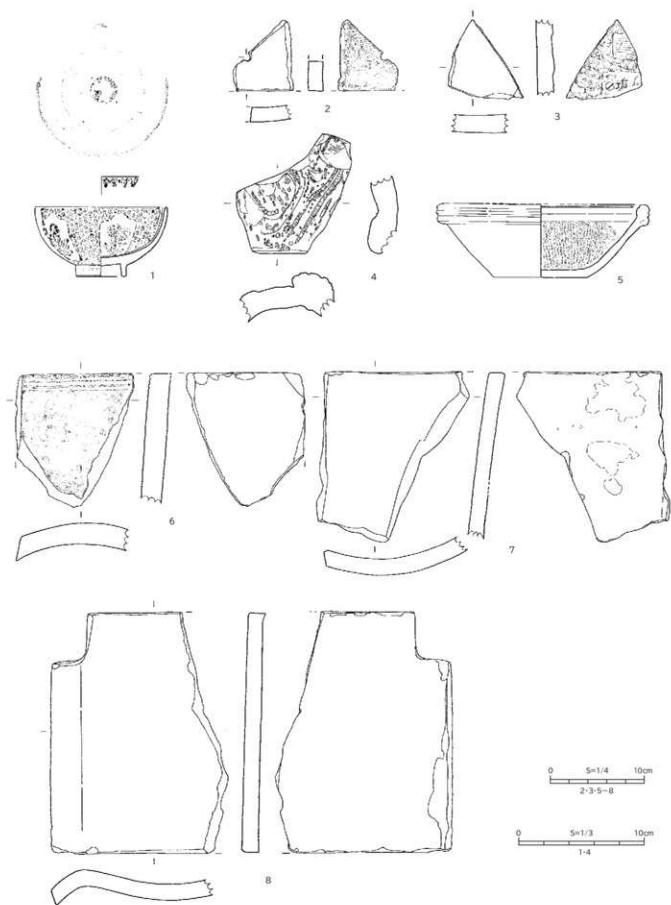


SE1

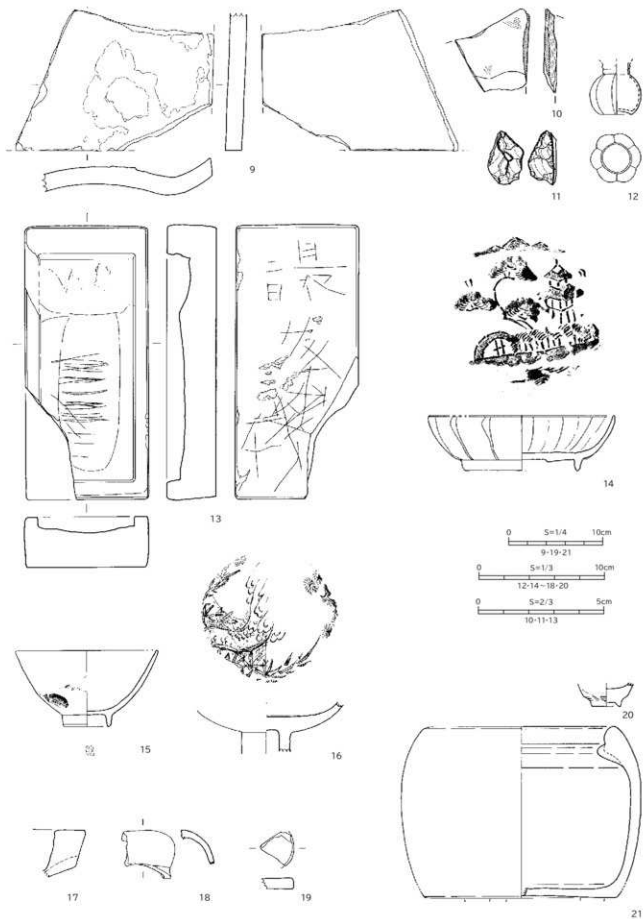


防空壕跡

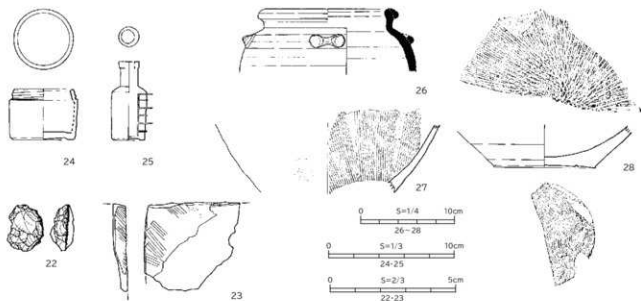
第9図 A区近世～近代遺構実測図(3)



第10図 A区近世～近代遺物実測図(1)



第11图 A区近世~近代遺物実測図(2)



第12図 A区近世～近代遺物実測図(3)

口鏝で蛇ノ目凹型高台である。15はSC7から出土した統制陶器の茶碗で、外面に茄子と富士が描かれ、高台内に「岐1060」の呉須印がある。16はSC6出土の肥前系盃洗で、松竹が描かれる。17はSE2出土で、焙烙の口縁部である。18はSH1出土で、素焼きで型造りの土人形である。19はSH2出土の瓦玉である。

(2) 遺物包含層出土(20～28, 第11・12図)

20は高台付の白磁である。21は瓦質火消壺である。落とし蓋タイプで、欠損しているものの推定3脚と推定される。22は玉髓製火打石、23は砥石、24は文具糊用と推定されるガラス瓶で、25はガラス製薬瓶である。

26～28はA区西側側道出土の遺物で、26は陶器甕で耳付きである。肥前系のものか。27・28は播鉢で、28は糸切底で褐色に発色する肥前系のものである。

第2節 中世の遺構と遺物

1 概要

中世に属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、小穴1基、畝状遺構である。前節で報告したとおり、IV層上面で検出された遺構は、その埋土が灰色系のおおよそ近世以降のものであり、黒色系埋土のものは古代を中心として縄文時代から中世までのものが含まれている。したがって、埋土中遺物の年代観や炭化種実の放射性炭素年代測定の結果等を根拠に、中世の遺構と判別できたものを本節で報告する。遺物は、青磁・東播系須恵器・土師器・瓦質土器羽釜・炭化種実が出土した。

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、B7Gr・南東を中心にB9・C8・C9Gr.にまたがって1棟検出された(現地復元)。南側に土坑2基(SC8・9)、小穴1基(SH3)が位置している。

2号掘立柱建物跡(SB2, 第13図)

1間×2間で南面に底を持つもので、主軸方向N-3°-Eである。身舎面積は約15m²で、底部分を含めると約20m²となる。柱穴はそれぞれ径16～48cmで、深さはほとんどが30cm前後であるが、深いもので48～64cmのものもある。P4の南に表土の落ち込みによる比高差が20cmほどの段差があり、P1～P4は他ピットよりも削平された範囲での検出になったため、他のピットと比べて浅めである。柱間寸法について、桁行は、西面のP1・P9間が3.7m、東面のP3・P5間が3.5mであり、西面が若干短いものの、東面・西面ともほぼ同じ寸法で配置されている。桁行東面のP3・P5の間に入るP4は、間柱と推測される。P3・P4間が1.8m、P4・P5間が1.7mとなる。梁行は、北面のP1・P2間、P2・P3間はともに2.1m、南面のP9・P10間、P10・P5間はともに2.3mである。柱穴埋土はすべて黒色土であり、根固めや柱痕跡は確認されなかった。柱穴のうち、P1、P5～7から土師器杯・皿・布痕土器、P10から青磁(29・30)が出土した。

(2) 土坑

土坑はB8Gr.で2基検出され、ともにSB2の南約5mに位置する。SC8のすぐ北には、土師器片の出土した小穴SH3が位置する。

8号土坑(SC8, 第13図)

平面形は不整な円形で、長軸1.6m、短軸1.36m、深さ0.3mである。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、底面は水平である。埋土は黒色土で、青磁(31)・土師器杯(32～35)が出土した。

9号土坑(SC9, 第13図)

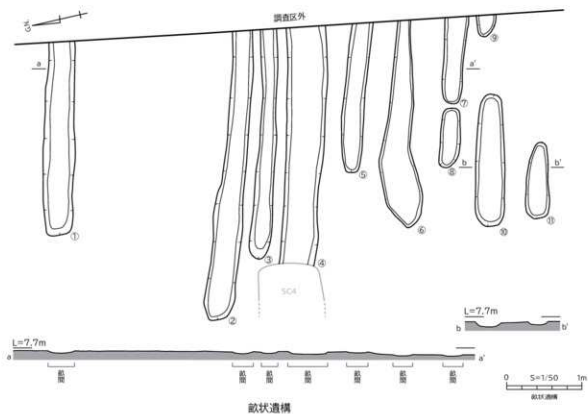
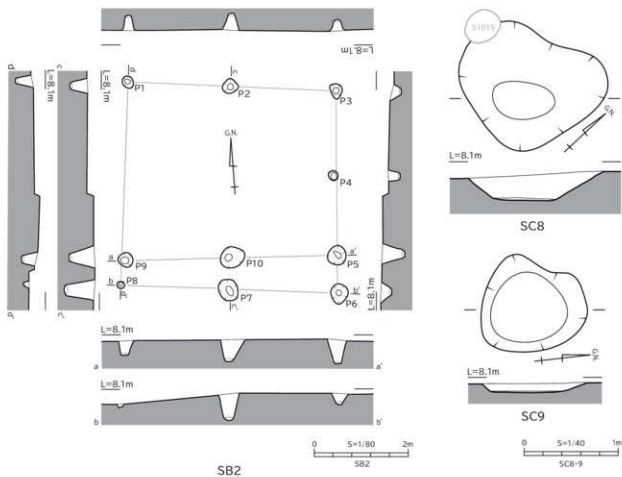
平面形は不整な円形で、長軸1.12m、短軸1.04m、深さ0.1mである。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、底面は水平である。埋土は黒色土で、土師器杯(36)が出土した。

(3) 畝状遺構(第13図)

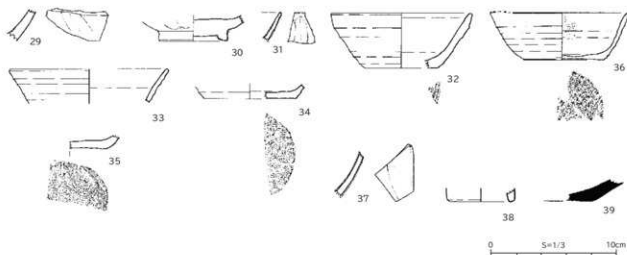
畝状遺構は、B9・B10Gr.にかけて検出された浅い溝状の畝間の集合である。畝間は11条あり、畝間ごとに北から順に①～⑪の番号を付して、記録や遺物の回収、フローテーションの土壌採取に備えた。畝状遺構は、その東側が調査区外へ延びるため、遺構全体の広がりや区画・単位については不明瞭ながら、西から東に向かって緩やかに下がる等高線に対して直交方向に並走し、西側について①・③・⑥・⑩・⑪、⑤・⑧がそれぞれ同じラインまでの延伸となっている。各畝間は、検出面で幅0.3～0.5m、深さ5cm前後となる。遺構全体の削平状況を勘案すると、軸が前う⑦・⑧ならびに⑨・⑩はそれぞれ1つの畝間であった可能性や、①・②の間の空閑地に本来は畝間が存在した可能性がある。④の西側は近世以降のSC4に切られる。遺構埋土はいずれもアカホヤ火山灰ブロックを含む黒色土で、土器等の出土はなかったものの、①・②・④・⑤・⑦・⑧・⑩・⑪の埋土計8.25kg分を対象にフローテーションを実施した結果、①・②・⑤・⑦・⑩からイネ・オオムギ等の炭化種実等が得られた(第七章参照)。

3 遺物(29～39, 第14図)

29・30はSB2出土の龍泉窯青磁碗である。31～35は全てSC8出土となる。31は龍泉窯青磁碗、32～35は土師器杯で、32・35は糸切り底で34のみ右回転である。36はSC9出土の土師器杯で、SC9・SH3間で接合が見られた。37～39は包含層出土で、37・38は龍泉窯青磁碗、39は東播系須恵器鉢である。龍泉窯青磁碗はいずれも蓮弁文である。破片資料が多いものの、土師器杯で法量のわかるものでは、口径が11～12cm大でかつ器高4cm以上となることから、堀田編年Ⅱ期(14世紀代)(堀田2016)と考えられる。



第13図 A区中世遺構実測図



第14図 A区中世遺物実測図

第3節 古代の遺構と遺物

1 概要

古代の遺構として、掘立柱建物跡8棟、溝状遺構7条、土坑13基、小穴116基が検出された。Ⅲ～Ⅳ層面で検出された遺構のうち、黒色系埋土には、縄文時代から中世までのものが含まれている。A区の全体相からは、黒色系埋土の遺構の多くは古代のもので推定される。本節では、埋土中遺物の年代観や放射性炭素年代測定の結果等を根拠に、古代の遺構と判別できたものを報告する。遺物は、須恵器(甕・壺・瓶・坏)・土師器(甕・坏・高台付坏)・布痕土器・黒色土器・籬羽口・管状土錘・炭化種実等が出土した。特に、布痕土器は小片が大半であったものの、多数出土した。

2 遺構

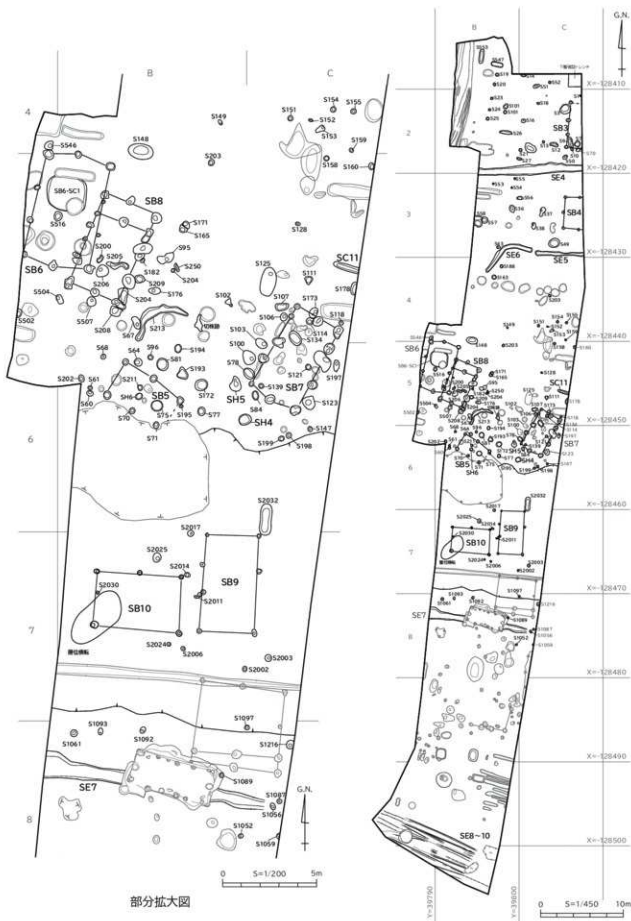
(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡8棟(SB3～SB10)を現地復元した。全て側柱建物であり、うち1棟が庇付きとなる。分布はC2Gr.で1棟(SB3)、C3Gr.で1棟(SB4)、B5Gr.で2棟(SB6・8)、B6Gr.で1棟(SB5)、C5・C6Gr.で1棟(SB7)、B7Gr.で2棟(SB9・10)である。周辺には小穴が分布し、特にB5・B6Gr.とC5・C6Gr.では遺物を伴う小穴が多数検出された。

なお、B2Gr.で検出されたS19・20・23～25の小穴5基は一列に並んでおり、掘立柱建物跡となる可能性も考え精査したものの、対になる柱穴列は確認されなかった。柵列等の可能性もある。

3号掘立柱建物跡(SB3, 第16図)

建物東側が調査区外に延びているため、P1～P4を桁行西面とすれば、主軸方向N-4°-Eの掘立柱建物跡となる。柱穴は径32～56cm、深さは32～56cmである。柱間寸法は、桁行のP1・P2間が2.16m、P2・P3間が1.68m、P3・P4間が1.52mであり、南に向かって柱間が狭く配置される。推定した主軸どおりであれば、建物南に東西に走る4号溝状遺構に主軸が直交する。柱穴埋土はすべて黒色土であり、P3から布痕土器かと思われる土器小片が出土した。



第15図 A区古代遺構分布図

4号掘立柱建物跡(SB4, 第16図)

建物東側が調査区外に延びているため、P1・P2を桁行南面とすれば、主軸方向N-84°-Wの掘立柱建物跡と推定される。柱穴は径24～32cm、深さは20～28cmである。柱間寸法は、桁行・梁行ともに1.8m前後で等しく配置されている。推定した主軸とおりであれば、建物北に東西に走る4号溝状遺構に主軸が平行する。柱穴埋土はすべて黒色土であり、P1～P4から土師器環・甕・布痕土器が出土した。

5号掘立柱建物跡(SB5, 第16図)

建物南側が深い掘乱により削平されている。P1・P2を梁行西面とすれば、主軸方向N-28°-Eの掘立柱建物跡と推定される。柱穴は径32～44cm、深さは16～24cmである。柱穴埋土はすべて黒色土で、P1から土師器環(40)・布痕土器、P4から土師器環・布痕土器が出土した。

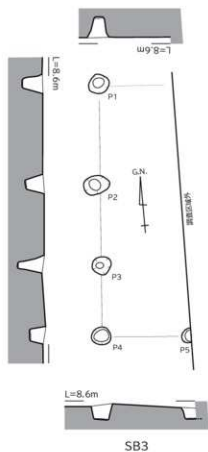
6号掘立柱建物跡(SB6, 第16図)

3間×2間の側柱建物で、身舎面積は20.1m²、主軸方向N-11°-Eであり、建物跡内に土坑を伴う。8号掘立柱建物跡とはやや軸を振りながら平面が重複する。柱穴は径16～64cmで、深さは8～32cmである。四隅の柱穴は径が大きくかつ深いのにに対し、それ以外は小さく浅い。桁行は西辺、東辺ともに約5.5mと等しく、梁行は北辺が2.4m、南辺が2.6mとなる。梁行中央の柱は、南面、北面とも軸よりやや外側に張り出す。柱穴埋土はすべて黒色土であり、P7から土師器環(44)・布痕土器、P9から土師器環が出土した。

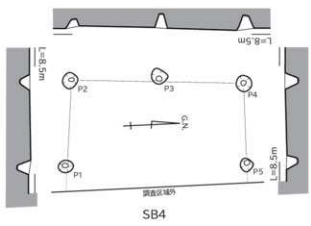
また、建物内の土坑(SB6-SC1)は、平面形が隅丸方形で長軸2.2m、短軸1.92m、深さ0.2mである。壁は、水平な底面からゆるやかに立ち上がる。遺構埋土は、しまりのある黒色土(3～8層)が大半で、底面付近には地山土ブロックを少量含む極暗褐色土(9層)が認められた。土坑中央の検出面より焼土粒を多く含む褐色土(1層)と、その周りに焼土を多量に含む硬質の明赤褐色土(2層)が認められた。遺物は、土坑南壁付近の床直上から鞆羽口(45)が出土した他、埋土中から土師器環(41)・土師器甕(43)・土師器皿・須恵器甕(42)・布痕土器・敲石(79)・焼成粘土塊・炭化物等が出土した。土坑埋土については、検出面において焼土が顕著であったことから、鍛冶遺構あるいは炉等である可能性を念頭に鍛冶滓や炭化種実等の回収を意図し、なるべく多く土壌採取してフローテーション(沈殿物の精査も含む)することとし、土層断面ラインを軸に四分劃した東北側をNE区、南西側をSW区としてそれぞれの3～8層を全て(N-E区:65kg・SW区:51kg)、また、中央の焼土等(1・2層)の全土壌8.3kg分を採取した。残る区画については、人力による通常の掘削でもって遺物の回収等を行った。フローテーションの結果、NE区・SW区・中央の焼土等の3件全てから土師器の細片や多数の炭化材・炭化物が出土した他、NE区からイネ果実68・イネ炭化果実(破片)119・ヒエ果実47・イヌビエ属果実34・オオムギ果実1・ムギ類果実(破片)1・イネ科果実(破片)3・ホタルイ属果実6・ホタルイ属果実(破片)2・キンバイザサ種子5・キンバイザサ種子(破片)2・ササゲ属子葉1・マメ科子葉3・マメ科子葉(破片)2点等が、SW区からブドウ属種子1・イネ果実73・イネ果実(破片)152・ヒエ果実3・イヌビエ属果実13・オオムギ果実2・ムギ類果実(破片)2・イネ科果実(破片)3・ホタルイ属果実24・キンバイザサ種子2・キンバイザサ種子(破片)1・マメ科子葉1点等が、中央の焼土等からヤマモモ核(破片)1・イネ果実9・イネ果実(破片)20・イヌビエ属果実2・イヌビエ属果実(破片)1・ホタルイ属果実1点等がそれぞれ回収され、NE区のイネ果実について放射性炭素年代測定を実施した(第VII章参照)。

7号掘立柱建物跡(SB7, 第17図)

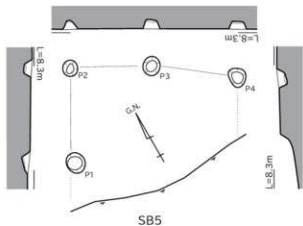
4間×2間の側柱建物で、身舎面積は12m²、主軸方向N-27°-Eである。柱穴は径28～114cmで、深さは30cm前後のものがほとんどであるが、深いもので56～64cmのものもある。柱間寸法にはばらつきがあるものの、桁行は東面・西面ともに4.8m、梁行は北面・南面とも2.56mと等しい。また、柱穴埋土はすべて黒色土であり、



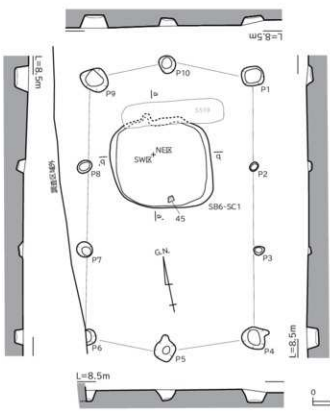
SB3



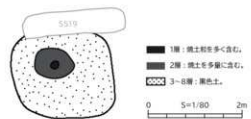
SB4



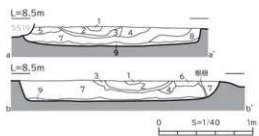
SB5



SB6



SB6-SC1横出面の土層分布模式図



- 1: 褐色(7.5YR4/3)土、焼土粒を多く含む。
- 2: 暗赤褐色(2.5YR5/5)土、焼土を少量に含む。硬質。
- 3: 黒色(10YR2/1)土、焼土粒を少量含む。
- 4: 黒色(10YR2/1)土、焼土(-5mm)を多量に含む。2層が覆われた印象。
- 5: 黒色(10YR2/1)土、2層に占む10%、2層よりも焼土粒が少くない。
- 6: 黒色(10YR2/1)土、焼土を含まない。
- 7: 黒色(7.5YR1/1)土、わずかに焼土を含むが全体に黒味が強い。しまりあり。
- 8: 黒色(7.5YR2/1)土、焼土が少量のみから焼土粒を多く含む。
- 9: 暗褐色(7.5YR2/3)土、焼土はブロックを少量含む。

第16図 A区古代遺構実測図(1)

P1～P6、P8・9・11から土師器甕(51・54・55)・土師器坏(52・53・56)・布痕土器(46～49)・敲石(81・82)が出土した。敲石は縄文時代のものの混入である。なお、7号掘立柱建物跡周辺の小穴からも、土師器や布痕土器等が多数出土した。

8号掘立柱建物跡(SB8, 第17図)

4間×2間の側柱建物で、身舎面積は12.6m²で底部分を含めると15.5m²、主軸方向N-21°-Eである。柱穴は径24～104cmで、深さは12～56cmと大きく深いものもあれば、小さく浅いものもある。柱穴埋土はすべて黒色土であり、P4から布痕土器(58)、P6から土師器甕(59・60)、P7・13から布痕土器、P10からはほぼ完形の土師器坏(61)、P14から布痕土器(57)・須恵器坏(62)が出土した。

9号掘立柱建物跡(SB9, 第17図)

3間×1間の側柱建物で、身舎面積は14.3m²、主軸方向N-1°-Eである。西側に近接して、軸をほぼ90°に振った10号掘立柱建物跡がある。柱穴は径16～40cmで、深さは8～16cmと浅い。浅い理由は、B6・C7Gr.まで表土の落ち込みによる比高差20cmほどの段差が生じており、9号掘立柱建物跡の柱穴は全て削平された範囲での検出になったためである。遺物は、P2・4・6～7から土師器・布痕土器が出土した。

10号掘立柱建物跡(SB10, 第17図)

2間×1間の側柱建物で、身舎面積は13.2m²、主軸方向N-87°-Wである。東側に近接して、軸をほぼ90°振った9号掘立柱建物跡がある。柱穴は径24～40cm、深さは12～44cmである。9号掘立柱建物跡と同じ削平状況だが、10号掘立柱建物跡の柱穴は9号のそれと比べて深い。遺物は、P1から黒色土器坏(63)が出土した。

(3) 溝状遺構

溝状遺構は7条検出された。B2・C2Gr.で検出された4号溝状遺構(SE4)及びB3・C3Gr.で検出された5号溝状遺構(SE5)は、近接して東西方向に並走する。また、6号溝状遺構(SE6)は5号溝状遺構と連続する可能性がある。7号溝状遺構(SE7)はB8Gr.で検出され、やはり東西方向に走る。8～10号溝状遺構はA区南壁沿いのB11Gr.で検出された東西方向に走るもので、東側については湧水が著しく、かつ調査区壁面崩落の危険性を考慮し土層断面作成にとどめた。

4号溝状遺構(SE4, 第18図)

検出できたのは延長約12.4mであり、東西とも調査区外へ延びている。断面形は逆台形を呈し、検出面で幅約0.96m、深さは最大で約0.2m、底面の幅は約0.72mである。埋土は黒色土で、遺物は須恵器・土師器坏及び甕(64～66)・布痕土器・黒色土器が出土した。

5号溝状遺構(SE5, 第18図)

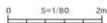
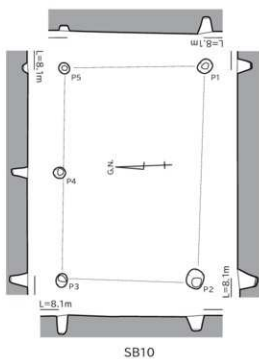
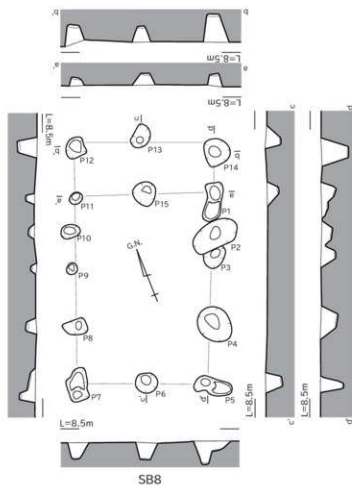
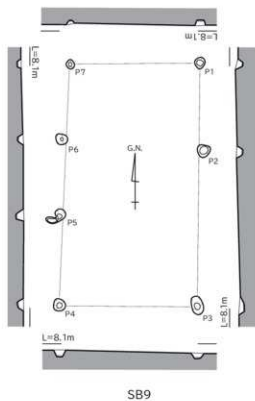
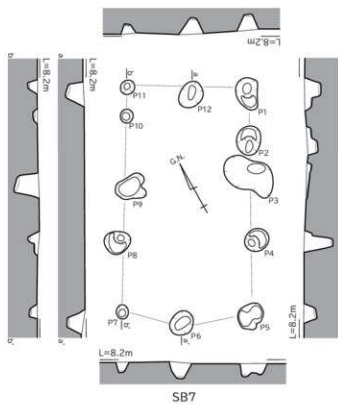
検出できたのは延長約5.7mであり、東側は調査区外へ延びている。断面形は立ち上がりの緩やかな皿状となり、検出面で幅約0.44m、深さは最大で約0.06mと浅く、底面の幅約0.24mで概して平らである。埋土は黒色土で、遺物は土師器・布痕土器が出土した。

6号溝状遺構(SE6, 第18図)

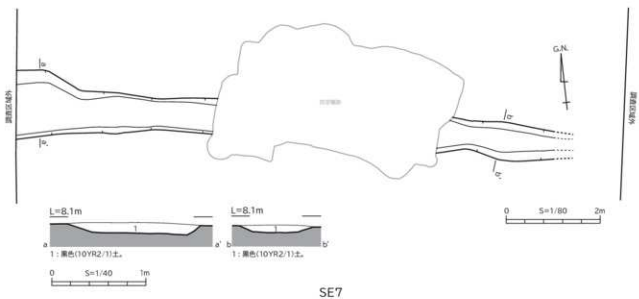
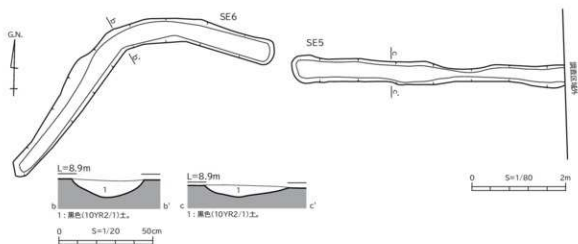
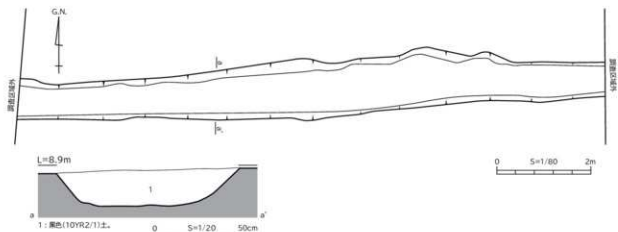
検出できたのは延長約7.0mである。断面形は半球状を呈し、検出面で幅約0.38m、深さは最大で約0.1m、底面の幅は約0.32mである。西へ3.2m延びたあと、軸を南西へ60°振って4m延びるが、徐々に浅くなっていることから、南西側は削平されたものとみられる。埋土は黒色土で、遺物は土師器・布痕土器が出土した。

7号溝状遺構(SE7, 第18図)

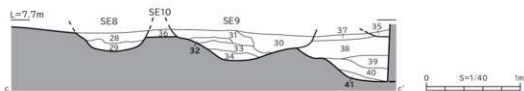
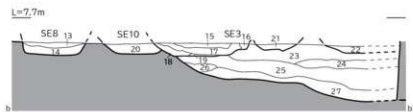
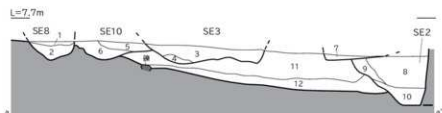
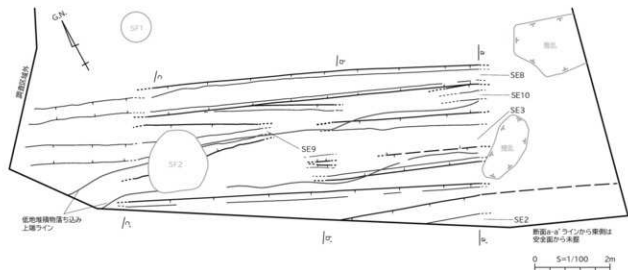
検出できたのは、延長約11.5mで、一部、防空壕により切られている他、東に向かって浅くなることから、東側の



第17図 A区古代遺構実測図(2)



第18図 A区古代遺構実測図(3)



- 1 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。
- 2 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 3 : 黒色(5Y4/1)土。
- 4 : 灰色(5Y4/1)土。砂を含む。
- 5 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。
- 6 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 7 : 黒灰色(2.5Y4/1)土。
- 8 : 灰色(5Y5/1)土。
- 9 : 灰色(5Y4/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 10 : 灰色(5Y4/1)土。焼山土ブロックと焼山土ブロックを含む。
- 11 : 黒色(10YR1.7/1)土。
- 12 : 黒褐色(10YR2.3/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 13 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。
- 14 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 15 : 灰色(5Y4/1)土。
- 16 : 灰色(5Y4/1)土。
- 17 : 灰色(5Y4/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 18 : 灰色(5Y4/1)土。砂を含む。
- 19 : 砂層。
- 20 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。
- 21 : 灰色(5Y4/1)土。
- 22 : 黒灰色(2.5Y4/1)土。
- 23 : 黒色(10YR1.7/1)土。
- 24 : 黒色(5YR1.7/1)土。少し赤みがある。
- 25 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。こぶ少量。焼山土ブロックを含む。
- 26 : 黒褐色(10YR2.3/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 27 : 黒色(5Y4/1)土。焼山土ブロックと焼山土ブロックを含む。
- 28 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。
- 29 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 30 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。
- 31 : 黒色(10YR1.7/1)土。少し赤みがある。
- 32 : 黒色(10YR1.7/1)土。31層よりしる。
- 33 : 黒色(5YR1.7/1)土。少し赤みがある。ややしまりに欠ける。
- 34 : 黒色(5YR1.7/1)土。少し赤みがある。
- 35 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。焼山土ブロックを含む。
- 36 : 黒灰色(2.5Y4/1)土。
- 37 : 黒色(10YR1.7/1)土。
- 38 : 黒色(10YR1.7/1)土。37層よりしるあり。
- 39 : 黒色(5YR1.7/1)土。少し赤みがある。
- 40 : 黒色(7.5YR1.7/1)土。こぶ少量。焼山土ブロックを含む。
- 41 : 灰色(5Y4/1)土。焼山土ブロックと焼山土ブロックを含む。

古代

- 1-2: 13-14-26-29: 8号溝状遺構(SE8)
- 5-6-20-35: 10号溝状遺構(SE10)
- 30-34: 9号溝状遺構(SE9)
- 11-12-23-27-37-41: 古代の埋蔵物

近世～近代

- 8-10: 2号溝状遺構(SE2)
- 3-4-15-19-21: 3号溝状遺構(SE3)
- 7-22-25: 近代の埋蔵物

SE8～10 ※ SE2・SE3(近世～近代)

第19図 A区古代遺構実測図(4)

延長は削平されたものとみられる。断面形は逆台形を呈し、検出面の広いところで幅約1.36m、狭いところで幅約0.6m、深さは最大で0.12m、底面の幅は0.48m～1mである。埋土は黒色土で、土師器甕・土師器坏・布痕土器が出土した。

8号溝状遺構(SE8, 第19図)

検出できたのは、延長約12.4mである。断面形は東側は半球状であるが、西に進むにつれ逆台形を呈す。溝の幅は検出面で約0.7m、深さは約0.2m、底面の幅は約0.5mである。埋土は黒色土で、遺物は土師器坏(69)・管状土鍾(68)が出土した。

9号溝状遺構(SE9, 第19図)

検出できたのは、延長約6.9mである。断面形は逆台形を呈し、検出面で幅約1.5m、深さは最大で約0.32m、底面の幅は約1mである。埋土は黒色土で、遺物は出土していない。

10号溝状遺構(SE10, 第19図)

検出できたのは、延長約9.3mで、溝の両幅をSE8とSE9に切られる。断面形は逆台形を呈し、検出面で幅約0.8m、深さは最大で約0.2m、底面の幅は約0.48mである。埋土は黒色土で地山土ブロックを含み、遺物は出土していない。

3 遺物(40～74, 第21・22図)

40～70は遺構出土、71～74は包含層出土である。40はSB5出土の土師器坏である。41～43・45はSB6-SC1出土で、41が土師器坏、42が須恵器甕、43が土師器甕、45が外面に溶着物が見られる鞆羽口である。44はSB6のP7出土の土師器坏である。46～56はSB7出土で、46～49が布痕土器、50・52が土師器高台付坏、51・54・55が土師器甕、53・56が土師器坏である。55の内面は縦方向ケズリとなる。57・58・61・62はSB8で出土した。57・58は布痕土器で58は小突起状の底部片である。61はほぼ完形の土師器坏で、推定口径12.7cmで9世紀末頃のものか、62は須恵器坏である。63はSB10出土の黒色土器坏である。64～66はSE4出土で、64が土師器坏、65が土師器甕、66が須恵器甕で外面の格子目タキはやや広めとなる。59・60はSH4出土の土師器甕である。67はSH5出土の土師器甕の口縁部で、やや特異な形状である。68・69はSE8出土で、68が土師質の管状土鍾、69が土師器坏である。70はSH6出土の須恵器甕で、内面が車輪文タキとなる。

71～73は西側側道出土である。71は内面が車輪文タキの須恵器甕、72は土師器坏、73は土師器高台付坏である。74はC6Gr.出土の須恵器甕で、古墳時代に遡る可能性もある。口縁端の打ち欠きは、意図的なものと考えられる。

なお、A区では、布痕土器の出土が目立った一方で、図化に耐えない小片が大半を占めたことから、出土遺構・グリッド別で破片数・総重量を集計した(第1表)。A区全体からは835点の布痕土器片が出土し、重さは合計4863.8gである。遺構別では、SB3:1点・4.5g、SB4:1点・1g、SB5:11点・104.7g、SB6・SB6-SC1:24点・72.3g、SB7:269点・1962.6g、SB9:4点・19.7g、SE4:15点・84.1gとなる。グリッド別ではC6Gr.:490点・3047.5gと最大で、B6Gr.:78点・531.4g、B8Gr.:59点・265.7gと続く。SB7が含まれるC6Gr.での出土量が突出しており、A区全体出土重量のうち、SB7のみで約40%、SB7の含まれるC6Gr.で約63%を占めている。

土師器甕・坏等の型式や須恵器甕の調整等の特徴や、多くの布痕土器・1点のみながら黒色土器坏を伴う点から、堀田編年Ⅱ期(9世紀中葉～後葉)(堀田2012)を中心に同Ⅰ・Ⅱ期(8世紀末～9世紀後葉)のものとして位置づけられる。

第1表 布痕土器集計表

実測遺構番号	報告遺構番号	Gr.	点数	量 ² (g)	実測遺構番号	報告遺構番号	Gr.	点数	量 ² (g)	実測遺構番号	報告遺構番号	Gr.	点数	量 ² (g)	実測遺構番号	報告遺構番号	Gr.	点数	量 ² (g)	
S22		B2	7	19.5	S60		B6	1	5.3	S1059		B8	1	4.7	S133		C5	1	0.9	
S539		B2	1	6.2	S69		B6	3	8.2	S1092		B8	2	4.7	S84		C6	2	6.5	
B2		B2	4	27.2	S70		B6	23	114.3	S1093		B8	1	5.0	S100		C6	3	20.7	
S33	SE4	B2	15	84.1	S71		B6	12	60.7	B8		B8	7	14.1	S116	SB7	C6	1	1.5	
S17		B3	4	7.0	S72		B6	8	36.5	S1024		B9	1	7.8	S119	SB7	C6	3	26.5	
S34		B3	2	14.0	S75	SB5	B6	2	6.8	S1040		B9	1	5.8	S122		C6	2	5.0	
S56		B3	7	20.5	S77		B6	1	1.1	S1045		B9	1	5.8	S123		C6	4	14.7	
S187		B3	1	0.8	S82		B6	19	181.2	S1047	SC2	B9	2	3.2	S124	SB7	C6	4	21.2	
B3		B3	1	2.6	S98		B6	1	2.2	S1080		B9	1	1.7	S137		C6	2	5.1	
S41	SE6	B3	4	42.9	S99		B6	4	26.8	S1095		B9	1	0.3	S141	SB7	C6	13	34.4	
S53		B4	4	9.8	S195		B6	1	1.8	S1077		B10	1	1.7	S143		C6	7	72.2	
S530		B4	1	11.1	S201		B6	2	9.6	S1203	東院跡	B10	1	1.8	S144	SB7	C6	115	825.6	
S532		B4	4	42.8	B6		B6	1	16.9	S6		SB3	C2	1	4.5	S145		C6	1	1.3
B5		B5	2	9.3	S2004	SE1	B7	1	1.5	C2		C2	4	13.3	S146		C6	21	105.1	
S68		B5	1	1.8	S2006		B7	1	0.7	S31	SB4	C3	1	1.0	S147		C6	8	39.8	
S80		B5	2	10.2	S2009	SB9	B7	1	4.9	S40	SE5	C3	2	19.8	S166		C6	3	5.6	
S86		B5	3	19.7	S2015	SB9	B7	1	2.7	C3		C3	11	23.6	S167	SB7	C6	9	73.7	
S87	SB8	B5	4	42.9	S2016	SB9	B7	1	2.2	S45		C4	2	2.8	S168	SB7	C6	119	909.8	
S91	SB8	B5	5	46.3	S2017		B7	2	10.4	S48		C4	1	1.7	C6		C6	173	878.8	
S92	SB8	B5	2	3.4	S1000	新交塚跡	B8	6	34.9	S47		C4	1	10.4	S2005	SB9	C7	1	9.9	
S171		B5	2	9.5	S1003	SE7	B8	7	39.6	S157		C4	3	11.5	C7		C7	8	16.4	
S176		B5	2	8.3	S1005		B8	4	17.9	C4		C4	2	4.9	S1001	SB2	C8	1	3.6	
S202		B5	2	9.4	S1006	SC6	B8	1	4.2	S79		C5	1	8.6	S1056		C8	1	1.8	
S205		B5	2	10.7	S1008		B8	1	2.5	S106		C5	1	2.1	S1057		C8	3	7.4	
S308	SB8	B5	1	4.4	S1010	SC5	B8	12	79.0	S107		C5	1	7.3	C8		C8	2	14.6	
S517	SB6	B5	1	3.9	S1011		B8	3	11.6	S111		C5	1	8.8	少A	-	14	121.6		
S519		B5	1	1.5	S1012		B8	2	3.3	S113		C5	2	5.0	西院跡		-	5	29.1	
S520	SB6-SC1	B5	10	36.4	S1013		B8	6	20.4	S114		C5	3	18.3						
S520SW	SB6-SC1	B5	2	2.9	S1052		B8	1	5.9	S117	SB7	C5	5	6.9						
S520NE	SB6-SC1	B5	11	29.1	S1060		B8	4	14.4	S118		C5	1	0.8						
S521		B5	1	3.4	S1065	SC1	B8	1	4.1	S132		C5	4	13.9						

点数合計	量 ² 合計
835	4863.8

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要

縄文時代と考えられる遺構は、土坑1基のみであり、他時代の遺構埋土等に混在して深鉢・敲石が出土した。

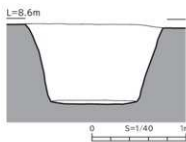
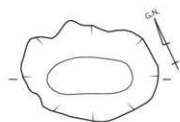
2 遺構

(1) 10号土坑(SC 10, 第20図)

C2Gr.で検出された。遺物は出土しておらず、遺構年代の根拠に欠ける状況であるが、縄文時代の遺構として報告する。平面形は不整な円形で、長軸1.46m、短軸1.06m、深さ0.82mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は水平である。埋土は、地山土ブロックを少量含む黒色土である。その規模や形状から、陥し穴状遺構の可能性が高い。逆茂木痕等は精査したものが見られなかった。

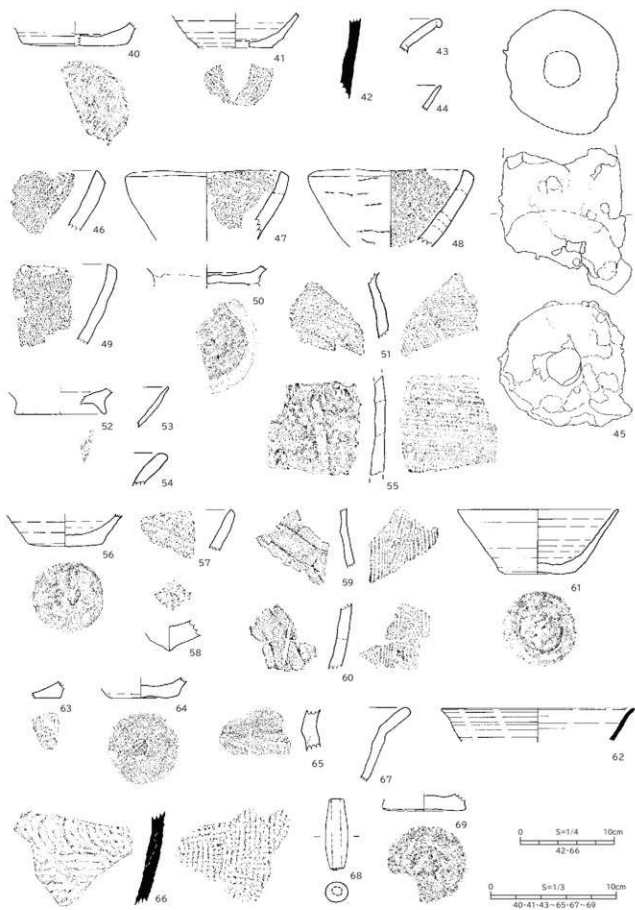
3 遺物(75～82, 第22図)

75～77は刻目突帯を持つ深鉢である。75・77は古代の土坑SC11から、76はC6Gr.からそれぞれ出土した。76は部分的にスガが付着する。78～82は、各出土遺構の年代の所産である可能性もあるが、縄文時代の石器としてここにまとめて報告した。いずれも砂岩製敲石である。

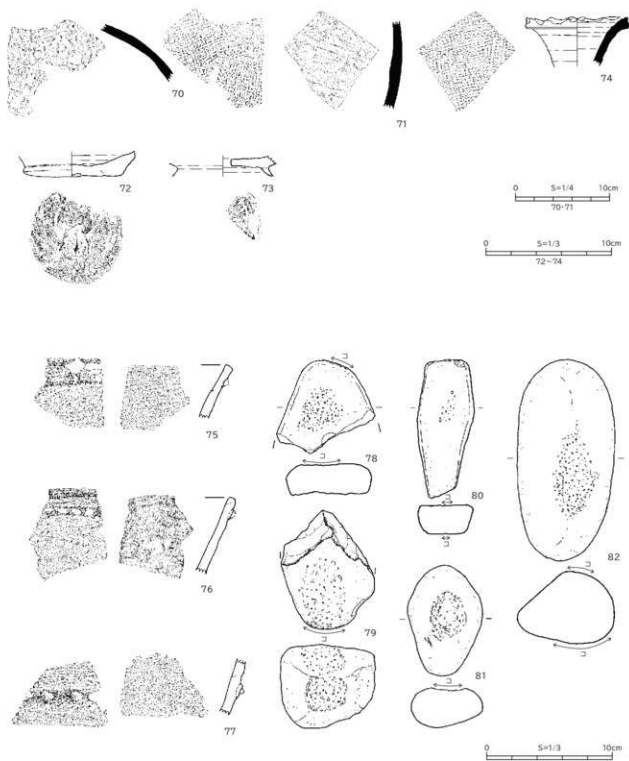


SC10

第20図 A区縄文時代遺構実測図



第21图 A区古代遺物実測図(1)



第22図 A区古代遺物実測図(2)・縄文時代遺物実測図

第V章 B区の調査成果

B区では、縄文時代晩期、近世～近代、時代不明の遺構が検出され、縄文時代晩期・古代・中世・近世～近代の土器・須恵器・陶磁器・土製品・石器・ガラス製品等が出土した。B区のうちA3～B3Gr.から南側について、耕作によりⅢ層(アカホヤ火山灰層)中まで削平を受けており、その削平面でもって遺構検出となった。Ⅲ層よりも下位についてトレンチ1～5を設定して精査したが、遺構・遺物とも皆無であった。なお、A0～2・B0～2Gr.から北側は、本来的に標高が高く、耕作に伴いⅣ～Ⅶ層以下まで削平を受けていた(第23図)。

第1節 近世～近代の遺構と遺物

1 概要

掘立柱建物跡1棟・溝状遺構1条・道路状遺構10条・畑跡1面が検出された他、ビニル片等を含み近代以降と思われる土坑13基が見られた。道路状遺構と掘立柱建物跡は、その配置・重複関係から同時性が高く、同建物跡を切って畑跡が広がる。遺物は、陶磁器(小坏・碗)・土鍾・ガラス製品が出土した。

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡(SB1, 第23図)

1号掘立柱建物跡(SB1)はB5Gr.で検出された(現地復元)。2間×3間の側柱建物で、東南隅の柱穴はない。身舎面積は21.2m²、主軸方向N-78°-Wである。柱穴の平面形は円形であり、径24～32cm、深さは幅があり検出面から20～56cmとなるが、これは東側の柱穴上部が畑跡で削平されていることによる。柱間寸法は桁行1.8m前後、梁行2.84mであり、西面の梁行には間柱(P4)がある。柱穴埋土は、検出面付近は黒色土(1層)で、底面近くと地山土ブロックを少量含む黒褐色土(2層)になる。埋土は素手で掘削できるほどしまりがなく、ものであった。遺物は出土しておらず、時期決定の明確な根拠に欠けるが、埋土の質感や道路状遺構との位置関係から、近世～近代のものだと判断した。

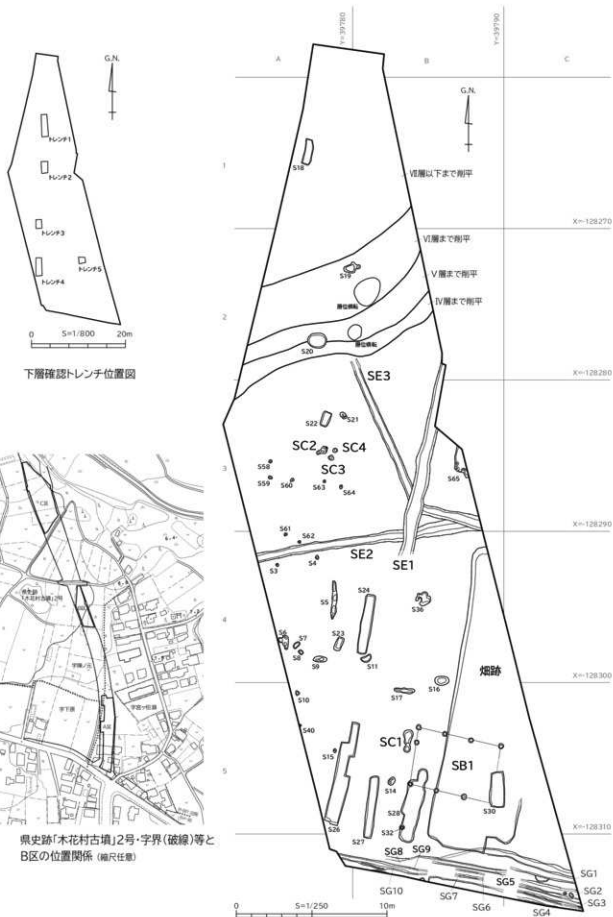
(2) 溝状遺構(SE1, 第23・26図)

1号溝状遺構(SE1)はB3・B4Gr.を南北に走る。同溝に重複して、現代の畑地境となるブロック塀が設けられていた。検出できたのは延長13.5mで、検出面で幅約1m・深さ約0.1mで断面形は浅い皿状である。床面は走向方向にやや波打つもので平でない。埋土中から、縄文土器・陶磁器が出土した。

(3) 道路状遺構

道路状遺構は、東西方向に走るものがA6・B6・C6Gr.で最大で10条検出された。この道路状遺構は、東側の調査区外において、A区の道路状遺構と重複する里道の北側の延長に直交し、西側の調査区外の延長はそのまま現代の畑の境界、そして県史跡「木花村古墳」2号の墳丘南側を巡る小道へと連続している(第23図)。

道路状遺構は、当初、1条のみで平面的に認識され、かつ攪乱に近い埋土であったため、土層観察は調査区東壁で行う予定で一気に掘り下げていったものの、数条の道路状遺構が切り合う可能性が床面近くになって初めて認識されたため、その時点で断面観察用の群(断面b・c)を残しつつ、切り合いの把握等に努めた。最も状況の把握できた断面aでは表土(1層)直下において4条の道路状遺構(SG1～4)がある。断面b・cでは、底面付近のみの記録となっているが、断面bで3条の道路状遺構(SG5～7)、断面cで3条の道路状遺構(SG8～10)が見られた。この断面の所見と平面的な精査でもって各遺構の掘り下げを進めたが、表土(1層)による削平によって遺構底面まで失われている箇所もあって、各断面で見られた道路状遺構の関係に不明確な点が残った。したがって、以



第23図 B区遺構分布図及びトレンチ位置図

下では最大数であるSG1～10でもって報告するが、最小数でいくと4条以上となる。

1号道路状遺構(SG1, 第24図)

検出できたのは延長約6mで、最大幅0.96m、断面形は最深度を2か所持つ不整形な逆台形で、検出面からの深さは最大で0.17mである。西側に向かって浅くなり、その延長は不明確である。埋土は、底面上に地山土ブロックを少量含んでしまりに欠ける黒褐色土(2層)があって、その上に岩片や砂粒を含みやや硬化する褐灰色土(1層)が堆積する。切り合い関係からは、一連の道路状遺構の中で最も新しくなる可能性がある。

2号道路状遺構(SG2, 第24図)

検出できたのは延長3.6mで、最大幅0.64m、断面形は緩やかに立ち上がる逆台形で、検出面からの深さは最大で0.24mである。SG3より新しくSG1より古い。西側に向かって浅くなり、わずかではあるが、底面に波板状凹凸面の可能性ある小さな凹みが確認された。埋土は全体に硬くしまっており、5層は褐灰色砂層と黒褐色土がラミナ状に堆積する。

3号道路状遺構(SG3, 第24図)

検出できたのは延長3.92mで、最大幅0.4m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは最大で0.3mである。SG4より新しくSG2より古い。西側に向かって浅くなる。埋土は底面上に硬化した黒色土(11層)があり、その上部に黒色土(10層)・黒褐色土(8・9層)が堆積する。8・9層は1cm未満の地山土ブロックを少量含むか含まないかというわずかな差でもって分層した。10層から陶器小坏(86)が出土した。

4号道路状遺構(SG4, 第24図)

検出できたのは延長4mで、最大幅0.4m、断面形は緩やかに立ち上がる逆台形で、検出面からの深さは最大で0.26mである。SG3より古いもので、SG1～3と同じく西側に向かって浅くなる。土層断面では黒褐色土(12層)のみの記録となっているが、西側の延長で、底面に硬化層の堆積を平面的に確認できている。

5号道路状遺構(SG5, 第24図)

検出できたのは延長4.32mで、最大幅0.36m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは最大で0.12mである。東西方向に向かって浅くなって延長が追えなくなる。SG6より新しい。埋土は、底面に地山土ブロックを含む極暗褐色土(3層)があり、次いで黒褐色土(1・2層)が堆積する。土層断面においては硬化層がないもの、東側の延長上で底面上の3層相当の硬化層を確認している。

6号道路状遺構(SG6, 第24図)

検出できたのは延長1.44mとわずかで、東西方向の延長が追えない。最大幅0.4m、断面形は浅い皿状でわずかな段差でもって二段掘りとなる。検出面からの深さは最大で0.08mである。SG5より古くSG6より新しい。

7号道路状遺構(SG7, 第24図)

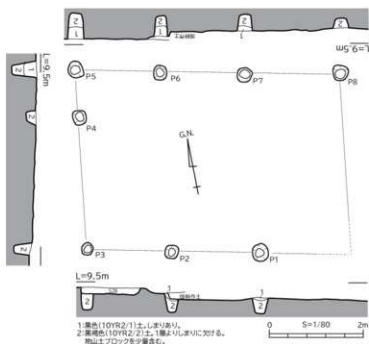
検出できたのは延長1.44mで、不明確ながら西側の延長上で南に曲がる可能性がある。最大幅0.4m、断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは最大で0.04mである。

8号道路状遺構(SG8, 第24図)

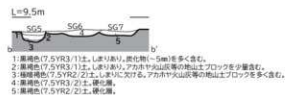
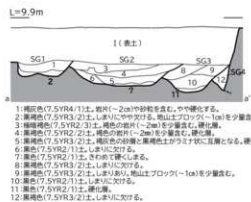
検出できたのは延長1.2mとわずかで、最大幅0.56m、断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは最大で0.04mである。SG9より古い。

9号道路状遺構(SG9, 第24図)

検出できたのは延長5.2mで、東側に向かって浅くなる。西側の延長は調査区外へ延びる。最大幅0.4m、断面形は逆台形で、検出面からの深さは最大で0.14mである。SG8・10より新しい。埋土は、底面側から順に、硬化し

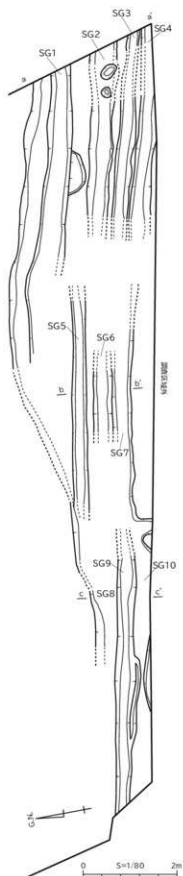


SB1



SG1-SG2-SG3-SG4-SG5-SG6-SG7-SG8-SG9-SG10

第24図 B区近世～近代遺構実測図



た黒色土(3層)、褐色砂層と黒褐色土がラミナ状に互層となる黒褐色土(2層)、褐色の岩片を含む硬化した黒色土(1層)が堆積する。

10号道路状遺構(SG10, 第24図)

調査区壁際において、平面規模等は不明確であるが、土層断面によって把握されたものである。検出面からの深さは最大で0.04mである。SG9より古い。

(4) 畑跡(第23・25図)

畑跡は、西辺20.1m・南辺は9.5m以上(延長は調査区外へ延びる)であり、その西辺と1号溝状遺構が約4.7m離れて並行し、南辺と1～10号道路状遺構が接しつつ並行する。耕起面はIV層付近まで及んでおり、耕作土中には近世～近代の陶磁器やガラス製おはじき(88)等の他、縄文時代晩期の土器(90～92)・石器(96)が含まれていた。1号掘立柱建物跡に後出するもので、同建物跡の柱穴の一部は、耕作土下ではじめて検出された。なお、畑跡の区画は、現代の土地区画と軸方向が共通する。

3 遺物(84～88, 第27図)

86はSG3出土の陶磁器小坏である。84・85は表探、87は試掘トレンチ、88は畑跡からの出土である。84は関西系の端反碗で18世紀後半から19世紀のものである。85は白泥によるハケ目のある碗である。87は管状土錘で、孔径0.25cmと極細である。88はガラス製おはじきである。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要

表土直下で検出された畑跡の耕作土について、重機で掘削中に破面の新しい縄文土器片が散見されたため、遺物回収を目的に、耕作土について人力掘削ならびに遺物点上げとした結果、畑跡の範囲では包含層は消失していたものの、縄文時代晩期の土器片や磨製石斧・剥片等が出土した。畑跡の西側には局所的に包含層(Ⅲa層：二次アカホヤ火山灰層)が堆積し、同層中からわずか2点ではあったが二次加工剥片・剥片が出土した他、包含層に近い土質を埋土とする土坑1基が検出された。

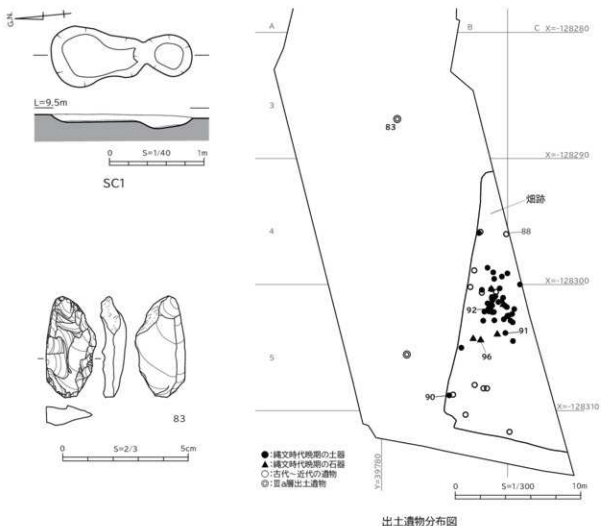
2 遺構

(1) 土坑(SC1, 第25図)

1号土坑(SC1)はB5Gr.で検出された。平面形は、北から南に向かってすぼまるような楕円形と円形が組み合うような歪なもので、円形部分がやや深くなっている。長軸1.5m、短軸0.68m(円形部分は径0.44m)、検出面からの深さは最大で0.14mである。埋土は、Ⅲa層に近いこぶい黄褐色土単層で、地山面(アカホヤ火山灰層)との境は不明瞭であった。埋土中から、縄文土器細片1点が出土した。

3 遺物(83, 第25図・90～96, 第27図)

83は包含層(Ⅲa層)出土の二次加工剥片である。チャート製のもので、図化していない他剥片等も全てチャート製となる。90～92・96は畑跡出土で、90～92は縄文時代晩期の粗製浅鉢・深鉢の口縁片、96はほぼ完形の磨製石斧である。93・95はSE2出土の敲石、94は表探の凹石である。94は霧島山系多孔質安山岩製でやや特異な石材利用である。



第25図 B区縄文時代遺構・遺物実測図及び出土遺物分布図

第3節 時代不明の遺構・その他の時代(古代・中世)の遺物

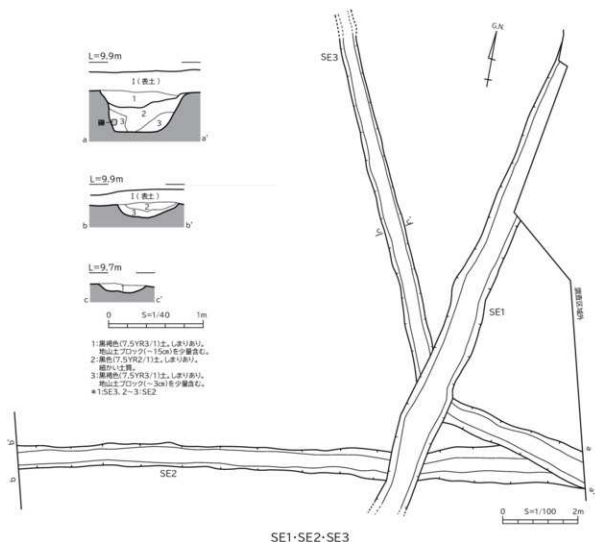
1 遺構

時代不明の溝状遺構2条・土坑3基・小穴20基がある。

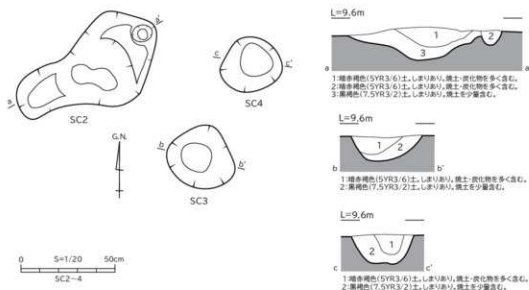
(1) 溝状遺構

2号溝状遺構(SE2, 第26図)

B3・A4・B4Gr.にまたがって検出された、東西方向に直線的に走る溝状遺構である。検出できたのは延長約15mであり、東西とも調査区外へ延びている。東側が深く、西側に向かって浅くなる。断面形は、東側では逆台形であるが、西側にいくほど壁面の立ち上がりが鈍くなって断面形が半球状となる。検出面で、最大幅0.8m、深さは最大0.44m、底面幅は約0.48mである。埋土は、底面や壁際に地山土を含む黒褐色土(3層)があり、次いできめが細かくしまりのある黒色土(2層)が堆積する。遺物は、2層中から縄文時代のもと考えられる敲石(93・95)が出土した。調査区東壁際での重複により、SE2がSE3より新しい。

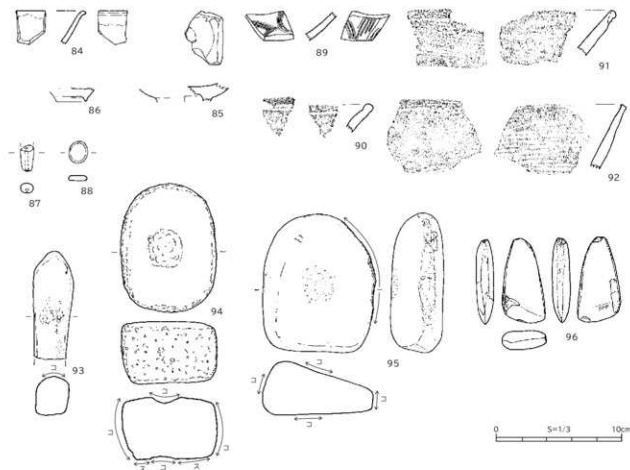


SE1・SE2・SE3



SC2・SC3・SC4

第26図 B区時代不明の遺構実測図



第27図 B区遺物実測図

3号溝状遺構(SE3, 第26図)

B2・3Gr.において延長約14.5mが検出された。南東方向に直線的に10m走り、軸を東へ50°振って4.5mほどでB区東壁外へ続いている。南東側に向かって深くなるもので、北西の延長は耕作により削平されている。断面形は立ち上りの緩やかな皿状を呈し、検出面で最大幅0.5m、深さは最大0.2m、底面幅は約0.32mである。埋土は、径15cm大の地山土ブロック等を含む黒褐色土(1層)であり、埋土中から縄文土器が出土した。

(2) 土坑(SC2～4, 第26図)

A3Gr.において不整形な土坑3基(SC2～4)が近接して検出された。3基とも埋土中に炭化物・焼土を目立って含むもので、竪穴建物の炉等の可能性を想定したものの、関係する柱穴等は見出せなかった。

2 遺物(89, 第27図)

ここまで報告してきた近世～近代、縄文時代晩期のもの以外に、近世以降の道路状遺構埋土中から土師器・青磁碗(89)が出土したほか、表土中から古代と見られる須恵器甕の小片1点が出土した。これらに伴う、古代～中世段階の遺構はB区にはない。

第VI章 C区の調査成果

第1節 古代・中世・近世の遺構と遺物

1 概要

表土直下のⅡ層面等において、近世の溝状遺構1条(SE1)・道路状遺構2条(SG1・2)・小穴1基(SH1)、中世の掘立柱建物跡1棟(SB1)・溝状遺構10条(SE2～11)・道路状遺構3条(SG3～5)が検出された。また、古代～近世の土師器・須恵器・布痕土器・陶磁器・瓦玉・土錘・滑石製品・火打石・鉄釘・銭貨等が遺構及びⅡ層等から少量出土した。

2 遺構

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(SB1, 第30図)

D7Gr.で検出された1間×2間の側柱建物である。建物主軸方向はN-70°-Wで、SE4に並行している。桁行4.9m(柱間寸法2.2～2.6m)・梁行2.2mで、身舎面積10.8m²である。柱穴はそれぞれ径28～40cmと幅広い。深さは12cmと浅いものもある一方で、おおよそ16～28cmである。柱穴埋土は黒色土を基本に、柱穴壁際や下部にアカホヤ火山灰ブロック等が少量含まれる(2・3層)。遺物は、流れ込みと見られる弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器小片がP6から出土した。SE4と建物主軸が並行するという位置関係から、同遺構と前後する中世の建物跡とみなした。

(2) 溝状遺構(SE1～SE11, 第29～32図)

1号溝状遺構(SE1, 第29・30図)

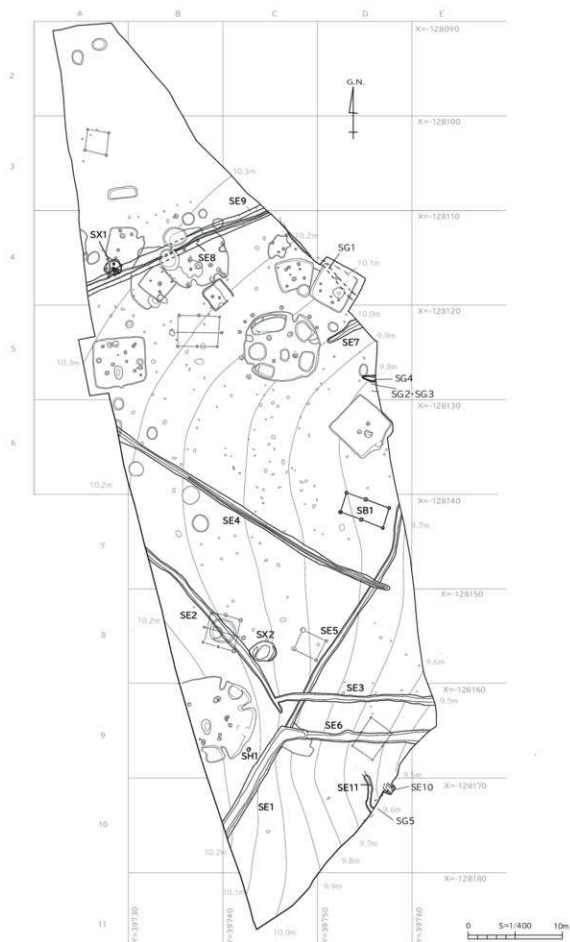
C9・C10Gr.の表土直下のⅡ層からアカホヤ火山灰層(Ⅲ層)において、延長約14.2mにわたって検出された。走行方向は南西-北東であり、北の延長上で約120°東へ屈曲し、途切れる。断面形は、東壁側に弱いテラスを持ちつつ、全体には逆台形を呈する。底面はⅥ層の深さまで掘り込まれ、底面の高さは土層断面の位置で標高9.9m、北の屈曲地点付近で標高10.0mとなり、東方へやや傾斜する。検出面で上幅約1.5m、底面の下幅約0.7m、深さ約0.3mである。埋土は、底面近くに地山土ブロックを含む黒褐色土(5～7層)があって、その上層に黒色土(1～4層)が堆積し、縄文～古墳時代の土器・石器等が混入していた。また、1層中に密に含まれた白色のテフラは、テフラ分析により霧島新燃享保テフラと判明した(第七章参照)。

2号溝状遺構(SE2, 第29図)

B7・B8・C8・C9Gr.の表土直下のⅡ層において、延長約22.2mが検出された。埋土及び地山ともに現生のタケ根を非常に多く含んでおり、地山と遺構埋土の境が不明瞭な箇所もあったが、明瞭な点をつないで遺構範囲とした。走行方向は北西-南東で、南端側でSE3に接続する。SE2・3の切り合いは平面・断面において見いだせず、単一の溝状遺構の可能性もあるが、走行方向が約120°振れることや内回りが削られていないことから、別遺構として報告する。底面は起伏があり、B7Gr.付近ならびに南端付近が相対的に浅く、それ以外が深くなる。断面形は、全体に半円状を呈し、検出面で上幅約0.9m、底面の下幅約0.4m、深さ約0.3m以上である。埋土は、黒色土をベースに、肉眼観察での推定で桜島文明テフラが溝幅中央の最上部に密に含まれており、黒色土中には縄文～古墳時代の土器・石器等が混入していた。

3号溝状遺構(SE3, 第29・30図)

C9・D9・E9Gr.の表土直下のⅡ層において、延長約17.0mが検出された。走行方向は西-東で、SE6とほぼ



第28図 C区中世～近世及び時代不明の遺構分布図

並走し、西端側でSE2に接続する。底面は、アカホヤ火山灰層(Ⅲ層)をわずかに掘り込んだ高さにあり、全体に地形に沿って東に傾斜している。断面形は、全体に半円状を呈し、検出面で上幅約0.7m、底面の下幅約0.4m、深さ約0.5mである。土層断面図はC9Gr.東壁ライン上(b-b')ならびにC区東壁(c-c')で作成したが、平面的に検出できていない硬化面等がC区東壁断面でのみ認識された。C区東壁での埋土は、最下部に黒色土(6層)があって、その上にテフラを含む黒色土(1~3層、テフラを最も多く含むのが3層)が堆積し、部分的にテフラを含む黒色土下に硬化層(4・5層)が認められる。埋土中には古墳時代以前の土器・石器が混入していた。3層中のテフラは、テフラ分析により桜島文明テフラと判明した(第七章参照)。

4号溝状遺構(SE4,第29・30図)

A6・B6・B7・C7・D7Gr.の表土直下のⅡ層において、延長約33.0mにわたって検出された。走行方向は北西-南東であり、おおそSE2に並走する。東側はSE5を切った後、浅くなっていく。底面は、アカホヤ火山灰層(Ⅲ層)をわずかに掘り込んだ高さにあり、全体に地形に沿って東に傾斜している。断面形は、西側では半円形、東側では半円形を基本とし中央に浅い溝を伴う。検出面で上幅約0.8m、底面の下幅約0.1m、深さ約0.5mである。土層断面図はSE4のほぼ中央部(e-e')及びC区西壁(d-d')で作成した。C区西壁での埋土は、最下部に黒褐色土(5・6層)があって、その上に黒色土(4層)、テフラの濃集層(3層)とテフラを多く含む黒色土(2層)が堆積した後、全体を広く黒色土(1層)が覆うような状況である。D Gr.西壁ライン上の土層断面では、既に上部が失われており、最上部にわずかにテフラ濃集層等(1・2層)があって、下位に黒色・黒褐色土(3~7層)が堆積する。埋土中には、縄文~古墳時代の土器・石器が混入していた。なお、C区西壁3層中のテフラは、テフラ分析により桜島文明テフラと判明した(第七章参照)。

5号溝状遺構(SE5,第29図)

D7・D8・C8・C9Gr.の表土直下のⅡ層において、延長約26.0mにわたって検出された。他の溝状遺構のように、視認できるテフラを含むことはないものの、桜島文明テフラを埋土上部に含むSE3・4により切られている。走行方向は南西-北東で、SE4と交差した北側で、やや西へ向きが変わる。底面は全体に北東に傾斜する。断面形は半円形を呈し、検出面で上幅約0.7m、底面の下幅約0.4mである。南側の延長には、近世のSE1が重複する。検出時は走行方向からSE1と同一のものと考えていたが、完掘後にC9Gr.付近における交差状況から別遺構と判断した。埋土は、底面上に地山土を含む黒色土があって、その上部に黒色土という堆積であり、古墳時代までの土器・石器等が混入していた。

6号溝状遺構(SE6,第29・30図)

C9・D9・E9Gr.の表土直下のⅡ層において、延長約12.2mが検出された。SE3に並行し、弥生時代後期後半~古墳時代前期の掘立柱建物跡(SB4)を切り、西端は近世のSE1に切られている。土層断面図はD Gr.西壁ライン上(f-f')ならびにC区東壁(g-g')で作成した。断面形は逆台形を呈し、検出面で上幅約0.8m、底面の下幅約0.6m、深さ約0.5mである。底面は、DGr.西壁ライン上において標高9.55m、C区東壁において標高9.05mであり、地形に沿って東に傾斜していく。埋土は、底面側に黒色土・黒褐色土(DGr.西壁ライン上の2~6層ならびにC区東壁の2~4層)があって、遺構の東側底面付近から鉄釘(114)が出土したほか、古墳時代前期以前の土器片が混入していた。また、DGr.西壁ライン上の1層ならびにC区東壁の1層最上部のテフラ濃集層は、テフラ分析により桜島文明テフラと判明した(第七章参照)。

7号溝状遺構(SE7,第31図)

調査区壁際のD5Gr.の表土直下のⅡ層において、わずかに延長約3.7mが検出された。底面は、地形に沿って

北東に傾斜していく。断面形は浅い皿状を呈し、上幅約0.6m、底面の下幅約0.3m、深さ約0.4mである。埋土は、底面側に黒色土(2・3層)があって、その上部には、肉眼観察で桜島文明テフラと推定される細粒を含む黒色土(1層)が堆積する。埋土中には、古墳時代以前の土器が混入していた。

8号溝状遺構(SE8,第31図)

C区を東西に横断する状況で、A4・B4・C4Gr.の表土直下のⅡ層において、延長約20.9mにわたって検出された。走行方向は、南西-北東である。SE9が先行し、ほぼ重複してSE8が掘り込まれている。断面形は、浅い皿状を基本に中央に浅い溝を伴っている。検出面で上幅約1.6m、底面の下幅約0.2m、深さ約0.3mである。埋土は、底面中央の溝にしまりに欠ける黒色土(6層)があって、皿状の底面には明瞭な硬化層(4・5層)が見られ、その上部に黒色土(3層)・テフラ濃集層等(1・2層)が堆積する。硬化層は、平面的には認識が難しいものであり、部分的な検出にとどまった。2層のテフラは、テフラ分析により桜島文明テフラと判明した(第VII章参照)。埋土中には、縄文～古墳時代の土器・石器が混入していた。

9号溝状遺構(SE9,第31図)

SE8に先行する溝状遺構で、SE8の重複により調査区東側におよそ部分的に残存する。上幅約0.4m以上、底面の下幅約0.2m以上、深さは約0.2mと浅く、底面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色土・黒褐色土(7～9層)である。テフラ等は視認できず、遺物の出土もない。

10号溝状遺構(SE10,第32図)

D10Gr.で延長約1.1mが検出された。およそその走行方向は、北西-南東であり、検出範囲が限定的なため、溝等でなく土坑等の可能性もある。SG5により切られている。底面はアカホヤ火山灰層直下の黒色土上面にあり、断面形は逆台形である。検出面で上幅約0.7m、底面の下幅約0.4m、深さ約0.2mである。埋土は、底面付近に地山ブロック等を含む黒褐色土(4～6層)があり、次いで黒色土(3層)が堆積する。遺物は出土していない。

11号溝状遺構(SE11,第32図)

D10Gr.で延長約3.9mが検出された。およそその走行方向は、北-南で緩やかに蛇行する。中世のSG5よりも古い。埋土(7～9層)は素手で掘り起こせるくらい全くしまりのないようなもので、かつ北の延長がアカホヤ火山灰層中にトンネル状に潜り込んでいくような状況であったことから、モグラ等の生物の巣穴であろうか。遺物は出土していない。

(3) 道路状遺構(SG1～5,第31・32図)

1号道路状遺構(SG1,第31図)

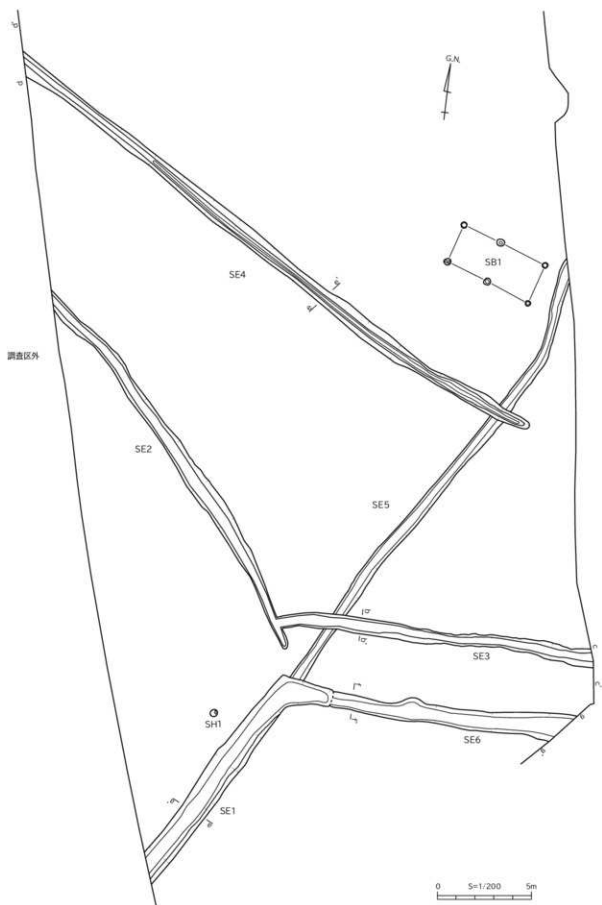
調査区東壁際のD4Gr.の表土直下ならびに7号竪穴建物に重複し、延長約11.2mにわたって検出された。走行方向は北西-南東で、砂利を含む硬化層(1層)が堆積する。調査区東壁際の埋土中から近世の四ツ目土鍾(110)が出土した。

2号道路状遺構(SG2,第31図)

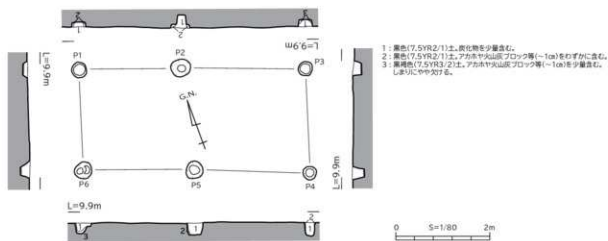
D5Gr.壁面の表土直下でのみ認識したもので、平面的な調査はできていない。断面は浅い皿状を呈する。底面には硬化層(2層)があって上面は水平になり、硬化層を覆うように黒色土(1層)が堆積する。Ⅱa層を高い位置から掘り込んでいることや、SG1と同じ検出状況であることから、近世の遺構と判断した。

3号道路状遺構(SG3,第31図)

D5Gr.壁面のⅡ層中で認識したもので、平面的な調査はできていない。断面はごく浅い皿状で、底面のより深くなった箇所のみ硬化層(4層)があって、その上部に黒色土(3層)が堆積し、その後には包含層(Ⅱa層)で覆われ



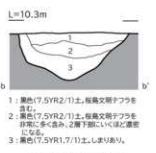
第29図 C区中世～近世遺構実測図(1)



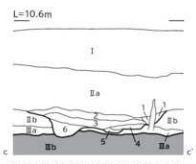
SB1



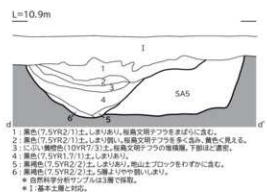
SE1 土層断面図①



SE3 土層断面図①



SE3 土層断面図②



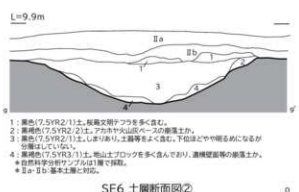
SE4 土層断面図①



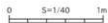
SE4 土層断面図②



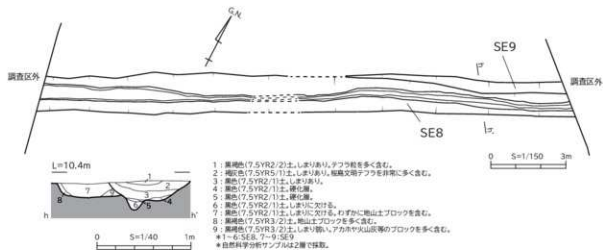
SE6 土層断面図①



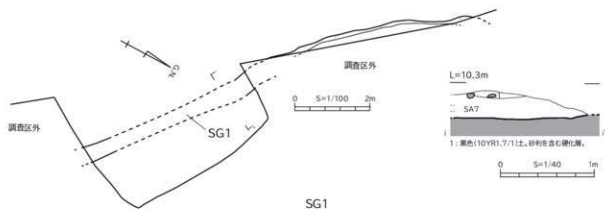
SE6 土層断面図②



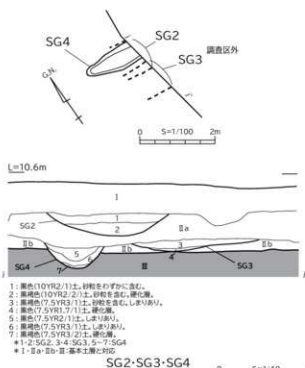
第30図 C区中世～近世遺構実測図(2)



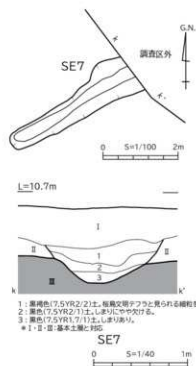
SE8-SE9



SG1

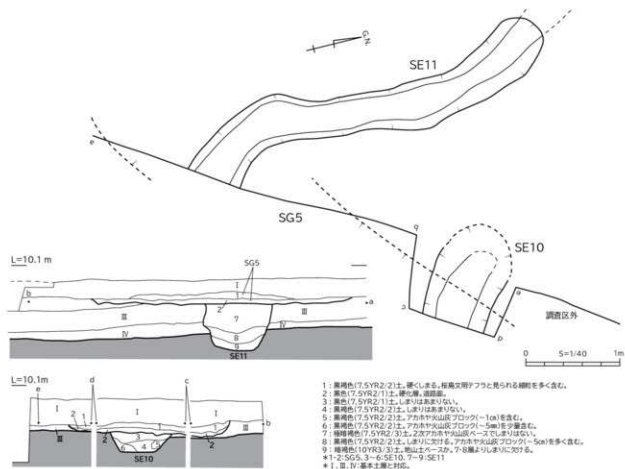


SG2-SG3-SG4



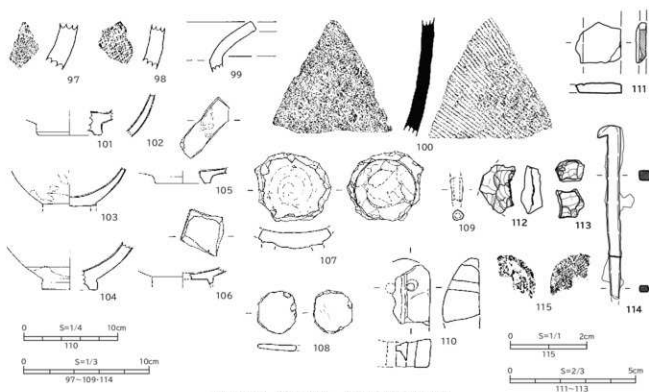
SE7

第31図 C区中世～近世遺構実測図(3)



SG5・SE10・SE11

第32図 C区中世～近世遺構実測図(4)



第33図 C区古代～近世遺物実測図

る。中世のSE3と同じ検出状況であることから、中世の遺構と考えられる。

4号道路状遺構(SG4, 第31図)

D5Gr.のⅡ層面で、延長1.4mと限定的に検出され、底面は地形に沿って東に傾斜している。断面は半円形を呈し、底面上に薄く硬化層(7層)がある。硬化層上に黒色・黒褐色土(5・6層)が堆積し、その後には包含層(Ⅱa層)が堆積している。包含層との関係はSG3と同じであり、SG3と同様に中世の遺構と考えられる。

5号道路状遺構(SG5, 第32図)

D10Gr.にあたるC区南壁の表土直下(Ⅱ層)において硬化層が認められたことで検出された。C区南壁は、その南側の一段下がった畑地との境界に土手状に残っていたものであり、南壁の土手の中でのみ、SG5の走行方向や断面形、埋土等を把握することとなった。断面観察からは、平坦な硬化面とその両壁が緩やかに立ち上がるもので、推定幅約0.8m、深さ約15cmである。走行方向は、おおよそ南西-北東である。埋土は、黒色土の硬化層(2層)の上に、肉眼観察では桜島文明テフラと推定されるテフラを多く含む黒褐色土(1層)が堆積する。遺物は出土していない。

3 遺物

(1) 遺構出土遺物(99・105・110・114, 第33図)

99は甕の口縁部で、外面には斜方向のハケメを施す。99は、SA4の埋土中からの出土であるが、SA4は古墳時代前期の竪穴建物跡であり、何らかの理由で埋土中に混入したものであろう。105はSH1出土の砂目積みの肥前系皿であり、17世紀後半頃のものである。110はSG1出土の四ツ目土錘である。破損があり、紐通しの4孔のうち2孔のみ残存する。側面観は「D」字状を呈し、側面に工具痕が残る。114はSE6出土の鉄釘で、断面方形のものである。

(2) 包含層出土遺物(97・98・100~104・106~109・111~113・115, 第33図)

97・98は布痕土器である。100は須恵器甕の胴部片で、内面は同心円タタキ、外面は斜方向の格子目タタキが見られる。

陶磁器片は、C区から中世から近代までの79点が出土し、そのうち7点を図化掲載した。101は龍泉窯青磁碗である。102・103は17世紀頃の天目碗である。104は16世紀から17世紀前半頃の肥前系碗で、底部は回転削りである。106は17世紀後半頃の、呉須紋様のある肥前系京風皿である。107・108は瓦玉で、107は18世紀頃の銅緑釉の肥前系、108は碗を用い、周縁を打ち欠いて円形に仕上げている。109はC区西隣の畑から表採された管状土錘で、孔径は0.5cmである。

111は板状の滑石製品で、右面は研磨され、右面から1.5cm左に右辺に平行する刻線が1条走る。112・113は玉髓製火打石で、近世のものである。

115は、全体の3分の1のみの残存ながら、「寛」通の文字が認識できることから寛永通宝である。障ノ元遺跡で唯一の出土銭貨である。

第2節 弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構と遺物

1 概要

遺構は、表土あるいはⅡ層を掘り下げ、Ⅲ層(アカホヤ火山灰層)～Ⅳ層面において、竪穴建物跡15軒・掘立柱建物跡3棟・土坑18基・土器集中3か所・小穴多数を検出した(第34～36図、図中の等高線はアカホヤ火山灰層上面で作成)。表土直下のⅡ層は遺物包含層であり、D・EGr.のⅡ層は、緩やかな谷地形に伴い厚い堆積が残存しており、当初は同範囲のⅡ層について人力掘削していたものの、Ⅱ層上部には遺物が含まれないことが確認されたため、遺物が出土し始める面まで重機により除去した。Ⅱ層からは、数多くの土器や石器等が出土した。遺構密度は、C区中央のA5～D6ラインより北側で高く、また、A2～3・B2～3Gr.では耕作等による削平がⅣ層中まで及んでおり、柱穴のみ残存する竪穴建物跡等もある。なお、包含層出土遺物のうち、その遺物出土位置の下位において竪穴建物跡等の遺構が検出された場合は、本来的にはその遺構に伴う遺物であった可能性もあるが、遺構プラン確定前の掘削時のものは包含層出土扱いに、遺構プラン確定後に出土したものをその遺構出土遺物として扱っている。

2 遺構

(1) 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡(SA1, 第37・38図)

間仕切り住居(花卉状住居)で、B8・B9・C8・C9Gr.に位置し、遺構西側は調査区外へ続いている。長軸9.24m、短軸6.78m以上となる。平面プランは、Ⅱ層を15cmほど下げたⅢ層上面で検出でき、土層は、1～10層が竪穴埋土、11・12層が炉埋土、13層が土坑埋土、14～17層が柱穴埋土、18～20層が貼床である。竪穴埋土のうち、1層は黒褐色土で2層と漸移的なものであり、2層に至ってしまりのある黒色土となる。3・4・8～10層は局所的に堆積する壁沿いの流入土と見られ、5層は床面上のほぼ全面に堆積していた。

本建物跡は間仕切り壁を有するもので、説明の都合上、間仕切り壁に囲まれた空間について、北から時計回りに間仕切り1～4とする。間仕切り2の外壁沿いに床面から10cmほどの浅い土坑が掘り込まれる。間仕切り3の中央には、削平を受け、わずかな痕跡のみ検出された間仕切り壁が外壁から内に延びる。間仕切り4は、竪穴全体の床面から約20cmの段差でもって高くベッド状になっており、水平でなく外壁に向かって緩やかに上がっていく。断面Cのとおり、間仕切り1の西壁はほぼ床面近くまで削平されている。これは、間仕切り3と同じような間仕切り壁を除去した結果と考えられる。

柱穴は7基(SA1-P1～P7)あり、P1～3・7は床面からの深さは40～50cm前後で、下部が径15cmほどの円柱状となっている。柱穴の位置関係を見ると、間仕切り壁と柱穴が対応して配置されている。SA1-P1～P7以外の小穴については、検出面で柱穴の可能性があったため掘り下げたが、柱穴と判断したものよりも浅いが細いものであり、補助的役割の柱の可能性もある。

炉は1基(SA1-SC2)あり、柱穴に囲まれたやや南寄りの位置に、長軸1.59m、短軸0.70mほどの不整形円形で、床面からの深さは約10cm、緩やかな皿状に掘り込まれる。炉の埋土(11・12層)は焼土ならびに焼土粒を含む黒褐色土・赤褐色土で、炉周辺の床面付近の竪穴埋土も合わせて24kgの土を採取しフローテーションした。ツブラジイ・コナラ属の炭化子葉等が回収され、ツブラジイ子葉については放射性炭素年代測定を実施した(第VII章参照)。

炭化材は5層を中心とする5～7層において、竪穴中央から外方向に向かっておおよそ放射状に広がって検

出された。炭化材の上下には焼土（第38図の遺構平面図中の網掛け）や地山土ブロック・土器片等が見られた。炭化材の中には、ホゾ穴のある板材（取り上げはできなかつたため現地で図化のみ）があり、炉の北側において、他の炭化材と同じく中央から外方向に向かって、ホゾ穴側を外にして検出された。同炭化材は、正面約24cm×17cm・厚み約8mmの板状に残存するもので、1.2cm×2.4cm角の長方形のホゾ穴が少なくとも1か所伴うものである。図中に破線で示したとおり、ホゾ穴から約6cm離れた位置に同規模のホゾ穴があった可能性もあるが、判然としない。

炭化材は、単位ごとに12点をサンプリングし（C1～C12）、4点について樹種同定・放射性炭素年代測定を実施した結果、C4（試料No.376-12）：クリ・C6（試料No.376-13）：ツブラジイ・C11・12（試料No.376-14・15）：スノキ属であった（第VII章参照）。竪穴の床面は貼床及び地山面で水平に仕上げられている。貼床の掘削面は、凹凸を持ちつつ、V～VII層面に達しており、貼床直下において縄文時代早期の赤化礫や土器片等が露出した。

遺物について、甕（120）はSA1-SC1の西から潰れたような状態で出土した。間仕切り3の外壁付近の床面には、台石（832・834）や使用痕こそ確認できないものの、台石に用いるような転磨礫がまとまっており、間仕切り4の西壁付近の床面直上で砥石（829）が出土した。台石（835）は、図の正面を上に向け、炉の近くに据え置かれたように出土し、やや離れて鉄製釣針（967）が床面直上で出土した。これら以外の甕・壺・高坏・鉢・ミニチュア土器（116～119・121～149）ならびに砥石（830）・軽石製品（831）・台石（833）・鉢（968）・鉄鏝等の小鉄器の基部（969）が床面から浮いた高さで出土し、縄文時代の土器・石器等も混入していた。

2号竪穴建物跡(SA2, 第39～41図)

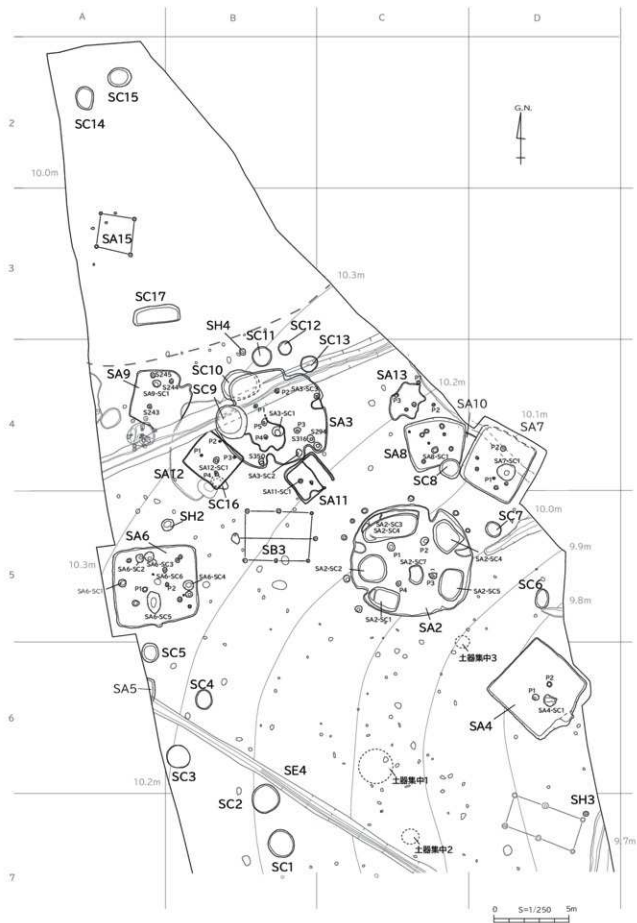
間仕切り住居（花弁状住居）で、C5Gr.で検出された。長軸8.13m、短軸7.41mとなる。II層を下げた結果、III層上面で検出できたが、南半はIII層が不明瞭で、地山と遺構埋土との境界をつかむのに時間を費やした。

竪穴そのものならびに床面外壁沿いに並んで検出された土坑の土層は、竪穴全体では、1～5層が竪穴埋土、6～8層が土坑埋土、9～13層が柱穴埋土、14層が貼床である。1～5層は黒色土・黒褐色土をベースに最大で径5cmの地山土ブロックを特徴的に含むものである。貼床は竪穴東側に部分的に見られた。

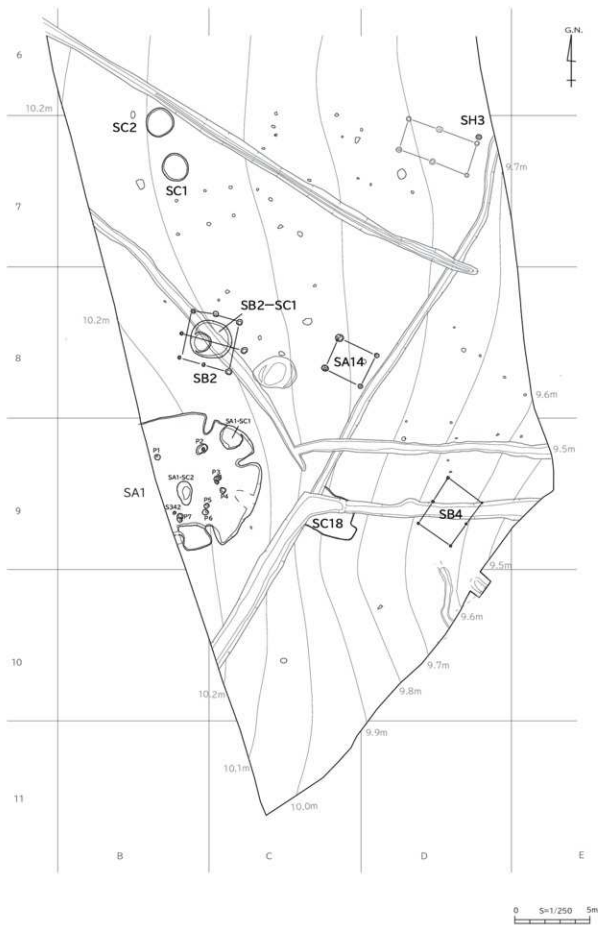
本建物跡もSA1と同様に間仕切り壁を有するもので、説明の都合上、間仕切り壁に囲まれた空間について、西から時計回りに間仕切り1～4とする。間仕切り1・2間ならびに間仕切り3・4間の間仕切り壁は、竪穴検出面から1段下がった高さでそれぞれ検出されたもので、残る2つの壁は竪穴確認面で検出された。また、南側の竪穴壁の立ち上がりが他壁に比べ不自然に乱れていたが、間仕切り4が他の間仕切りと比べて極端に広いことから、削平された間仕切り壁があったか、出入口等の空間であった可能性が考えられる。また、各間仕切りそれぞれ土坑が掘り込まれ（SA2-SC1～6）、間仕切り2においては、外壁際の床面に壁に沿う浅く細長い凹みがあり、それを切るように、3・4号土坑（SA2-SC3・4）が掘り込まれている。

柱穴は竪穴内に4基（SA2-P1～4）あり、各柱穴とも床面からの深さは50～60cm前後で、下部が径20cmほどの円柱状である。柱間寸法は、いずれも約2.4mである。また、竪穴外の南西側から北東側にかけて8基の柱穴が、竪穴外周を巡るように掘り込まれており、SA2に伴うものと考えられる。同柱穴は、径30～40cm前後・深さ12～25cmである。

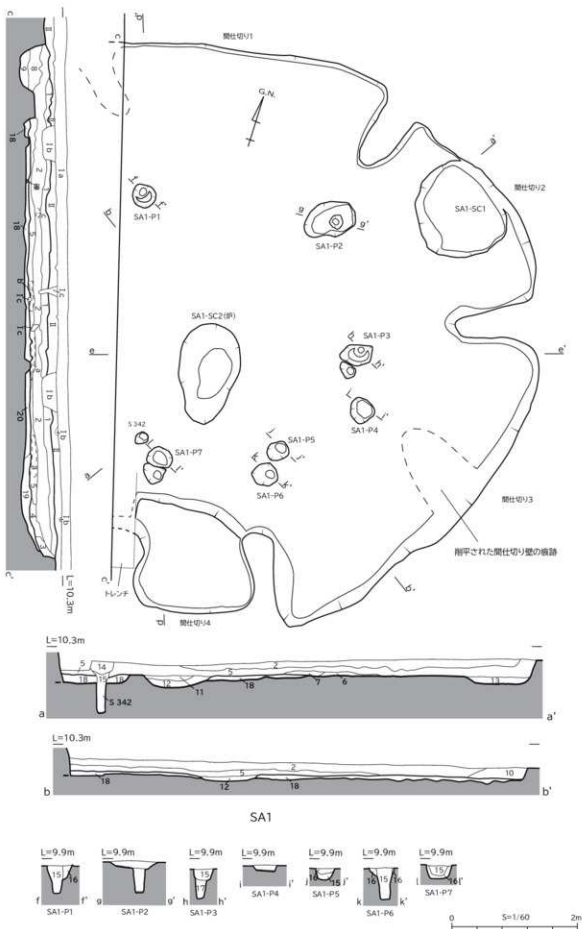
遺物について、土器のうち、器台（215）は北寄り、複合口縁壺（171）は遺構南東壁沿いに横臥で、鉢（221）は南壁沿いに置かれたような状況でそれぞれ出土した。その他の複合口縁壺（172）も竪穴床面直上で出土した。また、石器では、間仕切り2・3境壁付近に台石（838）や使用痕のない台石状の転磨礫がまとまって出土した。このほか、床面からやや浮いた埋土中から出土したものとして、甕・壺・高坏・器台・鉢・ミニチュア土器・円盤状土製



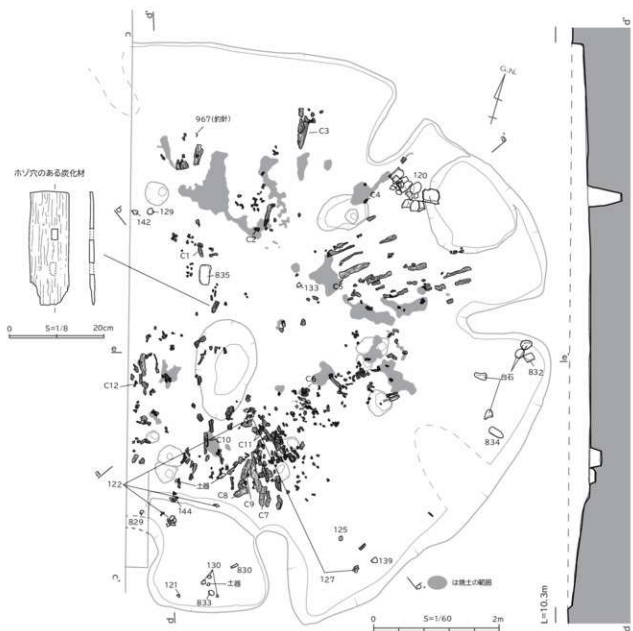
第35図 C区弥生時代後期後半～古墳前期遺構分布図(2)



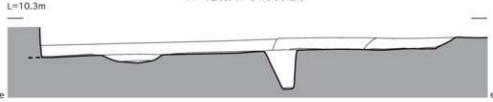
第36図 C区弥生時代後期後半～古墳前期遺構分布図(3)



第37図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(1)



SA1遺物出土状況平面図



- SA1土層記号
- 1: 黒褐色(10YR3/2)土。黄褐色粒(-3mm)をまばらに含む。
 - 2: 黒色(7.5YR2/1)土。しりとり。
 - 3: にじみ。黒褐色(10YR4/2)土。黄褐色粒(-5mm)を多く含む。
 - 4: 黒褐色(10YR3/1)土。黄褐色粒(-3mm)を多く含む。
 - 5: 黒褐色(10YR3/2)土。炭化物・焼土を含む。
 - 6: 土層の中心部。炭化物に焼土を含む。a: 焼土を多く含む。c: 炭化物。
 - 7: 黒褐色(7.5YR2/2)土。アカホヤ火山灰ブロックを多く含む。
 - 8: 黒褐色(10YR3/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(-20cm)を含む。
 - 9: 灰褐色(10YR4/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(-10cm)を含む。
 - 10: 黒色(7.5YR2/1)土。しりとり。
 - 11: 黒褐色(7.5YR3/1)土。焼土をまばらに含む。
 - 12: 赤褐色(2.5YR4/8)土。焼土。
 - 13: 黒褐色(7.5YR2/3)土。焼褐色土ブロック(-5cm)を多く含む。
 - 14: 黒色(7.5YR2/1)土。アカホヤ火山灰ブロック(-10cm)を少量含む。
 - 15: 黒褐色(7.5YR3/2)土。しりとり。穴ける。
 - 16: 黒褐色(7.5YR2/2)土。焼土ブロック(-3cm)を多く含む。
 - 17: 黒色(7.5YR3/1)土。焼土ブロック(-1cm)を含む。
 - 18: 黒褐色(7.5YR2/3)土。焼土ブロック(-5cm)を多く含む。
 - 19: 灰褐色(10YR4/2)土。黄褐色土ブロック(-5cm)を含む。
 - 20: 灰褐色(10YR4/2)土。焼土土ブロック(-5cm)を含む。
 - a: にじみ。黒褐色(10YR5/3)土。しりとり。表土(基本土層のI層)。
 - b: 焼土。
 - c: 炭化物。
 - d: 黒色(7.5YR2/1)土。5層より北を含まない。基本土層のII層。
 - e: 10: 掘穴。11-12: 井。13: 土坑。14-17: 柱穴。18-20: 柱礎。

第38図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(2)

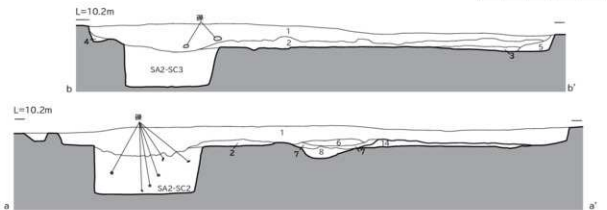
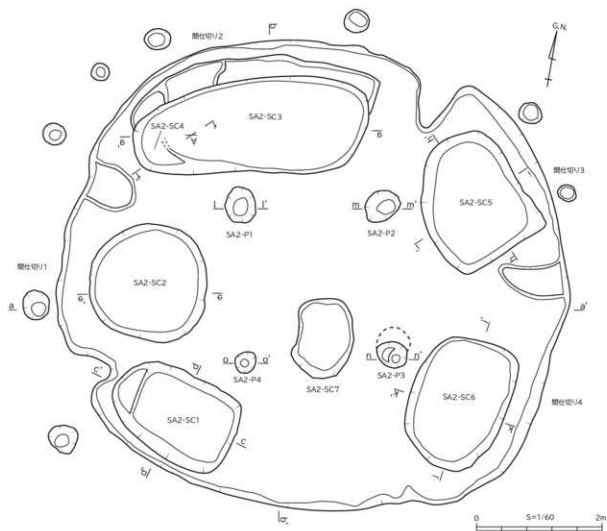
品(150・170・173・214・216・220・222・241)ならびに打欠石鍾(836)・砥石(837)・台石(839・840)・敲石(844)・袋状鉄斧(970)・刀子(971)・棒状鉄片(974)・炭化材(試料No.376-16)、混入した縄文時代の土器・石器等がある。炭化材(試料No.376-16)は長さ5cmほどの棒状のものであり、樹種同定・放射性炭素年代測定を実施し、スノキ属と判明した(第七章参照)。

2号竪穴建物跡は、外壁沿いに巡る土坑が特徴的である。土坑は、間仕切り1の中央に2号土坑(SA2-SC2)、間仕切り2の中央に3・4号土坑(SA2-SC3, SA2-SC4)、間仕切り3の中央に5号土坑(SA2-SC5)、間仕切り4の東壁よりに6号土坑(SA2-SC6)、間仕切り4の西壁よりに1号土坑(SA2-SC1)がそれぞれ掘り込まれている。竪穴空間の上で、1～6号土坑が同時に存在していたとは考えにくく、また、2号土坑以外は人為的に埋め戻されたような堆積状況であったことから、1～2基の土坑が同時存在していて、続けて埋め戻しつつ、新たな土坑を掘削する状況が想定される。また、2号土坑は他土坑と異なって自然堆積であることから、SA2埋没とともに埋まったものと考えられる。この埋土の相違(埋め戻されたようなものか自然堆積か)からは、2号土坑が1～6号土坑の中では最も新しいものと考えられる。

1号土坑(SA2-SC1)は、間仕切り4の西隅に、間仕切り壁と外壁に接して掘り込まれる。平面形は長軸2.07m、短軸1.41mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.75mであり、西側に浅い掘り込みがある。壁面は80～85°で外開きに立ち上がり、床面は水平となる。埋土は床面直上に褐色土ブロックの混じる暗褐色土(5層)があり、5層はしまりがあり、床面として機能していた可能性がある。次いで、壁際に4層が堆積した後に、基盤層の白色粘土からアカホヤ火山灰等の地山土ブロックを多く含む、比較的均質な黒褐色土(1～3層)が堆積する。1～3層は、2・3層中に土師器碎片・敲石を含むものの、その堆積状況から人為的に土坑を埋めたものと考えられる。このほか、地山土ブロックとともに混入したものと考えられる縄文時代早期の剥片や赤化礫が出土した。

2号土坑(SA2-SC2)は、間仕切り1の中央で、外壁から柱穴までの床面に掘り込まれる。平面形は長軸1.89m、短軸1.86mの円形で、検出面からの深さは0.66mである。壁面は80～85°でやや外開きに立ち上がり、床面は水平となる。埋土は、1・3～5号土坑と異なり、人為的に埋めたのでなく、地山土ブロックを含む黒褐色土をもって自然埋没したような堆積をなす。遺物は、西側(竪穴の外壁側)の床面から浮いた1・2層と3・4層の境付近の深さから、横位あるいは斜位でもって小形鉢(222)・ミニチュア土器(238)が出土した。この状況からは、埋没過程で土器が流れ込んだものと考えられる。このほか、埋土中から、鉢・敲石(845・846)、地山土ブロックとともに混入したと考えられる縄文時代早期の二次加工剥片・剥片・赤化礫が出土した。

3号土坑(SA2-SC3)は、間仕切り2の中央からやや西よりに掘り込まれる。平面形は長軸3.69m、短軸1.50mのやや歪な楕円形で、検出面からの深さは0.66mである。3号土坑は、4号土坑と切り合い関係にあって、4号土坑が古く3号土坑が新しい。検出当初の平面で切り合いは明瞭でなかったが、平面形が南西側に延びるような違和感を覚えたため、念のため、断面ラインとは別に断面ラインを設定したところ、ほぼ垂直に立ち上がる、ややしまりに欠ける黒褐色土(3号土坑の10層)を境に土坑の切り合い関係が認識され、床面においても、3号土坑に対し4号土坑がやや高くなるというわずかな段差を捉えることができた。10層については、地山壁でない4号土坑埋土が壁となる部分について、崩落を回避する土留め用の板等の痕跡と推測される。床面について、3・4号土坑の切り合い確認後に3・4号土坑の南半を掘り下げた結果、床面においてわずかな段差を検出した。土層断面ラインにはこの段差が現れてなく、すでに完掘していた北半にも段差の延長がないことから、床面は、南半にのみわずかな段差を持ちつつ、全体は水平に揃えられていると判断した。埋土は、2～5層とも地山土ブロックを含む、比較的均質な黒褐色土であり、1号土坑と同じく人為的に埋めたものと考えられる。

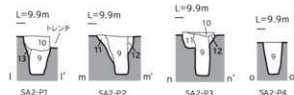


SA2

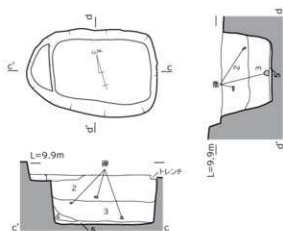
SA2土層記号

- 1: 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり。土層や炭化材を含む。地山土ブロック(3ca)をまばらに含む。
- 2: 黒褐色(7.5YR3/2)土。白色粘土-アカホヤ火山灰までの地山土ブロックからなる。
- 3: 黒色(7.5YR2/1)土。5層に比べてしまりや少くなる。
- 4: 黒褐色(7.5YR3/2)土。白色粘土-アカホヤ火山灰までの地山土ブロックからなる。
- 5: 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり。焼土ブロック(5ca)を含む。
- 6: 黒褐色(7.5YR2/2)土。しまりあり。アカホヤ火山灰ブロック(5ca)多く含む。
- 7: 黒褐色(7.5YR2/2)土。しまりあり。5層に比べてアカホヤ火山灰は少ない。
- 8: 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり。アカホヤ火山灰ブロック(3cm)を含む。
- 9: 黒色(7.5YR2/1)土。しまりや少くなる。焼土を含む。
- 10: 黒色(7.5YR2/1)土。1層と同じ。地山土ブロックを少量含む。
- 11: 黒色(7.5YR3/1)土。しまりに欠ける。地山土ブロックを含む。
- 12: 緑褐色(7.5YR5/1)土。しまりあり。焼土ブロックを含む。
- 13: 黒色(7.5YR2/1)土。1層よりさらにしまりが少なく。
- 14: 黒褐色(7.5YR3/2)土。白色粘土-アカホヤ火山灰までの地山土ブロックからなる。

* 1-5: 層厚: 6-8: 土厚: 9-13: 坑底: 14: 地底

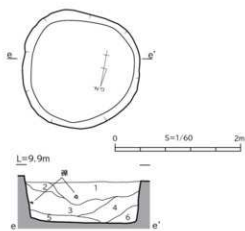


第39図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(3)



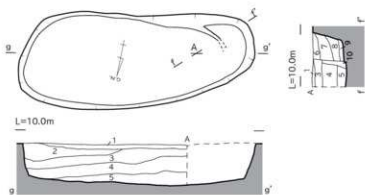
- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)土、白色粘土-アカサヤ火山灰ブロック(→5cm)を多く含む。
- 2: 黒褐色(7.5YR3/2)土、1層より多い。粘土、火山土ブロックを多く含む。
- 3: 黒褐色(7.5YR3/1)土、白色粘土-アカサヤ火山灰ブロック(→5cm)を多く含む。
- 4: 黒褐色(7.5YR2/1)土、1層より多い。壁面の中部分に堆積。
- 5: 黒褐色(7.5YR3/3)土、1層より多い。褐色土ブロック(→5cm)を多く含む。

SA2-SC1



- 1: 黒褐色(7.5YR3/2)土、1層より多い。
- 2: 黒褐色(7.5YR2/2)土、アカサヤ火山灰などの火山土ブロックを多く含む。
- 3: 黒褐色(7.5YR2/2)土、火山土ブロック(→5cm)を少し含む。
- 4: 黒褐色(7.5YR3/2)土、1層より火山土ブロックを多く含む。
- 5: 黒褐色(7.5YR2/2)土、1層より多い。
- 6: 黒褐色(7.5YR2/2)土、1層より多い。壁面では5層より1層よりやや厚い。

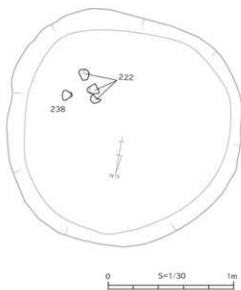
SA2-SC2



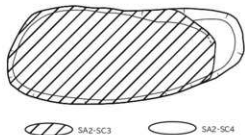
- 1: 黒色(7.5YR2/1)土、1層より多い。(SA2の2層に相当)
- 2: 黒褐色(10YR3/2)土、火山土ブロック(→3cm)をわずかに含む。
- 3: 黒褐色(10YR3/2)土、火山土ブロック(→3cm)を少量含む。
- 4: 黒褐色(10YR3/1)土、火山土ブロック(→3cm)を多く含む。
- 5: 黒褐色(10YR3/2)土、火山土ブロック(→5cm)を多く含む。
- 6: 黒褐色(10YR3/2)土。
- 7: 黒褐色(10YR3/1)土、火山土ブロック(→1cm)をわずかに含む。
- 8: 黒色(10YR2/1)土、6-7-9層に比べ、火山土ブロックをほとんど含まない。
- 9: 黒褐色(10YR3/1)土、火山土ブロック(→5cm)を少量含む。
- 10: 黒褐色(10YR3/2)土、1層より多い。火山土ブロック(→1cm)を少量含む。

*1: 層6、2-5: SA2-SC3、6-9: SA2-SC4、10: SA2-SC3土壁の裏側の層跡

SA2-SC3・SA2-SC4

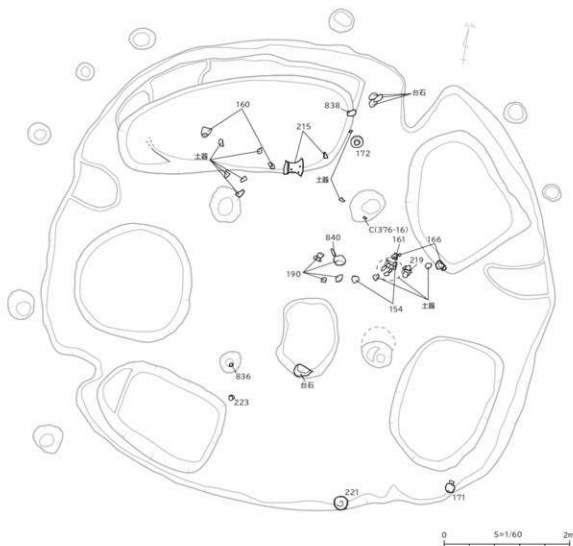


SA2-SC2遺物出土状況平面図

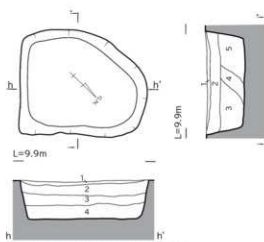


SA2-SC3・SA2-SC4切合い模式図

第40図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(4)

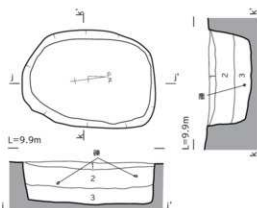


SA2遺物出土状況平面図



- 1: 黒褐色(7.5YR2/1)土、しまりあり、(SA2の2層に相当)
- 2: 黒褐色(10YR3/2)土、地山土ブロック(〜3cm)を含む。
- 3: 黒褐色(10YR3/1)土、地山土ブロック(〜3cm)を多く含む。
- 4: 黒褐色(10YR3/1)土、4層のみ地山土ブロック(〜15cm)を少し含む。
- 5: 黒褐色(10YR3/1)土、地山土ブロック(〜3cm)を多く含む。

SA2-SC5



- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)土、白色粘土〜アホヤカ山土ブロック(〜5cm)を多く含む。
- 2: 黒褐色(7.5YR3/2)土、1層よりは地山土ブロックを多く含む。
- 3: 黒褐色(7.5YR3/2)土、地山土ブロック(〜3cm)を多く含む。

SA2-SC6

第41図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(5)

4号土坑(SA2-SC4)は、3号土坑に切られており、わずかに西壁側が残存するばかりである。埋土(6～9層)は、8層のみ他と比べやや黒みの強い色であったものの、全体に3号土坑とあまり差のない均質な黒褐色土系である。なお、遺物は、3・4号土坑で区分けできず一括扱いでの取り上げとなってしまったが、1層中から甕・壺・鉢(157・168・183・188・197・226)ならびに敲石(847・848)・台石(843)・棒状鉄片(973)が出土し、2～5層中から縄文時代早期の打製石鏃・二次加工剥片・剥片・石核・赤化礫が混入して出土した。

5号土坑(SA2-SC5)は、間仕切り3の中央床面に掘り込まれる。平面形は長軸2.01m、短軸1.65mでやや歪な隅丸方形で、検出面からの深さは0.60mである。壁面は80°で外開きに立ち上がり、床面は水平となる。埋土は3・4号土坑と同じであり、2～4層が地山土ブロックを含む比較的均質な黒褐色土で人為的に埋めたもの、1層はSA2埋土2層と同一である。3～5層が南西側(竪穴中央側)から斜めに堆積した後に、その上面がいったん水平になられた上で1・2層が堆積している。遺物は、1層から甕(155)・鉢(231)・打欠石鏃・転磨礫が出土し、2～4層から剥片・石核・赤化礫が多く出土した。他土坑と同じく、剥片・石核・赤化礫については縄文時代早期のものが地山土ブロックとともに混入したと考えられる。なお、5層から6.4kgの土を採取しフローテーションした結果、炭化種実等の出土はなく、剥片のみが回収された(第七章参照)。

6号土坑(SA2-SC6)は、間仕切り4の東側床面に掘り込まれる。平面は長軸2.13m、短軸1.50mのやや歪な隅丸方形で、検出面からの深さは0.66mである。壁面は80～85°で外開きに立ち上がり、床面は水平となる。埋土は、1～3層とも地山土ブロックを含む、比較的均質な黒褐色土であり、1・3～5号土坑と同じく人為的に埋めたものと考えられる。遺物は、1層から土師器片・敲石・台石(842)・三角鉄片(972)が出土した他、1～3層から縄文時代早期の剥片や赤化礫が混入して出土した。

7号土坑(SA2-SC7)は1～6号土坑とは性格の異なるもので、柱穴SA2-P3・P4の間で竪穴床面の中央やや南寄りに、平面形が長軸1.29m、短軸0.9mほどの不整形で、検出面からの深さが25cmほどである。炉の可能性も考えられるが、焼土等は視認できていない。

3号竪穴建物跡(SA3, 第42・43図)

間仕切り住居(花弁状住居)で、B4・C4Gr.にまたがって検出された。長軸7.44m、短軸6.48mとなる。おおよそⅢ層上面で検出されたが、北半は近世の8号溝状遺構(SE8)により竪穴埋土が部分的に失われ、西壁付近には竪穴に重複して9号土坑(SC9)・12号竪穴建物跡(SA12)が掘り込まれ、南壁では、11号竪穴建物跡(SA11)と接している。また、10号土坑(SC10)はSA3より古く、同土坑埋没後にSA3が構築されている。

土層は、竪穴全体では、1～10層が竪穴埋土、11・12層が柱穴埋土である。SA3-SC1周辺に5・6層が局所的に堆積し、4・7・10層は竪穴の全体に堆積する。8層は壁際のみ考えられる堆積で、9号土坑(SC9)との切り合いにより不明瞭ながら9層も壁際のみ堆積である可能性が高い。竪穴の全体がある程度埋まって浅く広い土坑状になって、白色粘土等の地山土ブロックを多量に含む灰褐色土である1層が堆積する。

本建物跡も間仕切り壁を有し、説明の都合上、北東から時計回りに間仕切り1～5とする。間仕切り1・2境の間仕切り壁は、竪穴検出面から1段下がった高さで検出され、間仕切り2・3境、同3・4境、同4・5境の壁は竪穴検出面で検出された。間仕切り1・5境の間仕切り壁は、8号溝状遺構(SE8)による削平を受けて不明瞭である。また、床面中央より南付近には、全体の床面より最大で10cmほど下がる不定形の掘り込みがある。

柱穴は3基(SA3-P1・P3・P4)あり、いずれも検出面で径30cmほどの円形である。SA3-P1は床面からの深さが30cmと他の柱穴と比べて浅く、SA3-P3・P4は床面からの深さが50cmで、やや上に開く円柱形で掘り込まれている。また、SA3-P5は形状や深さ等から、SA3-P2は床面からの深さが10cmと浅いながらその

位置からみて、それぞれ柱穴の可能性がある。不明瞭ではあるものの、間仕切り2・3境壁の延長にSA3-P3、間仕切り3・4境壁の延長にSA3-P4・間仕切り4・5境壁の延長にSA3-P1(間仕切り1・5境壁の延長にSA3-P2)という、間仕切り壁と柱穴の対応があるとも見える。

炭化材は、1層下部から4層にかけて、竪穴中央からおおよそ放射状に広がって検出された。炭化材は、地点によって残存が良くなく半ば土壌化しており、その範囲について第43図中に破線で示した。炭化材は、単位ごとに10点をサンプリングし(C1～C10)、このうち5点について樹種同定・放射性炭素年代測定を実施した結果、C1・4・6・7・10(試料No.376-17・404-17～20)いずれもコナラ属アカガシ亜属であった(第VII章参照)。

竪穴中央やや南よりの床面には、長軸0.78m、短軸0.63mの楕円形で、床面からの深さが約10cmとなる緩やかな皿状の1号土坑(SA3-SC1)が掘り込まれている。SA3-SC1は、当初、認識できていなかったが、竪穴の土層断面Cで不自然な落ち込みが確認でき、遺物の出土状況に注目すると床面にめり込むように鉢(313)や棒状礫(871)が検出されていたことから、改めて床面を精査し検出に至ったものである。土坑内には、左右に分けたように棒状礫14点(860～873)が並べられ、その周囲から壺(258)・高坏(286)・鉢(313)・ミニチュア土器(326)・台石(859)・軽石製品(874)が出土した。また、間仕切り1・2境壁の外壁沿いにある3号土坑(SA3-SC3)からは、土坑床面に置かれたような状態で鉢(311)が出土した。このほか、いくつか土坑状の落ち込みが床面で検出されたが、いずれもごく浅い。

遺物について、竪穴床面直上から、壺(256・257)・打欠石錘(853)・台石(855～858)・打製石鏃(854)・棒状鉄片(977)が出土した。壺(256)は間仕切り1の外壁沿いに置かれた状況である。打製石鏃(854)はその石材や形・整形状況から弥生時代のものと考えられ、竪穴建物そのものの年代よりは古手のものであろう。このほか、埋土中から、壺・甕・高坏・器台・鉢・ミニチュア土器(242・245・246・249・251～260・262～271・273・275・276・278～290・292～295・297～299・303・305～315・317～324・326・327・330)ならびに敷石(849)・磨石(851・852)・凹石(850)・不明鉄片(976)、混入した縄文時代の土器・石器等が出土した。また、炭化材C5付近において、掘削中に炭化したイチイガシ子葉を視認できたため、その周囲の土壌2.1kgを採取しフローテーションした結果、コナラ属子葉・果皮やブドウ属種子等が回収された。コナラ属子葉については、放射性炭素年代測定を実施した(第VII章参照)。

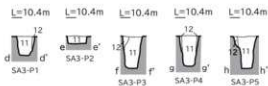
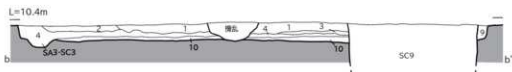
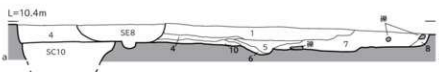
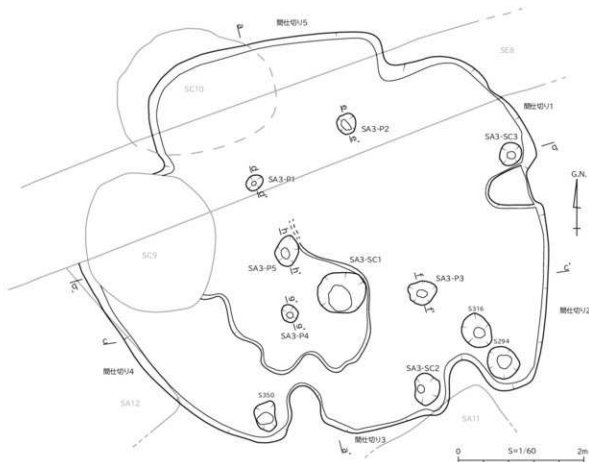
4号竪穴建物跡(SA4, 第44図)

D5・D6Gr.において、ブロック状に堆積した皿層ならびにIV層面で検出された。平面形は、長軸5.52m、短軸5.07mの方形プランで検出面からの深さは0.2mである。各壁とも垂直に近い立ち上がりを見せるが、南壁の中央のみ外に張り出しており、立ち上がりも緩くなっている。

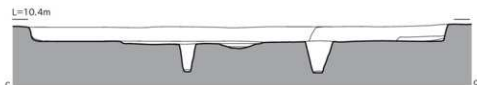
土層は、1～7層が竪穴埋土、8層が土坑埋土、9・10層が柱穴埋土、11層が貼床である。竪穴埋土のうち、3～7層は壁際に堆積する壁沿いの流入土と見られ、地山土ブロックが目につく。2層はしまりのある黒色土で、竪穴のほぼ全体に堆積し、最終的に2層に比べてやや明るい1層が竪穴中央上部に堆積する。

床面は、部分的に貼床されて全体に水平であり、削り込むと縄文時代早期の遺物や赤化礫が露出した。柱穴は竪穴中央に2基(SA4-P1・P2)が掘り込まれ、床面から20～30cmの深さになる。また、柱穴2基のやや南に、平面形が長軸0.81m、短軸0.66mほどの不整形で、建物床面からの深さが10cmほどの土坑(SA4-SC1)がある。炉の可能性も考えられるが、焼土等は視認できていない。

遺物のうち、壺(336～338・342)・鉢(365～367)・器台(356)・塊(362)・ミニチュア土器(368・369)・凹石(875)・台石(877～879)が床面または床面近くから出土した。また、埋土中から壺・甕・高坏・

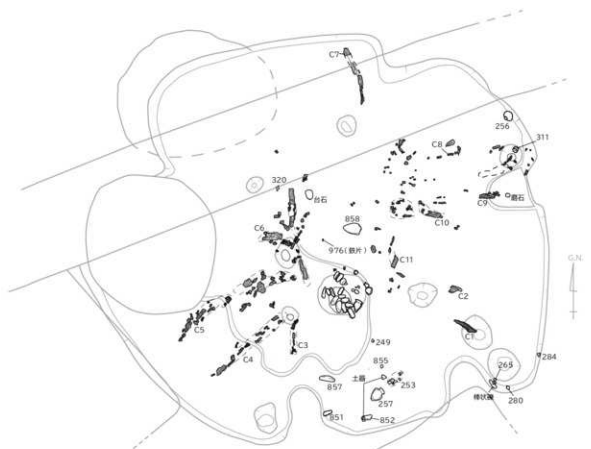


- 1: 灰褐色(7.5YR4/2)土, 白色粘土層や燧山土ブロックを多数に含む, 層積土か。
 - 2: 褐色(7.5YR2/1)土, アカホヤ火山灰ブロック(-5cm)を少量含む。
 - 3: 褐色(7.5YR2/1)土, アカホヤ火山灰ブロック(-1cm)を少量含む。
 - 4: 褐色(7.5YR2/1)土, アカホヤ火山灰ブロック(-5cm)を少量含む。
 - 5: 褐色(7.5YR1, 7/1)土, アカホヤ火山灰ブロック(-5cm)をほぼ完全に含む。
 - 6: 褐色(7.5YR1, 7/1)土, アカホヤ火山灰ブロック(-5cm)を多く含む。
 - 7: 褐色(7.5YR2/1)土, よくしみる。
 - 8: 褐色(7.5YR2/1)土, しみにくく, アカホヤ火山灰層をわずかに含む。
 - 9: 褐色(7.5YR2/1)土, よくしみる。
 - 10: 黒褐色(7.5YR3/2)土, 褐色土ブロック(-5cm)を少量含む, 灰のようなものも含まれ, 炭化材が入る。
 - 11: 褐色(7.5YR2/1)土。
 - 12: 黒褐色(7.5YR3/2)土, 褐色土(-1cm)を少量含む。
- *1-10: 竪穴, 11-12: 柱穴

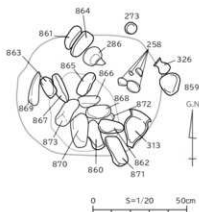
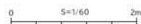


SA3

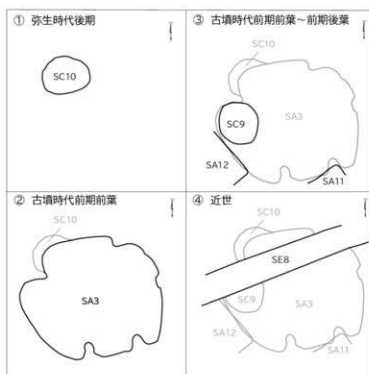
第42図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(6)



SA3遺物出土状況平面図



SA3-SC1遺物出土状況平面図



SA3・SA11・SA12・SC9・SC10・SE8の切合い模式図

第43図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(7)

器台・鉢・壺・ミニチュア土器(332～335・339～355・357～364・370～372)ならびに磨石(880)・軽石製品(876)・棒状礫・鉄鏃(有茎・無茎,978～980)・鏃(981)・不定形小鉄片(982)、混入した縄文時代の土器・石器等が出土した。このほか、北壁沿いにミニチュア土器(368・369)2点がまとまって出土したため、周辺の土壌2kgを採取しフローテーションした結果、イネ果実等が回収された(第七章参照)。

5号竪穴建物跡(SA5, 第49図)

A6Gr. で検出された。調査区壁際にあつて、平面方形プランのコーナーと推測できることや貼床の存在を根拠に、竪穴建物跡の一部として報告する。土層は調査区壁で確認したが、埋土を中世の4号溝状遺構(SE4)が大きく掘り込んでおり、情報はさらに断片的となる。竪穴埋土は黒色土(1・2層)で2層に褐色土ブロック等をわずかに含む。床面はほぼ水平で、貼床(3層)となる。床面直上から敲石(881)、埋土中から壺(373)が出土した。

6号竪穴建物跡(SA6, 第45図)

A5・B5Gr.にまたがってⅢ～Ⅳ層面で検出され、平面形は長軸5.61m、短軸5.22mの方形プランで、検出面からの深さは0.3mである。土層は、1～7層が竪穴埋土、8層が炉埋土、9・10層が土坑埋土、11～14層が貼床である。竪穴埋土のうち、5～7層は壁際に堆積する壁沿いの流入土と考えられる。竪穴下部には広く4層が堆積し、その後、凹凸に入り込むように1～3層が部分的に堆積する。1～4層については含有物等のわずかな違いで分層したもので、全体的には近い土質である。

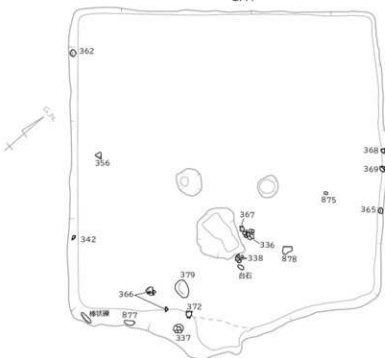
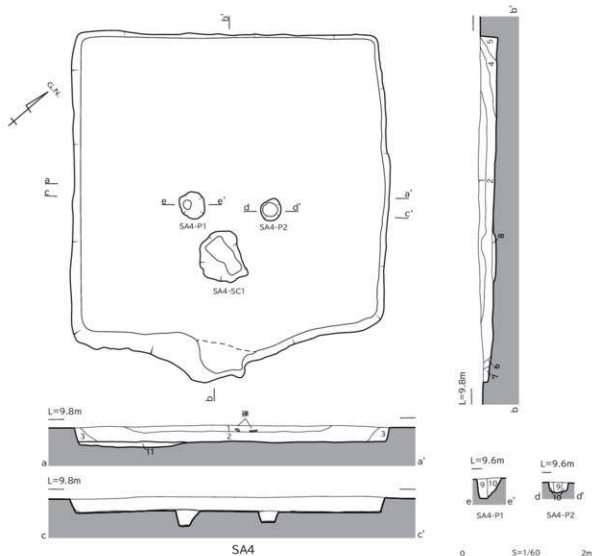
竪穴の壁面はほぼ直角に立ち上がり、南壁の中央付近のみ外壁が外方向へ膨らみをもつ。床面は、全体に貼床があつて水平に整えられている。断面bでは、床面の一部となる11層上面の硬化を確認できたが、硬化の平面的な広がりは明瞭でなく平面図へ反映するには至らなかった。柱穴は竪穴中央に2基(SA6-P1・P2)あり、柱穴は径30～36cm、床面からの深さは30～40cmである。また、柱穴2基のやや北側に、5cmほどのごく浅い炉1基(SA6-SC6)があり、焼土は視認できないものの、埋土に炭化物を多く含む。炉埋土8層ならびにその周辺から土壌5kgを採取しフローテーションした結果、土器細片・炭化材片が回収された(第七章参照)。

また、床面で土坑5基(SA6-SC1～5)を検出した。西壁近くの1号土坑(SA6-SC1)の平面形は径50cmの円形で、形状はサラダポウル状(最深度20cm)のものである。台石(888)が落ち込むように斜位で出土した。北壁沿いには近接して土坑2基、2号土坑(SA6-SC2)・3号土坑(SA6-SC3)があり、どちらも最深度は20cm程度である。東壁沿いの4号土坑(SA6-SC4)は平面円形で、床面から27cmの深さまで掘り込まれる。5号土坑(SA6-SC5)は、竪穴中央南よりに、平面が楕円形で浅く掘り込まれたもので、埋土(9・10層)中から壺(383)・鉢(410・412・417)がまとまって出土した。このほか、床面には小穴が8基あつて柱穴等の可能性も踏まえ掘削したが、いずれもごく浅いもので遺物も含まれず、貼床中の地山土ブロック等を遺構と誤認した可能性があるものの、平面図にはそのまま掲載した。なお、貼床を除去する過程では、縄文時代早期の遺物や赤化礫が露出した。

遺物は、床面直上から甕(375・379)・壺(380・381・383・396・397・399)・鉢(410・412・417・419)・砥石(887)・敲石(890)・台石(889)が出土した。埋土中から壺・壺・高坏・鉢・ミニチュア土器(374・376～378・382・384～395・398・400～409・411・413～416・418・420～429)ならびに凝灰岩製紡錘車(883)・有溝石錘(882)・砥石(884～886)、混入した縄文時代の土器・石器等が出土した。

7号竪穴建物跡(SA7, 第46図)

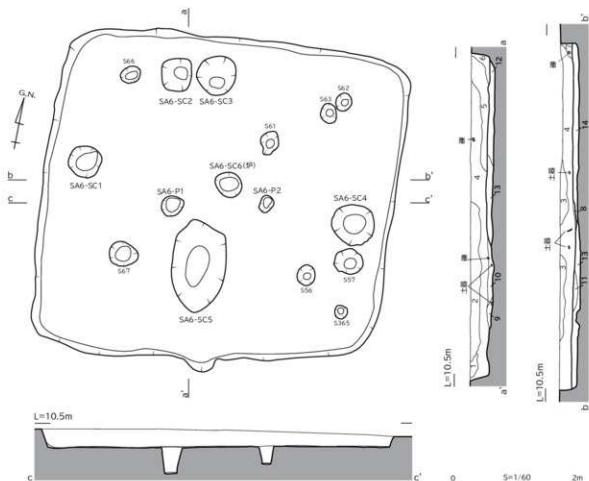
C4・D4・D5Gr.に位置し、南半は表土直下のⅣ層面で検出された。10号竪穴建物跡(SA10)を切つて構築され、竪穴埋没後には、8号土坑(SC8)が竪穴西隅とわずかに重複する。平面形は、長軸約4.20m、短軸4.02m



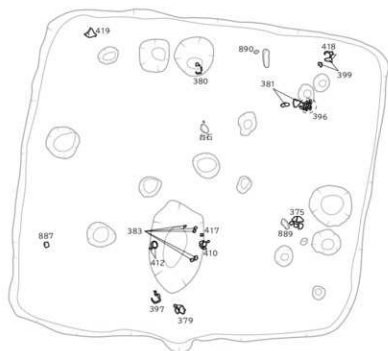
SA4遺物出土状況平面図

- 1 : 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、2層よりやや明るい色、2層を多く含む。
 - 2 : 黒色(7.5YR1.7/1)土、しまりあり。
 - 3 : 黒色(7.5YR1.7/1)土、2層よりしまりにやや欠ける。
 - 4 : 黒色(7.5YR2/1)土、アサヒホケム山灰ブロック(〜3cm)をまばらに含む。
 - 5 : 黒色(7.5YR2/1)土、7層よりしまりにやや欠ける、アサヒホケム山灰ブロック(3cm)をまばらに含む。
 - 6 : 黒褐色(7.5YR3/2)土、しまりあり。
 - 7 : 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、黒褐色土ブロック(〜5cm)をまばらに含む。
 - 8 : 黒褐色(7.5YR3/2)土、しまりあり、黒褐色土ブロック(〜10cm)を含む。
 - 9 : 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり。
 - 10 : 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、褐色土ブロック(〜3cm)をわずかに含むことのみ。
 - 11 : 黒褐色(7.5YR3/2)土、しまりあり、黒褐色土ブロック(〜10cm)を含む、結核のみ。
- *1〜7: 窠穴。8: 土坑。9-10: 柱穴。11: 地床

第44図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(8)



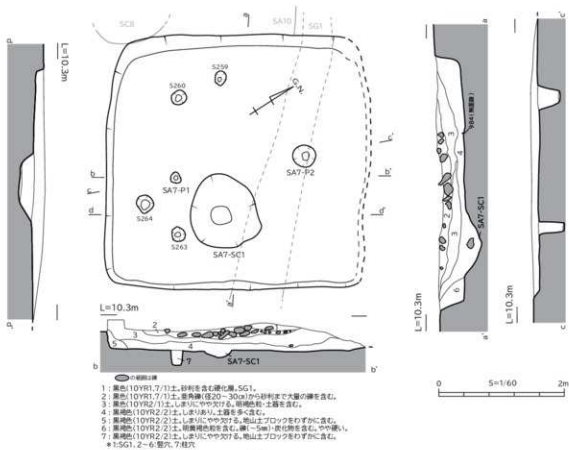
SA6



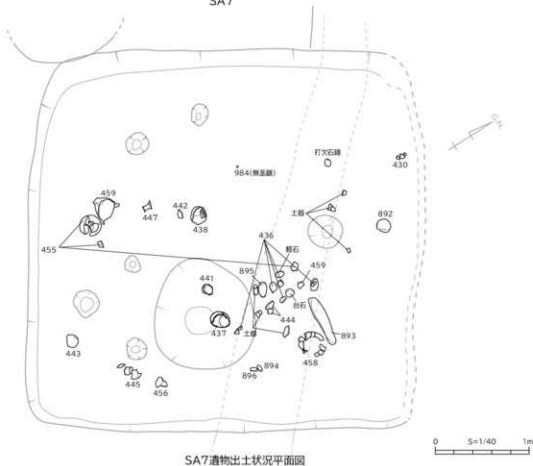
SA6遺物出土状況平面図

- 1 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり、2層よりやや明るい色。土層を多く含む。
 - 2 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。
 - 3 黒色(7.5YR2/1)土。褐色土ブロック(～3cm)をごく少量含む。
 - 4 黒色(7.5YR1.7/1)土。2層より、しまりにやや交ける。
 - 5 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり、暗褐色土ブロック(～10cm)を含む。
 - 6 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり、2層よりやや明るい色。土層を多く含む。
 - 7 黒褐色(7.5YR3/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(～3cm)を多く含む。
 - 8 黒色(7.5YR2/1)土。アカホヤ火山灰ブロック(～5cm)をまばらに含む。
中に物が多く含む。灰の混入あり。
 - 9 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり、暗褐色土ブロック(～5cm)をまばらに含む。
 - 10 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり。
 - 11 黒褐色(7.5YR3/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(～3cm)を多く含む。
土層(4層との境)に硬くあり。
 - 12 黒色(7.5YR2/1)土。アカホヤ火山灰ブロック(～3cm)をまばらに含む。
 - 13 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり、暗褐色土ブロック(～10cm)を含む。
 - 14 黒褐色(7.5YR3/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(～5cm)を含む。
- ★1-7: 壁穴。8: 井。9-10: 壁穴内土。11-14: 柱礎

第45図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(9)



SA7



第46図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期遺構実測図(10)

の方形プランであり、検出面からの深さは0.24mである。北東部分は現代の段々畑の土手落ち際ということもあって削平が進み、北東壁の立ち上がりが失われていたものの、東・西壁等で竪穴床面の隅をわずかながらも捉えられたため、平面図に示した位置でほぼ立ち上がるとみてよい。当初は調査計画範囲であった南西半のみを検出・掘削したが、遺構が北東方向に伸びることから、その後、北東半を掘削し、建物全体を検出した。土層は、2～6層が竪穴・土坑埋土、7層が柱穴埋土である。竪穴埋土のうち、5・6層は壁際に堆積する地山の流入土と考えられる。竪穴下部には広く4層があって、次いで2・3層が堆積する。1号土坑(SA7-SC1)も分層を試みたものの、同じ4層が堆積する。2層は径20～30cmから小砂利までの大小様々な転磨礫を大量かつ密に含む黒色土である。一見すると、礫層の横転か噴礫等が生じているのかと思わせるような人為的と思えない堆積状況であったが、後述のとおり縄文時代以降の遺物を若干含むものでもあって、何らかの人為的な行為により堆積したものと判断した。1層は、近世の1号道路状遺構(SG1)である。

竪穴の壁面はほぼ直角に立ち上がり、床面は地山面で水平に整えられ、貼床はない。1号土坑(SA7-SC1)は、竪穴中央東よりに、平面形が長軸1.17m、短軸1.11mの不整形円で、床面からの深さは約25cmである。サラダボウル状に掘り込まれ、埋土中から柳葉鐵(983)が出土した。柱穴は竪穴の軸線からやや振れた配置で2基(SA7-P1・P2)あり、平面規模の大小はあるものの、床面からの深さは40cm前後で揃っている。畑は未検出である。竪穴南半の床面にある小穴4基は精査した結果、いずれも柱穴ではなく樹痕の可能性が高い。

遺物のうち、床面直上から壺(438)・高坏(447)・器台(455)・鉢(458・459)・台石(892・893)・無茎鐵(984)が出土し、出土状況から、器台(455)と鉢(459)ならびに鉢(458)と台石(893)はそれぞれ隣接して並べ置かれた可能性が高い。また、床面からやや浮いた3・4層中から、甕・壺・高坏・器台・鉢(430～437・439～446・448～454・456・457・460・461)ならびに台石(891・894・895)・敷石(896)・軽石製品・打欠石錘、混入した縄文時代の土器・石器等が出土した。また、2層からは、転磨礫に混じって台石(891)、縄文時代の打製石斧(1121)・素刃石器(1089・1090)・二次加工剥片(1079)・石核(1100)・剥片が出土した。なお、1号土坑(SA7-SC1)埋土から土壌6.1kgを採取しフローテーションした結果、炭化材片が回収された(第七章参照)。

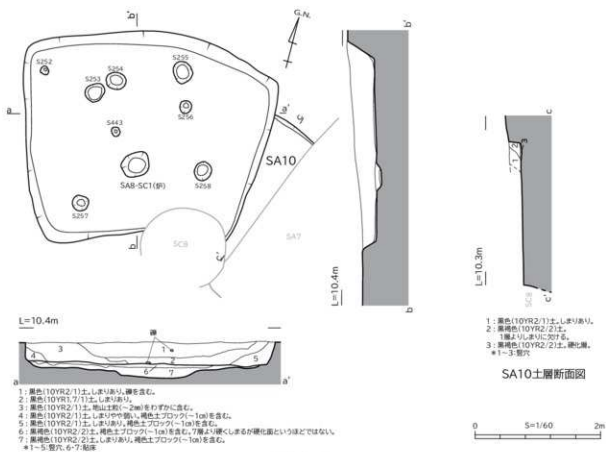
8号竪穴建物跡(SA8, 第47図)

C4Gr.表土直下のIV層面で検出された。平面形は長軸4.08m、短軸3.42mのやや不整形な方形プランであり、検出面からの深さは0.42mである。10号竪穴建物跡(SA10)を切って構築され、竪穴埋没後には、8号土坑(SC8)が旧竪穴南東隅に重複して掘り込まれる。

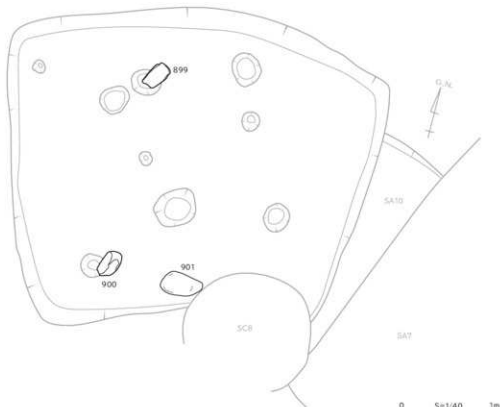
土層は、1～5層が竪穴埋土、6・7層が貼床である。竪穴埋土のうち、4・5層は壁際に堆積する褐色土の流入土で、1層と2・3層の違いはわずかなものでしかない。

竪穴の壁面は、75°前後でやや外開きに立ち上がる。竪穴中央付近は厚い貼床となっており、床面は水平に整えられる。竪穴中央やや南よりに炉(SA8-SC1)があり、焼土や炭化物粒等を検出した。平面図中の8基の小穴はいずれも床面あるいは貼床除去後の地山面において検出され、いずれも地山土がやや濁った程度の埋土でごく浅く、柱穴といえるものではない。貼床等の調査残しの凹凸を認識した可能性が高いが、念のため、そのまま図示した。

遺物のうち、台石(899～901)が床面直上出土であり、それ以外の甕・壺・高坏・ミニチュア土器(462～476)ならびに打欠石錘(897)・敷石(898)、混入した縄文時代の土器・石器等はすべて床面から浮いて(1～3層)出土した。なお、炉(SA8-SC1)埋土から土壌6.5kgを採取しフローテーションした結果、炭化材片・チャート



SA8・SA10



第47図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(11)

破片が回収された。このうち、炭化材について樹種同定・放射性炭素年代測定を実施し、クスノキ科と判明した(第Ⅶ章参照)。

9号竪穴建物跡(SA9, 第48図)

A4・B4Gr.のⅢ層上面で検出された。平面形は長軸3.96m、短軸3.66m以上の不整形な方形プランで、検出面からの深さは0.12mである。東側は縄文時代前期～晩期の2号竪穴状遺構(SJ2)を切って竪穴が構築され、竪穴南東隅は中世以降の8号溝状遺構(SE8)により失われている。

西壁のように直線的に延びる壁がある一方で、北西隅のような間仕切りあるいは張り出しのような箇所も確認できる。床面は水平で、部分的に貼床で整えられる。北壁よりに平面楕円形の浅い土坑1基(SA9-SC1)がある。このほか、小穴3基はいずれも浅く柱穴とは考えにくい。土層は、1～5層が竪穴埋土、6・7層が貼床である。竪穴埋土のうち、4・5層は壁際に局所的に堆積する壁沿いの流入土で、これとは別に3層のような不自然な地山土ブロックも堆積する。全体には黒色土(1層)が堆積する。遺物は大半が1層に含まれ、甕・壺・器台・鉢(477～492)の他、円鏝(902)・敲石(903)、混入した縄文時代の土器・石器等が出土した。また、赤色顔料(ベンガラと思われる)の小塊(最大で径2mm)が、南壁近くの1層中に散った状態で出土した。

10号竪穴建物跡(SA10, 第47図)

C4Gr.において7・8号竪穴建物跡(SA7・SA8)と切り合って検出され、当初は認識できていなかった遺構であるが、SA7・SA8の掘削をそれぞれ進めていく過程で、両遺構間に一段高く地山が現れる範囲があり、何らかの別遺構があるとはじめて認識された。

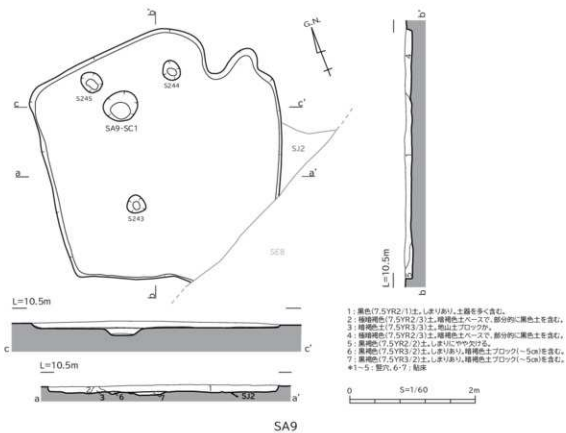
SA7・SA8・SC8が後に重複して深く掘り込まれたことで、北壁の幅約0.8m分と北壁から2.30mほどの延長で三角形の床面がわずかに残る。南壁側の立ち上がり部分が他遺構との重複で失われているが、これから復元すると1辺2.80m以下の遺構とわかる。柱穴等の構造物も未検出かつ遺物もないため不明瞭ながら、北壁の立ち上がりや北壁近くの床面に硬化面が認められたことから、竪穴建物跡として報告する。土層は、部分的な作図にとどまったものの、北壁沿いに入土土と考えられるしまりのない2層があって、全体は黒色土(1層)が堆積する。遺物は出土していない。

11号竪穴建物跡(SA11, 第49図)

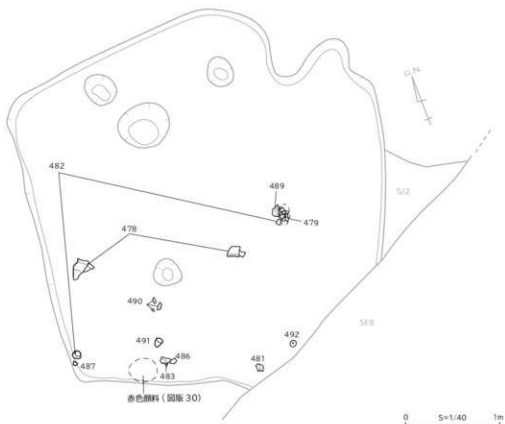
B4・B5・C4Gr.にまたがって検出された。平面形は長軸3.60m、短軸2.64mの方形プランで、検出面からの深さは0.21mである。北側に近接する3号竪穴建物跡(SA3)の間仕切り3にわずかに重複する。竪穴の東側半分弱が西側床面より一段高くなり、南壁の東側を除いて壁帯溝が巡る床面構造である。Ⅲ層面での検出ということもあって他の竪穴建物跡より削平が進んでおり、床面の高い部分では、検出時点で地山である床面が露出する箇所もあった。土層は、1～5層が竪穴埋土、6層が炉埋土である。5層が壁帯溝の一部に堆積し、3・4層は壁際の流入土で壁帯溝にまで堆積する箇所もある。竪穴西側の低い側のみ2層があり、全体に1層が堆積する。炉(SA11-SC1)は、焼土粒や炭化物の集中程度で認識されたごく浅いものである。炉埋土及び炉周辺の土壌2.8kgを採取しフローテーションの結果、炭化物片のみ回収された。

このほか、ごく浅い小穴2基が床面の低い側にあるが、柱穴ではないと考えられる。床面は、東側の高い側がアカホヤ火山灰層(Ⅲ層)で、低い側はⅢ層直下のやや砂利混じりで暗褐色土をした地山である。

遺物は全て床面から浮いた高さからの出土であり、このうち壺(506)は西壁沿いにおいて立位で出土した。台石(904)と甕(493)・壺(504)は折り重なって出土し、付近から出土した台石(905・909)とともに竪穴内に投棄されたと思われるような状態であった。このほか、甕・壺・高坏・鉢・ミニチュア土器(494～503・505・507

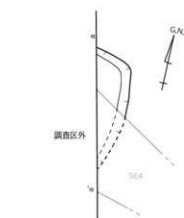


SA9



SA9遺物出土状況平面図

第48図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(12)

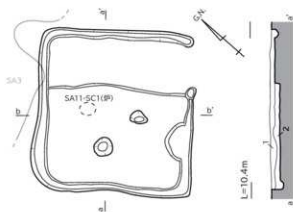


L=10.9m



- 1: 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり。
 - 2: 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、褐色土ブロック等をわずかに含む。
 - 3: 黒褐色(7.5YR3/1)土、しまりあり、褐色土ブロック物や火山土ブロックを多く含む。
- 1: 基本土層の1層に対応。
*1~2: 壁穴、3: 竈

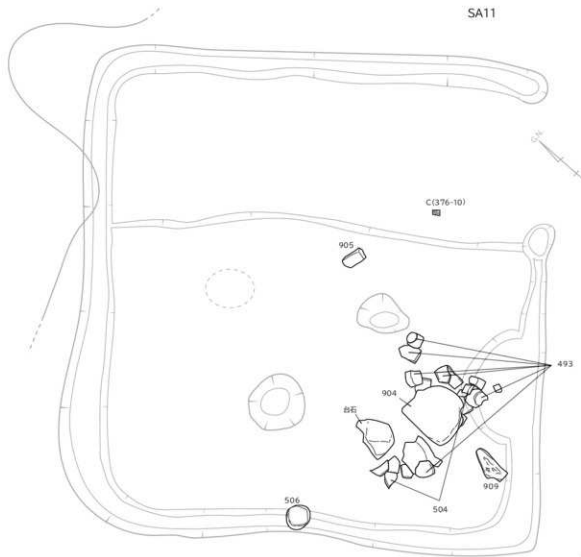
SA5



L=10.4m

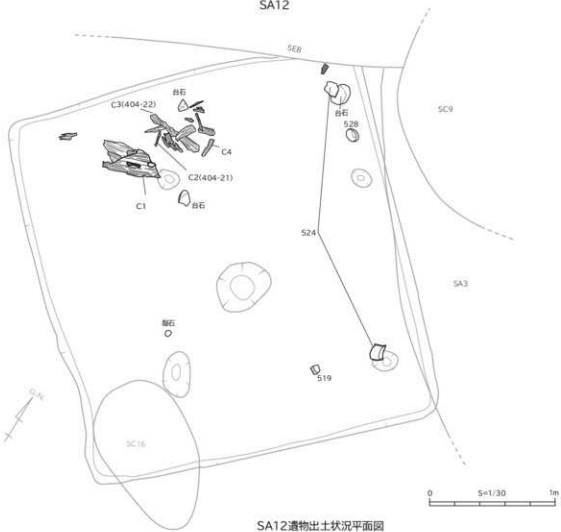
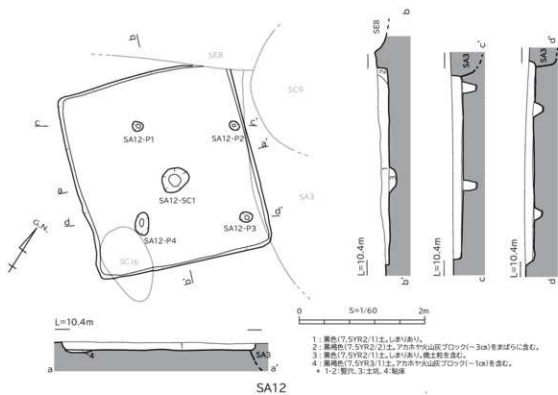
- 1: 黒色(7.5YR1/7)土、しまりあり。
 - 2: 黒色(7.5YR2/1)土、アカホヤ火山灰ブロックを多く含む。
 - 3: 黒色(7.5YR2/1)土、アカホヤ火山灰ブロックをわずかに含む。
 - 4: 黒色(7.5YR2/1)土、アカホヤ火山灰ブロックをわずかに含む。
 - 5: 黒色(7.5YR2/1)土、アカホヤ火山灰ブロックを多く含む。
 - 6: 黒色(7.5YR2/1)土、黄土砂を含む。
- *1~5: 壁穴、6: 竈

SA11

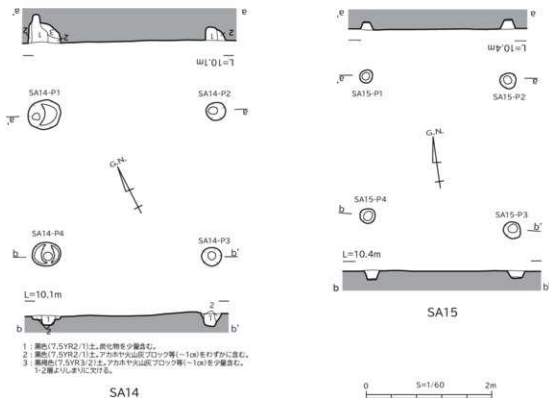
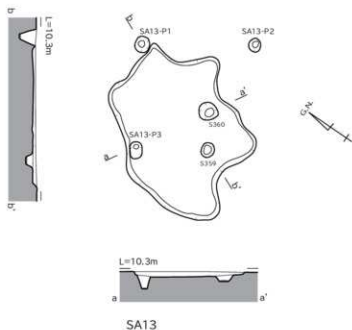


SA11遺物出土状況平面図

第49図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(13)



第50図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(14)



第51図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(15)

～518)ならびに台石(906～908)が出土した。また、炭化材(試料No.376-10)について樹種同定・放射性炭素年代測定を実施し、ガズミ属と判明した(第Ⅶ章参照)。

12号竪穴建物跡(SA12, 第50図)

B4Gr.で検出された。平面形は、長軸3.09m、短軸2.85mの方形プランを呈し、検出面からの深さは0.12mである。東側は3号竪穴建物跡(SA3)を切っており、北東隅は8号溝状遺構(SE8)に切られる。竪穴の西壁南側から南西隅付近は、ほぼ同時期の16号土坑(SC16)や縄文時代後期初頭までに収まる2号竪穴遺構(SJ2)を切っている。SA12の検出にあたって、北・南壁のラインは明瞭であったが、他遺構と重複のあった西壁・東壁のラインが不明瞭で、西壁側について北西隅の折り返しが見えた時点で土層確認トレンチを設置した。

土層は、1・2層が竪穴埋土、3層が炉埋土、4層が貼床である。2層は壁際の流入土である。柱穴は4基(SA12-P1～P4)あり、竪穴プランに対しやや軸のずれた柱穴配置となっている。柱穴3基は径約20cmと小さく、床面からの深さは約20～30cmである。残る1基は、径約35cm、深さ約15cmである。炉(SA12-SC1)は焼土粒を含み、埋土から6kgの土壌を採取しフローテーションした結果、炭化材・チャート碎片が回収された。

甕・壺・高坏・器台・ミニチュア土器(519～530)ならびに軽石製品(910・911)・敲石・台石の他、混入した縄文時代の土器・石器等は全て床面からやや浮いた高さから出土した。炭化材(サンプルはC1～C4で採取)は床面直上で検出され、C2・C4は小枝状のもので、C1・C3が柱材の一部と考えられる。炭化材(C2・C3)について樹種同定・放射性炭素年代測定を実施し、C2/試料No.404-21:モチノキ属・C3/試料No.404-22:クスノキと判明した(第Ⅶ章参照)。

13号竪穴建物跡(SA13, 第51図)

C4Gr.の表土直下(Ⅱ・Ⅲ層は削平)にあたるⅣ層面で検出された。当初、地山土ブロックを含む黒色土がアーメバ状に浅く、かつ床面が凹凸をもって広がっていたため、人為的な遺構かどうかも含めその性格付けに苦慮したものの、柱穴3基・小穴2基を認識できたことから、地山土ブロックを含む黒色土は竪穴建物跡に伴う貼床とみなした。柱穴は径18～24cm、検出面からの深さは約10～30cm、柱間距離は1.65～1.80mである。柱穴埋土は黒色土で、土師器片が出土した。

14号竪穴建物跡(SA14, 第51図)

C8・D8Gr.にまたがって検出された。竪穴等が失われ柱穴4基のみが残存するものであり、竪穴建物跡と積極的に評価した。柱穴は径30～48cm、検出面からの深さは、18～46cm、柱間距離は2.20～2.41mで、地山土ブロックを含むややしりに欠けた黒色土(2・3層)が柱穴壁際に堆積する。遺物は柱穴埋土中から土師器片が出土した。

15号竪穴建物跡(SA15, 第51図)

A3Gr.において、縄文時代早期包含層の掘削中に検出された。周辺はⅣ層下部まで攪乱が及んでおり、竪穴等が失われ柱穴4基のみが残存する竪穴建物跡と積極的に評価した。柱穴は径21～30cm、検出面からの深さは、12～18cm、柱間距離は2.26～2.64mである。埋土は黒色土で、出土遺物はない。なお、柱穴4基との関係は不明確ながら、柱穴4基の西寄りに重複して小穴4基も検出されている(第34図)。

(2) 掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡(SB2, 第52図)

B8・C8Gr.にまたがって検出された1間×2間の独立棟持柱建物であり、建物内に土坑を伴うもの、もしくは、土坑を囲む柱穴列とも考えられる。前者なら、桁行3.4m・梁行3.2mで、身舎面積は10.8m²で、主軸方向

N-74.5°-Wをとる。柱間寸法は、桁行北面3.1m・同南面3.4m、梁行西面3.0m・同東面3.3mである。柱穴は径22～44cmと大小があり、深さも16～32cmとばらつきがある。当初は土坑と柱穴群を別個のものとして捉えており、柱穴群に並びも見出していなかった。埋土はすべて黒色土である。土坑は二段掘りとなっており、平面形は長軸2.76m、短軸2.48mの楕円形であり、床面は検出面から0.8mの深さで、土坑西側のみ床面が約15cm掘り下がっている。土坑に重複する中世の2号溝状遺構(SE2)があり、当初、土坑と溝状遺構は一連の構造と見て、溝状遺構の軸に合わせて土層を確認することとなった。土坑埋土は黒色・黒褐色土であり(1～5層)、土坑床面の高い側のみ床面上に硬化層がみられた(6層)。土坑床面は、VI層中である。遺物は、おもに床面近くの2～4層から散漫に甕・壺・高坏・鉢(531～557)の他、混入した縄文時代の土器・石器等が出土した。また、埋土3層の下部から土壌2.5kgを採取しフローテーションした結果、炭化種実・炭化物片が回収された。このうち、炭化種実について自然科学分析を行い、イネ果実が同定された(第VII章参照)。

3号掘立柱建物跡(SB3, 第53図)

B5Gr.で検出された1間×2間の独立棟持柱建物である。桁行4.6m・梁行3.4mで、身舎面積は15.6m²、主軸方向N-88°-Wをとる。柱間寸法は、桁行2.10～2.24m、梁行3.20～3.32mである。柱穴は径20～64cm、深さは12～32cmである。棟柱はやや内向きで柱穴埋土は黒色土である。遺物は、P2から土師器片が出土した。

4号掘立柱建物跡(SB4, 第53図)

D9Gr.で検出された1間×2間の側柱建物である。アカホヤ火山灰層(Ⅲ層)上面の調査時に柱穴の1つを完掘し、近隣の小穴で遺物を伴うものもあったため精査しつつも建物跡と認定するには至っていない。その後、アカホヤ火山灰層下位のⅣ・V層掘削時に、6号溝状遺構(SE6)に重複していた柱穴等が見出され、それらと合わせて検討することで初めて建物跡と認識された。桁行3.5m(柱間寸法1.76, 1.92m)・梁行2.8m、身舎面積9.8m²、主軸方向N-34°-Eをとる。柱穴は径12～20cmと小さい。各柱穴ともその上部が大きく失われており、検出面からの深さは8～16cmである。柱穴埋土は、いずれも黒色土である。遺物はP3・P6から土師器片が出土した。

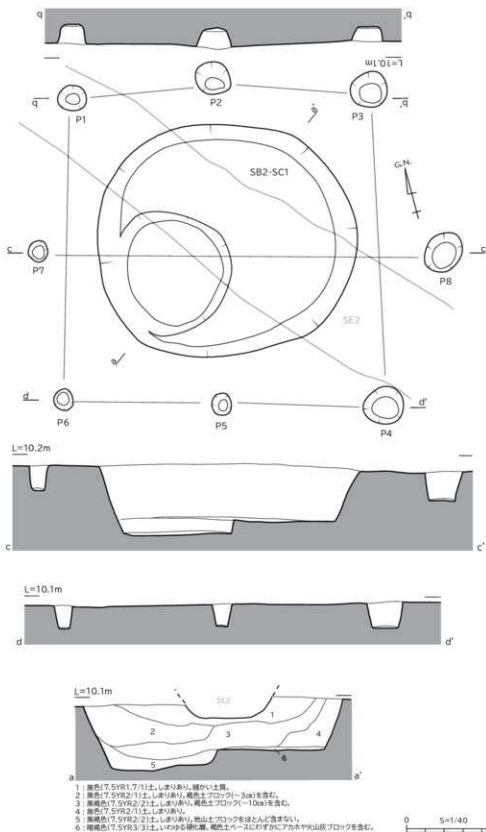
(3) 土坑

1号土坑(SC1, 第53図)

B7Gr.で検出された。平面形は長軸1.88m、短軸1.72mの円形で、検出面からの深さは0.36mである。底面はV層中できれい中央に向かって下がるように整えられ、壁面は80～85°でやや外開きに立ち上がる。埋土は地山土ブロック等を含む黒色土(1～8層)であり、壺(558)・鉢(559・560)・敲石(912)が出土した。

2号土坑(SC2, 第53図)

B6・B7Gr.に位置し、SC1の北側で検出された。平面形は長軸1.88m、短軸1.80mの円形で、II層除去後の検出面からの深さは0.84mである。ちょうど3号溝状遺構に近接する位置にあったため、作業の都合上で掘り残していた包含層(II層)から遺構埋土までを連続的に観察することができ、遺構がほぼ埋まりきった後に包含層が形成されている状況が把握された。底面はやや軟質のVI層中にある。底面の掘削面には凹凸があって、それを解消するために黒色土ブロックを含む黄褐色土(9層)で貼床がなされたと思われる。壁面は80～85°でやや外開きに立ち上がる。埋土は、地山土ブロックを多く含む黒色・黒褐色土(1～8層)で、埋土中から甕(561)・壺(562・563)・高坏(564)・凹石(913)・敲石(914)等が出土した。また、7層から土壌4.5kgを採取しフローテーションした結果、炭化物片が回収された。



第52図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(16)

3号土坑(SC3, 第54図)

A6・B6Gr.で検出された。平面形は長軸1.56m、短軸1.52mの円形で、検出面からの深さは0.90mである。底面は白色粘土層(XI層)上面まで下がり、その中央付近が不整形な掘削面となっていることを解消するために淡黄色土(淡黄ロームと黒色土の混ざったような土)で貼床(14層)がなされ、水平な底面としたと考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、黒色・黒褐色土(7~9・13層)と地山土ブロックの目立つ黒褐色土(6・10~12層)が交互に堆積し、次いで地山土粒を含む黒色・黒褐色土(2~5層)が堆積した後に、検出面付近のみややしまりに欠け細かい土質の黒色土(1層)となる。遺物のうち、床面のやや上に壺(577)が底部を上にして出土した。他、6~13層から甕・壺・高坏(565~576・578~596)ならびに敲石(915)・台石(916~918)が散漫に出土した。また、11・12層から土壌7kgを採取しフローテーションした結果、チャート碎片・炭化物片が回収された(第七章参照)。

4号土坑(SC4, 第54図)

B6Gr.で検出された。平面形は長軸1.32m、短軸1.08mの楕円形で、検出面からの深さは0.60mである。底面は褐色土上面で水平に揃えられ、壁面は85°とほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、褐色土ブロックを含む黒色土(2~7層)が堆積した後に、黒色土(1層)が堆積する。埋土中から、壺・高坏(597~600)が出土した。

5号土坑(SC5, 第54図)

A6Gr.に位置し、5号・6号竪穴建物跡の間で検出された。平面形は長軸1.28m、短軸1.10mの楕円形で、検出面からの深さは0.80mである。底面は白色粘土層(XI層)上面で水平に整えられ、壁面は75~80°前後で外開きに立ち上がる。埋土は、アカホヤ火山灰・褐色土・地山土ブロックを含む黒色・黒褐色土(1~15層)であり、このうち5層以下では最大で5cm大の地山土ブロックが目についた一方で、1~4層に地山土ブロックはわずかにしか含まれていない。埋土中から、壺(601・602)・高坏(603)・鉢(604・605)が出土した。

6号土坑(SC6, 第54図)

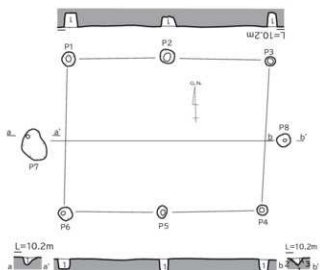
D5Gr.に位置し、4号竪穴建物跡の北側で検出された。平面形は長軸1.32m、短軸0.88mの楕円形で、検出面からの深さは0.40mである。底面は硬質の地山土(暗褐色土)で水平に揃えられ、壁面は75~80°前後で外開きに立ち上がる。埋土は、褐色土ブロックを含む黒色・黒褐色土(1~7層)であり、複合口縁壺(606)・器台(607)・鉢(608)・ミニチュア土器(609)が出土した。

7号土坑(SC7, 第54図)

D5Gr.に位置し、2号・7号竪穴建物跡の間で検出された。平面形は長軸1.08m、短軸1.00mの円形で、検出面からの深さは0.32mである。本土坑は、文化財課による調査開始前の試掘時点で、黒褐色土(IV層)面まで下げたところで検出されていた。その際、遺構の上部は包含層(II層)とともに掘削されている。底面は地山のVI層上面で水平に整えられ、壁面は65~80°前後でやや外開きに立ち上がる。埋土は、壁付近の堆積(4~7層)と中央付近の水平に近い堆積(1~3層)がある。埋土中層から鉢(610・611・613)・高坏(612)が出土した。

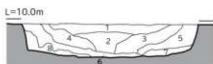
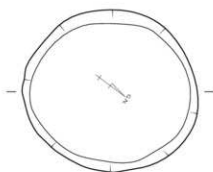
8号土坑(SC8, 第54図)

C4Gr.に位置し、8号・10号竪穴建物跡を切って構築され、7号竪穴建物跡の西隅にわずかに重複して掘り込まれる。平面形は長軸1.36m、短軸1.28mのやや歪な円形で、検出面(遺構西側)からの深さは、0.28mである。底面はVI層中で水平に整えられ、壁面は80°前後で外開きに立ち上がる。土層は、重複した8号竪穴住居跡の掘削との関係で、土坑底面から約30cm分のみの記録となっている。埋土は、わずかに地山土ブロックを含む黒色土(1~4層)となり、同層中からまばらに甕(614)・壺(615~617)・高坏(619)・鉢(618)・砥石(919)の



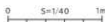
- 1: 黒色(7.5YR2/1)土、炭化物含む。
- 2: 黒褐色(7.5YR2/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(~1cm)を少量含む。
- 3: 黒褐色(7.5YR2/2)土。アカホヤ火山灰ブロック(~1cm)を少量含む。2層よりしまりにやや欠ける。

SB3



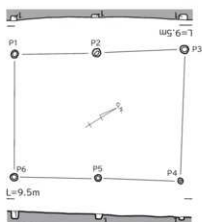
- 1: 黒色(10YR1/7)土。しまりあり。
- 2: 黒色(10YR2/1)土。黒褐色土ブロック(~5cm)を多く含む。
- 3: 黒色(10YR2/1)土。黒褐色土ブロック(~1cm)をまばらに含む。
- 4: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。
- 5: 黒色(10YR1/7)土。しまりあり。
- 6: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。
- 7: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。粘土土ブロック(~1cm)を含む。
- 8: 黒褐色(10YR2/2)土。しまりあり。

SC1



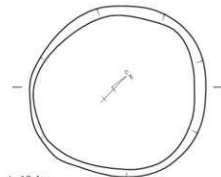
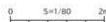
SC2土層注記

- 1: 黒色(10YR1/7)土。II層に濃い色合い。黒褐色土ブロック(~5cm)をまばらに含む。
- 2: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。粘土土ブロック(~5cm)を多く含む。
- 3: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。黒褐色土ブロック(~1cm)をまばらに含む。
- 4: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。黒褐色土ブロック(~10cm)を多く含む。
- 5: 黒褐色(10YR2/2)土。しまりあり。黒褐色土ブロック(~5cm)を多く含む。
- 6: 黒褐色(10YR2/2)土。しまりあり。黒褐色土ブロック(~5cm)をまばらに含む。
- 7: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。黒褐色土ブロック(~5cm)を多く含む。
- 8: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。黒褐色土ブロック(~5cm)をまばらに含む。
- 9: 黒褐色(10YR5/6)土。しまりあり。黒色土ブロックが混ざる。粘結的なもの。

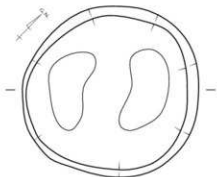


- 1: 黒色(7.5YR2/1)土。炭化物含む。

SB4

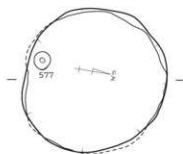


SC2

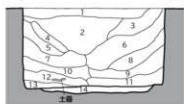


SC2-9層除去後

第53図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期遺構実測図(17)

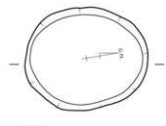


L=10.3m

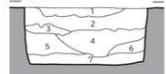


- SC3-14層除去後
- 1: 黒色(10YR1.7/1)土。しまりにやや欠ける。粘土層が薄い。
 - 2: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。また、2位の地山土ブロックを含む。
 - 3: 黒色(10YR2/1)土。2層が厚い。しまり強い。地山土粒(〜5cm)を含む。
 - 4: 黒褐色(10YR2/2)土。2層よりしまり強い。地山土粒(〜5cm)を含む。
 - 5: 黒色(10YR2/1)土。しまり強い。地山土粒(〜5cm)を含む。
 - 6: 黒褐色(10YR2/2)土。地山土ブロック(〜2cm)を含む。
 - 7: 黒色(10YR2/1)土。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
 - 8: 黒色(10YR2/1)土。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
 - 9: 黒褐色(10YR2/2)土。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
 - 10: 黒褐色(10YR2/2)土。しまりにやや欠ける。地山土ブロック(〜2cm)を含む。
 - 11: 黒褐色(10YR2/3)土。しまりあり。地山土ブロック(〜1cm)を含む。
 - 12: 黒褐色(10YR2/3)土。しまりあり。土層片を含む。
 - 13: 黒褐色(10YR2/3)土。しまりあり。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
 - 14: 深褐色(2.5YR/4)土。褐色ローム下部の深褐色ロームと黒色土が混在。

SC3

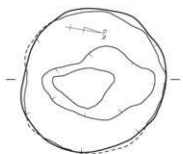


L=10.3m

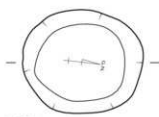


- 1: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。
- 2: 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜5cm)を含む。
- 3: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。地山土ブロックが少し含む。
- 4: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜5cm)を含む。
- 5: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜1cm)等を含む。
- 6: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜5cm)を含む。
- 7: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。アカホヤ火山灰-褐色土ブロック(〜5cm)を含む。

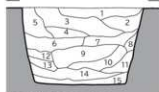
SC4



SC3-14層除去後

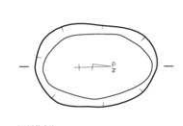


L=10.3m



- 1: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。アカホヤ火山灰ブロック(〜1cm)等を含む。
- 2: 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
- 3: 2層と地山土ブロックが混在しない。
- 4: 黒色(7.5YR2/1)土。しまりあり。地山土ブロック(〜2cm)を含む。
- 5: 黒色(7.5YR2/1)土。しまり強い。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
- 6: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。地山土ブロック(〜1cm)を含む。
- 7: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。アカホヤ火山灰ブロック(〜5cm)等を含む。
- 8: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。
- 9: 黒色(7.5YR1.7/1)土。しまりあり。アカホヤ火山灰ブロック(〜1cm)等を含む。
- 10: 黒色(7.5YR1.7/1)土。9層より地山土ブロックが多い。
- 11: 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜1cm)を多く含む。
- 12: 黒色(7.5YR2/1)土。しまり強い。地山土ブロック(〜5cm)を含む。
- 13: 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり。
- 14: 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜1cm)を1層より多く含む。
- 15: 黒褐色(7.5YR3/2)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜5cm)を多く含む。

SC5

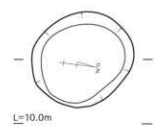


L=10.1m

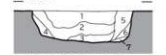


- 1: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。
- 2: 黒褐色(10YR3/1)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜1cm)を含む。
- 3: 黒褐色(10YR3/1)土。しまりあり。褐色土ブロック(〜5cm)を含む。
- 4: 黒褐色(10YR3/1)土。褐色土ブロックがアカホヤ火山灰ブロック(〜1cm)を含む。
- 5: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。褐色土を含む。
- 6: 黒色(10YR2/1)土。しまりあり。炭化物をわずかに含む。
- 7: 黒色(10YR1.7/1)土。しまり強い。地山土ブロックを含む。

SC6

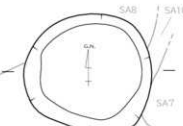


L=10.0m



- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)土。しまりあり。アカホヤ火山灰等の地山土ブロックを含む。
- 2: 黒褐色(7.5YR2/2)土。しまりあり。地山土ブロックをわずかに含む。
- 3: 黒褐色(7.5YR2/2)土。しまりあり。アカホヤ火山灰等の地山土ブロックを含む。
- 4: 黒褐色(7.5YR3/1)土。しまりあり。
- 5: 黒褐色(7.5YR3/1)土。しまりあり。
- 6: 黒褐色(7.5YR2/2)土。しまりあり。地山土ブロックをわずかに含む。
- 7: 暗褐色(7.5YR2/3)土。ローム等の地山土ブロックを多く含む。

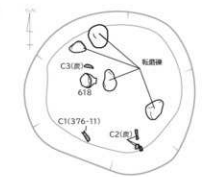
SC7



L=10.1m



- 1: 黒色(10YR2/1)土。土器のそばに地山土ブロックを含む。
- 2: 黒色(10YR1.7/1)土。土器-炭化物をわずかに地山土ブロックを含む。
- 3: 黒色(10YR2/1)土。1層よりしまりにやや欠ける。
- 4: 黒色(10YR2/1)土。地山土ブロック(〜1cm)を含む。

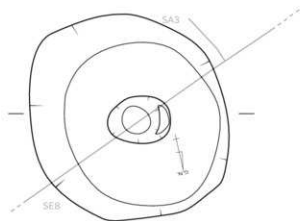


SC8遺物出土状況平面図

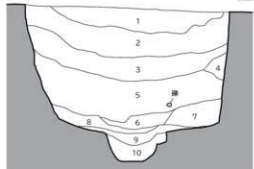
0 S=1/30 1m

SC8

第54図 C区弥生時代後期後半〜古墳時代前期遺構実測図(18)



L=10.4m

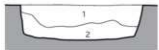


- 1 黒色(7.5YR2/2)土、しまりあり、褐色土球か焼土土ブロック(～2cm)や炭化物を多くまばらに含む。
- 2 黒褐色(7.5YR2/2)土、しまりあり、褐色土球か焼土土ブロック(～2cm)や炭化物をまばらに含む。
- 3 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、褐色土球か焼土土ブロック(～2cm)や炭化物をまばらに含む。2層とは色や中層。
- 4 黒色(7.5YR2/1)土、しまりやや弱い。焼土土ブロックを含まない。
- 5 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、焼土土ブロック(～5cm)や炭化物を多く含む。
- 6 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、焼土土ブロック(～5cm)や炭化物をまばらに含む。
- 7 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、焼土土ブロック(～5cm)や炭化物を多く含む。
- 8 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、7層と同様同じで、焼土土ブロック(～5cm)や炭化物を多く含む。
- 9 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、7-8層よりさらに多くの焼土土ブロックを含む。
- 10 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、白色粘土ブロック(～5cm)を多く含む。

SC9

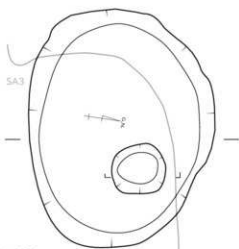
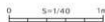


L=10.5m

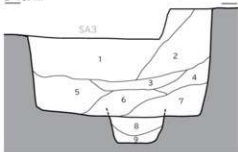


- 1 黒色(10YR2/1)土、2層よりしまり弱い、褐色土ブロック(～5cm)を含む。
- 2 黒褐色(10YR3/1)土、しまりあり、褐色土ブロック(～5cm)をまばらに含む。

SC11

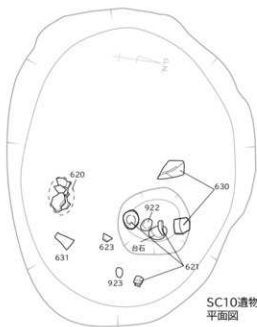


L=10.4m

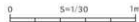


- 1 黒色(7.5YR2/1)土、褐色土ブロック(～5cm)を少量含む。
- 2 黒色(7.5YR2/1)土、焼土土ブロックをほとんど含まない。
- 3 黒色(7.5YR2/1)土、1層に近いが、褐色土ブロックはやや小ぶり。
- 4 黒色(7.5YR1.7/1)土、焼土土ブロックを少量含むのみ。
- 5 黒色(7.5YR2/1)土、褐色土ブロック(～5cm)を多く含む。
- 6 黒色(7.5YR1.7/1)土、褐色土ブロック(～5cm)を多く含む。
- 7 黒褐色(7.5YR2/2)土、褐色土ブロック(～10cm)を多く含む。
- 8 黒色(7.5YR2/1)土、白色粘土ブロック(～5cm)を少量含む。
- 9 黒色(7.5YR2/1)土、白色粘土ブロック(～5cm)を少量含む。

SC10



SC10遺物出土状況
平面図



第55図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(19)

ほか、一抱えもあるような転磨礫・炭化材(試料No.376-11)が出土した。炭化材はクスノキ科のものであり、放射性炭素年代測定も合わせて実施した(第七章参照)。

9号土坑(SC9, 第55図)

B4Gr.で検出された。3号竪穴建物跡を切って構築され、土坑埋没後には、中世の8号溝状遺構に切られる。3号竪穴建物跡と9号土坑との切り合い関係は、平面的には明瞭に検出できていなかったものの、3号竪穴建物跡の土層確認トレンチが9号土坑と重なったことにより検出に至り、土層観察により3号竪穴建物跡埋没後に9号土坑が掘り込まれたと判明した。平面形は長軸2.22m、短軸2.10mのやや歪な円形で、検出面から1.3m下がったおおよそ平坦な底面の中央に、さらに長径60cmの楕円形で長軸方向の一端に浅い段を持つ、深さ30cmほどの小穴が掘り込まれる。底面は白色粘土層(XI層)上面であり、底面中央の浅い穴は同粘土層中に掘り込まれている。壁面について、西壁側は85°とほぼ垂直な壁であるのに対し、東壁側の底面側は70°前後の外開きで立ち上がり、検出面付近で垂直に近い壁となる。埋土は、最大5cm大の地山土ブロックを多く含む黒色土(5~10層)が下部に堆積し、上部には相対的に小さい地山土ブロックをまばらに含む黒色・黒褐色土(1~3層)が堆積する。埋土中層の南壁沿いから鉢底部(316)・台石(920)・敲石(921)が出土した。このほか、SC9埋土中から出土した甕・壺・高坏・器台・鉢・ミニチュア土器については、SA3出土のものとの区別が困難だったため、土器実測図・土器観察表に関してはSA3出土土器とともに掲載した。なお、炭化物を多く含んだ5層下部から土壌4.1kgを採取しフローテーションにより炭化種実等を回収した。炭化種実について自然科学分析を行った結果、イネ果実・不明植物遺体が同定された(第七章参照)。

10号土坑(SC10, 第55図)

B4Gr.で検出され、土坑埋没後に3号竪穴建物跡に切られたため、遺構上部が削平されている。平面形は長軸2.52m、短軸1.98mのやや歪な楕円形を呈する。検出面から1.1m下がったおおよそ平坦な底面のやや東よりに、歪な円形で径60cm、深さ30cmの小穴が掘り込まれる。壁面は85°以上とほぼ垂直に立ち上がり、北壁のようにわずかにオーバーハングする壁面もあった。埋土は、最大5cm大の褐色土・白色粘土ブロックを含む黒色土(5・6・8・9層)や10cm大の褐色土ブロックを含む黒褐色土(7層)が下部に堆積し、上部には相対的に小さい地山土ブロックを少量含む黒色土等(1~4層)が堆積する。土坑東側の底面やや上位や底面中央の浅い掘り込みの中から甕(620・621)・壺(623)・高坏(630・631)・凹石(922)・敲石(923)が出土した。このほか甕・壺・高坏・器台(622・624~629・632)ならびに敲石(924)は埋土中から出土した。なお、6・7層下部から土壌4kgを採取しフローテーションした結果、炭化物のみ回収された(第七章参照)。

11号土坑(SC11, 第55図)

B4Gr.で検出され、3号竪穴建物跡の北側に隣接する。平面形は長軸1.32m、短軸1.22mのやや歪な円形で、検出面からの深さは0.36mである。底面はV層の硬質な地山で水平に整えられ、壁面は80~85°でやや外開きに立ち上がる。埋土は、褐色土ブロックを含む黒色土であり、上層の1層の方が褐色土ブロックを多く含んでいる。埋土中から、鉢(633)が出土した。

12号土坑(SC12, 第56図)

B4Gr.で検出され、11号土坑の東側に隣接する。平面形は長軸0.92m、短軸0.88mのやや歪な円形で、検出面からの深さは0.52mである。底面はV層の硬質な地山で水平に整えられ、壁面は85°以上とほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、褐色土ブロックを含む黒色土であり、下層の2層の方が褐色土ブロックを多く含んでいる。底面から浮いた状態ではあったが、2層中から甕(634・637)・高坏(640)が、それ以外の甕・壺・鉢(635・

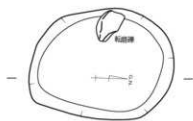


L=10.4m



- 1: 黒色(10YR2/1)土、褐色土ブロック(-5ca)を多く含む。
 2: 黒色(10YR2/1)土、しまりあり。
 3: 黒褐色(10YR2/2)土、しまりあり。

SC13



L=10.3m

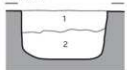


- 1: 黒色(7.5YR2/1)土、暗褐色土ブロック(-10ca)をわずかに含む。
 2: 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり。

SC14



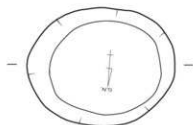
L=10.5m



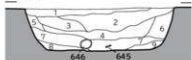
- 1: 黒色(10YR2/1)土、しまりあり、褐色土ブロック(-3ca)を含む。
 2: 黒色(10YR2/1)土、褐色土ブロック(-5ca)を主に15caX3、土器-漆を含む。

SC12

0 5=1/40 1m

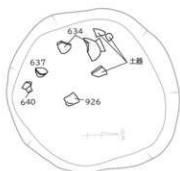


L=10.3m



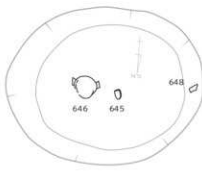
- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)土、褐色土ブロック(-2ca)を含む、しまりに欠ける。
 2: 暗褐色(7.5YR3/3)土、褐色土ブロックベースに黒褐色土ブロック(-2ca)をまばらに含む。
 3: 暗褐色(7.5YR2/3)土、2層より暗いが土質は近い。
 4: 暗褐色(7.5YR2/2)土、褐色土ブロック(-1ca)をまばらに含む。
 5: 黒褐色(7.5YR2/2)土、褐色土ブロック(-5ca)を多く含む。
 6: 暗褐色(7.5YR2/3)土、2層より暗いが土質は近い。
 7: 黒色(7.5YR2/1)土、しまりあり、土器の欠片を含む。
 8: 暗褐色(7.5YR3/3)土、褐色土ブロック(-5ca)を多く含む。
 9: 暗褐色(7.5YR3/3)土、褐色土ブロック(-5ca)を多く含む。

SC15



0 5=1/20 50cm

SC12遺物出土状況平面図



0 5=1/30 1m

SC15遺物出土状況平面図

第56図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期遺構実測図(20)

636・638・639・641)ならびに砥石(925)・凹石(926)は1層中から出土した。また、2層下部から土壌5kgを採取しフローテーションした結果、土器細片・炭化物が回収された(第七章参照)。

13号土坑(SC13, 第56図)

B4Gr.で検出された。3号竪穴建物跡の北東側に位置し、南側上部は8号・9号溝状遺構に切られる。平面形は長軸1.16m、短軸1.08mのやや歪な円形で、検出面からの深さは0.34mである。底面はV層の硬質な地山で水平に整えられ、底面と壁面の境はやや不明瞭である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、黒褐色土(3層)・黒色土(2層)・褐色土ブロックを含む黒色土(1層)の順に堆積する。底面から浮いた位置から、甕・高坏・ミニチュア土器(642～644)が出土した。

14号土坑(SC14, 第56図)

A2Gr.で検出され、15号土坑と隣接する。平面形は長軸1.56m、短軸1.20mのやや歪な楕円形で、検出面からの深さは0.56mである。底面はVI層あたりで水平に整えられ、壁面は70～80°で外開きに立ち上がる。埋土は、底面上に黒色土(2層)が流れ込んだ後に、暗褐色土ブロックをわずかに含む黒色土(1層)が堆積し、1層下部から甕・壺・転磨礫が出土した。また、2層下部から土壌40kgを採取しフローテーションした結果、炭化物のみ回収された(第七章参照)。

15号土坑(SC15, 第56図)

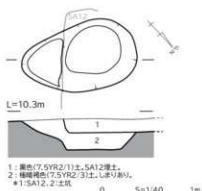
A2Gr.で検出され、14号土坑の北東側に隣接する。南壁は15号集石遺構を断ち割るように掘り込んでいる。平面形は長軸1.56m、短軸1.26mの楕円形で、検出面からの深さは0.44mである。底面はVI層あたりで水平に整えられ、壁面は60°前後で外開きに緩やかに立ち上がる。埋土は、褐色土ブロックを含む黒色土・極暗褐色土・暗褐色土(1～9層)である。土坑中央の底面直上から壺(645・646)が出土した他、壺(647)・高坏(648～650)・磨石(927)が埋土中から出土した。また、7層の底面付近から土壌13.8kgを採取しフローテーションした結果、未炭化種実・炭化物が回収された(第七章参照)。

16号土坑(SC16, 第57図)

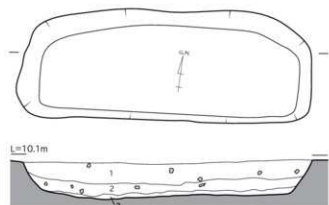
B4Gr.で検出され、12号竪穴建物跡に切られて北半の上部が削平されている。平面形は長軸1.20m、短軸0.74mのやや歪な楕円形であり、北側が一段下がる二段掘りとなっている。底面は上下段とも水平で、壁面は外開きに緩やかに立ち上がる。埋土は、地山土ブロックを含む極暗褐色土であり、周辺の遺構検出面との識別が非常に困難であり、12号竪穴建物跡の底面精査の過程で遺構北半を認識し、そのプランを精査していくなかで遺構南半を確認した。土坑北西隅側の検出面付近で台石状の平たい転磨礫が出土し、おおよそその下位で底面からやや浮いた位置で、別個体となる高坏の坏部・脚部(651・652)が出土した。なお、半裁時に、遺構南東側を地山であるIV層まで誤って掘り込んでしまっている。

17号土坑(SC17, 第57図)

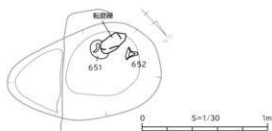
A3・B3Gr.に位置し、9号竪穴建物跡の北側で検出された。平面形は長軸3.16m、短軸1.24mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.44mである。底面は水平に整えられ、壁面は60°前後で外に開き、緩やかに立ち上がる。埋土は、褐色土ブロックを少し含む黒褐色土・暗褐色土(1～3層)であり、このうち3層については褐色の地山土にわずかに暗褐色土等が混じり込むというもので、土坑底面が露出していた当時における霜や植物根等による攪拌によるものと考えられる。1・2層から甕(653)・敲石(928)が出土した他、縄文時代早期の散礫群を掘り抜いていたことの影響もあり、大量の赤化礫が含まれていた。なお、北壁沿いの1層下部から土壌1.1kgを採取しフローテーションした結果、炭化物のみ回収された(第七章参照)。



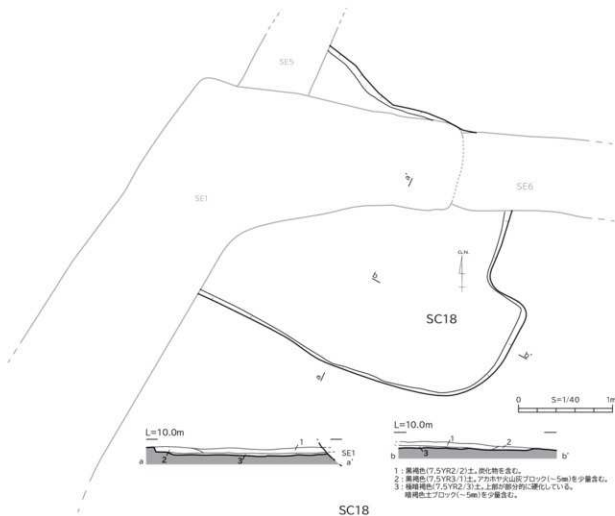
SC16



SC17



SC16遺物出土状況平面図



SC18

第57図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期遺構実測図(21)

18号土坑(SC18, 第57図)

C9Gr.で検出され、広い平面形からは竪穴建物跡である可能性も検討したが、柱穴等がなく、壁の立ち上がりも緩やかであることから、上部が削平されて下部のみが残存する(検出面からの深さは8cm)土坑として報告する。遺構の中央付近ならびに西壁を1・5・6号溝状遺構から切られる。南北壁はほぼ平行し、両壁間の距離は2.80mとなる。東南隅は張り出し状となっている。底面には厚み2cmほどの貼床と思われるものがあり(3層)、その上面は水平で硬化する。壁面は緩やかに立ち上がり、その壁際にアカホヤ火山灰ブロック等を含む黒褐色土(2層)が堆積した後に、中央付近に黒褐色土(1層)が堆積する。埋土中から遺物の出土はない。

(4) 土器集中

Ⅱ層について5m四方の小グリッドでもって掘り下げ、随時、遺構検出を進めていったが、その過程で、掌大の土器片等が他よりも視覚的に密集して出土する箇所がいくつか見出された。精査の結果、竪穴建物の埋土上部における土器片の集中と判明した箇所もあったが、最終的に竪穴系の遺構プランをつかめない、あるいは掘立柱建物跡等の遺構との重複関係のない、土器集中のみが掘り残される3か所があった。これについて、土器が集中する範囲(以下「土器集中」として、記録写真を撮影後、遺物を取り上げた。

土器集中1(第34・35図, 写真図版37)

C6Gr.に位置し、径約2.5mの範囲で検出された。大型の壺(670)の他、甕・壺・鉢・高坏・器台(654～669・671～680)ならびに打欠石錘(959)・台石・剥片が出土した。

土器集中2(第34・35図, 写真図版37)

C7Gr.位置し、土器集中1の南側で検出された。土器集中1よりも小規模な径約1mの範囲で検出され、甕・壺・高坏(681～684)が出土した。

土器集中3(第34・35図)

D6Gr.杭周辺で検出されたもので、土器集中の中では最も小規模である。高坏・鉢(685～688)ならびに打欠石錘・磨石・台石が出土した。

(5) 小穴(第34・35図)

Ⅲ～Ⅳ層面において径15～25cmの小穴が多く検出され、特に、C区中央付近で群をなしていたことから、整列状況や遺構規模等を精査したが、建物の復元等には至らなかった。小穴の多くは遺物を伴わないものの、埋土は弥生時代後期後半～古墳時代前期までの遺構とよく似ていることから、当該期のものとして報告する。小穴の遺物を含んだもののうち、A5Gr.のSH2出土壺(689)、D7Gr.のSH3出土壺(690)、B4Gr.のSH4出土甕・高坏(691・692)を図化掲載した。

3 遺物

遺物には、竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・土器集中・小穴等の当該期の遺構ならびに包含層出土の土器・石器・鉄器、後世の溝状遺構等出土の土器・石器がある。以下では、当該期の遺構出土品を中心に、土器・石器・鉄器の順で報告する。

(1) 遺構出土土器(第58～76図)

SA1出土土器(116～149, 第58・59図)

116～121は中型の甕であり、口縁部が緩やかに開くもの(116・118)、ラップ状に大きく開くもの(117・119・120)がある。119は口縁部外面に縦方向の線刻が数条ある。120は、球状の胴部に左上がりカキアケ状

のハケメを施す。底部は、粘土紐付加もしくはつまみ出しにより平底に整形する。121は、小型甕の底部片である。つまみ出しにより上げ底に整形し、外面はユビオサエを施す。122～139は壺である。122は、頸部が緩やかに屈曲し、胴部には棒状工具による刺突痕がある。123は、球状の胴部をもち、肩部内面にはユビオサエの痕跡が密に残る。124～128は複合口縁壺であり、口縁部が「く」字状に屈曲し、多くは口縁部外面に櫛描波状文を施す。129～130は偏球状の胴部に外に開く口縁部を有する広口壺である。131は肩部の外面に矢印状の3本の線刻を施す。132～139は壺の底部片または底部付近の破片である。底部形態は平底(135・137)、尖底気味の平底(132)、不安定な平底(134)、丸底気味の平底(133・136)のものがある。133は、外面に短い線刻がある。134はB系統の影響を受けたつくりになっている。138は、タタキを施した後にケズリ状のナデを施す。139はSA1出土壺の中では器壁が最も厚く、大型の壺と考えられる。内面には強い工具痕が残る。140～143は高坏である。140は脚部片で、摩耗が激しい。布留系と考えられる。141～143は裾部である。スカート状に広がるもの(141)、底部に向けて大きく広がり穿孔が施されるもの(142)、丁寧なナデが施され、内面に煤が付着するもの(143)がある。144～148は鉢である。144は頸部に粘土紐付加による突帯を施す。底部形態は、丸底(145)、粘土紐付加による上げ底(147)、つまみ出しによる上げ底(148)のものがある。149はミニチュア土器の口縁部～頸部である。口縁部が明瞭に屈曲し、ハケメを施した後にナデ消している。

SA2出土土器(150～241,第59～62図)

150～152・154・159は甕の口縁部～胴部であり、胴部は砲弾形を呈する。口縁部形態は、外に緩やかに開くもの(150)、ラップ状に開くもの(151)、「く」字状に屈曲するもの(152・159)がある。外面は縦・斜方向、内面は斜め・横方向のナデもしくはハケメ調整を施す。153・155～158・160は胴部～底部である。底部形態には、粘土紐付加あるいはつまみ出しで平底(153・155)あるいは上げ底(156～158・160)のものがある。152・153は同一個体である。156は強いユビオサエが施される。160は、B系統のつくりである。161～170・183・184・229は、小型広口壺の口縁部～胴・底部であり、球状(161～163・165・167)のものや偏球状(164・166・168・183)のものがある。161は、肩部に細筋のハケメが施される。162・163は底部内面が粘土の充填によって肥厚する。164は、ナデ調整により平底を呈する。166は底部外面にケズリ状のナデを施す。167・168は底部整形のための強いナデが施され、168には胴部内面に鉄の付着がある。183はSA2-SC3から出土した短頸壺であり、頸部と肩部の境に頸部形成のための工具ナデがある。170はSA2-P3から出土した直口壺である。頸部に粘土紐接合の段差を明瞭に残し、口縁部～肩部をユビオサエにより整形する。171～178は複合口縁壺で、175以外は口縁部外面に櫛描波状文を施す。171は完形品で、頸部が直立気味に立ち上がり、頸部上部では、緩やかに外反する。口縁部は、「く」字状に強く屈曲し、ユビオサエ痕を明瞭に残す。胴部外面には、多方向工具ナデを施し、底部は平底気味の丸底を呈する。172は、口唇部に丁寧な横ナデがある。頸部には縦方向のハケメを施し、内面にススの付着がある。176は、口縁部が下に拡張する。179・180には、2mm幅の線刻が、181・182には外面にモミ痕と思われる圧痕がある。185・190～192は口縁部がラップ状に開く広口壺であり、191のみ口縁端部がやや内湾する。190は布留系の壺で、口縁部には丹塗りとみられる着色があり、さらに胴部の別破片に外側から内側への打ち欠きが施される。186～188は長頸壺の頸部または胴部である。193は、布留系の直口壺である。器壁が薄く、かなり精巧に作られている。北部九州からの搬入品と思われる。203～214は高坏である。203～206は坏部である。205は、ミガキが暗文化している。207～209は脚部で、209は透かし孔を有する。210～214は裾部で、外面調整にミガキを施すもの(210・212・214)とナデを施すもの(211・213)がある。215～217は器台である。215は、口縁部が上に拡張する複合口

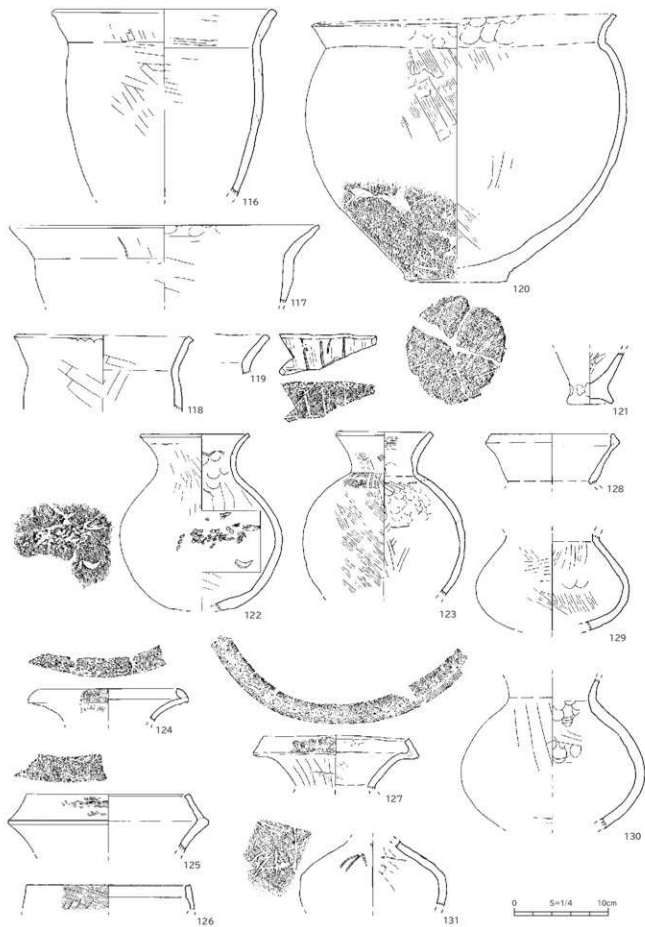
縁で、櫛描波状文を施す。透かし孔が脚部上部・下部にそれぞれ4か所みられ、脚部内面にはモミ痕も認められる。218～228・230～237は鉢である。221は、口縁部が外側に屈曲し、ヘラミガキにより明瞭な稜を作る。底部はナデにより径3.6cmの平底を形成する。周辺遺跡である前原北遺跡のSC38出土遺物と類似する。222は口縁部の平面が長径11.05cm、短径9.0cmの楕円形を呈す。230は、胴部に粘土紐付加による突帯を巡らせ、口唇部はつまみ出しにより、外側に拡張する。233の内面はハケメの後ヘラミガキ、外面は横方向の後、縦方向のハケメを施す。底部はユビオサエにより脚状に整形され、平底を呈する。237は、胴部外面に縦方向のヘラミガキを施す。底部には3mm幅の貫通孔の痕跡がある。239は、ミニチュアの手捏ね鉢で、ユビオサエにより整形し、全体的に形が歪である。241は円盤状を呈す土器片で、外縁を打欠き、円形に整形する。

SA3・SC9出土土器(242～331, 第62～64図)

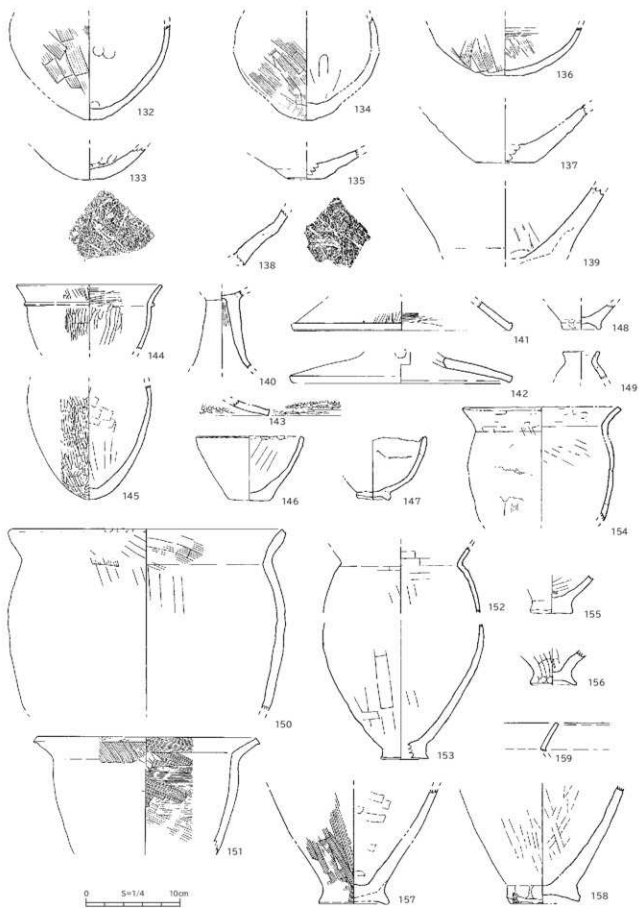
SA3もしくは、SA3と切り合い関係にあるSC9埋土中から出土したものである。両者には一定の接合関係が見出されたため、ここでまとめて報告する。242～255は甕である。242は、器高がやや低めの中型甕である。口縁部は緩やかな「S」字状を呈し、胴部外面は斜方向のハケメが施される。SC11出土破片と接合する。246は、口縁部が緩やかに外反し、外面下部の横ナデにより、弱い稜を形成する。245・247は頸部内面に明瞭な稜を有する。249～254は底部で上げ底となる。253は、胴部が直線的に大きく開く。255は、小型甕の胴部片で、外来系の模倣土器である。256～283は壺である。257は頸部が「S」字状に屈曲し、胴部は倒卵形となる。タタキにて大方成形した後、工具痕をナデ消している。258は、口縁部がラッパ状に開く小型壺で、底部は丸底気味の平底となる。260～267・273～278は壺の口縁部であり、ラッパ状に開くもの(260・261・263・265・267)、直口するもの(262)、口縁端部がわずかに内湾するもの(264)、口唇部が外側に拡張するもの(265)・上下に拡張するもの(266)、複合口縁になるもの(273～278)がある。273は、口縁部に2か所、対称するように貫通孔がある。268～272は肩～胴部片で、269は、接合面に長径7mmのモミ圧痕がある。279～283は底部または底部付近である。底部の形状がわずかに突出し平底のもの(279)、上げ底のもの(280)、レンズ状の平底(281)のものがある。284～291・294～300は高坏である。285は在来の小型高坏で、286は脚部に透かし孔が3か所認められ、別に透かし孔を開けようとした痕跡が見られる。301～307は器台である。口縁端部を上下に拡張して櫛描波状文を施すもの(301)や櫛状工具による連続刺突文(302～306)の文様帯を有する。308～322は鉢である。309は、口縁部が緩やかに外反し、B系統の模倣土器である。310は口縁部内面に明瞭な稜を有し、丸底を呈する。321は底部片で、内面全体に黒色付着物がみられ、同様の黒色付着物が残る土器片は本遺跡で他にない。黒色付着物の範囲が内面器壁に限定されることやその見た目から漆の可能性を想定し、自然科学分析(FT-IR分析)を実施した結果、漆と確定するに十分な根拠付けられるデータは得られなかった。ただし、劣化した漆または、他の有機物である可能性は残る(第七章参照)。322は、口縁部外面に櫛描波状文が2段に施される。323・325は小型壺で325は外面にハケメ後ミガキが施される。324・326～331はミニチュア土器である。326は小型脚付鉢で外面はハケメ後丁寧なナデを施す。330は、底部に2mm幅の貫通孔を有する。

SA4出土土器(332～372, 第65図)

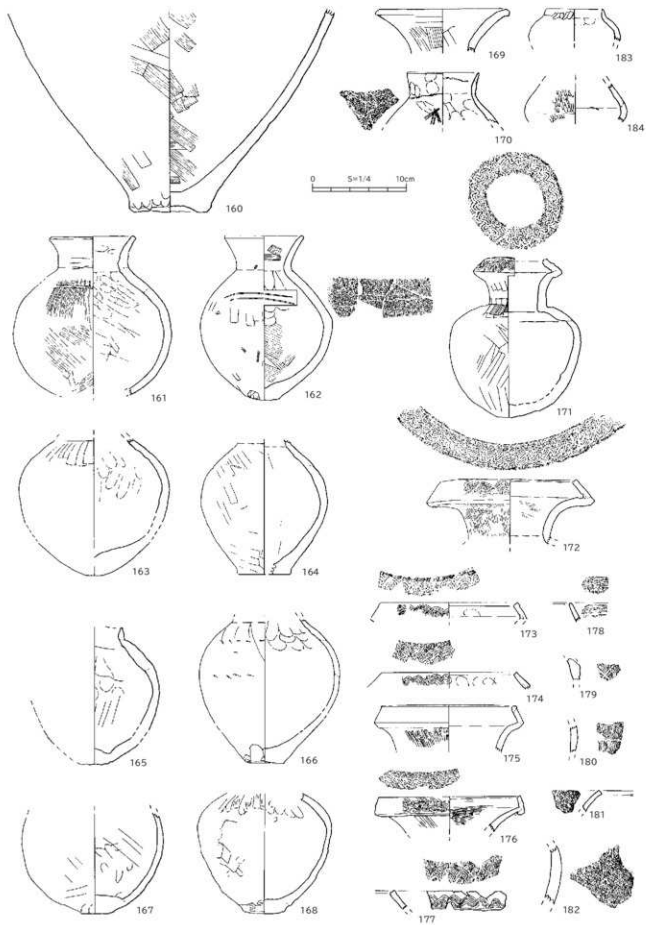
332～334は甕である。333は、口縁部が外側に屈曲する形状や胎土の様相から外来系の模倣土器と思われる。335～353は壺である。336は、倒卵形を呈し、内外面に工具痕が明瞭に残る。339～344は長頸壺で底部は平底気味の丸底になると考えられる。342は底部で、外面に放射状に広がる線状の圧痕がある。内部のつくりは粘土充填式である。345～350は複合口縁となり、345のみ口縁部が直立し、櫛描波状文が施され



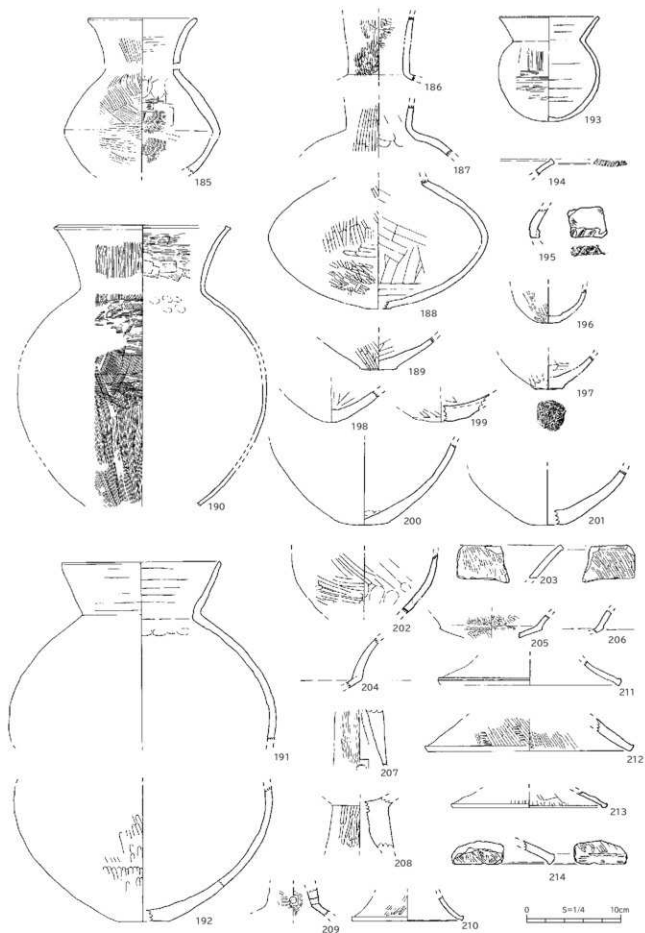
第58图 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測图(1)



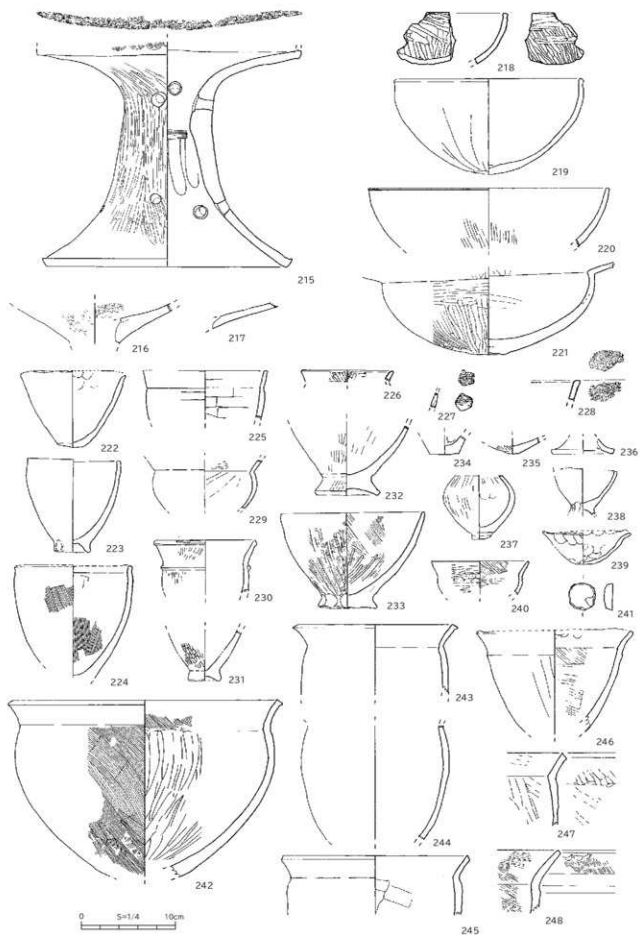
第59图 C区弥生时代后期後半～古墳时代前期土器実測图(2)



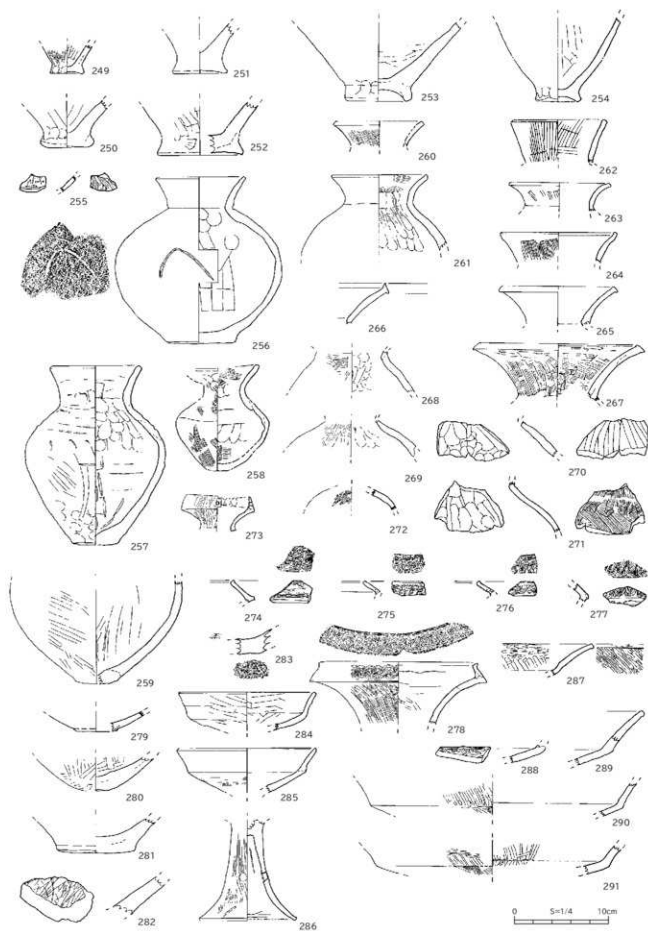
第60图 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(3)



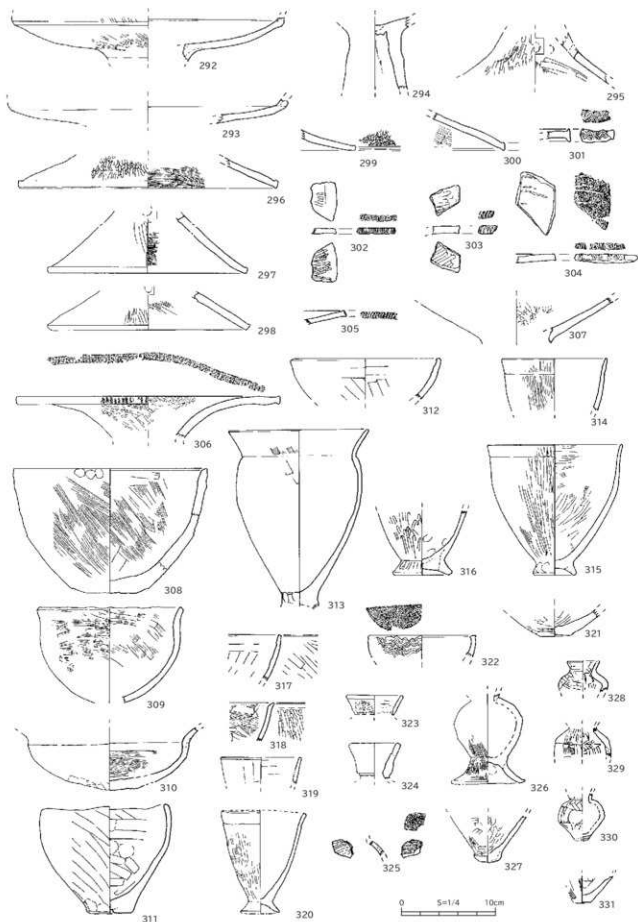
第61図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(4)



第62図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(5)



第63図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(6)



第64图 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測図(7)

ない。354・355は高坏で、355には透かし孔がある。356～359・370は器台であり、357は口唇部に櫛状工具による連続刺突文を施す。370は少なくとも3か所の透かし孔がある。360～367は、鉢である。360は縦方向のミガキを主体とする。368・369・371・372はミニチュア土器である。369は、ナデの後、ヘラ状工具にてミガキを施し、器面を丁寧に仕上げている。

SA5出土土器(373,第65図)

373は壺の口縁部で、外側に開く。

SA6出土土器(374～429,第66・67図)

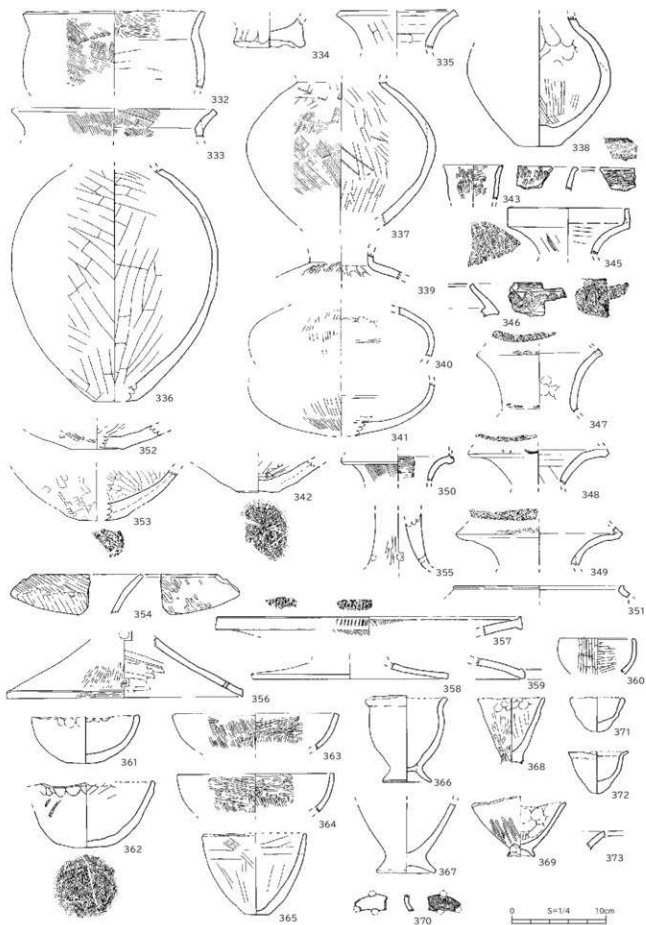
374・375・377～379は甕で、口縁部形態は、緩やかに外反するもの(374)、ラッパ状に開くもの(375・377)がある。374はほぼ完形の個体で、外面には多量の煤が、内面には少量の炭化物付着がある。底部は、粘土紐付加によると思われる平底を呈する。380～402は壺で、広口(380～385・387・388)、長頸(386)、複合口縁で外面に櫛描波状文を施すもの(391～395)がある。380はB系統で、胴部の外面下半に工具痕が多く残る。胴部中位には浮文が1か所みられる。386は、口縁部が楕円形になる。392は、内面下部の一部に赤みを帯びる。393は他に比べ拡張部が直立気味に立ち上がり、接合方法も異なる。396～399は底部で、底部形態は平底(396・397・399)と丸底(398)があり、396には外底面に線刻がある。403・404・406～409は高坏で、坏(403・404・406)はミガキを施し丁寧に仕上げ、407は脚に透かし孔を有する。376・410～427は鉢である。口縁部は緩やかに外反するもの、底部は粘土紐付加またはつまみ出しによる上げ底のものが主体となる。410は接合によりほぼ完形に復元された浅鉢で、内面には口縁部と胴部の境に棒状工具による横方向の凹線を施し、外面にも凸線として影響を与える。底部はレンズ状平底を呈し、外底面の縁はツマミによりわずかに拡張する。412は、ユビオサエにより、口縁部を緩やかに外反させる。413は頸部を持たない寸胴の鉢である。420は、口縁部が外方に長く伸び、外面に縦方向のミガキを施した後、斜方向の9本の線刻がある。そのうち2本は、上向き矢印のように施文される。422は、底部片で、くびれ部に粘土紐貼付けまたはつまみ出しによる三角突帯を巡らす。424は裾端部に櫛状工具による縦方向の連続刺突文を施す。426はジョッキ型鉢の底部で、安定した平底を呈する。428・429はミニチュア土器で、428は底部に貫通孔がある。

SA7出土土器(430～461,第67・68図)

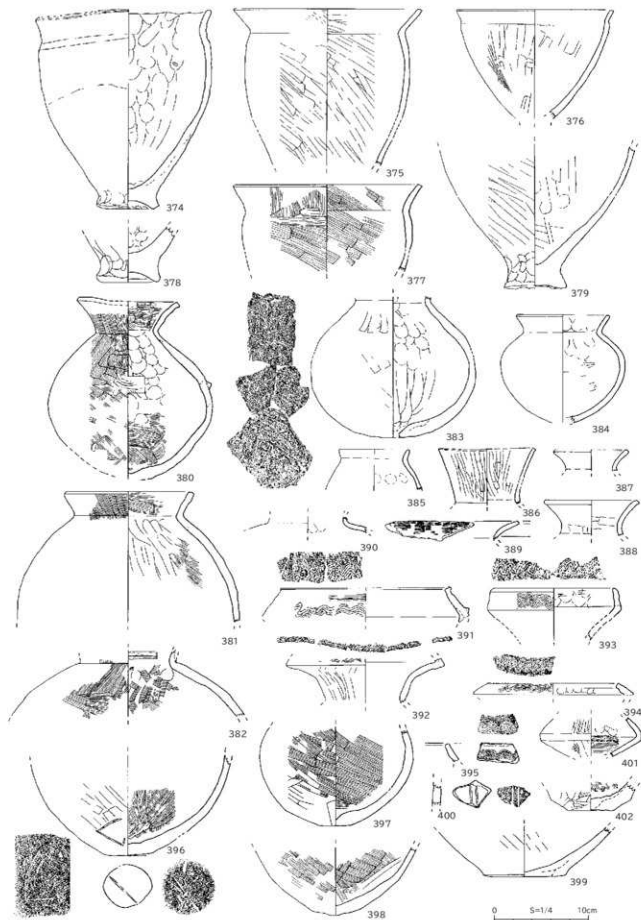
430～434は甕である。430は口縁部で、緩やかに屈曲し、口唇部が外側にやや拡張する。433は球形を呈し、外面は多方向の細かなハケメ、434は胎土に金雲母を含み、外面は細かなハケメ、内面はケズリが施される。435～445は壺である。436は尖底気味の丸底を呈し、内外面ともにハケメを施し、肩部内面は指ナデ痕がある。また、外面には浅い右下がりの線刻状のものがある。439は、口縁端部が上方に延びる。440は複合口縁で櫛描波状文が、443には胴部中位に帯状の浮文、下半に横方向の線刻が施される。446～449は高坏である。447は、坏部との接合部に周囲を打ち欠いたような痕跡が認められ、449は、裾端部が凹線状となる。450～457は器台である。455はほぼ完形で、鼓状の器形を呈する。柱部下位に4か所の透かし孔がある。456・457は筒状の柱部を持つ。458～461は鉢である。458はアタの可能性も考えられる。459は、内面下部にケズリ状の強い工具痕がみられ、胴部外面には右下がりのタタキあるいはハケメが施される。口縁部は「く」字状に外側に屈曲する。460は、胴部片で、粘土紐貼付による突帯がある。

SA8出土土器(462～476,第68・69図)

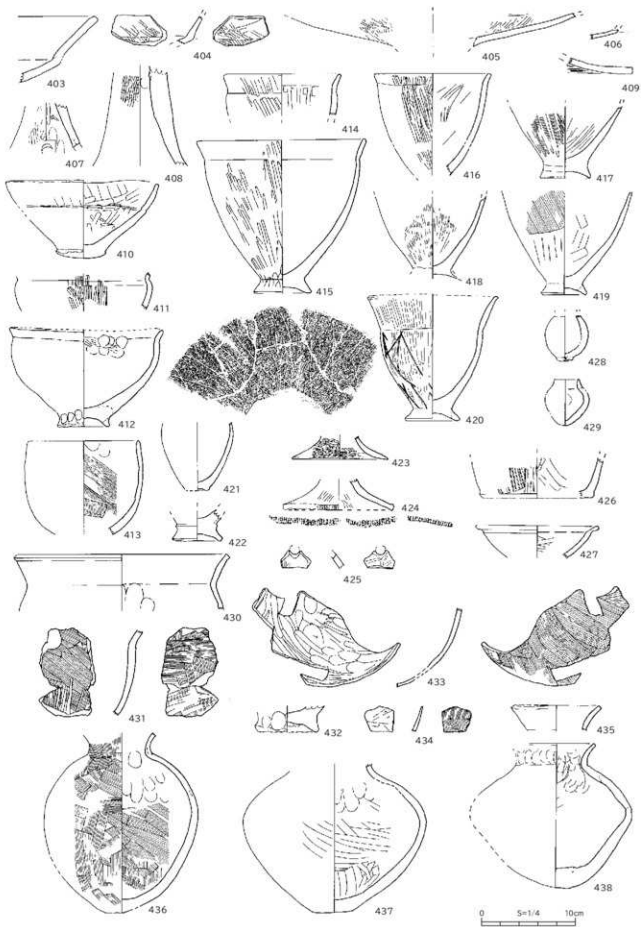
462～467は甕で、口縁部が緩やかに外側に屈曲する。462は、口縁部～肩部にかけて連続した縦方向のハケメが明瞭に残る。463・465は同一個体の可能性がある。467は、布留系の甕である。468～470は壺



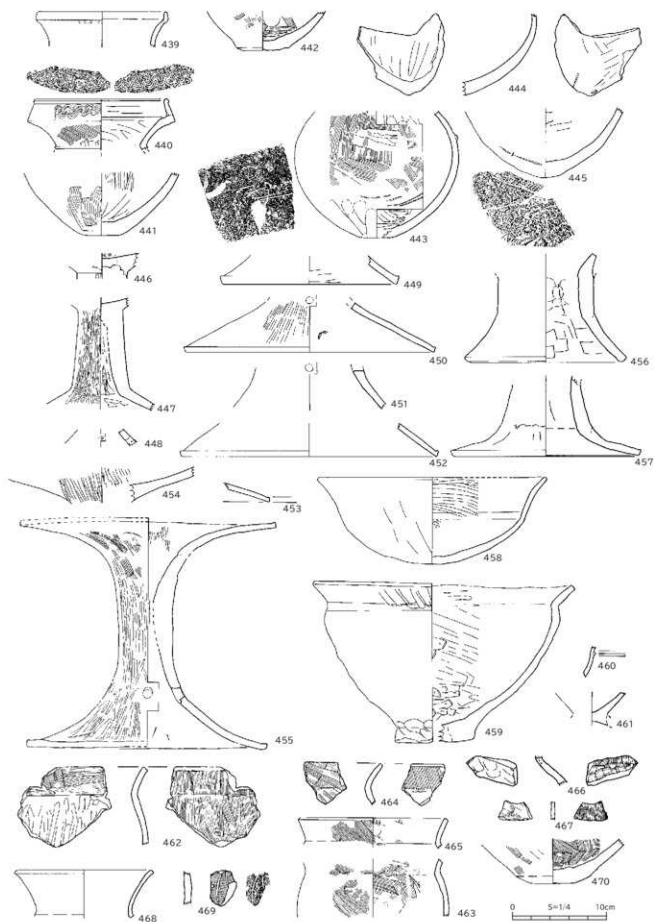
第65図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(8)



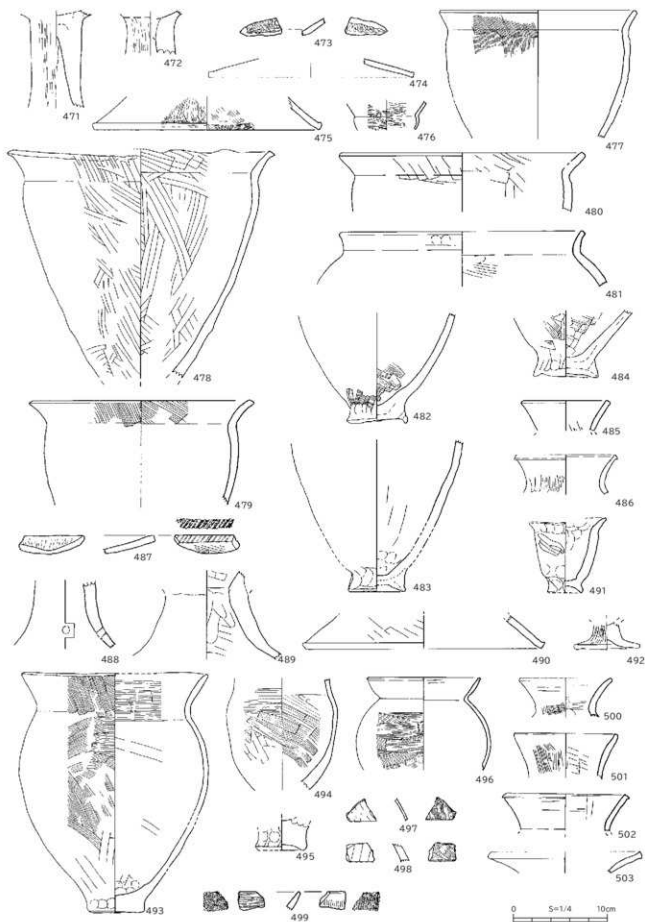
第66図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(9)



第67図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(10)



第68図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(11)



第69図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測図(12)

である。469は胴部片で、斜方向のハケメの後、2本の線刻がある。470は底部で、粘土充填により厚みのある平底を呈する。476は、小型丸底壺で、口縁部がわずかに内湾する。471～475は高坏である。471は脚部で、内面に坏部との接合後、さらに粘土を充填したと考えられる接合面が観察できる。474・475は裾部で、外面にヘラ状工具によるミガキを施し、端部は上に拡張する。

SA9出土土器(477～492,第69図)

477～484は甕である。口縁部形態には、ラッパ状に外側に開くもの(477～480)、直立気味に立ち上がるもの(481)がある。外面調整はナデ・ハケメが主流となる。477・483は同一個体の可能性がある。478は、胴部外面の随所にタタキ痕がみられ、口縁部は歪な作りとなっている。形状や技法から、近畿系統の土器の模倣品の可能性が高い。482～484は底部で、胴部との接合箇所は強めのユビオサエを巡らし、外底面はつまみ出しにて粗雑に拡張する。484は内面全体に炭化物が付着しており、外面にはモミ圧痕がある。485・486は壺の口縁部である。486は緩やかに内カーブしながら外側に開き、口唇部は外側にわずかに拡張する。487～490は器台である。487は口唇部に斜方向の刻みを施す。491・492は小型の鉢である。491は手捏ねで、口縁部や底部内外面に強いユビオサエが残る。底部の作りも粗雑である。

SA11出土土器(493～518,第69・70図)

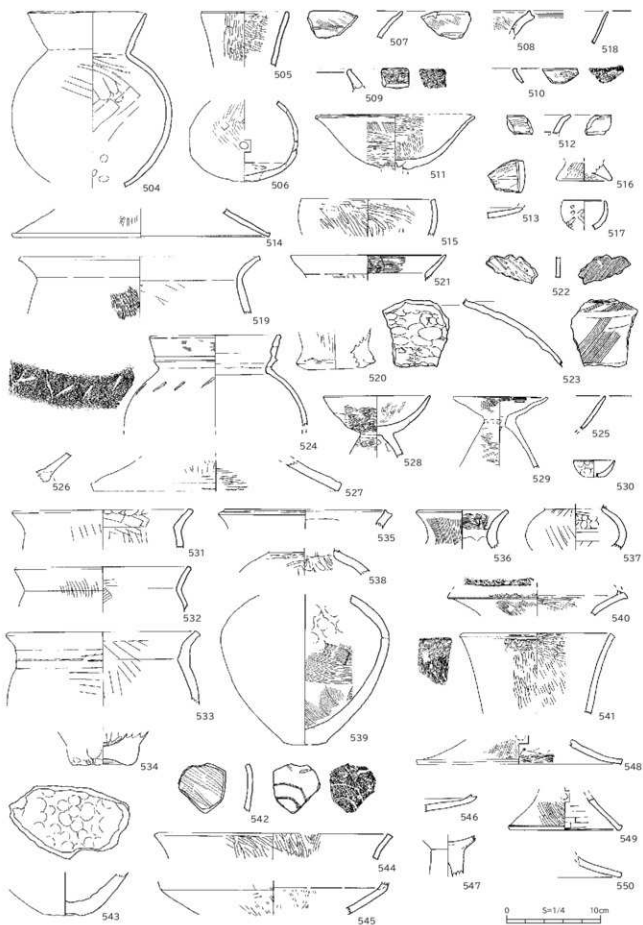
493～499は甕である。493は胴部をタタキで整形後、多方向の強めのハケメで調整する。胴部を中心とした外面全体に煤が付着し、内面下部には黒斑がある。494は在来の小型甕で、頸部がわずかにくびれる。内面は斜方向のハケメを施す。496は、口縁部が「く」字状に開き、口縁部付け根の稜線が明瞭で球洞を呈す。横方向を主体としたハケメ・ナデを施し、器壁をかなり薄く仕上げている。499は口縁部片で、外面は横方向の工具ナデで丁寧に調整した後、縦方向に強めのハケメを施す。500～510は壺である。口縁部が緩やかに屈曲するもの(500・502)、「く」字状に屈曲するもの(504)、直立気味に立ち上がり長頸となるもの(501・505)、外側に大きく倒れるもの(503)がある。506は偏球状の胴部で、底部はわずかながら平底を呈する。胴部に1か所、外側からの打ち欠きがあり、搬入の可能性がある。509・510は複合口縁となる。518は、小型丸底壺である。511～514は高坏である。511は坏端部がわずかに外反し、外面は、櫛状もしくは棒状工具による横方向のナデを施す。また、脚部との接合面には径5mmの軸痕が鮮明に残る。庄内系高坏である。513は、坏部内面端部に2mm幅の細長い粘土紐を貼付ける。515・516は鉢である。516は脚付である。517はミニチュア土器である。518は小型丸底壺の口縁部で内外面ともヘラミガキを施す。

SA12出土土器(519～530,第70図)

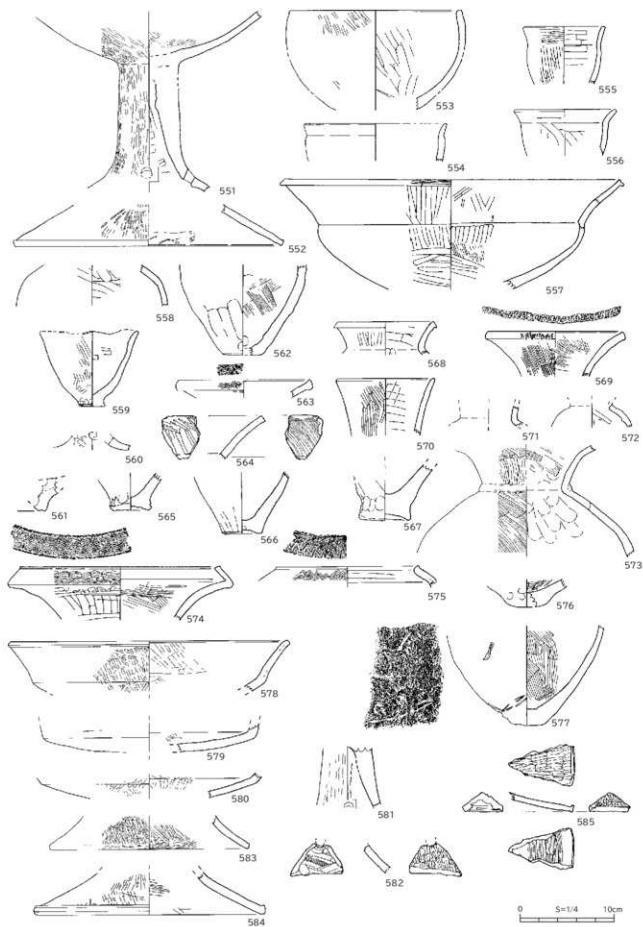
519～522は甕である。519は、口縁部が大きく屈曲することから搬入品の可能性がある。外面には煤が多量に付着する。521は、小型の布留系甕である。口縁端部が舌状に薄く尖り、内面には横方向の強めのハケメが明瞭に残る。523～525は壺である。523は胴部片で、ケズリを施した後強いユビオサエで整形するが、押圧痕の凹凸が顕著である。524は二重口縁壺の口縁部～肩部片である。口縁部はやや外方に立ち上がり、胴部外面に列点文が施される。山陰系模倣土器である。526～528は高坏である。528は小型高坏で、坏端部は舌状に薄く作られている。また、脚部と坏部の接合箇所は棒状工具による丁寧なナデにより丈夫に接着する。脚部内面の色調は黒色である。529は推定口径9.8cmの小型器台で、坏型の受部を有する。受部端部は、外縁に沿って横方向のハケメを施す。全体的に焼成は堅緻で、精巧な作りである。530はミニチュア土器である。

SB2-SC1出土土器(531～557,第70・71図)

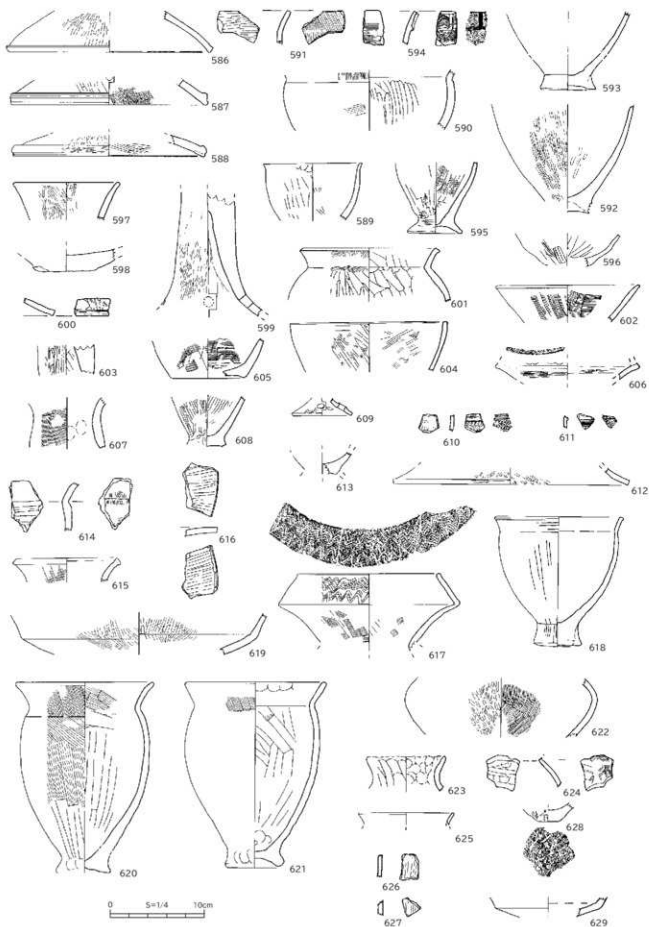
531～535は甕で、頸部内面に稜を有し、短く外方に開く。534は突出した底部で、外底面はわずかに上げ



第70図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測図(13)



第71図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(14)

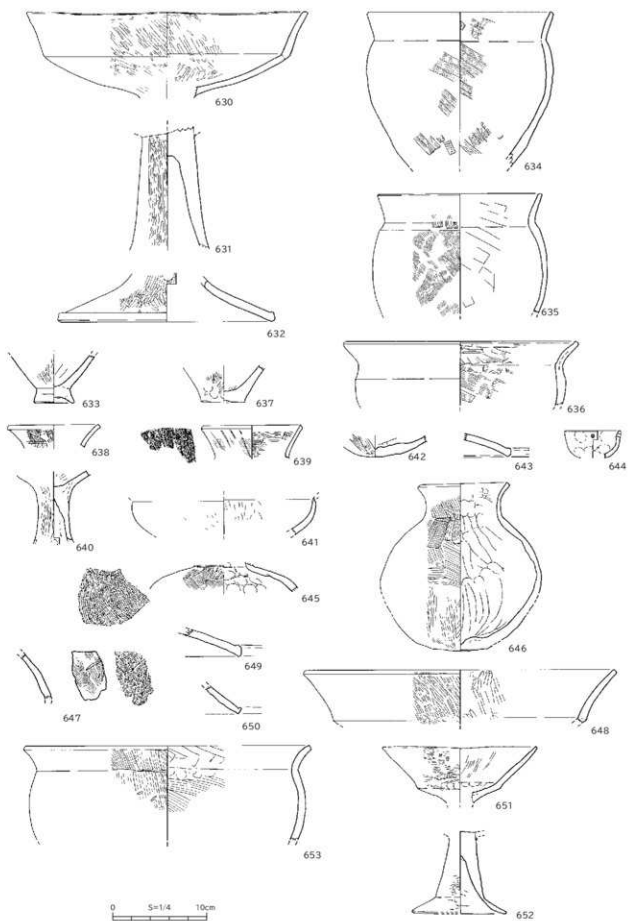


第72図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測図(15)

底となる。外面や胎土中の処々に赤橙色に変色した箇所があり、焼成時のものと思われる。536～543は壺である。541は大型の長頸壺で口縁部が直線的にやや外側に開く。口唇部は外側に拡張し、その下位に波長の異なる2種類の櫛描文を施す。542は、外面に2本の沈線を繋ぎ弧状を呈す線刻を施す。544～552は高坏である。547は長脚のものと考えられる。548・549は脚部下位に透かし孔が1か所、551は、2か所ある。553～557は鉢である。557は浅鉢で、同一と思われる2個の破片を図面上で合成した。口縁部の付け根には明瞭な稜線がある。内外面ともにナデの後ミガキを施し、滑らかな器面となっている。

SC1～SC17出土土器(558～653,第71～73図)

558～560はSC1から出土した。559は、小型鉢で、底部はつまみ出しにより突出し、ユビオサエにより整形する。561～564はSC2から出土した。563は、壺の口縁部で、口唇部に浅薄の櫛描波状文を施す。565～596はSC3から出土した。569は壺の口縁部で、ラッパ状に外側に開く。口唇部には櫛状工具による連続刺突文が施される。573は壺の頸部に貼付突帯を有し、口縁部が外方に大きく開く。二重口縁壺の可能性がある。577はB系統の壺で、粘土付加により丸底状の平底を呈する。底部内面には、ハケメの始点となる工具痕が放射状にある。578～588は高坏である。578は、多方向のヘラミガキにより器面を丁寧に仕上げる。586は裾部が内湾する。587は裾端部が櫛状工具のナデにより二重の浅い凹線を呈す。589～596は鉢である。592は外面に種子痕らしき圧痕が、594は口縁部の外面端部に櫛描波状文を施した後、その上に粘土紐貼付けにより区画を作る。595は小型鉢で底部はつまみ出しにより外側に開く上げ底となる。597～600はSC4から出土した。599は高坏の脚で、下位に透かし孔が4か所ある。601～605はSC5から出土した。601は口縁部が「く」字状に屈曲する短頸の外來系壺である。605は、外底面が上げ底気味の平底を呈する。606～609はSC6から出土した。609はミニチュア高坏で、裾部に器体の割には大きめの透かし孔が2か所にあるが、同じ間隔であれば、6か所程度の透かし孔が存在したと推測される。610～613はSC7から出土した。610・611は鉢の胴部片で、外面に櫛状工具による細沈線の間に羽状の連続刺突文が施される。614～619はSC8から出土した。617は複合口縁壺の口縁部～頸部で、口縁部外面は長く伸び、2段に櫛描波状が施される。618は精製の鉢で、口縁部がわずかに外反する。底部は、台形状に突出し、平底を呈する。底部の粘土の接合状況から、厚手の底部に粘土板を貼り付け、さらに外側に粘土を貼り付け、外方に引き伸ばしていることが観察できる。620～632はSC10から出土した。620・621は壺で、器形が類似するが、621は口縁部外面のハケメ方向からB(V様式)系統である。623は壺の口縁部で、端部は平滑ではなくユビナデ・ユビオサエにより波打つ形状となる。626・627は長頸壺の頸部片で、外面に丹を塗ったような赤みを帯びる。630・631は高坏の坏部・脚部で同一個体となる。口径が約30cmあり、本遺跡の中でも大型の部類に属する。坏部外面には右下がり、脚部では縦方向のヘラミガキを施す。633はSC11から出土した鉢の胴部～底部で、台形状に突出した底部の外底面は上げ底となる。634～641はSC12から出土した。634～637は壺で、636は口縁部が外側に大きく開く。642～644はSC13から出土した。644はミニチュア土器で、口縁部に径3mmの穿孔がある。645～650はSC15から出土した。646は、頸部～口縁部が「S」字状に緩やかに屈曲する壺であり、近畿系統の模倣土器である。648は、高坏の坏部で、丁寧なミガキを施し、器面が非常に滑らかになっている。651・652はSC16から出土した高坏である。651は坏部で、外面下位には段を有する。内外面とも細筋のヘラミガキを施し、精巧に作られている。在地模倣土器である。652は脚部で、外面は横方向ヘラミガキで滑らかに仕上げる。庄内系模倣土器である。653はSC17から出土した壺の頸部～口縁部である。外面に線刻のようなものがある。



第73図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(16)

土器集中1～3出土土器(654～688,第74～76図)

654～680は土器集中1から出土した。654～659は甕で口唇部は横方向のナデにより平坦な作りとなっている。654は、砲弾形で明瞭な稜を持つ。外面は胴部から口縁部にかけて連続した縦方向のハケメを施す。内面は胴部下半は縦方向、胴部～口縁部は横方向の強めの工具痕がある。突出した底部は、ユビオサエにより胴部と接着させ上げ底となる。655は、口縁部の付け根にわずかな段を有する。口縁部のナデ調整に比べると胴部の調整は粗雑な印象を受ける。659は、薄手で外面に細かなハケメ、内面にヘラケズリを施す。660～670は壺である。661は頸部に貼付突帯がみられる。662・663は複合口縁壺で、外面に櫛描波状文を施す。664は二重口縁壺である。665は長頸壺の頸部にあたり、わずかに外反しなから直立気味に立ち上がる。670は、本遺跡出土土器の中では、突出して大型の壺である。頸部に貼付突帯を付加し、複合口縁の外面に櫛描波状文を施す。胴部は斜方向のハケメが施され、上位の2か所に横方向の櫛描波状文がある。底部は、推定底径15cmの安定した平底を呈する。671～675・677～679は高坏である。671・672は坏部片で、胎土・色調の様相から同一個体である。675は脚の一部で、透かし孔がある。677～679は裾部でスカート状に広がる。678の内面に種子圧痕、679の内面に「×」状の線刻がある。676・680は器台である。676は受部が大きく開き、口唇部をナデにより平坦にし、器面全体にはナデの後にヘラミガキを施す。

681～684は土器集中2から出土した。681・682は甕である。681は、胴部が球形状を呈し、口縁部はわずかに内湾しなから立ち上がる。頸部外面には、くびれ部分に棒状工具の押し引きによる3条の浅い溝がある。内面には植物等の圧痕や線刻がある。682は胴部が砲弾形を呈し、口縁部がラッパ状に大きく開く。内面には種子と思われる圧痕がある。683は球胴の壺で、胴部外面には工具痕や底部整形のための指頭痕が、肩部内面には、強い指ナデ痕が明瞭である。684は高坏の脚部である。破片末端の割れ口に透かし孔が2か所みられ、全体では4か所と推測される。

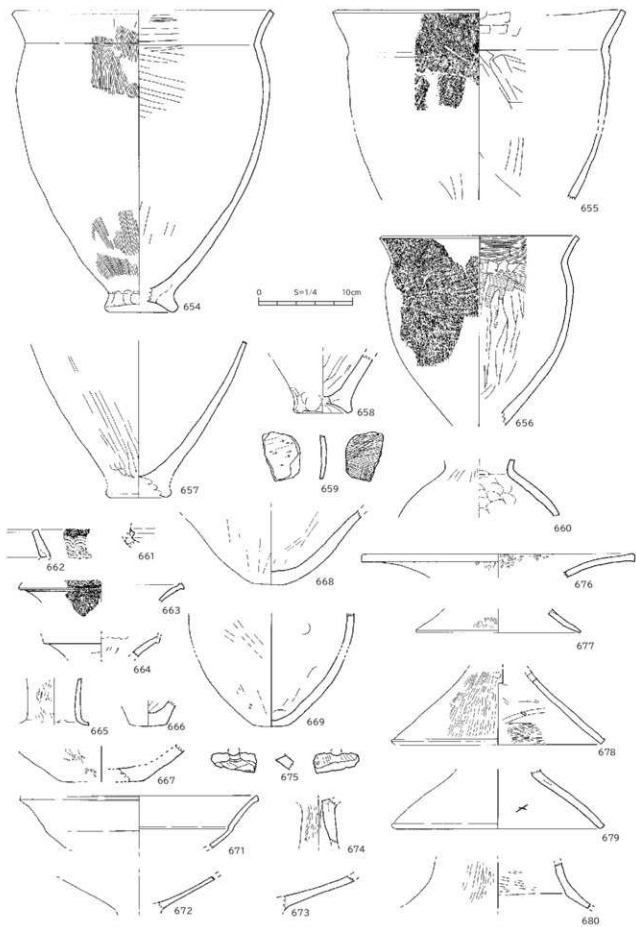
685～688は土器集中3から出土した。685は高坏で、坏部が端部で直立気味に立ち上がり、器面に丁寧なミガキを施す。脚部には透かし孔が3か所ある。686～688は鉢で、686は口縁部がわずかに外反する。台状の突出した底部を有し、上げ底となる。外底面には数本の線刻がある。687の外面には植物質と思われる圧痕がある。

SH2～4出土土器(689～692,第76図)

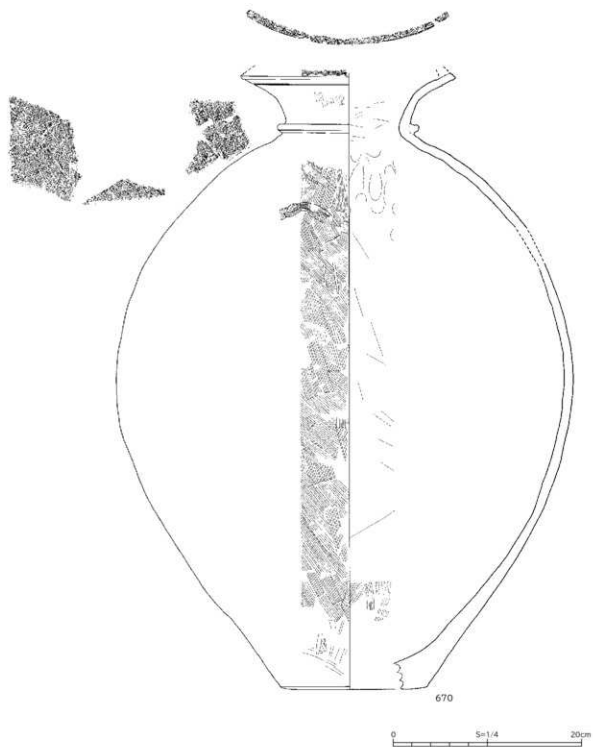
689はSH2から出土したV様式系統の壺の胴部～底部である。底径は4.3cmで平底を呈する。内底面には強めのハケメを施す。690はSH3から出土した壺の頸部である。屈曲部は「く」字状となり、粘土紐付加による突帯に斜方向の刻目を施す。内面には炭化物が付着する。691・692はSH4から出土した。691は甕の胴部～口縁部で、外面の広範囲に煤が付着する。692は高坏の裾部で、透かし孔を有し、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。

SE1(近世)・SE2,3,6,8(中世)出土土器(693～697,第76図)

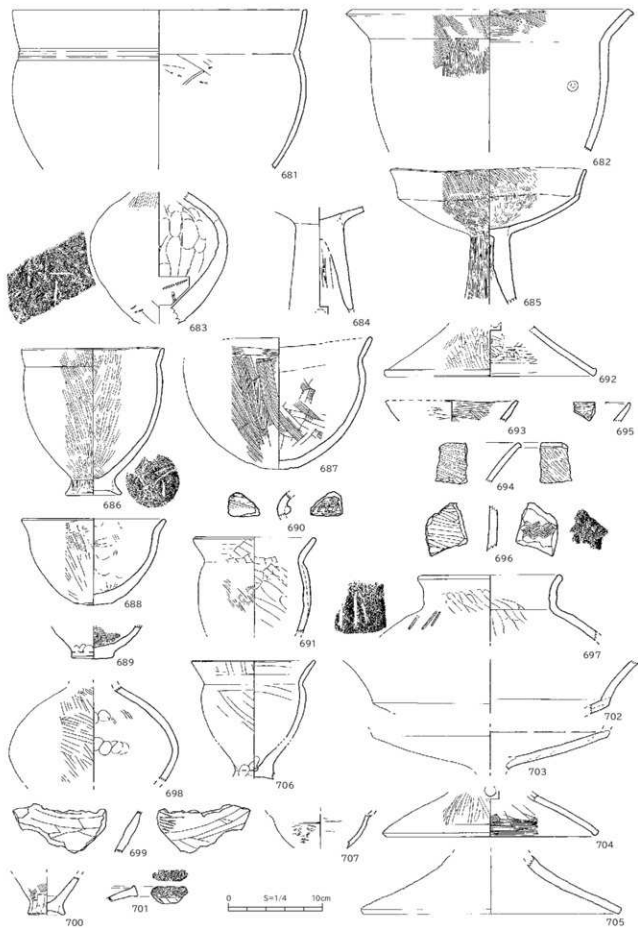
693はSE1、695はSE3から出土した甕の口縁部である。内面に横方向のハケメが明瞭に残る。口唇部は凹面状に浅く窪む。694はSE2から出土した高坏の口縁部である。内外面ともに丁寧なミガキが施される。加えて外面は上に焼成時の黒斑が作用し、縄文時代の磨研土器のような光沢のある黒色となっている。696はSE6から出土した壺の胴部で、外面に浅い櫛描波状文がある。搬入品の可能性がある。697はSE8から出土した壺の肩部～口縁部である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。肩部外面に棒状工具による縦方向の線刻が3本施される。



第74図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測図(17)



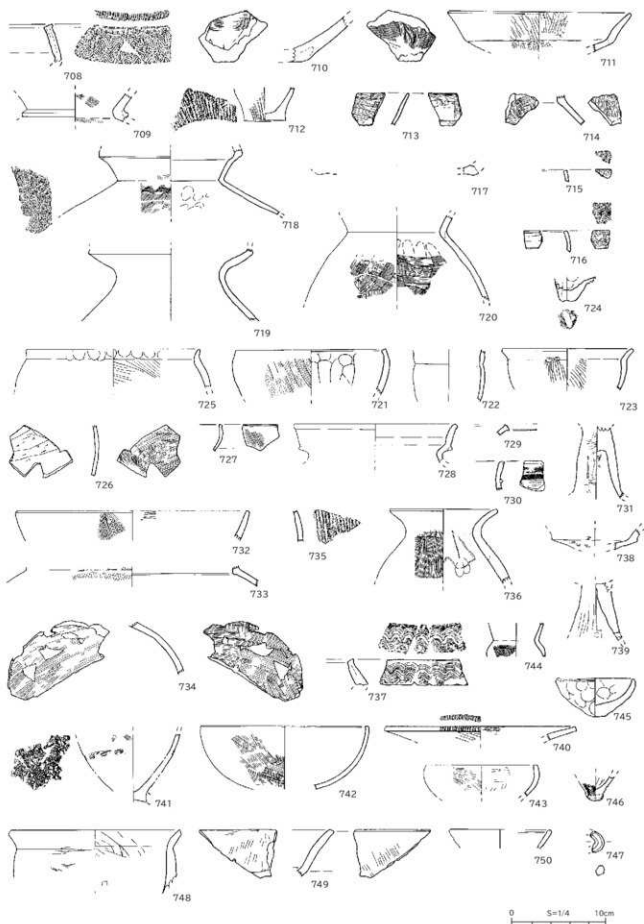
第75図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(18)



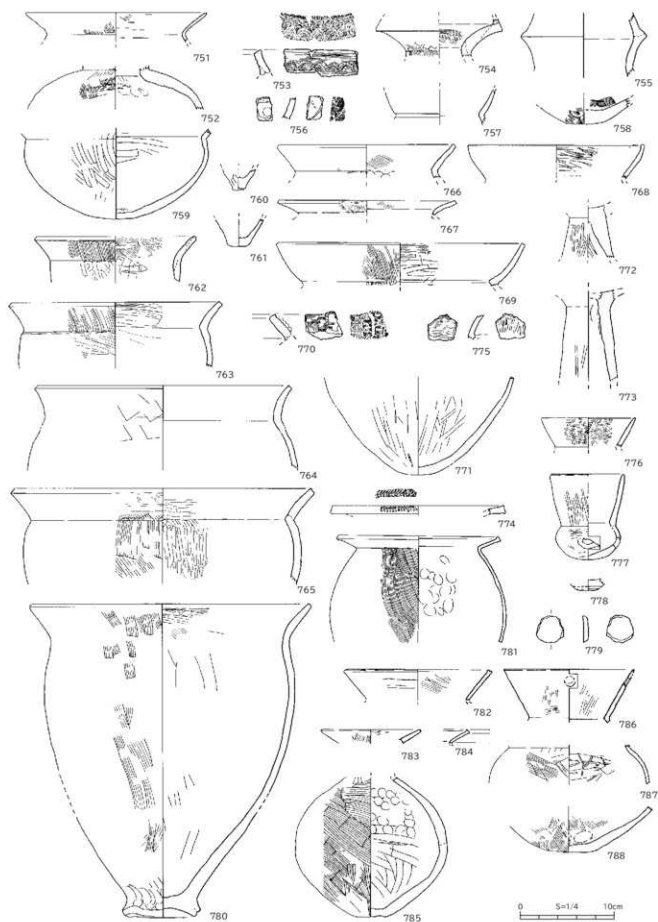
第76図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(19)

(2) 包含層出土土器(第76～79図)

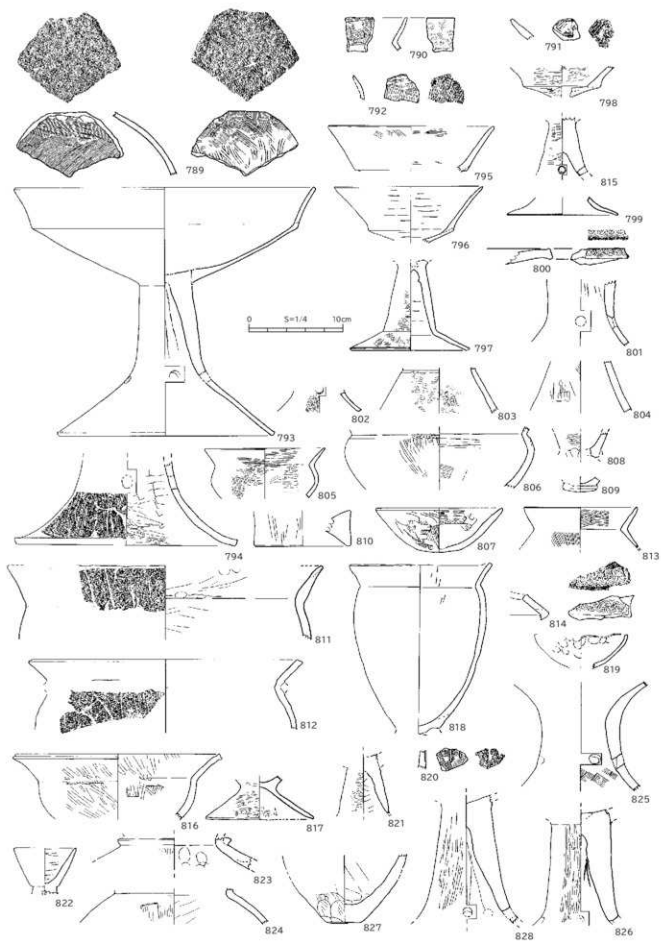
698～828は包含層出土であり、出土グリッド(第3表参照)ごとに掲載する。698はA2Gr.出土で、偏球状を呈す壺の胴部である。699～707はA4Gr.出土である。699は甕の胴部片で、内外面に多数の炭化した種子と思われるものや種子痕が確認できる。700・706は、B系統の甕の底部で、粘土充填式でつくられる。707は布留系鉢の頸部で、口縁部が内湾気味に立ち上がる器形と考えられる。708～711はA5Gr.出土で、710はB系統の壺である。712～724は、B4Gr.出土である。712は小型鉢で、底部の周囲に縦方向の明瞭なハケメを巡らす。搬入品と思われる。714は甕の頸部で、忠実に布留系の作りを模してつくられている。717は磨滅により器形が不明だが、二重口縁壺の頸部と思われる。718～720は壺の頸～胴部であり、いずれも外来系の搬入品である。718・719は二重口縁となり、718は、外面に浅い櫛描波状文を施す。719は、頸部が「S」字状に屈曲し、山陰系と考えられる。720は、C7Gr.出土の789と同一個体の可能性がある。723は、布留系の浅鉢である。724はミニチュア土器で、外底面が棒状に凹み貫通孔の名残と思われる。725～727はB5Gr.出土である。725は無頸の小型甕で、口縁部はコピオサエにより、わずかに外反させている。726は搬入の布留系甕の胴部片である。728～731はB6Gr.出土である。728・729は、壺の口縁部片で、729は口唇部に二重の凹線が施される。732～747はB7Gr.出土である。732～734は布留系甕であり、胎土から見て搬入土器と推測できる。738は高環の坏部で、内外面の処々が赤みを帯びている。740は器台で口唇部に櫛状工具による縦方向の連続刺突文を施す。744は、布留系の小型のA系統壺である。口縁部は内湾する。内面はヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。746はミニチュア土器で、突出した底部には貫通孔がある。747は土製品で、逆「く」字状に湾曲する。748～750はC4Gr.出土である。749は在来高環で口唇部に種子圧痕がある。750は布留系壺で、口縁端部が内側に拡張する。751～761はC5Gr.出土である。753は、複合口縁壺の口縁部で、外面上部にハケメ原体による横沈線、その下位に櫛描波状文を施す。754は、二重口縁壺の頸部で、外来系の模倣土器である。757は、広口の布留系小型壺である。762～779は、C6Gr.出土である。767は壺の頸部で、口縁部が大きく倒れるように屈曲する。宮崎平野に通有の胎土による模倣土器である。768・769は壺の口縁部で、端部に向かって内湾する。768は口唇部が内側に拡張し、宮崎平野に通有の胎土による近畿系統の模倣土器である。769は口唇部が平坦で、内面端部に強めのハケメが鮮明に残る。宮崎平野に通有の胎土による外来系の模倣土器である。770は複合口縁壺の口縁部である。口縁部にハケメ原体による横沈線及び櫛描波状文を施した後、押圧痕を有した2.5cmほどの粘土帯を縦方向に貼り付ける。本遺跡では他に類品がない。774は、器台の口縁部で、口唇部に櫛状工具による連続刺突文が施される。776は、小型壺の口縁部で、外側に直線的に立ち上がる。端部に向かって舌状に薄く尖る。細筋のミガキが施され、精製器種と言う。777は小型長頸壺で、底部外面が黒変する。胴部に内側からの穿孔がある。778はミニチュア土器で、わずかに突出した底部に貫通孔がある。779は土器片加工品である。780～810はC7Gr.出土である。781は、布留系甕の口縁部～胴部である。口縁部が大きく倒れるように屈曲し、口唇部は浅い凹線を有し内側に拡張する。西部瀬戸内からの搬入土器である。782は、布留系甕の口縁部である。口唇部には浅い凹線を施し、内側に拡張する。口縁部は横方向のナデにより若干のうねりを有する。搬入土器である。785は在来の壺で、外面に多方向のハケメを施す。786は壺の口縁部で、下位に内側からの打ち欠きが観察できる。787は布留系の小型壺で、地元の土を使って製作している。789は、布留系の搬入壺で外面に鋸歯状のハケメを施す。B4Gr.出土の720と同一個体の可能性がある。790は、布留系甕の口縁部で、内部に明瞭な稜を持つ。792は、搬入壺の胴部で、底部が丸底になる器形だと考えられる。793は、推定口径31.4cmの大型高環の坏部～脚部である。器面は風化が著



第77图 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測图(20)



第78図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期土器実測図(21)

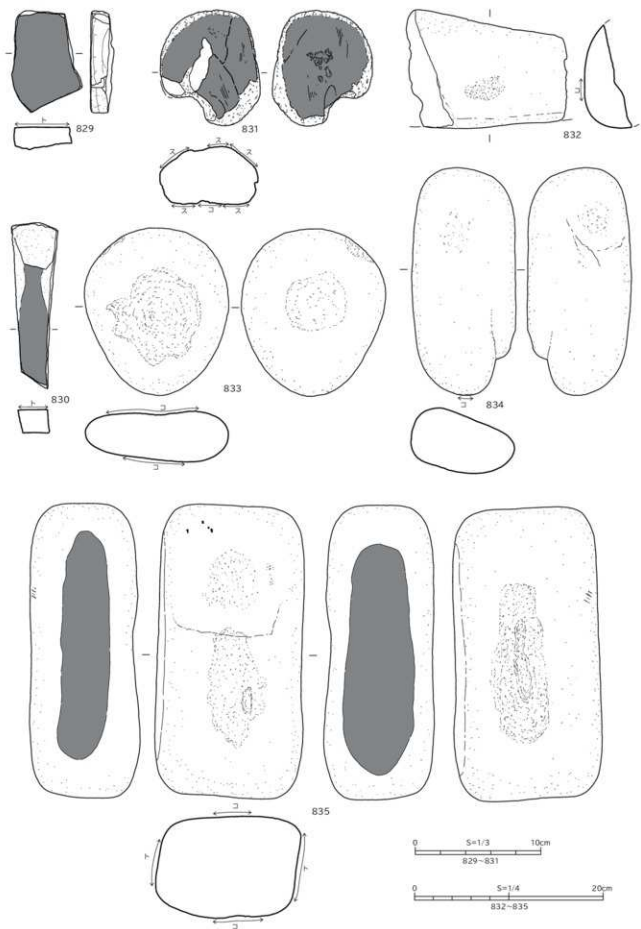


第79図 C区弥生時代後期後半~古墳時代前期土器実測図(22)

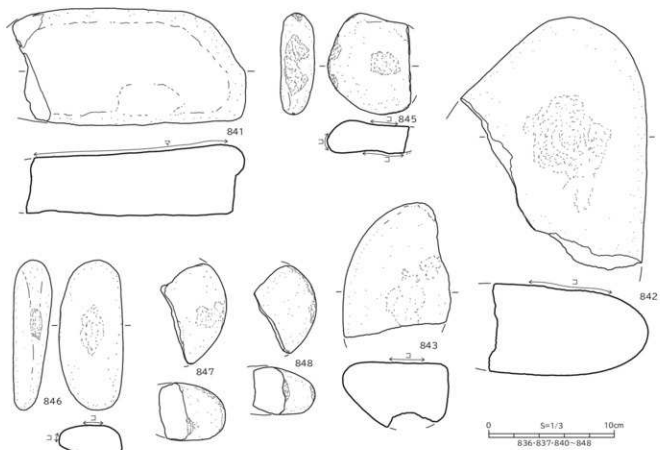
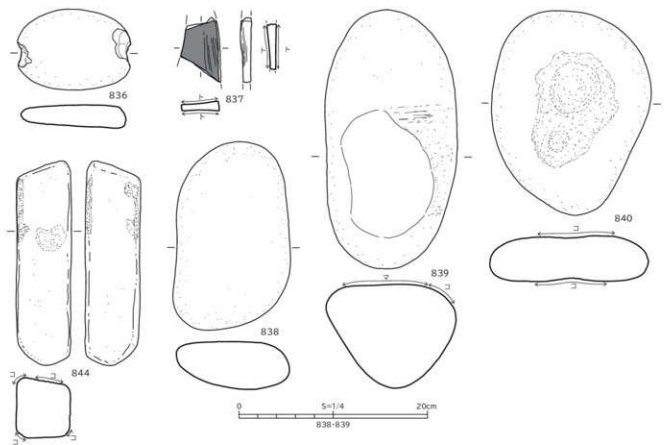
しく、砂粒が表面に露出する。794は器台の柱部～裾部で、裾部に縦方向の5本の線刻がある。795・796は、布留系高坏の坏部で、外面屈曲部に粘土を貼り付ける。805は、偏球状の丸底壺と思われる。内外面ともにミガキにて精巧に仕上げ、焼成時の黒変が広範囲に広がる。庄内系の模倣土器である。809は、突出した底部に貫通孔がある。近畿系統である。811～817はC8Gr.出土である。811は、壺の口縁部である。外面に斜方向の線刻が等間隔にあり、意図的な線刻と考えられる。812は在地B系統の甕の口縁部～胴部で、頸部に貼付糸帯の痕跡が確認できる。813は、布留系壺であり、口縁部が「く」字状に屈曲する。817は、脚付鉢の脚部で、内外面ともに、ケズリ・細かなミガキにより丁寧に仕上げている。819はD5Gr.より出土した鉢で、口唇部に注ぎ口状のたれを有する。822は、D6Gr.より出土したミニチュア土器で、底部には貫通孔がある。824は、布留系甕の模倣土器だが、内面のケズリが細く、不十分な模倣となっている。

(3) 遺構出土石器(829～928・959,第80～89図)

829～835はSA1から出土した。829・830は砥石である。831は軽石製品である。正面は大きく3面の磨面、裏面は1面の磨面となり、裏面中央には強いあばた状の敲打痕が集中する。832～835は台石で、835の正面・裏面に敲打痕、左面・右面に金属光沢を発するような砥面があり、正面・裏面の端にはわずかに鉄錆の付着もある。836～848はSA2及びSA2床面に掘り込まれた土坑から出土した。836は打欠石錘である。837は砥石で、砥面が凹面をなすほどよく研ぎ込まれている。838～843は台石である。838の使用痕は明瞭ではないものの、器面の全体に手擦れ感があるもので、床面上出土であったことから、台石として図化した。841の正面は広く浅い凹面の敲打痕(うち2か所はやや深い凹面)で、裏面中央に広くやや深い凹面となる敲打痕がある。844～848は砥石である。844は、正面上方に弱い敲打痕があるもので、他の砥石に比べ、やや特異な使用痕である。847・848の下端はともに欠損しており、その欠損により生じた稜線にもわずかな潰れ・磨滅等がある。849～874はSA3及びSA3床面に掘り込まれた土坑から出土した。849は砥石である。850は凹石で、正面に4か所の凹みがあり、うち2か所は5mmの深さに達するといった特徴的な凹みがある。851・852は磨石であり、851は縄文時代の磨石に多い使用痕の状況である。853は打欠石錘である。854は打製石鏃である。ガラス質安山岩製で、粗めの調整であること・風化が進んでいないことからこの時期のものであろう。855～859は台石である。857の正面の凸部に弱い敲打痕が、左面には部分的に磨滅がある。857の正面の凸部に弱い敲打痕があり、左面には部分的に磨滅がある。860～873は棒状礮で、土坑内に並べ置かれた点や、欠損品を除く13点のうち9点が約500～700gに、3点が約2,100～2,400gに、残る1点が約1,100gというように複数個体で重量が揃う特徴から、いわゆる錘石と考えられる。867・870・873は、端部等に敲打痕を持つ。874は軽石製品であり、正面・裏面に両面穿孔2か所ならびに未貫通の穿孔が正面から2か所、裏面側から1か所ある。875～880はSA4から出土した。875は凹石であり、縄文時代以前の凹石と共通点が多いことから混入の可能性も疑ったものの、床面出土であることからSA4に伴うものとした。876は軽石製品であり、正面に刃物状のものによる切削痕等がある。877～879は台石である。877の正面上手には浅く凹む敲打痕、正面下手には平らな敲打痕がある。さらに下面・左面に部分的に敲打痕があり、左面には砥面もある。879の正面は凸面で強くツルツルとした磨滅が広くあり、正面左側は幅狭な砥面となる。裏面は曲面でわずかに敲打痕がある。880は磨石である。881はSA5から出土した砥石である。882～890はSA6及びSA6床面に掘り込まれた土坑から出土した。882は有溝石錘であり、正面・裏面に一周する刻みと、それに直交する刻みを中位に一周させている。883は凝灰岩製紡錘車であり、中央に両面穿孔1か所がある。器面は全体に剥落する。凝灰岩製石器には、この他にSA8出土の打欠石錘があり、紡錘車や石錘等の石材としてはあま



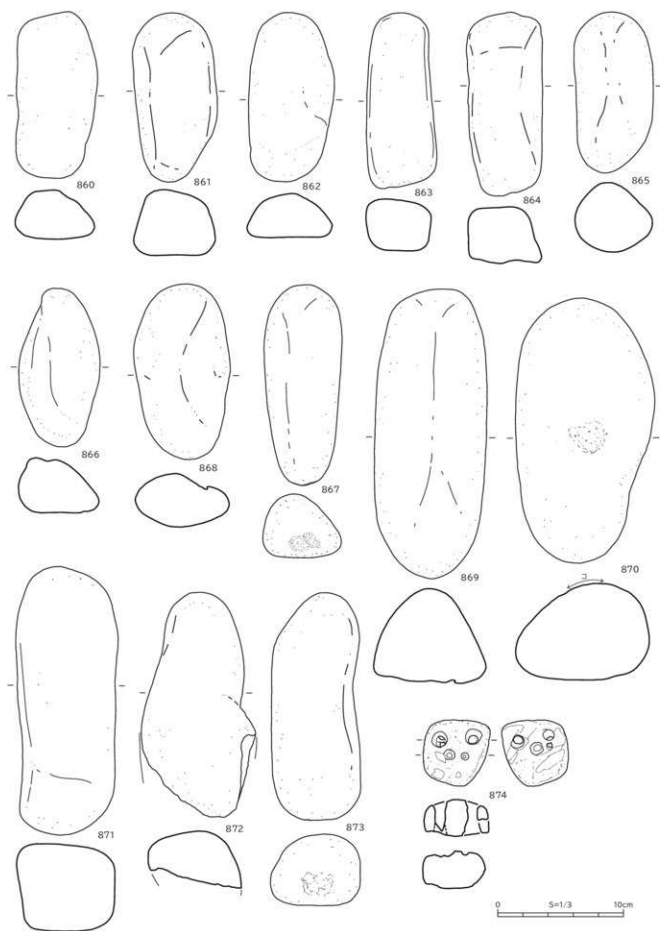
第80図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(1)



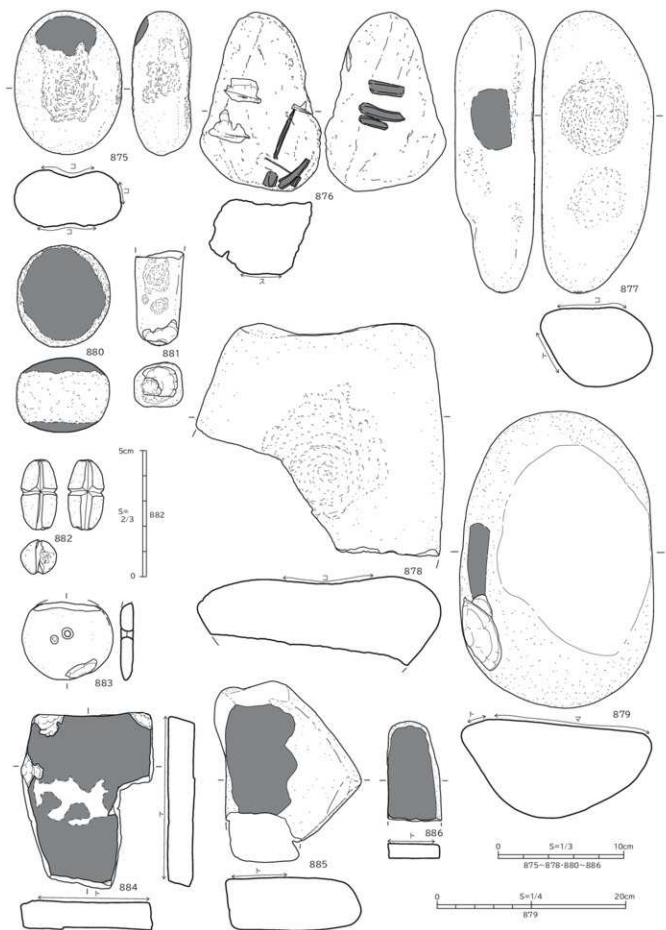
第81圖 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(2)



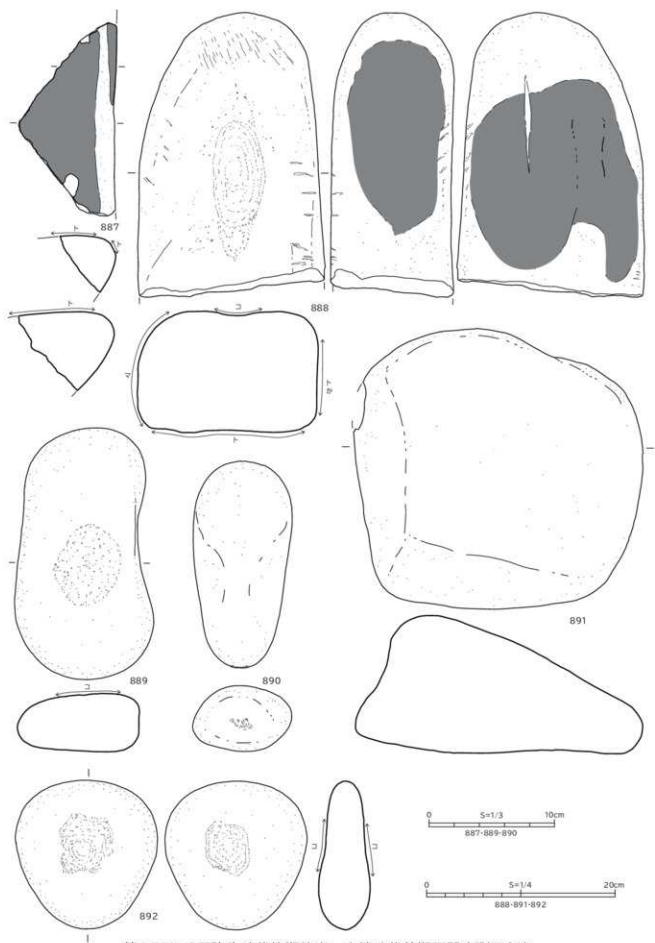
第82図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(3)



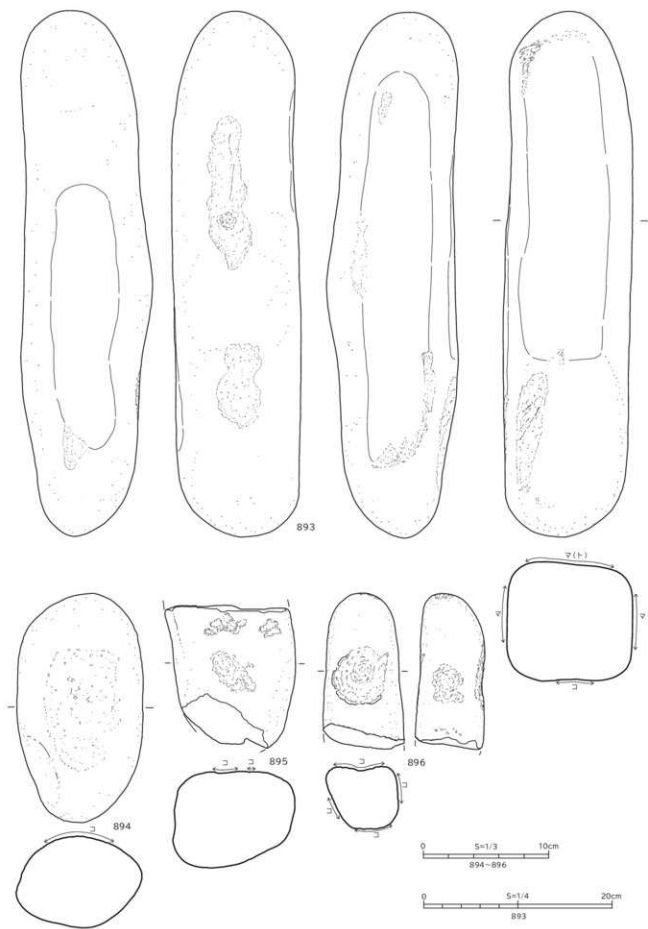
第83図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(4)



第84図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(5)



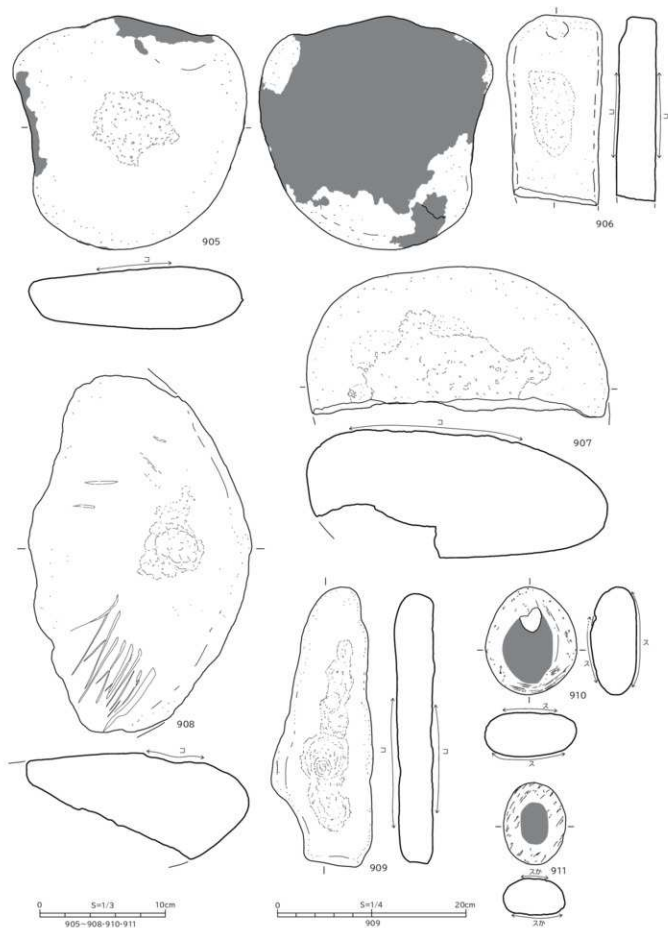
第85図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(6)



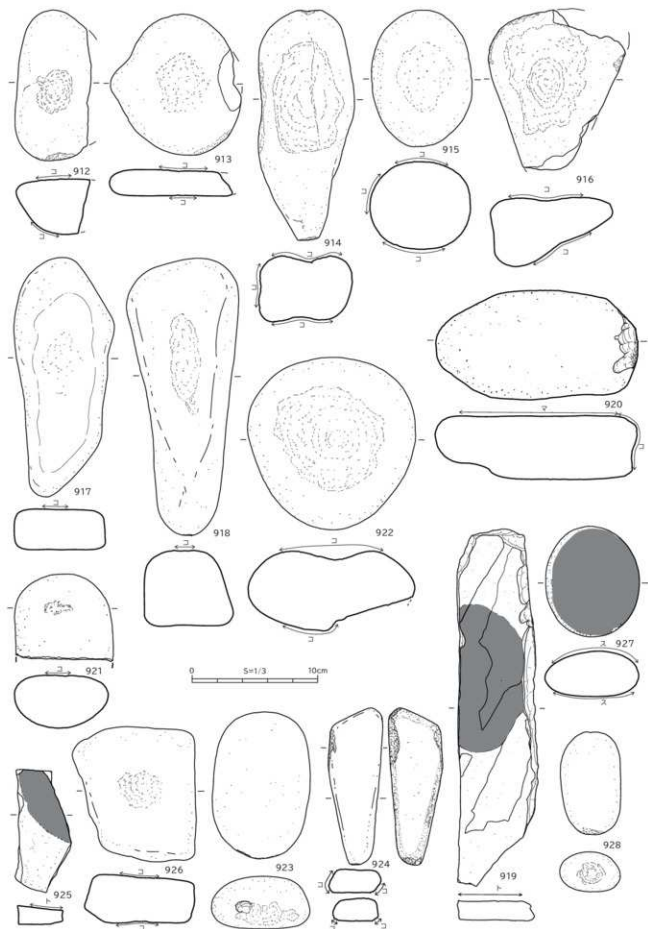
第86図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(7)



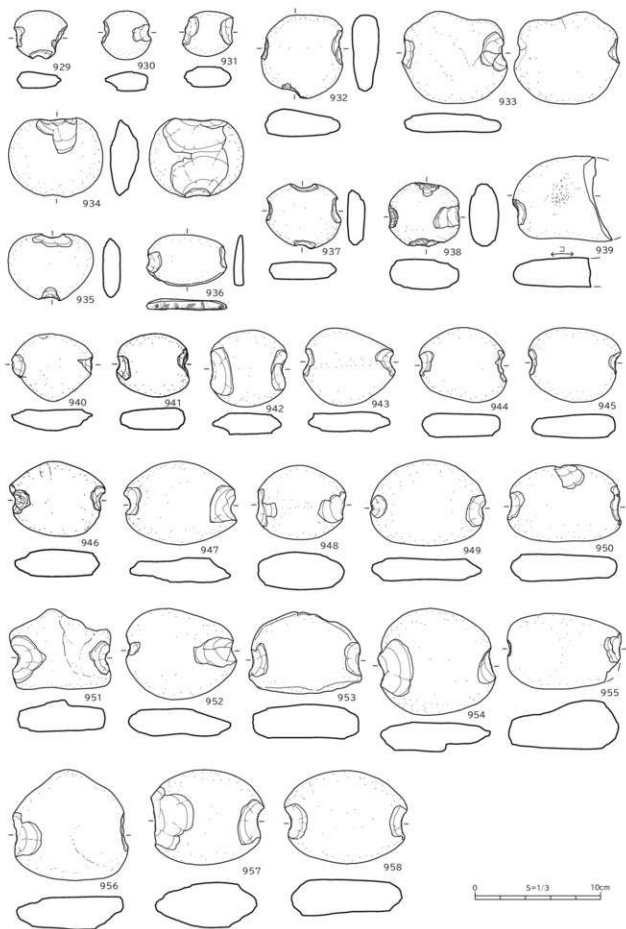
第87図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(8)



第88図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(9)



第89図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(10)



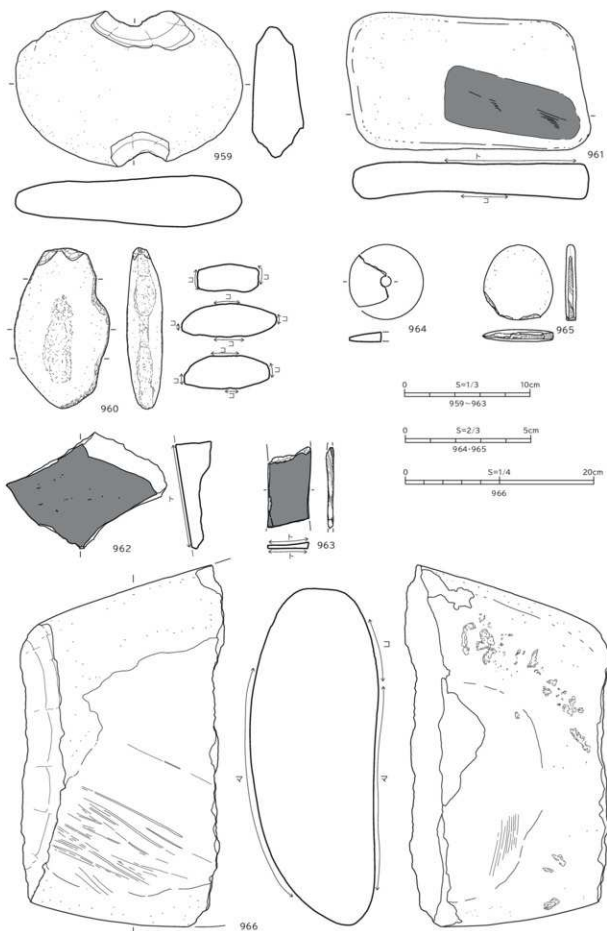
第90図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(11)

り好まれない凝灰岩を用いる点は、凝灰岩の供給源となる入戸火砕流堆積物を開析する大淀川・清武川流域の地域特性と言える。884～887は砥石である。884の自然面には海生生物痕跡がある。左・右・下面は打ち割りによる整形で、裏面は層理沿いに剥離する。884～886の3点は同質の石材であり、884の海生生物痕跡の存在からは、海浜等から石材を得たものと考えられる。888・889は台石である。888の正面は中央に凹面となる敲打痕があり、上方に擦痕、両側面に切傷痕がある。右面は全体に磨滅で部分的に砥面の可能性がある。左面は全体に磨滅、裏面は砥面で両側面に付けて切傷痕がある。下面は欠損するが、欠損面や稜線は全体に磨滅する。890は砥石である。891～896はSA7から出土した。891～895は台石である。893の正面は凹んだ2か所に敲打痕が、右面は広く磨滅で周辺に敲打痕がある。左面は中央付近が磨滅し、滑らかな面で部分的に敲打痕がある。裏面は他より強い磨滅(あるいは砥面)があり、その上・下方には斜方向に削るような敲打痕がある。896は砥石であり、正面・裏面にポウル状に凹む敲打痕、左・右面に浅い敲打痕、上端に弱い敲打痕等があつて、さらに下端欠損面の稜線が潰れていることから、欠損後も使用継続したものと考えられる。897～901はSA8から出土した。897は凝灰岩製打欠石錘であり、全体に熱を受けたためなのか黒褐色の器面である。打ち欠き箇所は磨滅により明瞭ではない。898は砥石、899～901は台石である。902・903はSA9から出土した。902は霧島山系安山岩の円礫、903は砥石である。902は使用痕がないものの、大淀川流域で採集の上、持ち込まれたと考えられるため図化した。904～909はSA11から出土し、いずれも台石である。905は、正面の周縁部から裏面に付けて鉄錆(錆汁状のもの)の付着が特徴的である。908は、正面の平坦面に凹面となる敲打痕及び鉄製品による先細りの削り痕が10条以上ある。909は、正面・裏面の平坦面に敲打痕がいくつかの単位に分かれて連続する。910・911はSA12から出土した。いずれも軽石製品で、よく転磨された円礫が用いられる。

912はSC1出土の砥石である。913・914はSC2出土で、913は凹石である。914は砥石で、正面・裏面・左面に広く深い凹面となる敲打痕があり、さらに上下端にも敲打痕がある。915～918はSC3出土で、915が砥石・916～918が台石である。919はSC8出土の砥石であり、層理沿いに板状に割り出された石片全周を荒い剥離・敲打で整形し、正面を砥面とする。部分的に鉄錆が付着する。920・921はSC9出土で、920が台石、921が砥石である。922～924はSC10出土である。922は凹石で、正面中央に広く深い凹面となる敲打痕があり、裏面も器面の凹凸がある中央付近に凹凸をまたいであばた状の敲打痕がある。923・924は砥石である。923は下端にのみ弱い敲打痕がある。924は右面上・左面上・下端に敲打痕がある他、裏面と両側面の境の稜を潰すような帯状の削りが特徴的である。925・926はSC12出土で、925が砥石、926が凹石である。927はSC15出土の磨石であり、特に裏面の磨面が顕著である。928はSC17出土の砥石である。959は土器集中1と重複した位置から出土した打欠石錘で、重量11.7kgとかなり重い。扁平礫の短軸を打ち欠いている。

(4) 包含層出土石器(929～958・960～966,第90・91図)

929～958は、平面分布上で縄文時代の石錘の集中と判断された範囲以外のものについて弥生時代後期後半から古墳時代前期の打欠石錘として位置づけ、重量分布を勘案して軽量のものから重量のものまでまんべんなく、かつ形態的に特徴的なものを対象に図化したものである。打欠石錘の多くは長軸打欠である。932・950は三辺打欠、937・938は四辺打欠、934・935は短軸打欠である。933の裏面左側の挟りは、元の礫面の凹みを生かして打ち欠くことなく仕上げている。936は下面について礫のカーブに沿うように丁寧に研磨する。939の正面に細かな敲打痕があり、打欠石錘の転用か、敲石等が打欠石錘へ転用されたかは判断としない。重量は、最軽量品が28.1gで、おおよそ300gまでに収まる。



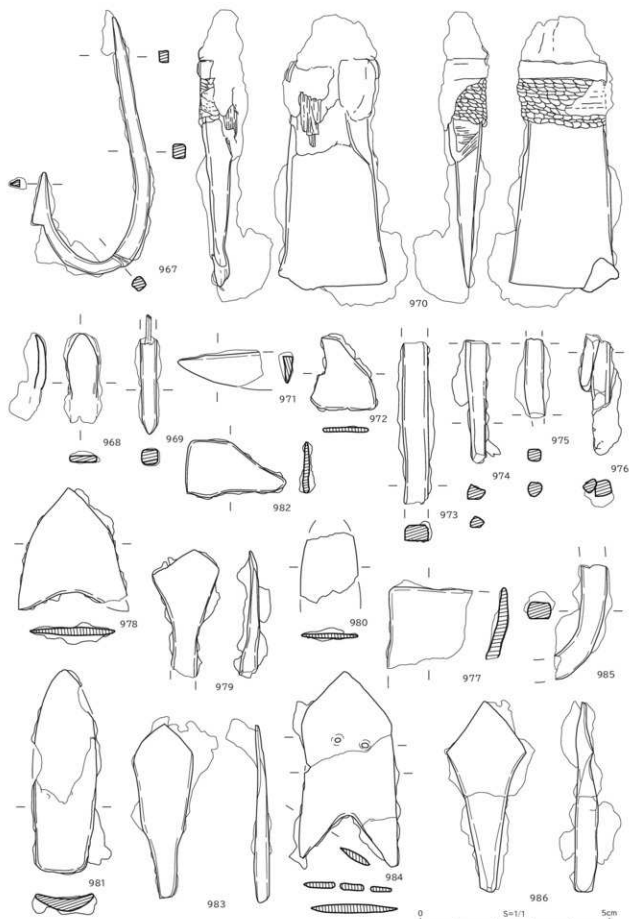
第91図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期石器実測図(12)

960～966は包含層出土で特徴的なものを取り上げた。960は敲石で、鉄鏃状の付着物が敲打痕の外周に特徴的である。961～963は砥石である。962の砥面は平滑で金属光沢を放つもので、より新しい時代の砥石の可能性もある。964は紡錘車で正面・裏面・側面の全てを丁寧に研磨して仕上げている。穿孔は両面からなされる。かなり精製された粘土を用いた土製品の可能性も残る。965は研磨ある礫であり、薄い礫の右から下面にかけて研磨がある。手持ちの砥石的な使い方をしたものか。966は台石で、切り傷状の使用痕や敲打痕・磨滅等がある。

(5) 遺構・包含層出土鉄器(967～986, 第92図)

残存がよく、およそその器種が判別できた20点を図化掲載した。971～987は遺構出土である。967～969は、SA1から出土した。967は鉄製釣針で、床面直上より3つに折れた状態で出土した。鐵が外側に付くように見えるが、錆ぶくれの可能性もある。その場合は、無鐵の鉄製釣針となる。968は埋土中出土で、へう状に屈曲する鋒が錆ぶくれで不明瞭だが、鋒が尖るように見えることから鉋である可能性が高い。969は埋土中出土で、欠損部分に中心部の地金が細く残る点から、鉄鏃などの小鉄器の基部であると考えられる。970～974はSA2南東部の埋土中から出土した。970は完形の袋状鉄斧である。樹皮巻部分から刃部に向かって11回糸を巻き、よれた最上部の糸巻きは刃部側から2番目の糸巻きに被る。5mm程度の樹皮により、糸巻と柄の接点を押さえている。971は一部の残存ではあるが、その形状から刀子鋒と考えられる。972はSA2-SC6埋土中から出土した三角鉄片で、鉄器製作時に鑿などで切除されたものと考えられる。973・974は棒状鉄片で、973はSA2-SC3から、974はSA2南東部の埋土から出土した。975～977はSA3から出土し、975・976は遺構南西部、977は北東部の埋土中から出土した。975は、残存部分では器種の判別不能ながら、上部の断面は方形、下部のそれは円形であり、何らかの鉄器の茎と考えられる。976は、2本の棒状鉄片が窮着したもので、大きいものの周囲に篋被状になっているものが確認できる。977は、用途不明の鉄片である。978・979はSA4南東部、980～982はSA4北西部の埋土中から出土した。978は無茎鐵で、片側の逆刺を一部欠く。979は、鐵鏃で、その形状から、柳葉形の側の鋒を整形し、歪な圭頭形にしたもの、あるいは、使用時に鋒が欠損などしたため再利用したものだと考えられる。980は鐵鏃で、厚さが1.5mm程度とかなり薄手である。形状から無茎鐵の鐵身部と考えられる。981は、鋒が剥落して形状が不明瞭ながら、鉋と考えてよかろう。982は不定形小鉄片である。SA4を含め同様の資料は他に出土しておらず、単発的な鉄器製作に伴う鉄片と考えられる。983はSA7-SC1から出土した小型の柳葉鐵、984はSA7北側埋土中ならびにSA7-SC1出土分が接合した無茎鐵である。985はSA7北側埋土中から出土した。剥落部分が多く不明鉄器として報告するが、屈曲する形状やSA1で鉄製釣針が出土したことも加味すれば、鉄製釣針の可能性も考えられる。ただ、針部が確認できないことや断面が平たく長方形となっていることなど、否定的な要素も併有する。

986は包含層出土であり、C8Gr.から出土した。ほぼ完形の圭頭鐵で、鐵身部が湾曲する。



第92図 C区弥生時代後期後半～古墳時代前期鉄器実測図

第3節 縄文時代前期～晩期の遺構と遺物

1 概要

遺構は、前期後葉(曾畑式土器併行期)の竪穴状遺構1基(SJ1)・後期初頭までに収まる竪穴状遺構1基(SJ2)・後期初頭(宮之迫式～南福寺式土器併行期)の土坑1基(SC20)・前期～晩期に収まる可能性の高い土坑1基(SC19)・柱穴1基が検出された。第93図のとおり、いずれも北半のA4Gr.ならびにB4Gr.周辺に限定的に分布している。遺物は、曾畑式土器の大きな破片や打欠石錘等がA4Gr.のⅡ層中からまとまって出土した他、包含層(Ⅱ層)や後世の遺構埋土中から、前期～晩期の土器・石器等が出土した。

2 遺構

(1) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は、竪穴建物の可能性のあるもの柱穴や炉等が不明瞭なものであり、2基検出された。

1号竪穴状遺構(SJ1,第94図)

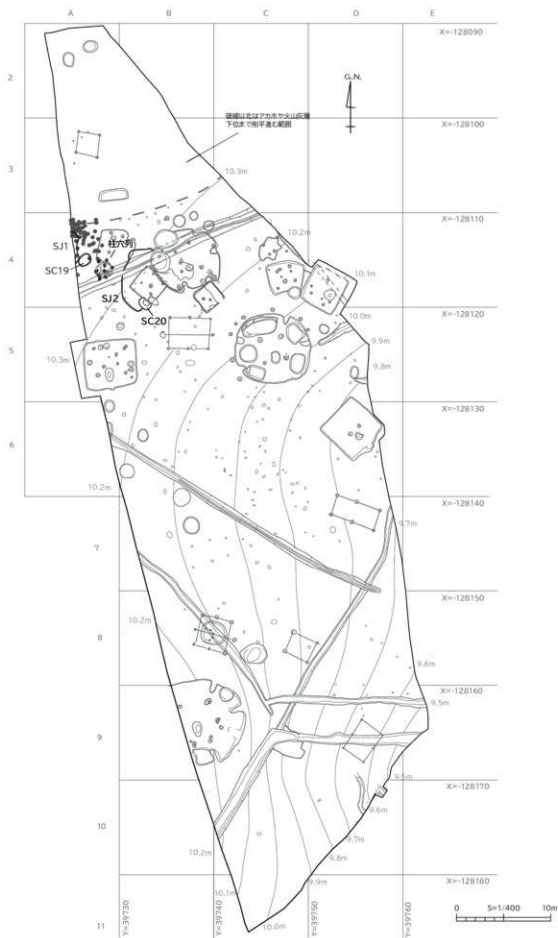
A4Gr.のⅡ層中から大きな破片を含む曾畑式土器や打欠石錘が多く出土したことから、遺構の存在を念頭に土器を点上げつつ掘り下げ(第96図)、最終的にSJ1を検出した。この付近は、Ⅱ層下にあるはずのアカホヤ火山灰層(Ⅲ層)がなく、Ⅱ層がⅣ層上に堆積している。SJ1は東側のみで、大部分が調査区外に広がるため、遺構の平面形は不明であるが、検出できた範囲から推測すると長軸3.48m以上、短軸0.42m以上となる。土層はC区西壁で確認したが、遺構埋土として分層できたのはわずかに床上10cm厚ほどの黒色土(1層)のみであり、壁付近でわずかな立ち上がりみせる。埋土1層の上には包含層であるⅡ層が堆積するが、両者の区別は、埋土の方が少量の地山土ブロックを含む程度のわずかなものであり、Ⅱ層中に見えるはずの遺構の立ち上がりの続きについては分層できなかった。床面から1基の小穴が検出されたが、柱穴かどうかは判断しない。埋土中から遺物の出土はないものの、重複する遺物分布状況(第96図)から見て、曾畑式土器の時期のものと考えられる。

2号竪穴状遺構(SJ2,第94図)

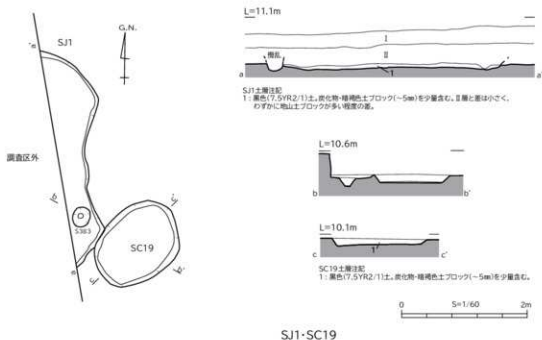
B4Gr.で検出された。遺構の東側は3号竪穴建物跡(SA3)に、同北西側は9号竪穴住居跡(SA9)に、同南東側は12号竪穴建物跡(SA12)に切られる。また、遺構を横断するように8号溝状遺構(SE8)により削平されている。また、遺構南側に重複して20号土坑(宮之迫式土器併行期)が掘り込まれる。検出当初は、8号溝状遺構(SE8)を挟んで南北にそれぞれ別個の遺構があるという認識であったが、西壁のラインや床面の高さが前うことから、1基の遺構として記録した。平面形は、遺構西側のみの検出であるため不明瞭であるが、おおよそ隅丸長方形であると考えられる。検出できた範囲から推測すると長軸6.51m以上、短軸1.26m以上となる。遺構の西壁は緩やかに立ち上がる。柱穴・炉はない。埋土は最大で10cm厚ほど残存し、炭化物や地山土である暗褐色土ブロックを含む黒色土(1層)であり、1号竪穴状遺構の埋土とよく似ている。遺物は、縄文土器片が出土したが、細片のため詳細時期が明確でない。20号土坑(SC20)との切り合い関係から、縄文時代後期初頭までに収まるものと考えられる。

(2) 柱穴列(第95図)

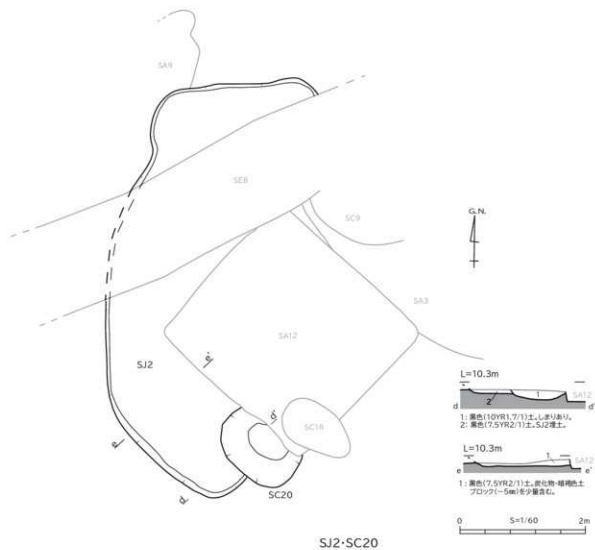
1号不明遺構(SX1)と重複して柱穴列が検出された。平地式建物あるいは竪穴建物の竪穴部が削平された柱穴列として報告する。平地式建物とした場合、柱穴列は、円形に巡る6基(S427・429～431・433・435)からなり、各柱穴を結んだラインは長軸2.42m、短軸1.86mとなる。竪穴建物の柱穴とすれば、円形プランの竪穴であった可能性が高い。柱穴は、径14cm～26cmで、検出面からの深さは10cm～20cmである。柱穴列の内側に3



第93図 C区縄文時代前期～晩期遺構分布図

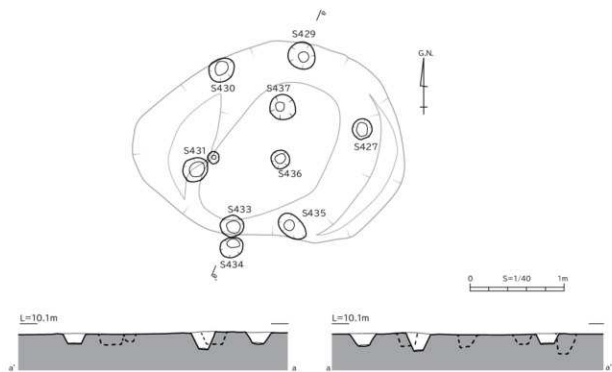


SJ1・SC19



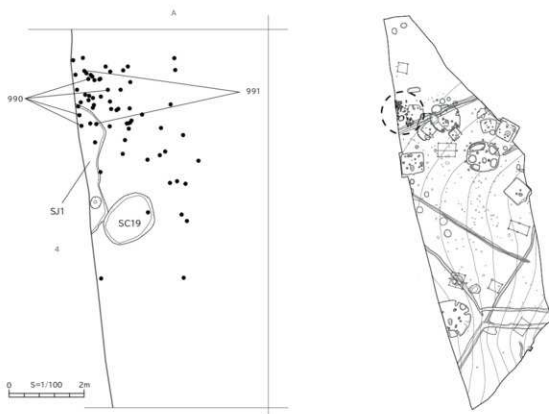
SJ2・SC20

第94図 C区縄文時代前期~晩期遺構実測図(1)



柱穴列

第95図 C区縄文時代前期～晩期遺構実測図(2)



第96図 C区曾畑式土器分布図

基・同外側に1基の小穴があるものの、柱穴列との関係は明確でない。柱穴埋土はアカホヤ火山灰ブロックを含む黒色土である。柱穴列に伴う炉や土坑はなく、柱穴内からの遺物も確認されなかった。遺構時期の根拠は弱いものの、円形に巡る柱穴列や遺構分布状況から見て、縄文時代前期～晩期までに収まる可能性が高い。

(3) 土坑

19号土坑(SC19, 第94図)

A4Gr.で検出され、1号竪穴状遺構の南東隅をわずかに切っている。平面形は1.47m×1.14mの楕円形であり、検出面からの深さ12cmである。断面形は浅い皿状である。埋土は、1号竪穴状遺構の埋土1層と同質の黒色土である。遺物は出土していない。

20号土坑(SC20, 第94図)

B4Gr.で検出され、2号竪穴状遺構の南側に重複して掘り込まれ、東側が12号竪穴建物跡(SA12)により切られている。2号竪穴状遺構の埋土1層よりやや黒みが強く、遺構プランを検出できた。平面形は1.38m×0.84m以上の楕円形であり、断面形は浅い皿状である。埋土から縄文土器深鉢(987～989)・打欠石鏝(1068・1069)・石核(1070)・石核転用の敲石(1071)が出土した。土器は小片ばかりであるが、ともに出土した砂岩製石核等の様相も勘案すると遺構の時期を示すものと考えられ、20号土坑は宮之迫式土器の時期のものと考えられる。

3 遺物

(1) 土器

(a) 土器の分類

遺構・包含層(Ⅱ層)出土の縄文土器について、特に南九州に既存の土器型式との対応関係から次の1～10類に分類し、分類困難なものを11類、底部を12類として図化掲載した。また、土器以外に土器片鏝が出土した。

1類 明瞭な沈線文を器面全体に施す土器

主に棒状工具による深く明瞭な沈線文が特徴で、口縁部から底部に至るまで縦横または斜め方向に並列させる等、一定の規則で施文する。口唇端部に刻目を施し、口縁部内面に施文が見られるものもある。器壁は厚手で、焼成良好である。前期後葉の曾畑式土器に相当する。

2類 ミミズバシ状貼付突帯をもつ土器

胴部の断面形が直線的、ないし緩いカーブを描くもの、「く」字状に屈曲するものがある。主文様はミミズバシ状の突帯で、口縁部から胴部に横・縦・斜方向の突帯を数条施す。器面調整は貝殻痕である。

3類 口唇部や口縁部に幅広の貼付突帯をもつ土器

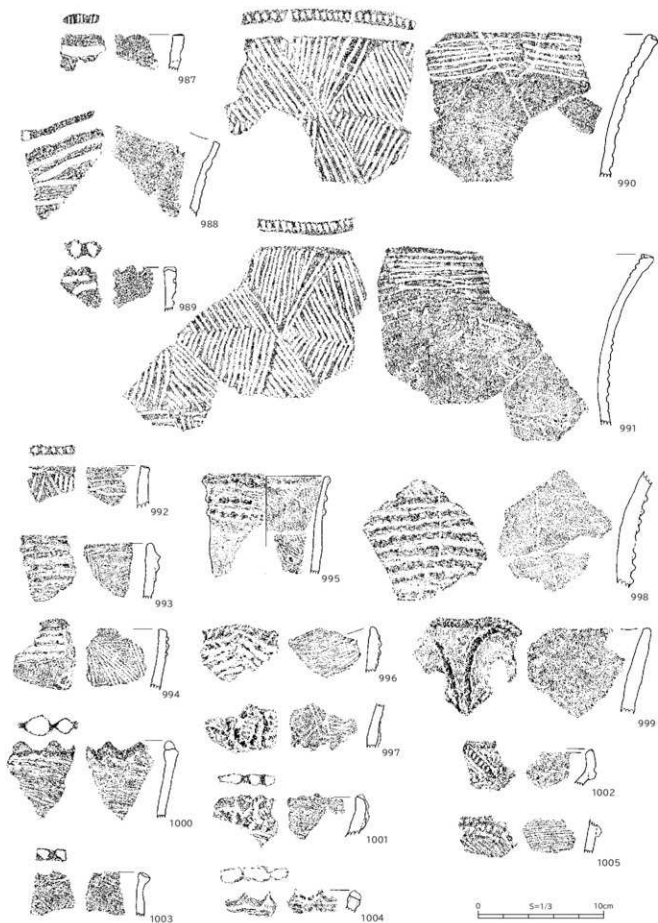
口縁部が内湾するキャリバー状の器形で、直口または外反するものもある。平口縁と波状口縁があり、口縁外面端部や口唇部に貼付突帯が見られるものもある。中期の春日式土器に相当すると考えられる。

4類 器壁が薄く、口縁端部が内部に内湾する土器

外開きで口縁端部のみ内湾するキャリバー状の器形。口縁から口唇部にかけて工具等による刺突文が見られる。天神河内第1遺跡のHⅡ・HⅢ類に近似する一群である。

5類 口縁部文様帯に幅広で深く横方向メインの凹線文を施す土器

先端が丸まった棒状あるいはへら状工具で、約1cm幅・約5mm幅の凹線文を施す。平口縁・波状口縁・さざ波状口縁があり、底部に向かって丸みを帯びて窄む。主文様は横方向の凹線文で、部分的に「つ」「S」字状となる。



第97図 C区縄文時代前期～晩期土器実測図(1)

凹線の太さには個体差がある。中期後葉から後期前葉の宮之迫式土器に相当する。

6類 肥厚した口縁部文様帯に、貝殻腹縁刺突文等を施す土器

口縁部は肥厚して三角形の断面となり、貝殻腹縁刺突文等が巡る。後期中葉の市来式土器に相当する。

7類 口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁部文様帯に、貝殻腹縁刺突文等を施す土器

斜方向の貝殻腹縁刺突文を1段または2段巡らせる。後期中葉の丸尾式土器に相当する。

8類 磨消縄文土器

内外面に丁寧な調整をし、外面に縄文を施文後、凹線・沈線等で区切る。後期の磨消縄文土器に相当する。

9類 黒色磨研土器

器壁が薄く、器面が研磨される。全体的に黒い色調の精製土器。口縁端部の断面形が円形のもの・リボン状突起を貼り付けるもの等がある。後期後葉から晩期の黒色磨研土器に相当する。

10類 突帯文を持つ土器

口縁端部直下に突帯を有する。丁寧な調整で仕上げられる。突帯上に刻目の有無がある。

(b) 遺構出土土器(987～989,第97図)

987～989はSC20出土であり、分類では5類に相当する。987は深鉢の口縁部である。直線的に立ち上がり、平坦な口唇部にヘラ状工具でキザミを施す。外面には横方向の太い凹線文を施す。988は波状口縁で、口唇部の一部に押圧による沈下が見られる。器壁は薄く、堅固に成形される。989は口唇部の押圧により口縁部がきざ波状を呈する。外面の凹線文の縁が微隆起する。内面は丁寧なナデ調整である。

(c) 包含層出土土器(990～1067)

1類土器(990～992,第97図)

990・991は緩めに外反する口縁で、口唇部に刺突が巡る。口縁部内面に横方向の明瞭な沈線文が数条あり、口縁端部から胴部の外面に縦・斜方向の明瞭な沈線文を規則的に施し、三角形の区画を作っている。器壁は厚さ1cm前後と薄めながら堅固かつ丁寧なつくりとなっている。992は口縁部の小片である。口唇部に刺突が巡り、内面に横方向の沈線文、外面に縦方向の沈線文が規則的に施される。

2類土器(993～999,第97図)

胴部が寸胴のもの(993～997)と膨らむもの(998・999)に大分される。993の外面には3条の粘土帯を貼り付ける。胎土に金雲母を含む。994の外面には粘土帯を横方向に3条、円弧状に貼り付ける。995は、口縁端部外面から途切れる粘土帯3条を貼り付ける。996は波状口縁で、口唇部にヘラ状工具でのキザミが見られる。外面は、口縁形状に合わせてように粘土帯を密に貼り付け、口唇部と同様にキザミを施す。997は外面に「S」字状にうねった粘土帯を縦方向に貼り付ける。998・999は2類の中では、器壁が厚く、器面調整も粗い。998は口縁端部に8条の粘土帯が貼り付けられる。粘土帯には手をつまんだような痕跡が随所に見られる。999の外面は風化が著しく表面の調整が不明瞭である。縦方向で放物線状に粘土帯を貼り付ける。

3類土器(1000～1005,第97図)

1000はやや直線的に開く口縁部で、口唇から口縁部内面に粘土帯を貼り付け、押圧により鋸歯状となる。1001の口縁部は肥厚し、わずかに内湾する。口縁部外面に縦方向に2本、その直下に横方向の粘土帯を貼り付け、その上に貝殻押圧文を施す。1002は口縁部が逆「く」字状に内湾する。口縁外面端部に幅広の粘土帯を貼り付け、その上にヘラ状工具で明瞭な刻目を施す。1003は口縁外面直下に横方向に指押さえが入ることで口縁部がわずかに外反する。口唇部から口縁部内外面に粘土帯を貼り付け、口唇部には工具等での押圧を施す。1004



第98図 C区縄文時代前期～晚期土器実測図(2)

は口縁端部のみである。口唇部から口縁部内外面にかけて粘土帯を貼り付け、押圧により「U」字状となる。1005は口縁部外面に粘土帯を貼り付け、粘土帯上に粗いキザミを施す。

4類土器(1006～1011,第98図)

1006は、口縁端部が内側に強く屈曲する。口縁部から口縁端部に棒状工具による刺突列点文を2条施す。1007は口縁部が内湾し、口縁部から口縁端部に管状工具による刺突列点文を3条施す。1008は口縁端部から口唇内部に貝殻腹縁による連続刺突文を2～3条施す。1009は口縁端部が内湾し、口縁端部に刺突列点文を施す。外面の施文は横方向でやや強めの貝殻条痕文である。1010は、口縁部が開き気味に立ち上がり、端部はわずかに内湾する。口縁端部から口唇部に、縦に半裁した管状工具による押圧文を施す。1011は口唇部と口縁部外面に管状工具による刺突列点文を施す。

5類土器(1012～1028,第98・99図)

1012の断面形は直線的に立ち上がる。口縁端部には施文原体による刺突文が部分的に見られる。横方向の凹線文の途中から垂下する箇所も見られる。1013・1014は口唇部に弱い刻目を施す。内面に影響を与えるほどの深い凹線文を施す。1015は曲線で凹線文を施し、その上位には施文の継ぎ目がある。1016は口唇部を丁寧なナデ調整により平滑に仕上げ、余剰の粘土が口縁内面に拡張する。1017・1018は口縁部の形状に平行な凹線文を施す。1017の口唇部には明瞭な刻目が見られる。1019は口縁部が直立し、口縁部はやや内傾する。1020は、幅が1cm強の太い凹線文で、施文部と器面との境は緩やかな段差で不明瞭である。1021は施文原体による刺突文が見られ、内面に影響を与えるほど深い。1022は口唇部を丁寧なナデ調整により平滑に仕上げる。外面には刺突文を2段にわたって施す。1023・1024は、口唇部を押圧することで、さぎ波状の口縁となる。口縁内部には、押圧により押し出された粘土溜まりが見られる。1024の口縁部は内湾し、外面の線幅は一定ではない。1025～1028はやや細い凹線文で構成される一群である。1025は波状口縁で、斜方向を中心とした幾何学的な施文である。1026は横方向に曲線状の凹線文を施すもので、口唇部にはへら状工具での刻目を部分的に施す。1027は縦方向に「S」字状の凹線文を施す。胎土に白色粒を多量に含む。1028の胎土は黒みを帯びる。縦方向の施文が目立つ。

6類土器(1029,第99図)

1029の口縁部は肥厚した三角形の断面であり、先細りの工具で沈線文を直線的に数条施す。本遺跡出土の6類は本例のみである。

7類土器(1030～1033,第99図)

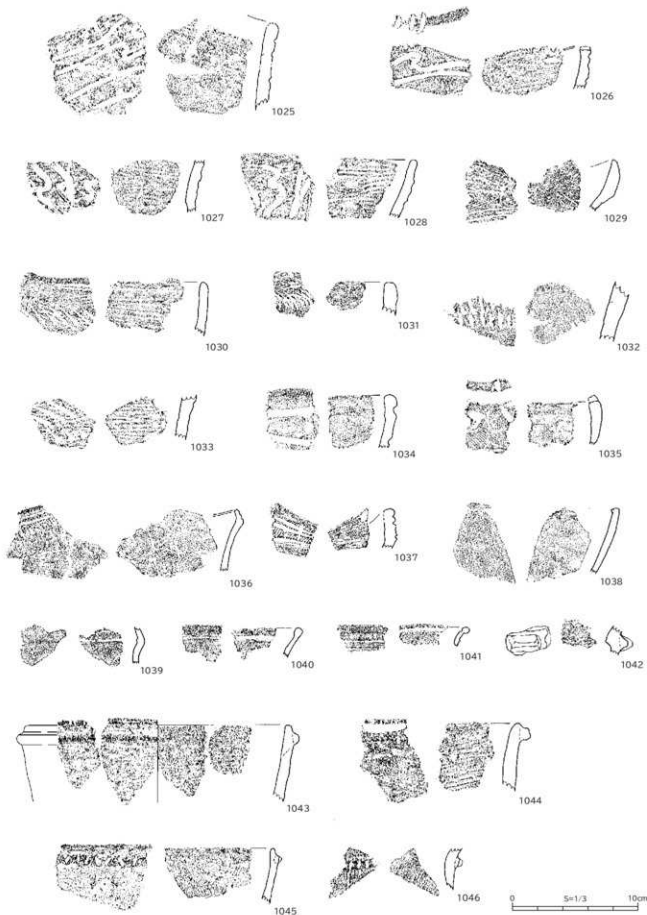
1030の口縁は直立し、口唇部が一部隆起する。内外面とも貝殻条痕調整で、外面に斜方向の貝殻刺突文を施す。1031は、丸みを帯びた口唇部に爪形状の貝殻刺突文を巡らす。1032は器壁が厚く、口縁部外面に縦方向の貝殻刺突文を2段施す。1033は内外面ともに貝殻条痕によるナデ調整で、外面に2段の貝殻刺突文を施す。

8類土器(1034～1037,第99図)

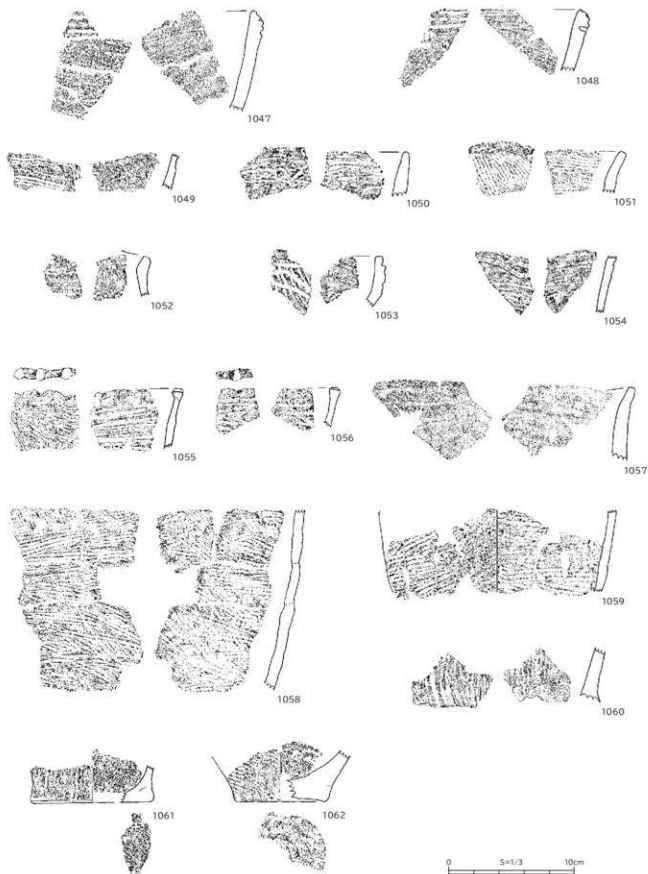
1034は、外面に施文後、ための凹線文により区画する。1035は、外面に広く施文した後に、幾何学的な凹線文でもって区画する。凹線文には口唇部から連続するものも確認できる。1036は、口縁端部が内側に「く」字状に屈曲し、器壁が薄い。内外面とも丁寧な調整で、施文後に2条の細沈線と稜により区画を設ける。1037の口唇部は平滑で、一部が突起状に隆起する。外面に施文後、3条の沈線文で区画する。胎土は他と比べ明るい色調である。

9類土器(1038～1042,第99図)

1038は外に開きながら内湾する口縁で、内面端部に粘土溜まりが見られる。1039は、特に外面が黒光りする



第99図 C区縄文時代前期～晚期土器実測図(3)



第100図 C区縄文時代前期~晚期土器実測図(4)